
TALES OF SYMPHONIA ~ ドキッ 猛者一刀と乙女達の三国志演義 ~

サムライ炎邪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TALES OF SYMPHONIA 〜ドキッ 勇者一刀と
乙女達の三国志演義〜

【Nコード】

N6930F

【作者名】

サムライ炎邪

【あらすじ】

この作品は、シンフォニアと、恋姫十無双がクロスしています。シルヴァラントとテセアラの平和を守る英雄の末裔。それが主人公である北郷一刀。かつての英雄の技を駆使し、乱世を駆け抜ける！

第一章：御使天参上（てんのみつかい、さんじょう）（前書き）

初めまして！！小説を書くことが初です。駄文ですが、最後までお付き合い頂けると幸いです。現在、1幕完結まで更新されています。2幕のスタートは私情の為、2011年3月以降とさせていただきます。それまでに所々の編集作業を行う予定です。

一人でも多くの人に楽しんで貰えたら幸いです。それでは、新たな外史の幕開けです！！

第一章：御使天参上（てんのみつかい、さんじょう）

<プロローグ>

世界再生から20X年。

ロイド、エミル達の活躍により、世界は平和の日々を過ぎていった。その中で、英雄達の血を継ぐ者がいた。名前は北郷一刀。かつての英雄達の剣術を扱い、膨大な魔力を率いて術を詠唱する。この平和な世の中では考えられない程の力の持ち主である。

彼は英雄の志を継いだかのように各地で時々おこる魔物の暴走を止めて世界中を旅している。まだ20にも満たない若者にしてはどうみても立派すぎる。

この若者は今、各地に神出鬼没に現れては街を荒らし多くの命を奪ってきた魔物、ソードダンサーと戦っている。

「グオオオオオ！」

ヒュン！

ソードダンサーの剣は何回降っても空を切る。

「次はこっちの番だ！」

『獅子千裂破！』

グサツ！

一刀の奥義はソードダンサーを捕らえた。が……。

「グオオオオオ！」

と言う叫び声と共に、

パリン！

と食器を落としたような高い音が響いた。

恐らく、ソードダンサーの所持していたヤタノカガミが割れたのだろう。

「……割ッテ……シマツタカ……愚力ナ」

「何のコトだ！？」

「異世界……扉ガ……開ク」

刹那、鏡から白い何かが現れて、一刀の動きを封じる。その状況はソードダンサーも同じらしい。

「異世界デ・・・苦シメ・・・グオオオオオ！」

「ちい・・・」

此处で一刀の意識は途絶えた。

TALES OF SYMPHONIA ｾﾞｯﾄﾞｷｯ
乙女達の三国志演義

1章 新たな外史の幕開け 変わる強さ 変わらぬ思い

【荒野】

一刀はとある荒野に放り出されていて、気を失っていた。

「・・・」

「おい。何だこいつ？」

「寝てるなあ。」

いかにも怪しげな盗賊2人組が一刀を珍しそうに見ている。2人は体格こそ違うものの、頭には黄色いものを巻いている。

「こんな所ですか？」

「さあな。兄貴の所へ連れていくか？」

「そうするか。」

盗賊達は一刀を抱えて、兄貴という輩が待つ陣地へと向かった・・。

【黄巾賊の陣地】

陣地内で一人明らかに着ている服が違う人がいる。その服は一刀が着ている服ほどではないが、少しだけ素材の高級感を感じる恐らくこの人が兄貴だろう。

「兄貴イ〜。」

「どうした！？おまえら。」

「変な奴を拾ってきやした。」

「変な奴？」

兄貴は一人の盗賊が抱えている一刀に目を向ける。兄貴は初めて見る服に少し戸惑いながらも何かを感じとっていた。

「見て下さい。この服、兄貴も初めて見ますよね?」

「そうだな……。売ったら金になりそうだな。」

3人は薄気味悪い笑顔を浮かべて微笑した。それはいつものことだった。

「だから連れてきたんすよ。」

「おまえら……。よくやった!!」

微笑はやがて大笑いになった。きっとこの服を売ればそうとうの金になる。今までにない大物がかったのだ。

その笑い声で一刀は目が覚めた。いきなりのことでもまだ頭が回っていないのか、眠そうな目つきで3人を見る。

「ンン……。此処は?」

「兄さんよお。此処は俺様の陣地だよ!」

「陣地……。?」

一刀はあたりを見渡す。見た事もない風景。初めて見る服。まだ世界にはこんな場所があったのだろうか?一刀は目を疑っていた。

「そつだぞ！兄貴と俺らが盗んだり、奪ったりした物を蓄え・・・」

「余計なコトをいうな！チビ！」

「兄貴・・・ごめん。」

「おまえら・・・盗賊か？」

大地も凍るかのような声で一刀は問う。此処が何処かなどは一時的にどうでも良くなっていた。それよりも盗むと言う言葉に反応する。一刀は世界平和の為に各地を回っていたからか？正義感に心を動かされていた。

「そ・・・そつだ！文句を言わずに、身ぐるみ置いていけや。そして許してやる！」

子分と思われる盗賊が引きつった声をあげる。

「おまえらに許されなくても困らないな。」

「この剣を見てもか？兄さんよお・・・」

そついい兄貴は剣を首に突き付け・・・軽く刃があたり、鮮やかな赤色が一滴、二滴と地を染める。

「正当防衛か・・・。人に刃を向けるのは好まないが、しょうがないか。」

聞き取るのがやつの低い声。一刀は完全に怒った。平和は世を壊すのはいつもこういう奴らだ。

「死ね・・・ひい!？」

パアアアアアア!

刹那、一刀の背中から翼が現れる。ロイドの母の命とも言える、ロイドがずっと付けていたあのエクスフィアの力だろうか。彼は今それを装着している。兄貴は勿論、周りにいた黄巾賊は全員驚き、身動きをとれないでいた。

上空に移動し、敵の人数を確認。200人前後。この数ならばいけると、素早く術を唱える。

《輝く御名の元、地を這う穢れし魂に、裁きの光を雨と降らせん。
安息に眠れ、罪深き者よ》

『ジャッジメント!』

「・・・ん?何も起きな「兄貴!上!上!」え?」

空から紫色のような光が無数に落下してきた。完全ランダム落下の為、黄巾賊の内、兄貴を含めて30人ほどが生き残る。残りは皆、死骸となった。

「て、てめえ!よくも俺の部下を・・・っ!弓隊!」

そういつと、生き残りの弓隊数名が前に出る。

「弓を構えよ!全員で奴を射るのだ!」

「3・2・1・・・斉射！」

ピュン！ 弓が勢いよく一刀に襲い掛かる。

「ちい・・・！」

『閃空裂破！』

体を回転させて、まるで竜巻のような壁を作り、矢を全て弾いた。

「なんだよ・・・なんなんだよ！」

みたコトもない技を次々を目のあたりにして、兄貴は動揺していた。

「何を訳解んないコト言ってるんだ？」

「う、五月蠅い！」

「威勢がいいのは結構なんだが、もう終わりにするぞ！歯を食いしばれ。」

『鳳凰天駆！』

体が炎で包まれる。そして、勢いのまま兄貴に突っ込む。

「ぐ・・・ぐはあ！」

剣は確実に兄貴の心臓を貫き、兄貴は土に埋もれた。

兄貴は完全にこの世から消え去った。

「あ・・・兄貴。」

全員が兄貴の死を目の辺りしたが、誰一人憎しみは生んでいなかったようだ。そもそも黄巾賊は生きるためのすべとして盗みを計っていた。

「おまえたちに話がある。」

一刀は相変わらず低い声で黄巾賊の生き残りに話しかける。

「な・・・なんだよ？」

「俺に降伏しろ。無駄に命を削る趣味はないからな。」

全員が黙る。この少年は何者か？そんなことは誰も考えなかった。ただ、彼といたほうが長生きできるかどうか？それだけを考えていたのだろつ。

「俺は賛成だ。この人は強い。きっと我等を導いてくれるはずだ。」

俺も俺もと声が聞こえた辺りで。

「皆、俺についてきてくれるか!？」

「オオオオオオ!!」

「では、その巾を外せ!今からお前たちは俺の仲間だ!」

「応!!」

しかし、一刀は困っていた。此処がどこなのかも分らないのに、とつさの判断である意味一軍を作ってしまったのだ。これから何処に行って何をすべきかを全く考えていなかった。これからのことを考えよう。

一刀が悩んでいると、後ろから人の気配がした。

「流石は天の御使い様です。」

「だれだ？」

後ろを振り向くと、黒髪の少女がでかい得物をもっていた。きつとかなりの強者だろう。その瞳に敵意を感じなかったのか、一刀は剣を下げた。

「はっ。申し遅れました。我が名は関羽。字は雲長。貴方様を、天の御使い様をお迎えに来ました。」

「・・・天の御使い??」

いきなりの言葉に一刀は動揺した。自分が天の御使い?意味が分からなかった。

「そうです。あなたが天の御使いで間違いありませんよね??」

「え??ちょ、どうということ!??」

「どうということ?といわれましても・・・。」

その関羽と名乗った少女は少し困った顔をして頭に「?」を浮かべている。おかげさまで深呼吸する余裕が出来た。

3分後

彼女はスタイルもよく、胸も大きく、うん。かなりの美人だ。なんてコトを考えられるくらい一刀は落ち着いてきた。

「あ、俺の名前は北郷一刀だから。」

一刀が長い沈黙を破る。

「では、一刀様。共にこの乱世を鎮めましょう。」

「え？」

そして、関羽から色々事情を聞いた。占い師のいう通り、此処に空を飛ぶ人が現れたコト。今は奴らみたいな黄巾を巻いた奴らが各地で暴れてるコト。関羽は弱き人を守る為に主を探し求めているコト・・・なにより、聞きなれない地名が多い。此処は自分のいた世界とも違う可能性がある・・・。

そんな熱心な関羽を見ると、昔話で聞いたあの人のことを思い出す。

「目の前の人間も救えなくて、世界再生なんてやれるかよ・・・か。」

一刀はその台詞をつぶやいた。

「世界再生・・・とはなんですか？」

「俺の世界で行われた世直しのコト・・・かな。俺の御先祖様が遺した言葉。」

「それは素晴らしい言葉だ。」

「関羽は俺を必要としてるみたいだし、俺もこの世界も救いたいて思った。」

「では!？」

関羽は、一刀の返事に期待値が上昇した為か？笑顔で一刀を見る。その表情はとても可愛らしい乙女を感じさせた。

「だから俺は関羽の志の元、力を振るうコトにしようかな。」

「それは天の御使いを認める・・・と？」

「違う。今のは一個人として言っただけ。でも、俺は天使と呼ばれた人の血を受け継いでるから天の者という表現に間違いもないしな問題ないだろ？」

と、大まかに話がまとまった所で誰かが来る気配。武人であるが、こちらにも警戒はしないようだ。

「姉者!」

今度は、小さい女の子がこっちに向かってくる。持っている武器は・・・かなり大きい。きっと武もそれなりのものだろう。

「鈴々!」

「も」。鈴々を置いて行くななんて酷いのだ。」

。 一刀は啞然とする。しゃべり方と持つてる得物が全く合わない・・・

「犬を追っかけて遊んでいたのは誰だと言っのだ。」

「むゝ。所でこのお兄ちゃん誰？」

この少女は興味深々で一刀を見ている。

「失礼な！このお方こそが天の御使い様だ。」

「や、やあ。」

微妙な感覚の中、とりあえず挨拶をする一刀。

「鈴々は張飛なのだ！鈴々って呼んでね、お兄ちゃん。」

「でも、鈴々って名前じゃないんだろ？」

「真名なのだ。」

「真名？」

「御主人様は真名をご存知ないのですか？」

「俺のいた世界にはなかったな。」

真名？一刀はそんな風習は知らない。すくなくとも自分が回った国すべてに無かった。やはり此処は異世界なのだろうか？

「真名とは、女が持っている名で、心を許した者だけに呼ばれるコトを許される名のコトです。それ以外の者が呼ぶコトは斬られても文句は言えないほど失礼に当たります。」

「俺はもう心を許されてる訳？」

「勿論なのだ、お兄ちゃん。」

「ご主人様が鈴々と私を導くのです。」

2人の意志は固かったコトを一刀は実感していた。自分もこの世界の為に頑張ろう！そう心に誓っていた。

「了解！共に皆の平和を手に入れような。」

「御意。鈴々、先に村へ行き傭兵を集めてくれ。私はご主人様と共に行く。」

「合点なのだ。」

鈴々は、駆け足で来た方向へ走っていった。

（鈴々って子。まだ小さいのに志をもって生きている。志をもつのはいいけど、これからあるのは戦争。関羽や、鈴々みたいな女の子まで巻き込むなんて・・・戦争なんて・・・大嫌いだ。」

「ご主人様・・・。お気持ちは嬉しく思いますが、我々にはお気遣いなく。」

「え？全部聞こえてた？」

「刀はまた思ったコトを口に出していたようだった。」

「御意。あと、私の真名をまだ教えていませんでしたね。」

「そうだね。関羽の真名は？」

「我が真名は愛紗です、ご主人様。」

「可愛い名前だね。うん。愛紗にお似合いの名だ。」

「か、可愛いなどと軟弱な言葉を使わないで頂きたい。」

「少し照れながら可愛いを否定する。」

「軟弱だなんて言っていないよ。愛紗は可愛くて強い。立派な志を持っているじゃないか。だから愛紗と一緒に思ったのかも知れない。」

「そうですか。」

「愛紗は満面の笑みでこちらを見る。だから愛紗を抱き寄せる。」

「う、ご主人様？」

「愛紗。これから宜しくね。」

「はい。ご主人様。」

【黄巾賊達】

「なあ？俺達完全に空気じゃないか？」

「五月蠅い！余計な行動は断じて慎まなくては。ジャッジメントな
る技を喰らった日には・・・」

「そ、そうだな・・・。」

こうして、北郷一刀は新たな外史を歩むコトになる。

第二章：人愛為則（いとしきひとのためならば）

北郷一刀には愛していた人がいた。2人は会って間もない頃から、まるで幼なじみのように、いつも一緒だった。しかしまだ魔物とラタクスとの関係が上手くいっておらず、ミズホの里に魔物がいきなり襲ってきた際に彼女は命を落としてしまった。一刀は彼女を守れなかったことを悔やみ続けていた。

愛紗はその彼女と雰囲気似ているような気がした。愛紗だけでなく、鈴々にも似た感覚がある。何故だろう？ 考えれば考える程に不安が募る。

「ご主人様・・・？」

「ど、どうかした？ 愛紗？」

「い、いえ。何も・・・」

（ご主人様は何をお悩みになられているのだろうか？）

そんな気まずい空気の中。町が見えてきた、が。町が、赤く、黒かった。簡単にいえば燃やされていた。

「あ・・・町が・・・」

「少し遅かったか・・・とにかく、鈴々をさが・・・」

「うつつ・・・」

「ご主人様？」

「うああああああああ！！！」

あの時の光景が脳裏に浮かぶ。友が死に、親戚がしに、愛した人が死んだあの日の光景。まるで自分が殺したのでは？と疑いたくなるあの日の出来事。

「俺は・・・俺は、守れなかった。無力だ。結局なにも出来ないんだ！くそっ！」

「ご主人様！何を言っておられますか！？」

「俺は・・・俺は・・・。」

一刀は完全に我を忘れていた。それを見ていた愛紗は見えていられなくなり、そして・・・

パツチイイイン！！？

「だから何なのです！？貴方が一度守れなかったら、次を繰り返さないために行動をしてきたのではないのですか！？」

「愛紗・・・。」

「そんな弱気なご主人様なんて知りません！ご主・・・いや、北郷一刀殿。私はこれより、民を助ける為に町へ行きます。迷う者の面倒は見れませんので此処でお別れです！！好きに各地を回るがいいでしょう！」

そういつて愛紗は走っていった。愛紗からしてみても「乱世の英雄になってくれるはずの人」が取り乱してしまい、やり場を失っていたのだろう。

「俺は・・・」

我に返った一刀は自分を責めた。なぜ彼女を不安にさせてしまったのだろうと。元黄巾賊隊の長に任命した人が一刀の前に来る。

「北郷殿、我々は関羽將軍を追います。彼女に仁義を教えていただき、世の為に戦います。では。」

一刀は一人になった。また独りぼっちになってしまった。前の世界でも、自分が人のいくら人の為に旅をして、人々に感謝されても、仲間が出来なかった。皆自分を恐れていた。そして、この世界でようやくできた仲間も、今縁が切れ・・・

「・・・まだ切れてはいない！」

愛紗に叩かれ暫くして、自分の大儀を再確認し、町へ行くコトを決意した。辛い過去を振り切り、新しい未来へと歩む為に。

一刀は町を見ると・・・。

「な・・・。」

愛紗達の前に黄巾賊が50人ほど並んでいた。しかも横には弓兵が10ほど伏兵として潜んでいる、しかも愛紗は今それに気づいていない。このままでは隙を突かれて射られてしまう。

状況を察知した一刀は全速力で飛んでいた。まるで愛しい人を求めるかのように・・・

【町入口付近】

一刀親衛隊は愛紗の命令で上手く町へ入り、人々の保護及び鈴々の搜索を担当していた。よって愛紗は20人の前に一人で立っている

「匪賊風情が！この私に逆らうコトを後悔しろ！」

「てりいいいやああ！」

ザシュ！

一回の斬撃で敵を5人程斬る。

すぐに20人は死んだが、最後の一人を完全に心臓を貫いた為、得物が抜けなくなってしまった。黄巾賊はその隙を見逃す程甘くなかった。

「弓兵構え！！！」

「3・2・・・」

「なにっ！」

愛紗はかなり焦っている。得物が抜けない。抜けなければ矢を弾けない。逃げる場所もなかった。

「1・・・」

愛紗は半分諦めた。自分はここで死ぬのだと、自分の大志は鈴々が果たしてくれるだろう。そして彼を思い出す。

「北郷・・・一刀様・・・」

自分がもし、彼と来れば死ぬコトはなかったかも知れない。もう少し心にゆとりを持っていたら・・・

「斉射！」

ピュン！？

3本の矢が愛紗に飛んでくる。黄巾賊は弓が得意ではないのが幸いだった。

愛紗は目をつぶる。

グサツ！

音がした・・・が、愛紗には一矢も当たらなかった。痛みもない。愛紗は驚きながらも目を開けた。

「ぐ・・・」

「ご主人様！！何故！？」

そこには、別れを告げた彼がいた。

「別動隊が・・・見えた・・・から・・・愛紗を・・・死なす・・・

わけには・・・ゴボツ。」

口から血を吐く。三本は両肩と背中を貫通するように刺さっている？

「ご主人様！！しっかりしてください！！」

一刀は、自身の手で矢を全て取る。体からはかなりの血が流れた。

「ご主人様！！一刀様！！」

愛紗は、未だに仁王立ちをして背中を向ける俺を後ろから抱きしめ、少しでも出血をすくなくしようとしている。

「愛紗・・・服が汚れ・・・から・・・下がれ。」

「嫌です！！ご主人様の為ならば、服が汚れようが構いません！」

「そうか・・・」

一刀は愛紗の気遣いに感謝しながら、黄巾賊を見る。

「お前たち・・・覚悟し・・・」

「斉射！」

更に二本の矢が襲う。

「ちい！！」

「きゃ・・・」

愛紗を素早く振り払う。彼女を護る為に、命尽きようとも護りたい。そう思う自分がいるから・・・

クジャ！

「うぐ・・・ぐあああああああ！」

更に一刀に矢が刺さる。しかし、一刀はまだ仁王立ちをしている。また矢を抜いた為、更に血が流れる。

「ご主人様！もう止めて下さい！！」

そういつて愛紗が得物をとろうとする。が、

「伏せろ！愛紗！！」

何が起きるか解らなかった愛紗は言われた通り伏せた。

「これで愛紗には当たらないな。」

「ご主人様！？」

「詠唱中に愛紗を狙わす訳にはいかないから・・・な」

明らかに一刀はダメージを追っている、が。奮い立たした魂の叫びが一刀を激しく突き動かす。

《悠久の時・・・を廻る優しき風よ、我・・・が前に集い・・・
て裂・・・刃と成せ》

『サイクロン！』

巨大な竜巻が発生し、敵を襲う。敵は全員吹き飛ばされ、全滅。
一刀と愛紗の勝利だが。

「うぐっ！」

更に矢を4本喰らった一刀は今にも死にそうだった。一刀地につ
いた。愛紗は泣きながら主人の名を呼ぶ。

「ご主人様！！一刀様！！」

反応はない。息をしているかすら判らない状況だ。愛紗自身一刀
を神の領域で見てしまっていたのかも知れない。だから更に弱気にな
った彼を許せなかったのかもしれない。彼も人間だ。同じように
血を流すんだ。そう愛紗は確認した。

「愛紗・・・」

「ご主人様！？」

「まいったな・・・口に貯まった血を吐かねえと・・・これじゃ
あ、治療術も使えねえ・・・」

更に出血している。このままでは・・・いや、根気でなんとかし
なければ。愛紗をこれ以上悲しませたら、此処に來た意味がない。

《万物に宿りし生命の息吹よ》

『リザレクション』

傷はすべてではないが、塞がった。痛みも薄れてきた。これで助かっただろう。愛紗を見て笑おうとしたが・・・

「ご主人様・・・よかった・・・!!」

愛紗は仰向けに倒れている俺の頭を持ち上げると、膝枕をした。

「俺は、そんな簡単に死んだりしねえ・・・よ。少なからず、俺の存在を認めてくれた2人を残してはな。」

「・・・はい!」

一刀の体力は人間とは思えない勢いで回復した。治癒術の恩恵もあるが、自然回復力も尋常では無いようだ。

「愛紗、そろそろ行くか。」

「御意。きっと鈴々も心配しているでしょう。」

二人は更に絆を深め、鈴々を探し始めるのだった・・・。

第三章：一刀疾風隊（かずとしつぶうたい）

一刀は愛紗と廃墟と化した町で一人の少女を探していた。 - 鈴々
- 愛紗の義妹であ...

「姉者〜！」

鈴々の元気な声でシリアスな空気が一気に和やかになる。これも
鈴々の持ち味だろう。

「鈴々！無事か!？」

「見ての通り元気なのだ!!」

と、鈴々は1回転してみせる。その無邪気さがまたなんとも可愛
い。

「って、そんなコトで遊んでる場合じゃないのだ!町を黄巾賊の人
達が襲ったのだ!」

「それは知っている。残党30人ほど斬ってきたからな。」

「愛紗の武は凄いな。遠くから見ても分かる。」

「ご主人様……。お褒めの言葉、嬉しく思います。」

満面の笑顔で微笑む愛紗。自然と一刀の顔が赤くなってくる

「むー。鈴々だって愛紗に負けないのだ!!」

「私に勝てる。と?」

「今日は勝つのだ! 愛紗はお兄ちゃんに、いい所見せようってても、そうはいかないのだ。」

「な、何を勝手に・・・!!」

姉妹が仲良く喧嘩を始める。こうしてみれば、見た目は違うものの、本当の姉妹に見えてくる。

「二人とも。今は町の人を助けないと・・・」

「はっ! そ、そうでした。関雲長一生の不覚。ご主人様、申し訳ありませんでした・・・。」

本当に申し訳なさそうな愛紗。その仕草がまた新鮮だった。

「いいさ。鈴々! 町の人の生き残りはいるのか!?」

「皆酒屋にいろのだ!」

「よしっ! まずはそこにいくぞ!」

「御意!」

「合点なのだ!」

【町の酒屋】

「あんた達、誰だ？」

そこにいたのは死んだ魚のような目をしている人達だった。活気を感じない。生きるコトを諦めているかの如く。

「我等は黄巾賊を討伐するために立ち上がった者だ！」

「官軍か!？」

「・・・。残念ながら官軍ではない。」

「なんだ・・・。官軍じゃないのか。」

皆、一瞬期待の目をしたが、更にどん底に叩き落とされた感じに見える。

「でも、皆を助けたいのは本当だよ!」

「子供に何が出来るってんだ！だいたい数が違うんだ！」

「そんなに多かったのか！？」

「4000ぐらいって所だろうな。」

「こっちは何人ぐらい兵を出せる？」

「老人含め、2000ぐらいだな。」

「そうか・・・」

愛紗は深呼吸をした。そして、明るい顔で民達に問う。

「皆に一つ聞きたい。」

「な、なんだよ。」

「この町を守りたいか？」

「勿論だ！じいちゃんばあちゃんが汗みず垂らして作った町なんだ
！」

「ならば我等と戦おう！」

「だから、勝てないって」

「いや、勝てる。」

愛紗はあっさりと言い切ってしまった。

「なんでそう簡単に言い切る？」

「んとねー。天使のお兄ちゃんがいるのだ！」

「鈴々は黙っていなさい。」

「むー。」

民が少しざわつく。なんかあったか？と何も気付かない一刃。

「鈴々の言う通り、我等には天がついているのだ！」

「天だと！？天使とか言っていたが？」

「この方がそうだ。」

あっ、俺か。と今更気付く一刃に、笑っている鈴々。

「ど、どーも」

「こいつが？嘘も程々に・・・」

一刃は翼を出してみせる。その姿を見るや、住民達は驚きの声をあげながらも、一斉に深々と頭を下げた。

「おお・・・」

「ありがたや、ありがたや。」

「先程、紹介に預かった。天の機関の者だ。今汚れた世を直す、世界再生の為に現れた！」

「世界再生・・・」

「民を想う政こそ信義。そんな世を実現するため。天から舞い降りつかまつった！いざ、今こそ立ち上がる時！まずはこの町を守りたい。皆、協力して欲しい。」

この威厳のある言い方はクラトス譲りなのだろう。説得力がある。

「うおおおおおお！」

「勝てる！勝てるぞ！」

「ああ！きつと守れる！」

「俺は武器を調達してくるぜ！」

「俺は人を集めてくるぜ！」

勢いよく彼等は酒屋を飛び出していった。

「いい目をしてるな、あいつら。」

「そうですね・・・」

「皆、あんな顔にしてやるのが俺達の大義って奴か。」

「そうなのだ！皆が笑って暮らせる世界にするのだ！」

「世界再生・・・ですね」

鈴々は満面の笑みで、愛紗は気真面目な顔で答える。

「ああ、まずはあいつらを守らないとな。俺ら三人で先陣をいくべきか？」

「いえ、ご主人様はお下がりでください。」

予想外の答えに戸惑う一刀。

「・・・その怪我で出陣なさるおつもりで？」

治癒術で治っているのはやり一時的なものだと愛紗にはばれていた。

「愛紗のせいで怪我したのに、そんなに厳しい言い方は酷いのだ！」

「な・・・。何故それを・・・？」

「町の人がいつてたのだ！それで二人がやっと来たのに気付いたのだ！」

「うつつ。」

「愛紗は油断大敵って言葉も理解出来てないお馬鹿さんなのだ　鈴々々に勉強勉強言うコトもできないのだ！」

「それとこれとは話が・・・」鈴々の言う通りだ」「ご、ご主人様！？」

「鈴々は無知だとしても、戦場で一番大事なコトを知っているんじゃないの？」

「ご主人様・・・。そうですね。」

「鈴々も、愛紗に教えられての知識なんだから、愛紗には感謝しないとな。」

「うん！」

「よし、いい子だ！」

鈴々は凄く素直で純粋でいい子なんだ。と鈴々の頭をくしゃくしゃに撫でていると、愛紗がじっと見ながら口を開ける。

「鈴々！町で足軽な者5人と共に敵の居場所を捜せ！」

「了解なのだ。またね、お兄ちゃん！愛紗！」

鈴々は前よりも素早く駆けていった。

「さて、ご主人様？」

「愛紗・・・。少し黒いオーラ出てるが、何かあったか？」

「・・・。」

なんだ！？この黒さは！！鈴々と話をした後から黒い！俺は何かしたか？愛紗に悪いコトはしてないとおもぅが・・・

「あ！」

「どうか？」

「もしかして、嫉妬してる？」

一刀は凶星とも言えるそれを、冗談半分に刺激した。

「ななな、そんなコトは、あ、ありませんよ。ええ、け、決して！」

愛紗は顔を赤く染め、まるで林檎だ。

「隠さなくてもいいよ。正直嬉しいし。」

慌てる愛紗がとても可愛かったのだろう。一刀はさらに言葉を繋げた。

「だから！し、嫉妬などと軟弱な思想は描きません！！」

「そこまで否定されると凹むなあ。」

「いや……。あの……。その、えっと……」

「やっぱり嫉妬？」

「……。はい。」

暫く沈黙が流れる。

「……正直者にはご褒美をあげないとな。」

「えっ……。」

愛紗は顔を真っ赤にしてアタフタしている。一体何を考えているのやら……。

「冗談だ。今から戦なんだ。愛紗は民に剣術を教えてくれ。」

「は、はい!!」

「俺は、俺の親衛隊にちょい特技を教えってくるから。」

「特技？」

「技のコトかな？かなり使い勝手のいいやつをね。」

「こんな短時間で習得出来るのでしょうか。」

「ああ、短時間で覚えられる、とっておきだ……じゃ、いこうか。」

「御意。」

（ご主人様は私に何を褒美にくれようとしたのだろうか？少し気になる所だが、今は置いておくか。）

一刀の畏だということに気づいていない愛紗は民が集まる場所に

行き、剣術や、敵には二人一組で当たるコトを教えた。一方、一刀はというと……。

「天の御使い様、今から何をや……」

「俺のコトは一刀將軍と呼べ!」

「はっ。一刀將軍!」

「お前らは厳しく稽古を付けてやらあ!」

「応!!」

「お前ら!ついさっきまでは落ちこぼれだったよな?」

「うつ……。」

確かに彼らは人からものを奪う生活をしてきた。落ちこぼれの表現に偽りはない。

「でも安心しな!今から落ちこぼれから立派な兵隊に成り上がる機会だ!無駄にする奴はこの中にはいないな!」

「応!」

「今の気分はどうだ?最高か!」

「応!」

「それはなりより。では、この軍はこれから一刀疾風隊と名付ける

「!!」

「応!」

「全員、迅速かつ、力強い攻撃をするために特訓をする!」

「応!」

「今は時間がない。よって、瞬迅剣を習得して貰う!!いいな!」

「応!」

こうして、士気を上げる一刀であった。

・・・二刻後・・・

「愛紗!鈴々!やっぱり先陣にいかせて貰う。」

「だから!ご主人様は傷が・・・」

「今回は肉弾戦しか使わない。黄巾賊ごときに討ち取られはしないさ。」

「ですが・・・」

「分かったのだ!」鈴々!」お兄ちゃんが前にいたほうが士気が上がるのだ!姉者はお兄ちゃんに気を使いすぎるのだ!!」

「それは・・・」

「決まりだな。我が軍は一刀疾風隊のみで一軍を形勢する。」

「そんな小数ですか!？」

「あいつらは一人一人が将に値する強さを持っている。黄巾賊を威嚇するには十分あるだろう。」

「ご主人様がそうおっしゃるならば。」

「お兄ちゃんがいうならきつと間違いないのだ!」

「そういつて貰えると助かる。」

「では、そろそろ出陣を。」

「そうだな。」

「最後に、士気を高める言葉をお願いします。」

「了解。」

「皆、この町を守って欲しいか!？」

「応!」

「だが断る!!」

「え・・・」

ざわめきが辺りを過ぎる。

「守ってやるではなかるうが!!愚か者!!」

一刀疾風隊の隊長が声を上げた。?

「自分達で守るのだろっ!他人行儀でどうする!」

「そうだ。俺達はいくまで手を貸すだけだ!護りたければ、自分達で護ってみせよ!!」

「応っ!!」

「俺たちで守るんだ!!」

「天の御使い様たちだけでなく、俺たちもしっかりやるんだ!!」
兵隊の士気は一気に上昇した。

「ご主人様・・・流石です。」

「他人行儀では困ると言うのは本音だ。そろそろ出陣するぞ!」

「突撃!粉碎!勝利なのだ!」

「御意!」

【黄巾賊の陣地】

「報告!!」

「なんだ!? 騒がしい! 宴会の途中というに・・・」

「敵軍がこちらに奇襲を!!」

「はあ!? 官軍でも来たというのか?」

「いや、民の奇襲かと。」

「旗は?」

「関、張、十の三つです!!」

辺りが凍りつく。

「何っ! あの関羽と張飛がか!! それに十つてのも気になる。初めて聞く旗であるが、大きさは」

関羽と張飛の噂はかなり広がっていた為、脅威があるのも頷ける。

「関・張の間にあり、1番大きいかと。」

「あいつら二人は主を捜す旅をしていたと聞いている。もしや・・・」

「その器のある将か・・・」

「我等も終わりですか？」

「いや、そいつを倒せば・・・」

「伝令！」

「どうした！！」

「十文字の軍が先陣を切り、我等の先陣隊とぶつかり、敗戦をし、後退戦争中です！」

「十文字の軍の数は」

「30です！」

「は！？30の軍勢が1000の軍勢を破るだと？」

「それが、十文字の軍に天使が・・・天使が！」

「・・・何が起きたんだ・・・」上だ！！」「何！？」

彼が斜め上を見上げると、そこには、空を飛ぶ男がいた。？

『ファイアーボール！』

低級呪文だが、呪文は呪文。その名の通り、火の球は敵を一人一人焼き尽くしていた。？

『瞬迅剣！』

『瞬迅剣！』

〔衝破十文字！〕

兵隊が瞬迅剣を重ねる。今が好機と兵が隙を狙い攻撃をしかける所で、ユニゾンアタックが発動。更なる一撃は愛紗顔負け。彼らは前々から共に行動していたため、チームワークが良かった。それでユニゾンアタックを習得させたのだった。

「有り得ん・・・」

「伝令！関羽隊、張飛隊が左右から奇襲にできました！」

「・・・降伏しよう。」

「はっ？」

「全員！！武器を棄てろ！」

「はっ！！！」

「黄巾賊に告ぐ！！抵抗をやめるならば、殺しはしない。武器を棄て、その場でひざまづけい！！！」

「・・・」

黄巾賊は黙ったままひざまづき、降伏した。？

この戦で町民が殆ど死ななかったのは奇跡だろう。一刀の親衛隊。

彼等のチームワークは賞賛に値するだろう。そのなかでも隊長は特に一刀を驚かせた。

【黄巾賊との戦い中】

「ひらめいたぜ！」

『空破衝！』

瞬迅剣より遙かに強い一撃が黄巾賊を襲う。黄巾賊の一人は吹っ飛び、その後ろも吹っ飛び・・・10人前後がその場に倒れる。

「すげえな隊長！」

「ああ。何か改良できそうな気がしたから試してみたんだ。」

「流石隊長です！」

「ありがとう！」

こうして、降ってきた黄巾賊を一刀疾風隊に入隊させてから町に戻ってきた。

町の人達は歓声をあげた。死に戦に近い戦いなのに、死者無しで帰ってきたのだ。しかし、中には？

「父上！！！」

「おかあさん……」

ごく僅かであるが、亡くなってしまった人々の家族が泣いていた。その人達に一人一人、土下座して謝る黄巾賊達の姿があり、それを見る度に一刀は心が苦しくなった。どうして守ってやれなかったのだろうか、と。

「お兄ちゃん……どうして、顔を青くしているのだ？」

「俺は……この町の人をもっと助けられたかも知れないんだ。なのに……なのに……っ！」

一刀は唇を強く噛む。唇からは血が滲み出していた。

「お兄ちゃんは頑張ったのだ。愛紗も助たし、町の人も沢山助けたのだ……それより鈴々はお兄ちゃんの体が心配なのだ。」

「え？」

体を見渡す。一刀の体からはあちこちから血が垂れていて……

「ずっと出血してたのか、気づかなかったな。」

「戻ってくる途中からずっとなのだ!!」

「ははっ……こつちもまずいかもな。」

「かも、じゃないのだ!!お兄ちゃんに何かあったら鈴々は……」

突然、鈴々は涙を流す。いきなりのコトで慌てる一刀。

「泣くなつて！！俺は二人を残して死んだりしないから！！」

「そう母様と父様はいったけど、鈴々を置いて死んじゃったか……」

「そうか……辛い思いをさせてたんだな。無理せず治療するよ。な、治療が終わったら一緒に遊ぼうな。」

「え、いいの？」

「もちろんさ！心配かけたお詫びと、お互いにもっと知り合いたいし。」

「鈴々もなのだ！！」

「よし、そうと決まったら治療を……」

鈴々と酒場に向かおうとした時だった。愛紗が走ってきた。

「ご主……ご主人様！？その傷は！！」

「傷口が開いたみたいだ。愛紗の用件を聞いたら治療する。んで、何かあったのか？」

「実は……」

というとき愛紗は、後ろの男に話を話させる。

「あなた様に、天の御使い様にこの町の、啄島の県令をやって欲し

いんだ！」

「け、県令だと!!！」

「はい。いかがしますか？」

「えっと・・・」

「受ければいいのだ!!！」

と、鈴々は言うが重要問題だから、愛紗を見た。愛紗は黙って首を頷く。

「・・・。俺は政の経験はないぞ？それでもいいか？」

「もちろん！この町にはあなたと、鈴々嬢ちゃんと関羽嬢ちゃんがないと駄目なんだ！」

「県令は死んだのか？」

「逃げちまったよ。金めの物を全部持つてな！」

民は皮肉な声をあげる。無理もないだろう。自分たちの金で得たものすべてを持って何処かへ去っていったのだから・・・。

「卑劣な奴らだ・・・。」

「県令がいないとまた新しい官がくるんだけど、もう信用出来ないんだ！」

「分かった。早く引き受けよう。まずはな・・・にを・・・」

バタツ！？

一刀は、出血による貧血だろうか？意識を失ってしまった。

「ご主人様・・・？ご主人様！！」

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

「大変だー！！天の御使い様が、倒れたぞー！！」

最後まで慌ただしいのが一刀流だろう。今はゆっくり体を休めたほうがいい。こちらの世界に来たばかりなのだから。

彼の存在が、この世界をどう変えるのか？全ては期待で溢れていた。昇り始まった太陽は、当分沈まないだろう。

第三章：一刀疾風隊（かずとしつぶうたい）（後書き）

本作と同じように、拠点パート見たいな、各キャラに焦点を置く恋愛パートを導入します。目的は、私が描く二次創作キャラの違和感に慣れてもらうのと、私の文章力向上の為・・・です（・、・）

愛紗パート01（前書き）

トントン・・・。だれだ？つて愛紗！！「作者殿、お願いがあるのだが？」「な、なんだい？愛紗？」「あの・・・私とだな。ご主人様の・・・」「恋愛パートはこれだから安心しなよ。」「本当ですか！」「ああ！だから安心シタマエ。」「解りました。では、私はこれで。」「愛紗に殺されなくてよかった・・・。では、始まり〜始まり！！！」

愛紗パート01

あれから一週間後。愛紗の看病を受けながらも、政務について勉強を始めていた。

「財政は・・・」

トントン。扉がノックされる。

「ご主人様？」

「愛紗か。入っていいよ。」

「はい。失礼します。」

愛紗は入って来ると、一刀が合間を見ては政務の勉強をしているのを理解し、あえて触れないようにしていた。

「体調の方はいかがですか？」

「愛紗のおかげで大分よくなってきたよ。ありがとう、愛紗。」

「れ、礼には及びませんよ。家臣として当然です。」

「家臣として・・・か。淋しいなあ。」

「・・・ご主人様には嘘は通用しないようですね。」

「嘘なのか？」

「知ってらっしゃるくせに……。」

「ははっ。ごめんよ、愛紗。」

「今の私は一個人としての私ですから。」

「そうか。愛紗みたいな美女が直々にお見舞いに来るなんて。これ以上ない幸せだな。」

「そんな私ごときに大袈裟な。」

「大袈裟じゃないけど……。」

一刀は一呼吸置いて話を続ける。

「これから大事な話があるから聞いてほしいんだけど、時間は大丈夫？」

「はい。特に急ぎの用事はありませんから。」

「そうか。」

少し間を置いて、愛紗に伝えたと決心したもの、口は未だに重かった。

「この町を最初見た時に取り乱した件についてだ。」

「え……。」

「俺は毎日故郷の近くで鍛練をしていたんだが、ある日町で騒がしいと思つて村へ戻つてみたら・・・」

「何かあつたのですか？」

「村が魔物に襲われていたんだ。」

「な・・・。」

「魔物の統率している奴は俺の家を、家族を、愛人を、全てを奪つたんだ・・・。」

「・・・。」

「俺は怒り、魔物を撃退したが、統率者・・・ソードダンサーだけは倒し切れなかった。」

「そうだったのですか。」

「でも、俺は今でもソードダンサーよりも自分を恨んでるんだ。」

「な、何故です!？」

「もし、俺が村にいたら皆死ななくてすんだんだった。自分が殺したようなものだって・・・。誰かを護る為の武技なのに、これでは本末転倒。俺は何をしているんだろうな・・・ははは。」

「ご主人様・・・。」

「だから、責めてもの償いに、俺は各地で起きている魔物の騒動を

解決してきた。そして、あいつにまた会った。」

「それで、仇を討ったのですか？」

「いや、あいつの持つ鏡を割ったら此処にきていた……。やばいな。」

「何がやばいのですか？」

「あいつがこの世界に来ているとしたら……」

「確かに、ご主人様でも仕留めるのが難しいとなれば、討伐するまでに民の被害がどれほどになるか……。」

「……。今は考えちゃいけない話だ。忘れよう。」

「はい……。」

確かに、あいつがこの世界にいたら大変だ。早く殺さなければならぬ。

「でも、愛紗の言う通りだ。」

「えっ？何がでしょう？」

「俺は、ソードダンサーを殺したら、自分も死ぬつもりだった。」

「何故です……！」

愛紗は思わず声をあげる。

「償いだ。そう思っていたが、死ぬことに意味はないな。だったら愛紗達を、皆を護れるだけ護って生きていこうと思った。」

静かな風が部屋を過ぎる。

「そうですか。では私はそんなご主人様を出来る限り支えてみせます。我が大義は貴方の大義と同じなのですから。」

「そうか。心強い仲間がいるんだ。早く怪我を治して町の為の政務をしっかりとこなさないと。」

「はい。それまでは私にお任せを。」

「分かった。」

「では、私はこれで・・・」

愛紗が部屋をゆつくりと出ようとする。それに続いて段々寂しさが溢れてくる。

（この気持ちはなんなんだ？）

答を捜す前に声が出る。

「愛紗！」

「は、はい！？」

「まだ時間があるか？」

「はい。」

「急に人肌が恋しくなってきたんだ。もう少し、もう少しだけでいいから一緒にいて欲しいんだ。」

「ご主人様……。喜んでお付き合い致しましょう。」

愛紗は微笑んで自分の元に戻ってきた。

「手を握っててくれないか？俺が寝るまででいいからさ。」

「はい。でも……」

「でも？」

「少し恥ずかしいです……」

「義妹の鈴々と話すだけで妬くのに、いざとなるとこうなるか。愛紗はそういう性格なんだな。」

「ち、違います！！」

「真面目で、しっかり者で、いつも回りを見てくれていて、俺の心を落ち着けてくれて、でも、乙女の一面もある。」

「そうですね。」

流石にツンデレといっても理解して貰えないか、殴られるかしそうだから、余計なことと言わないようにしよう。

「それじゃあ、愛紗……。おやすみ。」

「おやすみなさい。ご主人様。」

・・・ZZZ・・・ZZZ・・・

・・・その日の夕方・・・

「ん……。愛紗!？」

夕方目が覚めると、愛紗はまだ俺の所にいてくれた。正確には俺の手を握ったまま、寝ていた。

「・・・ご主人様。何処までも・・・付いていきますよ。我が心は・・・貴方の元・・・に」

ここまで忠義を誓ってくれる家臣がいるんだ。俺はもっとしっかりしないと。そう思いながら、愛紗をそっとベットに入れて、一緒に寝た。

俺はただ、愛紗が風邪をひかないか心配で入れたただけなんだ。決してこの後に起きたことを後悔はしていない。

【屋敷の中】

「姉者は何処にいるの?」

「多分、県令様の所だと思いますよ、張飛殿。」

「分かったのだ！」

（晩ご飯の準備できたから、早く呼ばないとご飯が冷めちゃうのだ！）

【県令の部屋】

ドン！鈴々が勢いよく扉を開ける。

「姉者ー！！お兄ちゃん！！ご飯・・・」

そこで鈴々が見た光景はというと・・・。一刀と愛紗が抱き合つて（正確には愛紗が一方的な形であるが）しかも指を絡ませて、顔も向かい合い、あと少しで唇がくつつきそうだった。

「愛紗はずるいのだ!!」

「ん・・・どおした鈴々・・・!？」

愛紗は起きるや否、自分の状況を把握した。恥ずかしさからか、床から跳ね飛び起き上がる。その振動で一刀は目を覚ます。

「・・・愛紗？どうかしたか？」

「ご主人様が私を動かしたのですか？」

また、黒いオーラが出ている。やっぱり正直に言うべきか。

「いや、愛紗が風邪ひいたら困るから床に上げたただだ。そしたら

いきなり抱き着いて来るからびっくりしただけだ。」

「な……。そ、そんな事はけ、決してしていない！！ハズ……」

「明らかに愛紗が抱きしめにいつてたのだ！いつもは寝相が悪……」

「鈴々は黙っている！」

「愛紗はお兄ちゃんの前だと、いつも堅苦しいのだ。」

「そうか？俺と二人の時はまた雰囲気が違うぞ？な、愛紗？」

「うつ……。」

「まあ、寝相が悪いくらいで嫌いになったりはしないからさ。」

「と、当然でしょうに！！」

「そんな捨てられた犬みたいに涙目になることはないでしょ。」

「え……。あ！」

愛紗は自分が無自覚に涙目になっているのを知り、更に顔を赤くする。

「愛紗はお兄ちゃんに嫌われたくないだけなのだ。」

「そついう気遣いはいらなから。愛紗は愛紗のままでいいから、ずっと傍にいて欲しい。」

「はい。」

そういつて笑顔になる愛紗。俺は気が付くと愛紗の前に立ち・・・
愛紗の髪を撫でていた。

「ご主人様・・・。」

「愛紗。」

いい雰囲気にな何か不満な鈴々は当初の目的を思い出した。

「思い出したのだ！！愛紗、お兄ちゃん！晩ご飯なのだ！」

「そうか、鈴々はそれでわざわざ呼びに来てくれたんだもんな。」

「そうなのだ！急ぐのだ！」

鈴々は、猛スピードで駆けていった。鈴々を見送った後、

「私達もいきましょうか。」

「そうだな。それにしても、愛紗の寝顔は可愛かったな。」

一刀は悪戯に笑う。

「か、可愛いなどと軟弱・・・ではなく、調子のいいことを言われ
ても困ります。」

「事实は事实。愛紗は可愛い女の子だよ。さっきもいったけど、人

肌が恋しいから、今夜は三人で寝ないか？」

「え……。」

「駄目かな？」

「いや、ご命令とあらば、我等に断ることは出来ません。お付き合
いいたしましょう。」

「……嫌ならいいぞ。」

今の言い方は納得いかん。上手く訂正して欲しいと思う。

「嫌ではございません！是非とも我等と睡を共にしましょう。」

愛紗はそういつて笑顔を見せる。

そして、たわいのない話をしながら鈴々の待つ食堂へいったのだ
った。

……その日の夜……

「んにゃ〜。お兄ちゃん。むう……。」

「ご主人様……ご主人様……。」

一刀は眠れなかった。何故かって??それはだな、あの二人がいけないんだ!!

まず、鈴々。俺の左手を完全に抱き枕にしている。しかも、又をまたいで抱いているため、布ごしに当たっている……。

もつと酷いのが愛紗だ。

寝相が悪いつていうか……、本能で動いてるだろ。

まず、愛紗の手は俺の首を抱いている形になっている。しかも、ふくよかな胸が俺にこすり付けられている。更に、愛紗の脚は……俺の右ふともを絡み、タケノコ部分にまで脚をぶつかったり、ぶつからなかったりして、タケノコが元気になりそうで危なかった。流石に朝起きて、成長期だったりしたら、示しがない。

そんな地獄(?)を味わいながらも、必死になって一刀は寝た。

愛紗パート01（後書き）

これからも、ちよくちよく入れて行きたいと思います。 18 禁内容
は、その内入ると思いますが、別に区分する予定です。

鈴々パート01（前書き）

次は鈴々パートです。二人はパートいくつまで用意するかは未定ですが、メインヒロインは結構多めに書きたいと思います。

鈴々パート01

怪我が完全に治った一刀は、久しぶりに鍛練がしたいので、鈴々を鍛練に誘った。

「鈴々？」

一刀は鈴々の部屋をノックして鈴々を呼ぶ。

「あ、お兄ちゃん。どうかしたのだ？」

鈴々がいきなりすることに驚きながらも返答する。

「俺の鍛練に付き合ってくれないか？」

「了解なのだ！」

と、声を上げてから三秒後。

ドッカーン！

扉が勢いよく・・・吹っ飛んだ？

「鈴々・・・。流石に扉壊したらいけないだろ。」

「あ！ごめんなのだ。」

「まあいいか。いくぞ、鈴々。」

「合点なのだ。」

【鍛練場】

鈴々はいつも元気な子であるが鍛練場に来ると、やはり真剣な目になる。

「さあ！お兄ちゃん。来るのだ。」

「急かすなつて。」

一刀は自分の行動パターンを決める。

瞬迅剣 獅子戦吼 魔神連牙斬

「よし！！いくぞ！」

「おーなのだ！」

しばらくぶりに打ち合う。鈴々はあの長い得物を簡単に扱うが、相手の心理を読みかわしていく俺には一撃も与えることが出来ない。

「むー。当たらないのだ！」

『瞬迅剣！！』

ガッシイイン！！

鈴々の腹を狙って突きを放つが、鈴々に止められる。

「危なかったの・・・」

『獅子戦吼!』

防いだ剣が再び襲い掛かる。鈴々は止めようとするが、

ブオオオオオ!

謎の幻覚のような物。自分も初めて見た物が剣と同時に襲い掛かる。

ドッカーン!!

鈴々はそのまま吹き飛んだ。が、流石は鈴々。普通ならば倒れる所だが、何とか堪えた。

しかし・・・

『魔神連牙斬!!』

剣で出来た波が鈴々を襲う。鈴々は武器を落とした為に、防御も出来ずに魔神連牙斬を直撃・・・はしなかった。一刀がわざと鈴々の手前で消えるように仕組んだのだった。

「俺の勝ち・・・かな?」

一刀は戸惑うように声をかける。

「むー。お兄ちゃんは強すぎるのだ。」

鈴々は少し悔しそうにしたが、一刀が

「怪我はないか？」

と聞くと、

「大丈夫なのだ！」

と、いつもの元気な鈴々の声が返ってきた。うん。鈴々はやっぱりこうでないと。

「お兄ちゃん。お願いがあるのだ。」

「え、何？金は持ってないから点心は買えないぞ。」

「違うのだ。獅子・・・なんとかを教えて欲しいのだ。あれはすごかったこいいのだ。」

「よし、分かった。特別に教えてあげよう。」

こうして一刀は鈴々に丸一日をかけて、獅子戦吼を教えるのであった。

・・・夕方・・・

「ドッカーン！！」

鈴々は大体獅子戦吼をマスターしてきた。ただ、無邪気さからか、溜めが短くなり、技の威力が減ってしまうこともあるが、実戦でも

使える位上手くなっている。

「うん。いい一撃だ。」

一刀は鈴々を誉める。

「これでいいの？」

「ああ。上出来だ。」

「やったのだ!!」

一刀は鈴々の頭を撫でる。

「えへへ。撫でられちゃったのだ。」

「……。」

一刀にふと考えが過ぎる。鈴々は子供だ。子供だから・・・戦うことの意味を考えずに戦える。だから強いのではないか？戦争の恐怖。死ぬこと。もし、鈴々に戦場で何かあったら俺はどうすればいい。何も出来ないのが落ちだ。どうしたら・・・

「お兄ちゃん？」

「ど、どうした？鈴々？」

「顔が暗いのだ。何かあったら鈴々に聞けばいいのだ。」

聞いていい話なのだろうか？鈴々の気を紛らすのは今の世の中で

は寧ろいけないのか？俺には分からない。だからこそ、聞いてみた。

「鈴々は・・・戦は怖くないの？」

不意の質問に鈴々は驚く。

「毎日戦に出る為の鍛練をして、兵の士気を上げて戦をしては、また鍛練……。鈴々だって他にしたいことあるだろうし、盗賊とはいえ人だ。人を倒すことが怖いとかって思ったりしないの？」

「大丈夫なのだ。」

鈴々は平然に答えた。笑顔を作る顔はいつもの鈴々。しかし、目だけはいつもと違う。気合いが入っているのが分かる

「平気なの？」

だからこそ、ついついまた聞いてしまった。まだ、本音があると思っただからだろうか。

「平気・・・じゃないけど、平気なのだ！」

「え？」

一刀はどういう意味か、すぐには理解出来なかった。

「人の命を削るのは好きじゃないし、嫌だけど・・・。」

鈴々の少し重くなった唇はゆっくりであるが開かれていく。

「強い人は弱い人を助ける為に働く義務があると思うのだ。」

「・・・愛紗がそうだったからか？」

愛紗とが鈴々にそう言わない限り、鈴々はそんな堅い言葉は使わないはずだ。

「確かにそうなのだ。でも、愛紗と沢山の町を回ってそれが正しいって思ったのだ。」

「・・・そうか。」

鈴々は本当に優しい子なんだ。なのに・・・なのに、鈴々がこんな風に戦をしないといけない事実に一刀は動揺を隠せないでいた。

「鈴々！」

「にやにや！！いきなりなんなのだ！？」

一刀は少し心を落ち着けてただ一言、

「早く乱世を終わらせような。」

「合点なのだ！」

鈴々は、元気よく言った。

（やっぱり、鈴々に戦をさせたくないけど・・・今じゃ無理な話かなら鈴々は、絶対護ってやらないといけないな。）

「それじゃ、帰ろうか。」

「うん！」

（鈴々・・・死ぬなよ・・・！）

一刀は心から祈った。

鈴々パート01（後書き）

鈴々パートは出だしから暗いですが、まあ有り・・・ですかね？ 鈴々のような妹キャラは、やっぱり護ってあげたくなるような設定にしたかったんですよね。ではまた次回！

第四章：軍師殿推参（ぐんしどのすいさん）

それから数週間、一刀達は啄島の近くで起きた賊達を全て鎮圧していた。彼らのもつ財宝でかなり経済的にも上乘せされてきた。しかし、一方で、兵隊の疲労はかなり溜まっていた。なんとかしないといけないのだが、その話し合いをする最中、想像もしなかった最悪の事態が起こるのであった。

【軍儀室】

「・・・と言う訳で、経済的には上昇しているが、兵の疲労に若干問題があるというコトだな。」

「兵隊さんが疲れてるのは問題なのだ。」

「かといって休める訳にも行かないし・・・。」

5000位しかない軍の数では休暇の人を作るのは無理に等しい。

「交代制にするほど余裕もない・・・か。」

「そうですね。」

「軍師が欲しいよな。こういう時こそっていう時に助言をくれるさ。」

一刀はついついため息を付く。

「無理は言わないのだ！」

「鈴々の言う通り、ここは幽州でも人の流通が少ない方の県です。ここに軍師になる器の者がいる訳がない。」

「でも、実際には天下に通用する武官が2人いるし、なくもない話だが……。」

「でも、今いないのは事実なのだ。」

鈴々はさりげなく正論を叩きつける。

「だから今考えなくてはいけないので……。」

愛紗がいかけた時だった。

ドカツ！

扉がノックもされずに開いた。

「誰だ!!！」

「で、伝令です!!！」

「だから何だと言っている。呼びもせず、言葉も無しに部屋に入るなど……。」

「愛紗。今は落ち着け。」

兵がいきなり入るなど、緊急事態に違いない。そう思った。

「……んで用って何だ？」

「はっ。ここから南に黄巾賊や盜賊が集結して、合計3万の軍が出ています。」

「さ、三万だと!!」

「流石に大き過ぎるのだ。」

「やばいな……。」

三万じゃ数が違う。流石に一刀が100%の力を出しても被害は大きくでるだろう。

「しかし、公孫賛殿の軍が、2万程の軍を5000の軍で押さえています。」

「ほお、公孫賛殿が。」

「いい人なのだ。」

一刀は鈴々の言葉に頷く。

「ってコトは残り一万がこっちに向かって来るのか……。村を襲いながらか……。」

「御意。」

一刀は唇を噛む。また罪なき人が死ぬのかと。

「……愛紗！鈴々！」

「はっ。」

「どうしたのだ？」

「すぐに出陣の準備だ！！」

「御意。」

「合点なのだ。」

「では、お前は民に知らせろ。今から黄巾賊の討伐に向かうから出陣出来る者は急いで準備し、広場で待機しろとな！」

「御意。」

兵が部屋からでようとすると、

「待て！貴様！！」

愛紗が兵を止めようとするが、一刀が愛紗を止める。

「愛紗は俺が説得するから、行つて。」

「はっ。」

兵は一礼して部屋をでた。？

「ご主人様！何故止めるのですか！私はあの者の無礼をですな。」

「愛紗……。兵を休める案を思いつかないからってさ、兵にあたるのは頂けないな。」

「べ、別にあたつてなど……」

愛紗が下を向く。否定というよりは認めたく無い気持ちが強いのだろう。

「凶星か……。」

「はい……。不覚ながら。」

一刀は愛紗を抱きしめる。

「……ご主人様！？」

不意の行動に愛紗は驚き声を出す。

「別に愛紗を責めた訳じゃないんだ。」

「……それは、分かっています。」

どこか素直でない返事の返し方。

「だったら自分で自分を責めるのも止めろな。」

愛紗は目を丸くする。このコトも凶星だったのだろう。

「・・・ご主人様は私のコトはなんでも分かるのですね。」

「もう出会ってから何日と立ってるからな。鈴々！お前は何時も準備が遅いから先に準備してきて。愛紗の気持ちを落ち着かせてから俺達も準備するから。」

「愛紗だけお兄ちゃんを一人じめするのだ。ずるいのだ。」

「帰ってきたらまた遊んで上げるから、な。」

と一刀が一言いえば

「やったー！約束だよ。お兄ちゃん。」

「ああ、約束する。だから早く準備するんだぞ。」

「了解なのだ！」

と、ご機嫌になる鈴々であった。

「愛紗・・・。」

「ご主人様・・・。」？

一刀が鈴々の前では決して言いたくなかった話を始める。

「あと、なんでもかんでも一人で背負うのは止めて欲しいな。」

「な・・・。」

いきなりの一刀の願いに動揺する愛紗。

「何時も何かとあれば自分で背負い、自己嫌悪に入る癖があるだろ？」

「・・・はい。」

「よし、素直だな。」

一刀は愛紗を撫でる。

「そんな軟弱な行為を私にし・・・。」

最初こそ、嫌がっていたのに、段々抵抗が無くなり、寧ろ気持ち良さそうだ。

「鈴々に、なんて言わないけど、俺にも背負わせてくれよ。分かっただな？」

「はい！ご主人様。」

愛紗は笑顔で答える。やっぱり愛紗は笑顔が1番だと一刀も思う。

（もし、自分が1番愛紗を笑顔に出来るなら、ずっと一緒にいてあげたい。）

「・・・ご主人様？」

「・・・いくぞ！愛紗。共に弱き人を出来る限り多く護ろう！」

「・・・はい！」

こうして二人も戦の準備を始めた。

【荒野】

「愛紗が1番来るが遅かったのだ。」

「確かに。結構時間がかかったな。」

「べ、別にいいではないか。」

「伝令!!」

「どうした？」

「前方に逃げている難民を発見！」

「何!？」

「逃げてるってコトは黄巾賊が近くにいるのだ。」

「急ごう!鈴々!愛紗!」

「全軍駆け足!罪なき民達を護るのだ!!」

「皆、鈴々に続けー！」

「うおおおおおおー！」

荒野に魂の声が上がる。

そして、難民の集団を見付けた。

「愛紗は」

「愛紗！民の護衛を頼む。」

「はっ。」

「鈴々は俺と一緒に本隊を・・・」

愛紗と入れ違いに兵が来た。

「伝令！！逃げ遅れている民が2人。」

「何！？」

「愛紗と入れ違いになったからまずいのだ・・・。」

「しょうがない。俺と、鈴々と、一刀疾風隊は逃げ遅れた民を助ける。他の奴らは愛紗との合流後に進軍せよ！」

「鈴々は、一刀疾風隊を引き連れてくれ。俺は先に行く。危ない気がするんだ・・・。」

「分かったのだ。気をつけてね。お兄ちゃん。」

「ああ！」

パアアアアア！？

翼を広げて、一刀は文字通り飛び出した。

【二人の難民のいる荒野】

「ふう・・・ふう・・・。」

「お婆さん。頑張つて下さい！もうすぐ町がありますからね。」

一人は老婆、一人は少女だった。

「じゃが・・・もう年貢の納め時じゃ。前からも何か来てるしのお・・・。」

「はうあー！空を飛んでいます！」

「せめて、前から来る者を味方であることを信じて頑張ろうかね・・・。」

と、再び歩き始めたその時。

「追い付いたぜ！婆よお。」

「もう来たのかい・・・。お嬢ちゃん。わしのせいで・・・悪いねえ。」

「い、いえ！まだ諦めるのは早いですよ！きっとなんとかありますう！」

「無理だろうな！弓隊！斉射！」

ピュン！

無数の矢が二人を襲う。

「ナムナム……。」

「うつつ。」

と二人が諦めたその時だった。

『レイ！』

その言葉と共に空から無数の光が降り注ぐ。その光は黄巾賊が打ち放す矢を全て喰らいつくす。

「啄県県令でかつ、天からの使者、北郷一刀！！民を護る為！此処に参上！！」

まだ力が弱い俺達は天を名乗るコトで人を寄せる必要がある。だから今もこうして名乗りをあげてみた。

「県令が自ら死にに来たか！？？」

「先導隊の１０００人に過ぎない連中が調子に乗るな！」

『グレイブ!』

地面を盛り上げ、先頭の10人を中に浮かし、墜落。しかも、地面が盛り上がった事実には怯え、敵は進軍出来ないでいる。

「なんと言うお力……。ありがたや……。ありがたや。」

老婆と少女は呆然と立っている。我に還った所で……。

「……。きたか。」

「はうあ!だ、誰が来たのですか?」

「鈴々!この二人を連れて愛紗と合流してくれ!一刀疾風隊もだ!」

「そ、そしたらお兄ちゃんは一人なのだ。」

「構うな。あいつらは二人に対して……。罪無き民に武器を使ったんだ。全員まとめて地獄へ葬ってくれる!」

わざと黄巾賊に聞こえるように放った言葉は、一刀の思惑通りに黄巾賊の士気を下げた。

「分かったのだ!ってお前は子供なのだ。大丈夫か?」

「大丈夫ですけど……。私は子供じゃありません!!大人の女の子ですもん!」

「鈴々も子供じゃないのだ。」

「分かったから今は止める。鈴々は指示を遂行してくれ。いいな。」

「わ、分かったのだ。でも、お兄ちゃん。死んじゃ嫌なのだ……。絶対、生きてね。」

「分かった。生きて帰るさ！」

鈴々とハイタッチをすると鈴々は老婆をおぶる。

「君も早くくるのだ！」

「私は……。あのう。」

そういつて一刀を見る。何故だ。

「俺に用か？」

「はっ、はい！」

「分かった。鈴々は先に行ってる。この子もなんとか護るさ。」

「了解！皆、行くよー！」

「うおおおおおおー！」

「一刀さん！死なないで下さいね！」

「……。早くいけ。」

「応っ！」

ダダダダダダ！？

皆勢いよくかけていった。

「話ってなんだ？早めにな。」

「は、はうあ・・・はうう。」

（大分緊張してんな・・・）

無理もない。今戦場には俺と少女、数10M先には黄巾賊がいる。

「とりあえず、深呼吸しろ。すーはー。すーはー。」

「すーはー。すーはー・・・」

しばらくして。

「落ち着いたな？」

「はい。」

「俺が護るっていったら死んでも護るから安心しな。」

「は、はい！」

少女は、顔を少し紅く染めながらも大きく頷いた。

「話ってなんだ？」

一刀は単刀直入に話を切り出した。

「えっと、私の名前は諸葛亮で、字は公明です。ある先生の元で勉強していたのですが、今の世の中を変えたくて。でも、変えるに相応しい人を見当らなくて、そしたら天の御使い様の噂を聞いて・・・」

「はるばる此処までか？」

「は、はい！！」

かなりの意志を持っているのがよく分かる。ならば彼女に軍師をやって貰おう。

「俺の軍隊には軍師が足りないんだ。是非軍師になって貰いのだが、いいか？」

一刀は逆に問う。彼女に期待出来る。一刀の本能がそれに気づいたのである。

「勿論です！ご主人様。」

「ご主人様ね・・・。」

「私はもう家臣ですよ。あと、私のコトは真名で、朱里って呼んでくださいね。」

「分かった。では、朱里。」

「はい。ご主人様。」

「背中に掴まれ。」

「はうあー!!」

いきなりの話の流れに戸惑う朱里。

「敵が弓を構えている。くるぞー!!」

「は、はい!!」

朱里は背中に掴まった。刹那、北郷一刀は空を飛び、矢をことごとく避けた。

「チッ外したか!!」?

「隙を付こうにも考えが甘いな!!」

「次は当てる!!」

「無駄だ。」

朱里はまた怯えまじまる。今度こそ確実に命を狙われる。それを実感した。

「朱里……。今からかなり強めの術を使う。びっくりするなよ。」

「は、はい!!」

一刀は詠唱する。慎重にかつ正確に。

第五章：怒剣雷削魂人（いかるらいけん、ひとのたましいをけずる）

朱里は少し体がピリピリしている。回りの空気が何者かに支配され、なにか不思議な感覚していた。これが魔術の力なのだが、朱里は理解するコトが出来なかった。

《雷雲よ刃となりて敵を貫け！》

『サンダーブレード！』

突如、黄巾賊の上空だけ、雨雲に覆われた。しかし、彼等はこれから起きる恐怖を知らない。無知とは時に哀しいものである。

「なんだあれは！！」

「雲から剣が！！」

「かなりでかいぞ！！」

「た、助けてくれー！」

ズドドドド！

殺戮の稲妻の剣は無情にも黄巾賊のいる場所の中心に落ちる。

「だ、大丈夫か！？」

周囲にいた黄巾賊が仲間を心配して中央による。それは、この剣の真骨頂を知らないから起きる惨事である。

稲妻の剣は・・・雷を放った。一刀にギリギリ届かない範囲まで雷は襲う。黄巾賊達に助かるすべもなく、得体のしれない数の哀れな黄色は、黄の色を制する雷に飲まれたのである。

絶望しか生まないこの光景に朱里はただ、

「はわわ・・・。」

としか言えなかった。

「朱里・・・。やっぱり俺の力は怖い・・・よな。」

「そ、そんなコトはありません!!」

「嘘は言わないでいい。今まで何人の人に恐れられて生きてきたか・・・。」

朱里は悟った。一刀は世界に恐れられていて、ずっと一人で生きてきたコトを。

「わ、私は確かにびつくりしました!」

慌てながらも自分の意見を言う朱里。

「ですけど、ご主人様はその力を世の中の為に使ってます。そのコトに間違いはないのです。」

自分の気持ちを落ち着かせながらも、意志を伝える。

「だから……。もつと自信を持ってください！！少なくとも私は、私を認めてくださったご主人様を信じます。」

朱里の思いを受け取る一刀。自分は少しネガティブ過ぎたのかもしれない。今は支えてくれる仲間がいると言っのに。愛紗のコトを言う資格など自分にはなかったのだ、と。

「ありがとう、朱里。」

一刀はお礼を朱里に伝える。彼女の一言が、一刀の重荷を一つ取り払ったのは言うまでもない。

「ご主人様……。」

「貴様！なにやつだ！？」

そこそこいいムードになってきたが、愛紗がそれを制する。

「あ、この子は諸葛亮だ。さつきから俺達の仲間になった。」

「はうう。始めまして。諸葛亮、字は公明です。」

「ご主人様。こやつを仲間に入れるなど聞いておりませんが？」

愛紗はどこか不満そうだった。ってかまた黒い！

「仲間が増えるのはいいコトなのだ！鈴々は張飛なのだ。鈴々って呼んでいいよ。」

「あ、私のコトは朱里って呼んでください、鈴々ちゃん。」

「分かったのだ、朱里。宜しくね。」

「宜しく願います」

と、和解した二人を睨む愛紗。うゝん、なんで怒ってるんだ？？

「愛紗はヤキモチ妬きだからしょうがないのだ。でも、それじゃ朱里にとっては迷惑なのだ」

「や、ヤキモチなどではなくだな、護衛上問題がだな。」

「朱里は一刀疾風隊の真ん中に入れて置くから問題ないだろ。それに、彼女は軍師としてかなり優秀な人材かもしれない。」

確かに、あの軍団に入れて置けば問題はほとんどない。

「それなら構わない。私は関羽。真名は愛紗。愛紗と呼べ。」

「私も朱里って呼んでくださいね、愛紗さん。」

「分かった、朱里。共に乱世を鎮めよう。」

「御意です。」

一通り和解した所で、愛紗は回りを見る。すると、傷一つなく倒れ

ている黄巾賊の姿が見える。

「・・・これは全部ご主人様が？」

「ああ。」

「一撃で全部倒しちゃったんですよ。びっくりしました。」

「「一撃!?!」」

二人は朱里よりびっくりしている。今までの素行を見ても、天術は魔術を見たが、そこまで強いものはみたこともない。

「サンダーブレードより上の魔術もあるけどな。」

「鈴々はみたいのだ!!!」

「私も、拝見したい。さんだーぶれーど、とやらも見てみたいが。」

二人には恐怖より好奇心が強いらしい。

「皆・・・怖がらないのか？」

「刀はやっぱり怖いと恐れられることを恐れていた。」

「お兄ちゃんは優しいから怖くなんてないよ。」

「ご主人様・・・。我々はどんなコトがあろうと、心も体もご主人様の傍にいますと言いましたよね。忠義を誓ったのをお忘れですか？」

「だから、ご主人様は自信を持っていいんですって言ったじゃないですか。」

聞きたかったこの答え。三人はこれから俺のことを支えてくれるだろう。やっぱり俺は何処か心が弱い。けど、皆と一緒になら・・・三人と一緒になら・・・何処までもいける。そう思った。

「さて、ご主人様。」

愛紗が話を切り替える。

「もうすぐ黄巾賊の別動隊が来るのですが？」

「向こうは9000か。こっちは何人くらいいるんだ？」

「えっと・・・。5000人位ですね。」

「ありがとう。ってか、朱里にはいつのまにか副官の仕事を任せているな。」

一刀は当たり前になっていた今の一部始終を振り返り朱里に言う。

「えへへ。今はこれくらいしかお役に立てませんから。」

褒められたからか、少しご機嫌な朱里。

「どうやって敵に当たりましたっ？」

「そんなの、突撃。粉碎。勝利なのだ！」

「鈴々、それでは兵に大きな被害がですから言っているんだが。」

「む。分からないのだ。」

「「だろうな。」」

愛紗と一刀は声を揃える。

「あ。」「

朱里が声を出す。？

「お、軍師殿。何か妙案でも？」

一刀が期待して朱里に問う。

「今の兵力から考えれば、別動隊を作り、半包囲するのが良いかと。」

朱里はいざという時に冷静だ。うん、頼りになるな。

「それが無難だな。」

「そうですね。」

「よく分からないけど、それでいいのだ！」

とりあえず満場一致で方針が決まる。

「別動隊は・・・俺と一刀疾風隊でいいな。」

「異論はありませんが……。」

「分かってる。朱里は愛紗の部隊に入ってくれ。」

「御意です」

「朱里、合図を頼んだぞ。」

「朱里。お前の力量を信じるぞ。」

「朱里、頑張つて！」

「は、はい！頑張ります。」

軍を集めた所で、士気を高める為に全軍を集める。

「おい！お前ら！！俺達に新しい仲間が出来た！彼女は我等の軍師になる者だ！」

（あれが軍師か？）

（ただの少女だろ。）

（あいつの指示？あてになるのか？）

（さあ……。正直、従いたくはないな。）

「半信半疑の奴は前へ出ろ！聖なる裁きを降す！！！」

（一応、信じよう！）

（そ、そうだな。死にたくはないしな。）

「・・・とりあえずはいいかな。」

「兵が此処まで疑うとは・・・。」

「でも、朱里の凄さを今見せてあげればいいのだ!!」

「そうだぞ、朱里。だから、落ち着いてな。」

朱里が慌てないか心配ではあったが、時間は来た。

「んじゃ、愛紗！朱里を頼んだ！」

「御意。」

「気をつけてね。お兄ちゃん。」

「ご主人様に御武運を。」

「疾風を名乗る者達よ！我等が力を今見せる時！！剣を取れ。構えろ。そして、風の如く敵に襲い掛かるぞ！！」

「うおおおおおおお！」

「・・・。今回は伏兵だ。時期までは我慢するぞ。」

「応っ！」

（朱里の初陣だ。しっかり決めてやらないとな。）

【荒野】

「敵が突っ込んでくるのだ！」

「全軍！方円の陣を形勢してください！」

愛紗が事前に方円の陣の練習はしていたので、全軍は速やかに陣を作る。

「敵を迎撃するぞ！」

「応っ！」

「絶対に生きて帰るのだ！！」

「応っ！！」

それから一刻が経過した。お互いに戦力は殆ど変わらず、双方に疲

労が溜まっていた。

「い、今です！！狼煙をあげてください！！」

【伏兵隊のいる山】

「あれは・・・。」

朱里があげた狼煙に気付く一刀。

「聞け！今から敵に雷剣を落とす！！その直後を襲え！いいな！？」

「うおおおおおおお！」

一刀は早速唱える。

《雷雲よ刃となりて敵を貫け！》

『サンダーブレード！』

先程よりもかなり大きい雲が発生し、仲間も敵も混乱する。

【北郷軍本陣】

「あの雲はなんだ!？」

愛紗が完全に取り乱している。

「はう……。ご主人様の術です。」

「ご主人様はあんな雲までだせるのか……。」

軽く感心する愛紗。

「でも、雨を降らせてもあまり効果がないのだ!」

と、突っ込む鈴々。

「あの雲は雨ではなくてですね……。」

朱里が説明しようとしたが、雷剣が自ら顔を出すほうが早かった。

【黄巾賊の陣地】

「あ、雨雲？」

「いや、違うぞ!!黄色っぽい光が……。」

「雷か!!」

「まずい！！撃たれるぞ！！」

「し、しかし今軍は動かせないぞ！！」

と、考える黄巾賊だったが、もう手遅れだった。

「け、剣が！！」

「大きすぎるだろ！！？」

「・・・天の御使いの力か・・・。」

「「「「・・・。」」」」

黄巾賊が凍り付く。未知なる恐怖に包まれた黄巾賊はもはや戦うコトは出来なかった。いや、戦おうにも雷剣が落ちてくるのだ。と諦めている。

ズドドドド！！

剣は敵軍中央を目掛けて落下した。

「ぐはっ・・・。」

「うわああああ！！」

「た、助けてく・・・。」

黄巾賊は剣により裁かれた。彼等にも友情があるのか、やられた仲

間の所に集まってくる。そして第二弾が発動する。

ビリビリビリビリ……。

剣から雷が発生する。近くに寄った黄巾賊は全滅する。

……。

黄巾賊の陣地にはぽっかり穴があいた。

今度のサンダーブレードによる被害は、先程よりも効果絶大だった。何より、生き残った残党の士気をも全て奪ってしまった。

「どうするんだ……。」

「あんな奴ら相手に勝てるはずがないよな……。」

と暗くなっているのもつかの間。

「敵軍の伏兵だ!!」

「旗は……十文字……です。」

「……。天の御使いと、その親衛隊か。」

「戦うか?」

「いや、俺は降伏だ!!まだ死にたくはない。」

「俺もだ!」

次々と降伏を志望する者が出る。そんな中、一刀が救いの一言を言い渡す？

「降される者はその頭巾を棄てよ!!」

この一言で黄巾賊は罪深いコト全てに終わりを告げた。

青い空は汚れた黄色を癒してくれるコトだろう。一刀もそれを祈りながらも、7000人の大群を連れて自陣に帰っていくのだった。。。

【北郷軍本陣】

「あ!!」

朱里が思わず声を上げる。

「どうした!朱里?」

愛紗が尋ねる。

「敵が・・・降伏したみたいです!!」

「本当か!?」

愛紗が嬉しそうな顔で朱里を見る。

「はい!ご主人様の旗が黄巾賊の中を駆け巡りながらこちらへ帰還してきています!!」

「そうか……。よかった。無駄な戦争がまた減るのだな。」

と、安堵を漏らしながらも

「ご主人様の力はどれほどなのだろうか……。」

「わかりません……。けど、あの術よりまだ上の術もあるって言うてましたよ。」

「そうか……。我等には物凄い味方がいるのだな。」

「はい。しかも、ご主人様はその力を信義の為だけに使おうとしますから……。」

愛紗も朱里も自分の主の偉大さを知り、喜ぶ。しかし、愛紗はふとあの存在を思い出す。

「ソードダンサー」

かの者は一刀と互角に近い強さを持っている。そんな魔物がいたとなれば……。考えても始まらない為、愛紗は思考を停止させた。

【黄巾賊の陣地】

そろそろ一刀も自陣につくというころ、まだ降伏していない黄巾賊

と鈴々が戦っていたので鈴々を手伝い連れて帰っていた。

「お兄ちゃんと一緒に戦えるのは運が良かったのだ！」

「ははは、そう言ってもらえると嬉しいよ。」

といいながらも苦笑い。鈴々に背中を護ってもらいながら戦うのはあまり良い心地がしない。護るべき存在に守られているのだから・・。

「鈴々、無理して一人で前にするのはこれで最後な。」

「・・・分かったのだ。」

「頼むから俺に心配をかけないでくれ。」

心からの本音。鈴々がいくら強いといっても突撃將軍。そういう人はよく策にはまる傾向がある。今は大丈夫でも・・。と考えると落ち着けなくなる。

「気をつけるのだ。」

一刀はすこしほつとしながら愛紗達の待つ自陣へ到着した。

【北郷軍陣地】

「愛紗！朱里！」

「鈴々……。心配したぞ。」

「鈴々ちゃんはどんどん前に行く傾向があるんですね。」

「ごめんなのだ！」

鈴々なりに反省……。してるよな？

「朱里。黄巾賊7000人が仲間に加わるんだが、被害と合わせる
とどれくらいの人数になる？」

「えっと……。こちらの被害を考えて、更に怪我人を町や村に送る
となるとですね……。」

朱里は一生懸命計算している？

「一万弱……。でしょうか。」

「一万弱……。か。これなら公孫贄の軍と合わせれば勝てそうだな。」

「ご主人様一人でも充分に勝てそうですけど……。」

朱里はボソツと本音を呟く。

「なんかいったか？」

はつきり聞こえたが、あえて聞く。

「い、いえ！何も。そ、それより早く行きましょう！」

「そうだな。」

「全軍前進！」

「公孫賛って人の援軍にいくのだ！！！」

こうして、公孫賛のいる所へ向かうのであった。

第六章：一刀結契公孫贊（かずと、こうそんさんとちぎりをむすぶ）

【荒野】

「しっかし、良かったな。朱里が認められてさ。」

「おめでとうなのだ！朱里！」

鈴々は素直に喜ぶ。

「有り難うございます」

「兵にも愛紗にも認められたんだ、軍師殿。これからも一つ！よろしくお願いしますよ」

「は、はうあ！なんです！？その言い回し・・・って、完全にかわれてますう・・・。」

少ししよげる朱里の横で

「ご主人様？何故私の名前まで入れるのですか！？私は既に真名を教えています。そんな風に言わないで欲しい。」

「でも愛紗は本当には認めてない感じがしたのだ。」

鈴々は実に正論者だと思う。子供なりの直感だが、間違いを聞いたコトはほとんどない。

「わ、私も・・・そんな感じがして、あの、そのう、少し怖かった

でしゅ！うう・・・また噛んじゃった。」

「怖かったと・・・私がな・・・そうか、朱里はそういう目で私を見ていたのだな？」

愛紗は更に黒いオーラを発する。このままでは朱里が可哀相だ。と一刀が考えた結果・・・。

「愛紗・・・。」

愛紗の怒りを抑えるには・・・アレしかないか。

「ご主人様？なにか？まさか、ご主人様まで怖いとでも！？」

「もしかして妬いてる？」

一刀の不意の質問に顔を真っ赤にする愛紗。

「な、なんてコトをい、言っているのですか！！そ、そんなはずはありません！」

完全否定する愛紗。もう一押しだ。

「そうか。妬いてくれないのか。残念だな。」

本当に残念そうな顔をする一刀。

「う、ご主人様！決してそのようなコトは・・・。」

「さっきと言ってるコトが違うのだ。」

鈴々がとどめの一撃を加える。

「そ、それは……。って、早く公孫贇殿の所へ行かなくてはいけないのだ。こんな話をしている場合ではなああい!!」

いきなり怒鳴る愛紗に……

「逃げましたね……。」

「逃げたのだ。」

「逃げたか。」

と三人は同じコトを口ずさみながら愛紗についていくのであった。

【公孫贇の陣地】

「へえ〜。」

いきなり一刀をじろじろ見渡す少女、それが公孫贇である。

「そんなに珍しくもないと思うんですけど……。」

「はは。悪い悪い。天の御使いがどんな奴かって、ちょーとばかり気になってたもんでさ。」

公孫賛・・・なんか不思議なオーラを持つ少女は悪戯っぽく笑った。

「まあ、それはともかく、此处を守ってくれて、ありがとうございます。」

一刀は丁寧な礼を言う。実際、彼女がここを封鎖してくれていなかったら、今頃はもっと酷い事態になっていた筈だ。

「ちょ、礼なんてよせよ。こっぱすがしいじゃないか。」

少し照れる公孫賛。公孫賛といえば白馬だが、白馬隊は今回はないようだった。

「んで、そっちは今どのくらいの人数がいるんだ??」

「えっと、一万弱だな。」

一刀が答える。

「ならば我等と合わせて一万五千くらいか。敵は二万五千・・・数が違うな。」

少しため息混じりに嘆く公孫賛。

「これくらい大丈夫だろ。」

公孫賛とは正反対にのんきな一刀。

「な……。お前は どうして そう……。 」

公孫賛が言いかけた時だった。

「なんともありませんようぞ。」

一人の美少女が軍義の場に現れる。見た感じからいって強そうだ。愛紗や鈴々にも並ぶか？

「所詮は烏合の衆。一騎当千の将があたれば敵は碎け散るに違いない。」

堂々と意見を述べる美少女。かなり気が強い……。というか、口喧嘩で勝てる人がいなそうな感じがする。

「そんな将が何処にいる!？」

公孫賛が戸惑う中、その美少女は躊躇いもなく

「「四人だ!」「」？」

「「あつ……。 」」

二人は同じコトを言った。

「話は聞いておりましたよ、北郷一刀殿。我が名は趙雲、字は子龍と申す。今は公孫賛殿の客将としてここにいますが……。 」

明らかに公孫賛が不満なんだろうな、と思いながらも話を戻す。

「趙雲と俺の中の四人はどうやら同じらしいな。」

一刀は趙雲を見る。

「ほう。我が武を見ずに認めるか。」

趙雲が関心する。

「当たり前だ。我が軍の誇る猛将二人に並ぶと見るが。」

「そこまで高く評価ならとは。有り難いお言葉だ。」

「仲間の力は見分けないと乱世では生きていけないからな。その三人と俺で四人というわけだ。」

一刀が勝手にまとめる。

「その通りです。流石は北郷殿だ。」

「趙雲も俺の武をみなくても分かるか？」

「貴方が一人で黄巾賊1000人を一撃で倒したと言う話は偵察を派っていましたから知っていますよ。」

なんて早い行動だろうか。仲間の力をより早く見定めて、次の戦につながる。まさに将の鏡だろうか。

「北郷・・・お前は化け物か？」

公孫賛が問う。

「・・・それより作戦はどうするんだよ？趙雲はもう行ったぞ？」

「何！？」

趙雲は一人で先に行く気だろう。死なないとは思うが、戦場では何があるか分からない。少し心配な為、早く作戦を決めなくては。

「とりあえず・・・。朱里！！」

「はうあー！！」

朱里はいつも通り、慌ただしい反応をしてくれる。うん、可愛い。

「つか、これがお前の所の軍師か？」

「は、はい・・・。頑張りますう。」

「多分実力は天下を取るに足るから心配するなって。それより朱里？」

「は、はい！？」

天下を取るに足ると言われ、更に緊張する朱里。

「策はあるかい？？」

「勿論ありますよ」

流石は朱里。こういう場面でもしっかり策を考えてくれている。

「まず、公孫贇さんの軍は伏兵として、裏に回りこみ、私達が戦い、敵の士気を削った所で出てもらいます。あとは陣を展開し、包囲しちゃいましょう。」

「つまり、趙雲の考えに乗るのか？」

公孫贇が少し不満そうに聞く。

「一騎当千の将は、士気を下げるには一番ですから。少々危険ですけど……。」

「じゃ、愛紗と一緒に行かせよう。そして、時を見て帰って貰ったら、前と同じように方円陣でいいだろ？俺は前で張ってもいいし、後ろから術で援護してもいいし。」

「今回はご主人様には前をお願いします。被害を少なくするにはそれが一番なんで、無茶だけはしないで下さいね。」

「了解。朱里、心配ばかりかけて悪いな。」

そういつて朱里の頭を撫でる。

「もう、ご主人様……。」

かなりいいムードだったのだが、公孫贇がそれを阻止する。

「決まったなら、さっさといけよ！！まあ、武運は祈ってやるから

さ。死ぬなよ。」

公孫賛なりの気遣い。

「分かった。そっちも気をつけて。」

そういい、一刀は陣地を後にした。

「北郷一刀……。何者なんだろうか……。？」

公孫賛には未だに謎だった。あの趙雲が敬意を持って認めるのだ。何かがあるに違いない。後ほど気付くのだが、それは彼が命の恩人になるくらい後の話である。

【北郷軍陣地】

「ただいま。」

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「おかえり〜なのだ。」

猛将……。には見えそうもないが、かなりの猛将二人がお迎えしてくれた。

「とりあえず、作戦は決まったから、指示は朱里から出しておいて俺は、少し心配事があるから回りを調べてくる。」

「ご主人様と対等に近いあいっ関係ですか？」

愛紗は一刀に問い掛ける。これが本当なら一大事になりかけない。

「ああ。奴の部下みたいな奴が来るかも知れないから。」

近くに魔界が開いた気がした。こつちの世界にも魔界があるのかは不明だが、この勘は当たってる気がする。

「皆・・・気をつける。」

「御意。」

「合点。」

「はい。」

この暖かな大地には似合うのこのない北風が、一刀達の近くを通りすがっていった。

第七章：救趙雲（ちようつんをすくえ）

結局、魔界と繋がる空間を見付けるコトができずに戦闘が始まった。既に趙雲が戦っていて、敵の死体により、戦いにくくなっていて、かなり危険な状態だった。

「愛紗！趙雲を頼むぞ。」

「はい。では、いつて参ります。」

愛紗はただ一言述べると、趙雲を目掛けて走って行った。

「むー。待つてるのは退屈なのだ。」

不満な鈴々をよそに、この戦で何がおこるか分からない不安になる一刀がいる。

「ご、ご主人様。きっと大丈夫ですから、自信を持ってください。」

一刀の不安を少しでも減らせるようにと頑張る朱里。

（私は直接戦うコトは出来ないけど・・・。）

「俺らしくなかったかな？ありがとう、朱里。」

そういつて朱里の頭を撫でる。

「えへへ・・・。撫でられちゃいました。」

少し照れる朱里。

（そうだ。俺しか対応出来ないんだ。俺がしっかりしないと……。俺が皆を護らなくてはいけないんだ。）

改めて一刀は意志を固めた。魔物が出てきたとしても、皆を必ず守り抜くと。

【黄巾賊の先陣】

「何女一人に時間をかけているんだ!!」

「で、でもあの女はかなり強いですって!物騒な得物を持っていますし。」

いくら黄巾賊が数の戦いが得意であっても、趙雲の武には全く通用しなかった。

「はああ……!!」

ザシュ!?

その一突きで敵の命を一つ消す。その動きは非常に華麗なものだったらしい。

「あ、あいつだって人間だ！疲れは必ず来るぞ。」

一人の男が今言える最大の言葉で何とか士気を保つ。――

――数分後――

敵の数は少し減り、士気も下がって来た。が、趙雲の得物も血を少し吸った為に幾分重くなってきたのと疲労の為に、動きが段々鈍くなってきた。

（もしかしたら負けるかもしれない・・・。）

そんな考えさえ脳裏に浮かぶが、武人として、手を止める訳にもいかず、敵を狩り続ける。

ザシュ！

一人。

ザシュ！

また一人死んでゆく。が、仲間が死ぬコトに恐怖がなくなった黄巾賊達に恐い者などいず、そろそろ立場が逆転しようとしていた時だった。

「ぐわああああ！」

一人の男が別の方向から宙を舞う。全員が呆然とする

「誰だ!？」

趙雲が飛んできた方向に目を向ける。そこには黒髪の美しい少女が、その特徴のポニーテールをさげながら、また特徴的な得物を持っていた。

「関羽殿か。」

「趙雲殿、無茶するのは止めて頂きたいものだ。主の振る舞いに感謝せよ。」

「ほう。関羽殿を此処に寄せたのは北郷一刀殿の計らいか？」

「朱里の提案だが、ご主人様が勧めたからな。それより、これから共に戦った後、私と共に陣に戻って欲しい。趙雲隊も仮ではあるが用意している。」

「ほう。先陣を釣るのか。」

「そ、そうだが……。よく分かったな。」

「将として、当然だ。しかし、此処で名高い関羽殿に背を任せられるとは、それこそ本気を出せると言うものだ。」

一連の流れを聞いている黄巾賊達は未だに体を硬直させている。あの化け物に更に仲間が来たと。それに……。

「だが、あの者達は誰だ?? 一人一人に将の気質を感じるか。」

趙雲が質問する。

「ご主人様直々に鍛えている親衛隊だ。」

「北郷殿が・・・か。あの方には驚かされるばかりだ。武といい、指導力といい、政といい・・・。」

少し呆れたように星が言う。

「それは私もだ。語りたいコトはいくらでもあるのだが、今は敵に集中するぞ、趙雲殿。」

回りの黄巾賊は一刀疾風隊の五人衆により、彼女達に近付けなかった。やはり、瞬迅剣の前には黄巾賊達も齒が立たない。

「では、参ろうか!!」

「応っ!」

そして二人はまるでいつも一緒に戦っているかのような息のあった動きを見せる。

皮肉にも、鬼神の女神達は、黄巾賊達にその牙を少し見せ付けるのだった。

ザシュ!!

ザシュ!!

その動き動きが黄巾賊の命を奪う。その動きに隙は無く、黄巾賊達

は本当の恐怖を覚える。その彼女達を囲むように

『瞬迅剣！』

『瞬迅剣！』

『空破十文字！！』

趙雲曰く、将の気質を持つ者達も彼女達の舞を盛り上がらせた。そこにいるのは死神か？そのような錯覚が起きるほど空気は重たかった。先程まで、死を覚悟していた黄巾賊達の姿は無く、土気も無くなっていた。そんな中だった。

【北郷軍陣地】

「あいつら……。」

「愛紗さん……趙雲さん……。」

「す、凄いのだ。」

一刀達も、二人の活躍にはア然とする。

「って、びっくりしている場合ではありませんよ！狼煙をあげましょう。」

「そうだな。狼煙をあげよ！」

ブオオオオオオ！

狼煙が高らかとあがる……。

【黄巾賊先陣】

「狼煙か！！」

「どうやら引き時のようだ。確かに今なら引くには絶好な時だ。素晴らしい指示出したな。」

趙雲が更に感心する。

「我等の軍師も誇れる人だ。では、全軍後退！！自陣に帰るぞ！」

「「応っ！」」

最後に空破十字を加えて7人の戦士は誇りを胸に自陣に帰るのであった。

【北郷軍陣地】

「お、愛紗！趙雲！」

一刀が二人を呼ぶ。

「ただいま戻りました。」

「北郷一刀殿。氣使いに感謝する。」

「ご苦労様、愛紗。趙雲も怪我はなさそうだな。親衛隊もよくやったな。」

皆の無事に安心する一刀。

「話があるんだが、先に行に一手討つから待ってて。」

「御意。」

そして一刀は術詠を始める。

『ライトニング!』

愛紗達は足速に戻って来たのに対して、黄巾賊達の移動は遅かった為、間合いがかなり出来ていた。それを一刀は見逃さない。雷を落とし、黄巾賊達を脅す。そして、堂々と名乗りを上げた。

「我が名は北郷一刀。天の力を借りて世を正す者なり!!我が信義の道を邪魔をするならば、天から見放させられ、災に会っだろう!」

黄巾賊は目の前に落ちた雷を思い出す。

いきなり落ちるなんて言うのは不自然だ。

確実に北郷一刀が落とした一撃だ。もし迂闊に近付いたなら、自分達は死ぬだろう。仮に彼の力がなくても、あの猛将達が待っている。彼等には絶望しかなかった。人数では勝っている。が、敵を一人も倒せないまま既に何百人が死んでいる。勝ち目がないのは黄巾賊に

でも分かっていた……。なら、することは一つ。

『降伏』

しかし、それで本当に助かるのだろうか？別動隊は生きてる者は皆助かっているらしい。なら、賭けるには十分な条件だった。

「皆……。俺達の負け……。だろう……。」

「そうだな。あんな猛将と天術を使う奴ら相手に勝てるはずがない。」

「皆で降伏しよう！！賛成する者は頭巾を取れ！！武器を棄てよ！！」

ガチャ！

ガチャ！

ほぼ全員が頭巾を取り、武器を棄てた。その多さに驚き、抵抗を願う人達も頭巾を外す。

【北郷軍陣地】

「降伏か。」

「降伏ですね。」

「降伏ですな。」

愛紗、朱里、趙雲がそれぞれ、同じコトを口ずさむ。

「また戦えないのだ。」

一人、満足しない者もないが、ここは放って置こう。

「よかった。また、無駄な戦いが減り被害が少なくなるし、軍もまた大きくなる。」

1万弱の軍に2万の軍が降伏し、軍隊として加わるのだ。これほど嬉しいコトはない。

「これが、天の御使いがなせる技ですか。今の乱世で生きる人で、このようなコトを出来るのは、恐らく貴方だけでしょうな。」

趙雲が言う。

「ははっ。そうか……も……。」

一刀が笑おうとした時だった。一刀は魔物の気配を感じ取った。

「……魔物のお出ましだ!!」

「何!?!」

全員が息を潜める。

「ど、何処にいますか!?!」

愛紗が問う。

「向こうの方・・・公孫賛が危ない!!」

「公孫賛殿のいる所の近くか!!」

趙雲が問う。魔物についての話を聞かなくても対応出来る辺りが流石と言っべきだろう。

「ああ。間違えない・・・。愛紗、鈴々、朱里、趙雲。死なないって約束するから、俺を行かせてくれ。」

「でしたら私もついていきます!」

「鈴々もついていくのだ!」

「私も今は一応、公孫賛殿が主なのです。主の危険があるならば、私は助けにいきます。」

三人は皆意志が固い。しかし、どの魔物がいるかまでは分からなかった。普通の魔物ならいい。が、術を使う奴だったり、コカトリスのように石化ガスを使う奴らがいたら大変だ。一応リカバーは使えるから復活は出来るが、きっと未知なる恐怖に襲われるだろう。

「絶対に無茶をしないな・・・?」

一刀が問い掛ける。

「分かったのだ!」

「勿論です。」

と答える愛紗に

「未知の敵ですからな。」

趙雲が続く。

「分かった。全員、俺に掴まれ!!」

全員一刀に掴まる。

「飛ぶぞ!!」

パアアアアア!

美しい翼が姿を表す。

「朱里! 北郷軍を任せた。軍のまとめは俺の親衛隊と協力しろ。」

「御意です」

「いくぞ!!」

一刀は3人の武将を引き連れて飛んで行くのであった。

第八章：恐怖石化（せきかのきょうふ）

【公孫賛陣地】

「そろそろいくな．．．。」

公孫賛は降伏にも気付かないまま、今から仕掛けようとしていた。そんな中だった。

「で、伝令！！」

「なんだよ、慌てて。まさか！北郷軍がやられたのか！？」

「北郷軍の心配をしている場合ではありません！我が軍の後方が謎の生物に襲われています！！」

「なんだと！？私も出迎えるぞ！」

「御意。」

「全軍！敵は後方にあり！！体制を整え、反撃の準備を！」

「応っ！！」

【公孫賛後陣】

「グルルルル・・・」

「うわああああ!!」

カブッ!!

凶暴化した大きめの犬(?)が兵士を食らいつく。そして、

ブオオオオオウ!

「うわああ!!」

かなり大きめの鶏が、兵士達を吹き飛ばす。しかし、公孫賛は怯まなかった。

「よくも仲間を・・・!!」

その犬には目もくれず、狙いはその鶏にあった。

「せりやああ!!」

公孫賛は力一杯に剣を降るが、突風を起こさせられて、距離が離れていく。その時に剣が離れてしまい、鶏の首に刺さる。

「・・・!!」

鶏は声にならない叫びを上げた。公孫賛は兵士から一本の剣を借り、仕留めようとした。しかし、先程の一撃で怒った鶏はついに、その力を発揮してしまう。

「仲間の仇……」

だ。が言えなかった。鶏はその一撃を交わして、公孫賛に突いた。公孫賛は叫びもせず、また公孫賛からは血すら出ていなかったのだ。が……。

「体が……重い……。」

体を見ると、少しずつ変色している。

「な……体が!!」

この鶏の正体はコカトリス。体内から石化ガスを放ち、ましてやその喙に触れた者は、高確率で石になってしまう。

「そんな……嘘だろ!!」

公孫賛はパニックに落ちた。体が石になるなんて普通は信じられないだろう。

「このまま動けな……く……な……。」

（……るのか？）

石化しても意識は無くならない為、色々考えるコトは出来るのだが、恐怖の為か公孫賛は気を失ってしまった。

【公孫贇陣地】

「公孫贇殿が!!」

「石になっただと!!」

公孫贇軍は動揺を隠せないでいた。無理もない。総大将を失ったのだ。混乱するのは当たり前だ。

「と、とにかく!逃げるぞ!!」

「お、応っ!!」

【森】

暫くして、犬やコカトリスから放れたと言う頃。

「ぜ、前方から!飛行物体が!!」

「な・・・また化け物か!？」

「翼が生えてる人だ!!」

「嘘だろ・・・。」

全員が失望する。もう終わりだと。

「いや!!背中誰か乗ってるぞ!!」

「人だ。。あ!」

「どうした!？」

「あれは、趙雲將軍だ!!」

全員がその言葉で息を吹き返した。彼女が援軍を連れて帰ってきたと。

「では、あの方は北郷一刀殿か!？」

「そうだろう!!皆、迎えるぞ!」

「応っ!」

ここは森の中でなかなか光が入らない。しかし、今はとても眩しい光が彼等を照らしていた。

【公孫贄陣地】

「少し遅かったか……。」

「コカトリス……ですか。なんと恐ろしい魔物だ。」

「息自体に石化を持つと言うのは厄介だ。しかも、あれだけの敵がいては戦いづらい。」

と、軍議をしている中、鈴々が帰ってきた。

「お兄ちゃん。綺麗な石を見付けたのだ。」

「鈴々！こんな時になにを暢気な……。」

「鈴々！その石は……。」

一刀が真剣な顔をして聞くので、全員が鈴々に注目する。

「拾ったのだ。」

「それは『ストーンチェック』と行って、それを持っていれば、石化しない。」

「そんな石ころで、ですか？」

愛紗が問いかける。

「あ、ああ。鈴々がその石を見つけるなんて・・・奇跡だな。これでめどがついたな。」

「ほう。作戦でも??」

趙雲が問い掛ける。

「前方のウルフは三人に任せる。もし、コカトリスが来たら、鈴々を中心に戦うコト。ただし、俺が戻るまで、無理はしないコト。」

「一番無理をするご主人様はどうするのですか?」

愛紗が呆れながらも疑問をぶつける。

「俺は先に公孫贄を助ける。多分今頃、石化の恐怖感に苦しんでるだろうし。」

「そ、そうですか・・・。」

「愛紗はまたヤキモチ妬いてるのだ!!」

鈴々がいつものツツコミを入れる。

「だから、妬いてる訳ではないといつも言ってるではないか!?」

と、顔を赤くして怒る愛紗に一刀がいつもの一言を言おうとした時、

「何、仕える理由は多くて結構ではないか。北郷殿はかなりのよき漢だ、惚れるのも無理はない。」

と、愛紗に言う趙雲。

「だから、誰が惚れて・・・。」

「では、私が北郷殿の女になっても宜しいか？」

「それは断る!!」

愛紗が即答する。

「やはり、北郷殿が好きなのではないか。まあいいとして、」

「よくない!!」

と吠える愛紗を無視しつつ、趙雲は続ける。

趙雲の要領の良さは本当に素晴らしいと思う。

「北郷殿の帰還まで、我等が耐える。帰還と同時に反撃。それでいいのだな。」

「ああ。皆。健闘を祈る。あと、誰かが石化しても慌てないコト。いいね？」

「応っ!!」

「御意。」

「頑張るのだー！」

こうして、初の魔物討伐が始まった――。

【森奥】

（どれくらい時間が経ったんだ・・・？）

回りも見えず、聞こえるのは、コカトリスの奇妙な声だけだった。

（私は・・・このままになるのかなあ。）

そっぴいながら彼の名を思い出す。

――北郷一刀――

（あいつは今頃、私の援軍を待っているんだよな。私は動けない。そのうち死ぬかも知れないさ。でも、あんたには生きて・・・）

そんなコトを思っていた刹那、

「公孫賛！！何処だ！！」

無事を祈った人が自分を探していた。しかし、声も出せない。大体、体の色もきつと赤い髪も、石の色になっている。見付かりはしな・

「いた！！そこか！！」

（北郷・・・私を見付けてくれたのか？）

声にならない疑問。しかし、答えは出ていた。

「あいつを倒せば近付けな。コカトリス・・・覚悟！！」

体中に熱い気が溜まる。そして、その気が炎となり、一刀を包む。
この技は・・・そう、あの奥義。

『鳳凰天駆！！』

先の尖った炎の刃は見事、コカトリスに命中。コカトリスは何も言わずに消え去る。運よく、回りのコカトリスも少し動揺している。
助けるには絶好の機会だ。

「公孫贇。安心しろ、助けてやるから。」

（北郷・・・。）

そして翼を出し、また宙へ飛ぶが、一刀は公孫贇に悪戯したくなってきた。

「少し悪戯してもいいか。動けないもんな」

（・・・まあ、助けて貰ったんだ、少しくらいな・・・んっ！！）

石化をしても、全身の神経は生きているし、視力もある。一刀が何をしたかは分かっている。

・・・キス・・・

（北郷一刀・・・お前って奴は・・・。）

少し呆れて彼を見る、いや視界に入っていて、見ない訳には行かない状況だ。

「怒ってるか？ただの悪戯だ。許せよ、な？」

（別に怒ってなんかないけど、こっぱずかしいから止めてくれよ！）

と、少し照れ目な公孫賛であつた――。

【森】

愛紗、鈴々、趙雲は森で、前方のウルフと戦っていた。ウルフは体力こそないが、ちょこまかした動きから噛み付いて来る為、愛紗と趙雲は苦戦し、服はあと少しで大事な所が見えてしまうくらいボロボロになっていた。

しかし、鈴々は普段から動物と遊んでいる為か、楽々にウルフを倒していく。

「く・・・。」

「ちい・・・。」

「うりゃりゃりゃりゃー！！」

「張飛殿は相手がなんであつても通用するのだな。」

趙雲が、関心して言う。

「いつも、政務を放棄し、犬と遊んでいるからな。」

「むー。でも、役に立ってるからいいのだ。愛紗は服がボロボロでおっぱいが殆ど見えてるのだ。」

「う、五月蠅いぞ！鈴々。」

確かに今の愛紗の状況は教育上宜しくない。あと少し服が切れていたら胸の豆が見えそうなくらい切れている。趙雲はそこまででもないようだが、結構露出している。

「さて、ウルフを倒した今、お出ましのようだな。」

そして、コカトリスが現れた。道の狭さが幸いして、敵の先陣は三羽。合計は40羽前後だろうか。かなり多めだ。

一人で一羽を相手にする。

趙雲は間合いを取り、しっかり相手を見極めるが、愛紗と鈴々は突撃してしまう。

ブオオオオオ！

「ぐう……。。」

「にゃふー！。」

二人は吹き飛ばされる。

鈴々は上手く着地。しかし、愛紗は鈴々より高く飛ばされた為、着地に失敗した。そして、コカトリスはその隙を逃すことなく、愛紗を突く。

ズサッ！

「ぬあああああ！」

愛紗に激通が走る。不思議な声を上げる。普通の痛みとは何かが違うようにも感じられた。

「うつっ・・・。」

「姉者！！！」

「関羽殿！！！」

石化が起きない為か、コカトリスは息を大きく吸い込んだ。そして

――

「ハアアアアア――。」

石化ガスを吐いた。

「な・・・うわあああああ！！！」

パキッ

ガスは脚部のみに掛かる。が、じわじわと石化が愛紗を襲う。

「い、いやあああ!!」

戦場だと言うコトを忘れたかのような声を出す。石化部分は徐々に広がり、愛紗はそのたびに声を上げていく。

とあることに、その様子に気をとられた趙雲に。

「ハアアアアア――」

自分の相手に集中しなかった為、石化ガスをモロに喰らう。

「な……しまっ……」

パキッ!

趙雲は体全体でガスを受けた為に一瞬で石化してしまった。

「あっ……っ!」

一方愛紗はもうすぐ胸と言う所までできていた。そんな中だった。

『魔神連牙斬!!』

空中から一刀が一羽ずつコカトリスに魔神剣を放つ。その隙に石化を解く。

『リカバー!!』

愛紗、趙雲、公孫賛は全員石化が解けた。愛紗は若干我に還ってい

ないが、今は放置。一刀は地上に下り、公孫賛を降ろすと、

「三人は先に休んでくれ。石化は主に精神の疲れが大きいからな。」

一刀が簡単に説明する。

「御意。」

「よく分かんないけど、アンタの指示に従うよ。アンタの方が、何かと詳しそうだからな。」

「・・・ご主人様！！私はそのっ！！」

愛紗が顔を真っ赤にしている。石化は解けたが、未だに動けずにいるた。

「全く・・・随分ボロボロになるまで頑張っで・・・。」

そっつい愛紗をよく見る。下半身はいつもスカートっぽい仕様だが、靴下も破れ破れになっていて露出し、ボロボロになってしまった。服の破れも酷く、ダメージはかなり大きいだろう。

「うん。愛紗自身に傷が付かなくてよかったよ。」

「ご主人様・・・！」

愛紗は内心、罪悪感と不安を抱いていたが、一刀の気づかいで、不安は解消された。

「随分可愛い声だしてたけどな。」

一刀は笑う。勿論、愛紗の桃色声だったコトは知っているが、あえて触れないでおく。

「もう・・・おからかいになって・・・。」

愛紗は顔を紅める。

「今はコカトリスを鈴々となんとかするから、二人と陣地で休んでくれ。」

「分かりました。」

そうついい、二人を追いかけていった。

「鈴々！」

「わかってるのだ！！けど、お兄ちゃん石ないんでしょう？」

鈴々は一刀を心配する。

「俺にはこの石があるから。」

そうつってペンダントを見せる。

「天の加護を受けるコトが出来る石だ。天の加護があるから、俺も石化しないんだよ。」

「へえゝ。んじゃ重いつきり暴れ・・・。」

「待った。」

一刀が鈴々を止める。

「なんなのだ!？」

「相手を重ねてから獅子戦吼を撃った方がいい。」

「了解なのだ。」

そして、コカトリスとの戦いが始まった。

「お兄ちゃんは剣を二本も使うの?？」

「まあな。どっちも出来るが、基本的には二刀流かな?技も繋げ易いし。」

「へえ」。鈴々はでかくて長いのが一番強いって思ったけど、違うんだね。」

「それは一番一撃の強さが強い話であって、総合的な強さではないな。」

「そーなの?？」

「ああ。例えば、今みたいに敵が複数の時は短く持って、より回数を稼いだ方がいいし。武を奮うより、守を考えた方が、よりいいな。守が完璧〓負けない〓勝たせない、だからね。」

「つまり、守が硬いと負けないから強いってコト？」

「まあ、そんな所。攻めるだけが強さではないからな。では、いくぞ！！」

「応っ！」

刹那、一刀は術詠を始める。

『フォトン！』

光にコカトリスが包み込まれ、攻撃を受ける。コカトリスは耐えられずに消える。開いた穴を埋めるべく、無駄にコカトリスが前へ前へ来てしまったため、かなりぎゅうぎゅうだ。

「今だ、鈴々！」

「ドッカーン！！」

『獅子戦吼！！』

コカトリスの中央に命中後、吹っ飛び、縦一列敵が消える。鈴々の一撃は相当重いのが伺えた。

「流石は鈴々だな。」

頭を撫でる。

「にやはは……。撫でられたのだ。」

「次は俺の番だ！」

そういい、敵の中央へ向かい、わざと囲まれた。そこで術詠する。

『グレイブ！！』

地面が盛り上がり、コカトリスに突き刺さる。地面が盛り上がる度、コカトリスは消えていく。

あつと言つまでもなく残り一匹になってしまった。一刀は鈴々に耳打ちして作戦を言い渡す。鈴々は黙って頷いた。刹那、鈴々の背後に回った。そして、

『獅子戦吼！』

鈴々に獅子戦吼を放った。鈴々は物凄い勢いでコカトリスの方へ飛んでいき、

『獅子戦吼！』

コカトリスへ獅子戦吼を放つ。コカトリスは耐えるコトも出来ずに消えた。ついに、討伐が完了したのである・・・と、思った矢先。

「お兄ちゃん！コカトリスの子供がいるのだ。」

「おっ。本当だ。」

「飼いたいのだ。」

鈴々がねだる。一刀は鈴々に促され、飼うコトを許したのである。

二人で飼うことにして・・・。

「北郷、本当にありがとう。」

「こっちも助けて貰ったんだ。気にするな。」

一刀はまるで友達と話すかのような気軽さで話す。

「それじゃ、解散か？」

「そうだな。元気だな。」

「そっちこそ。」

こうして二人は別れて、一刀も自陣に・・・？

「あ！朱里に任せつきりじゃんか！？」

「あ！確かに！」

「朱里はきつと怒ってるのだ・・・。」

「急ぐぞ！！」

「応っ！」

「合点！」

結局一刀達は朱里にめいいっぱい叱られたのであった。そんな中、一刀は久しぶりの平和が訪れるコトに期待して・・・

「ご主人様！！もう、聞いていますか！？」

「ごめんごめん。」

先に朱里のご機嫌を取ろうと思う一刀だった。

朱里パート01（前書き）

朱里パート01は最初のパートながら激しいです。まあ、はわわ軍師ですからしょうがない。彼女にも魔物を味わって貰わないといけないんです。次のストーリーに影響するので、ご了承ください。では、始まり。

朱里パート01

啄巢に帰ってきてから、一刀は沢山の書類の山に覆われていた。近くの村や町が自分達の土地を納めてほしい、と願う人々も多いらしい。

既に、一刀の善政は全土で知らない者はいない程になっていた。税が安く、草民も気遣い、それらの町はいつも笑いで絶えないと。

「さて、今日も行かないとな。」

一刀が朱里に言う。

「また、行かれるんですね・・・。」

朱里が淋しそうに言う。実は朱里はまだ一刀のコトを怒っていたりする。無理もない。いきなり倍以上の軍になったのだ。統率がどれだけ難しいコトだろうか。朱里はかなり苦労していたのだ。

そんな状況を考えてか、一刀は朱里に問う。

「朱里、今日は一緒に来ないか？」

「ほうあーご、ご主人様と二人でですか？」

朱里がいきなりの質問に驚き聞き返す。

「ああ。たまにはいいかなって。嫌ならいいぞ？」

一刀が少し意地悪く言う。

「い、嫌なんかではありませんよお。むしろ、嬉しいです。ですか……、」

朱里は机の上の書類を見る。結構山積みになっている。

「そんなの、一緒に夜までやれば終わるだろ？急ぎの書類も片付けたコトだしさ。」

「そうですね……是非連れて行ってください、ご主人様」

ご機嫌になる朱里。久々に一刀と二人になれるのが嬉しそうだ。

【城門】

ここで、会ってはいけない人に会ってしまった。

「何故に朱里を連れて行かれるのですか!？」

愛紗が怒鳴る。このままでは朱里を置いていかなくてはならないが、約束を守らないといけない。

「朱里の力が必要なんだよ。向こうの草民に質問された時に答えられた方がいいかなって。」

「そうかも知れませんが……。」

愛紗が少しいじける。このままでは少し病むだろう。それを察した一刀は、

「今度鍛練に付き合うからさ。」

この一言で愛紗は了承した。

【高原】

質問は馬に乗れない為、一刀の馬と一緒に乗っていた。朱里に見れば、あの日以来の急接近である。

「朱里・・・？」

「~~~~」

かなりご機嫌の朱里。朱里とはまだ会ったばかりだが、こういった姿を見るのは初めてではない気がする。いや、初めてなのだが、愛紗や鈴々とどこか似ている。

「ご主人様。村が見えてきましたよ。」

朱里が前を指差す。

「そ、そんなに身を乗り出すなって。」

朱里は立ったまま、前を指差して・・・

「はうあ!!」

朱里が横に落ちる。

「危ない!!」

ザザザザザ・・・

一刀は朱里を間一髪の所で受け止める。朱里に怪我はないが、馬は暴走して、何処かへいつてしまった。

「朱里！！大丈夫か！？」

一刀は朱里に問い掛ける。

「だ、大丈夫ですけど・・・。」

朱里が顔を赤くする。

「この抱き方はなんですか？」

朱里が問う。

「ああ。お姫様抱っこのコトか。俺の世界では人気があつただけで、気に入らないか？」

「い、いえ！気に入らないことはないんでしゅー！」

朱里はまた嚙んでしまう。

「俺の首に手を巻くと安定するよ？」

一刀は平然と言う。

「く、首に・・・ですか。分かりました。し、失礼します！」

朱里は慌てながら一刀を首に抱き着く。

「・・・ご主人様」

更にご機嫌になる朱里に少し呆れながらも一刀は口を開いた。

「馬を乗る時は気をつけろよ？」

朱里は自分の失敗を自覚した為か、少し落ち込んだ後、

「申し訳ありませんでした。」

と謝った。

「朱里が怪我でもしたら俺も心配するしな。勿論、鈴々も愛紗も心配するだろうし、気をつけろよ。」

「はい。」

そんなこんなで村についた。

【村】

村では、天の御使いが来ると言う話で持ち切りだった。

「天の御使い様がいらっしゃるぞ。」

「せめて食べ物でも渡せれば・・・。」

村は今までになく忙しかった。そんな中だった――。

「な・・・っ！」

一刀が魔物の気配を察知した。

「ご主人様、どうかしましたか？」

朱里が問う。

「魔物が・・・でた。」

「はわわっ！」

朱里は同様を隠せないでいた。朱里も愛紗の話を聞いていたので、魔物については知っている。凶暴化した犬や、人を石にする化け物など、様々な魔物がいるコトを。朱里は震え上がった。

「大丈夫。俺が護るから・・・。」

一刀は朱里を降ろすと朱里を優しく包み込む。

「ご主人様・・・。」

。そんなやり取りをしている間にも、魔物達は村を荒らしていた・・・。

「いくぞ！朱里！」

「は、はい!!」

村はウルフとコカトリスの計4匹に襲われていた。前より数は随分とへったが、民がいる為、術を放てない。

「朱里。どこかに隠れてろ。」

「はい・・・。」

不安そうな朱里。

「これを持ってろ。」

そついい、一刀はまた不思議な石を朱里に渡す。

「これは・・・?」

「エクスファイアといって、それを持つと力を最大限に引き出せる。いざとなったら全力で逃げるんだ。わかったな?」

「御意です・・・。」

「うわああああ!犬がああああ!!」

「今行くぞ!!」

一刀は朱里を置いて駆け出した。

「ご主人様・・・。どうか、ご無事で!」

と、朱里はひたすら祈るのだった。

『閃空裂破！』

体を回転させてウルフを切り刻みウルフは消えた。つかのま、別のウルフが二匹こちらに向かってくる。刹那、

『魔神剣・双牙！！』

二つの波がウルフ達を襲う。二匹とも雄叫びをあげながら消えていく。

のこるはウルフとコカトリスの一匹ずつ、幸い、二匹は同じ場所にいる。ならば術で仕留めるのが良策だ。

『グレイブ！！』

土が盛り上がり、尖った岩が魔物達に突き刺さる。

こうして、魔物達は全滅した・・・はずだった。

「な、何！？」

一刀は気配で感じとる。新しい魔物が送り込まれたコトを。そして皮肉にも、標的は朱里だった――。

「ご主人様・・・ひゃああああ！」

スライムの群れが朱里に襲い掛かる。朱里は体制を崩して倒れる。

「朱里！！」

朱里を救出に向かうが、膨大な数のスライム達に囲まれてしまい、朱里の助けにいけなくなってしまった。

「はわわわわ・・・。」

そんなテンパる朱里の前に現れたのは・・・

・・・グリーンローパー・・・

沢山の触手を使い、栄養を吸収したり、連続攻撃を仕掛けてくる厄介な魔物。

スライムにより転び、立ち上がろうとした朱里に触手が襲い掛かる。

「はわわわわ・・・!!」

手と足を掴まれて、体は完全に身動きがとれなくなる。

「こ、来ないでください!!」

と、力いっぱい叫ぶ朱里。しかし、願いは届くコトなく、無数の触手が朱里の体にくっつく。中には服の間に入る触手もある。

「き、気持ち悪い・・・です。」

朱里は初めての感覚に気持ち悪さを感じている。自分の体を何者かが、乱暴に触れているような感覚。自分の心許せる人以外に触れるのは認めない。

「朱里いい!!」

一刀は叫ぶ。朱里は既にグリーンローパーに捕まっている。助けな
いと……。しかし、回りのスライムが邪魔をし、中々朱里を助け
にできなかった。

少し時間が立った頃、朱里に変化が出てくる。朱里の理性が若干飛
んでしまった為に、悲鳴の声質が変わっていた。

「あつ……。あつ……。」

秘部に当たったりしている訳ではないが、いきなりの触手に理性を
失った朱里は息を荒げていた。その口に、一本の触手が朱里の口の
中に強引に入っていた。

「ん!?……。んっ……。」

朱里は意識も朦朧としてきた。

一方の一刀はスライムの攻撃を食らいながらも、朱里が見える所ま
で戻ってきた。そして、朱里が意識を朦朧とさせながら触手に捕ま
っている光景をみるとすぐに叫んだ。

「朱里いいいいいい!!」

この一言で朱里は我に還る。今の状況を把握すると、すぐに触手を
噛んだ。触手はびっくりしたのだろうか、口からすぐに出ていく。
そして一刀に向かって助けを求めようとした、その時、

ドコッ！！

スライムが一刀の真横から吹っ飛ばす。一刀は朱里に気を取られていた為にそのまま吹っ飛ばされる。腹部に強烈な一撃が入り、

「ぐはっ！」

一刀は口から血を吐いた。朱里はその光景を見ながら

「ご主人様ああ！！」

と涙ながら叫ぶ。もう一度叫ぼうとしたが、触手がまた口に入り、

「んんっ・・・！」

それ以上続けるコトは出来なかった。

一刀は古井戸に落ちていった。一刀は落ちながら自分を叱り付ける。

（俺は何故、朱里を泣かしているんだ！！朱里を護るって約束したじゃないか。朱里・・・、つらい思いをさせてごめんな。）
ドッゴーン！！

そして地面に叩き付けられる。その音は、外にいる朱里にも聞こえた。朱里は心の中で叫んだ。

（一刀様！！）

北郷一刀は直ぐには起き上がれなかった。意識はあるが、強く頭を打ち付けた為か、軽い脳震盪を起こしたようだ。井戸の深さは20

mもあつた。朦朧とする意識の中、自分がすべきコトを思い出す。

（朱里を・・・護るんだ！！俺が悲しませてないけない！！）

そう思つたら雄叫びを上げずにはいられなくなっていた。

「うおおおおおおー！」

ゴゴゴゴゴゴゴ！！

地面が揺れて、魔物も動きを止めた。朱里から触手が離れて、朱里は地面に正座している。そして朱里はまた叫んだ。

「一刀様ああああー！」

井戸の中にも、その声は響いた。そして、二人の意志に答えるかのように彼の双剣は炎のごとく燃えていた。

「はあああ・・・！」

トンッ！

地面を勢いよく蹴ると20mを楽々越えて、地上に顔を出した。

「朱里iiiiiiiiiii！！！」

自分が護る可き人の名を呼ぶ。朱里はそれに答える。

「一刀様ああああー！！！」

一刀は縦に回転を始める。そして一刀は火炎車となった。そして朱里の元まで火炎車は駆け出す。

『火炎裂空！！』

朱里の元につくのを妨害するスライムやグリーンローパーは火炎裂空の餌食となり、消えていく。そして、邪魔する敵を全て焼き払い。朱里の元へ到着した。

「朱里。」

「ご主人様。」

二人は抱きあい。キスをして、その絆を確かめる。

「んっ・・・朱里・・・。」

「んんっ・・・ご主人様・・・。」

数秒だけした後、すぐに現状を思い出し、次の行動にでる。

「朱里！俺に掴まれ。」

「は、はい！」

初めて会った時と全てが同じだった。敵から逃れる為に地面を離れた。そして一刀はあの術詠を唱えた。

《雷雲よ刃となりて敵を貫け！》

『サンダーブレード!』

大地に怒る雷の剣が突き刺さり、そこから雷が放出させる。今は一刀の思いが強い為か、前とは比べられないほどの威力を持っていた。そして、魔物は今度こそ全滅した――。

一刀達は地上に戻る。一刀は朱里を降ろした段階で意識が薄れて来た。

「朱里――無事……か……。」

バタッ!

一刀はそのまま倒れた。

「ご……主人様? ご主人様!? ご主人様!？」

朱里は何度も一刀を呼ぶが返事がない。ただ、あう……とか意味の分からない言葉を並べていた。

朱里は慌てながらも、村長の家に向かったのだった――。

【村長の家】

「……様?」

「誰……だ?」

「……人様!？」

「この可愛らしさを持つ声は・・・朱里か。」

一刀が返事をする。

「ご主人様・・・！よかった。気がついたんですね！！」

朱里が一刀の布団にダイブする。

「こら、朱里・・・朱里！？」

一刀が朱里の顔を見ると、泣いていた。

「ご主人様・・・が、もし気を・・・戻らなかったら・・・私・・・私！！」

朱里は泣き、少し鼻水を啜るように詰まらせながらも声を出す。

「朱里・・・。心配かけてごめんな。」

一刀が謝る。

「私を・・・助けるのに夢中で・・・自分の体・・・振り返らないんですからあ・・・。全身のあらゆる所が火傷してますし・・・背中だって出血が・・・。ご主人様あ・・・！！」

朱里がまた泣き出す。確かに一刀は無茶をし過ぎていた。頭を打ち、体から血流してるコトも忘れ、身を焦がしてまで敵を粉砕するのだから。

「朱里・・・。本当に悪かった。心配させたな。でも、もう大丈夫

だ。」

朱里を抱き寄せて、落ち着かせる。

「それよか此処は何処だ？」

一刀が聞く。

「ああ。村長の家です。私が全て用件は済ましたので、体調が良くなったらいつでも帰れます・・・けど。」

「けど？」

一刀が問いかける。

「私は、もう少し此处にいたいです。」

そう言つて朱里は一刀の首を抱きしめる。

「朱里がいたっていうならもう少し長居するかな？治療もゆつくり出来る時にしたいし、朱里と二人の時間も取れるし。」

「御意です」

こうして二人は3日滞在したのだった。勿論、帰ってきたら愛紗のお説教が待っていたが・・・。

余談だが、グリーンローパーの生き残りを帰りに見付けて来た。倒そうとしたのだが、朱里が飼いたいと言い出したので、鈴々同様に飼うコトを許してしまったのである。

（最初は気持ち悪かったけど、今では結構気持ちよかったりするんですよねー。）

「朱里？なんかいったか？」

「い、いえ！何も？」

「そうか、ならいいけど、そいつの触手には気をつけるよ？いいな？」

「御意です」

こうして朱里は変な物を持ち出したのですが、それは置いておき、一刀と朱里は一層距離が近くなったのだった――。

朱里パート01（後書き）

恋姫＋無双では絶対出来ないハズの触手ネタ。しかし、テイルズ混ざりの此処でなら出来るんですよ！！しかし、こちらは一応15禁で抑え込むので、激しさが甘いのは勘弁して下さい。希望次第で専用の短編小説も出しますから。では、次回！！

愛紗パート02（前書き）

愛紗パートの第二段は、鍛練の誘いのハズが・・・どうなってしまうのか。そして一刀の野望が現れる！？

愛紗パート02

溜まっていた書類が大分片付いた。此処まで早く終われるのも朱里のおかげだろう。あんなに小さいのに、知識も多く頭の回転も早い為、常にアドバイスを貰っていた。そんなコトを振り返りながらも一刀は愛紗の部屋に向かっていた。

それは、この間に約束したコトを果たす為だった。

「鍛練に付き合つとか言っちゃったけど……。」

そつばやきながらも愛紗の部屋の前へ到着。

コンコン

「愛紗ー？いるか？入るぞ。」

「え、ちょ、ご主人様！？」

ガチャ

一刀は禁断の扉を開けてしまった。一言でいうならば、愛紗は着替え中だった。

「あ……。」

「い、い……。」

まずい。このままでは愛紗が叫び出す。一刀は愛紗の口を塞ぐと

一步踏み出してしまふ。勿論、コトは逆の方向へ流れる。

「いやあああああ！！」

叫ばれてしまふ。幸い、鈴々も朱里も近くにはいなく、だれも愛紗の部屋に駆け付けて来る者はいなかった。

「愛紗！落ち着け。」

一刀が叫ぶように言う。

「落ち着いてなど……って、私の胸をチラチラ見ないで下さい！」

（と、言われてもなあ……。）

今の愛紗は下着を下の方だけの装備で、後は全て外していた。相当来るタイミングが悪かったらしい。胸は手で隠そうとするが大事な部分以外は全く隠れていない。ダイナミックな胸をお持ちなのでそこはしょうがないだろう。

「それで、何の用で参られたのですか？まさか、私の体を見に来た訳ではないでしょうし。」

愛紗が若干冷たい目で一刀を見る。

「約束を果たす為に来ただけ……折角着替えたのに、鍛練するのアレ……だよな。」

少し困りながらも一刀は話した。

「ご主人様……。覚えていらっしゃったのですね!？」

嬉しそうにする愛紗。

「私は朱里を連れていく口実かと思っていました。」

「そんな訳ないだろう。愛紗とまた二人の時間を作りたかったのも事実だしさ。それじゃ、今から二人で市を覗きにいかないか?？」

「市ですか？警邏なら……。」

と愛紗が続けようとする。しかし、警邏となると仕事ではないか！
！一刀は愛紗の話を割り込んだ。

「警邏じゃなくなつてさ。二人で市見ながら、色々たわいのない話を
したいだけなんだけど……。さ。」

「ご主人様……。」

愛紗は少し顔を赤くする一刀を見て一刀以上に顔を赤くする。

「分かりました。是非共にいきましょう。ですが……。」

更に顔を赤くする愛紗。

「まだ着替えの途中ですから!!早く出ていってください!!」

一刀は部屋を追い出された。出際に一刀は

「う、ごめん。」

と一言、言い残して部屋を出た。

「いや、その……いきなりのコトでその……驚いただけですから……。」

ガチャン

一刀は言葉を聞かずに扉を閉めた。

「もう……ご主人様はいつもそうやって私の気持ちを理解してはくれないんですね。」

独り言をいいながら、愛紗は着替えた。

- - - 10分後 - - -

「お待たせしました。」

愛紗が部屋から出て来た。が……

「いつもと変わらないな。」

「これが一番落ち着きますから。」

愛紗はいつもと変わらない服を着ていた。違うのは鎧を付けていない位だろうか。

「違う服はないのか？」

一刀は不思議そうに聞く。

「ありませんが何か？」

「い、いや。女の子は普通、誰もがオシャレするものだと思ってたからさ。」

一刀がいた世界も、女の子がオシャレに興味を持つのは当たり前だった。こちらの世界でオシャレは無いのかも知れないが、不思議ではないのでつつい、ぼやいてしまう。

「だから、私を女の子と軟弱な扱いをしないでください。」

「だから、女の子だから軟弱という考えは改めろって。」

一刀は前に言ったコトを思い出しながら言う。

「そ、そうでしたね。しかし私は、あいにく興味がないものですか。」

口では言い切るが、目は何故か切ないような感じがする。理由は分からないが、事情がありそうだ。

「と、とりあえず行こうか。」

そついいながら愛紗の手を握る。

「あ、ご主人様……。」

愛紗も握り返す。そして二人は、町によくいるカップルのように仲良く歩き、市へ向かうのだった。

【市】

「久しぶりに来てみたけど、大分賑やかになったよね。」

「・・・。」

「ほら、品物もかなり増えてるし、店の種類だってさ・・・。」

「ご主人様・・・。」

愛紗が恥ずかしそうに一刀を見る。

「どうした、愛紗？顔が真っ赤だぞ？」

「あの、手・・・。」

「手がどうかした？あ、俺と繋ぐのが嫌なら先にいって・・・。」

一刀が言い切る前に

「ち、違います!!」

愛紗が大声を出してしまう。愛紗は更に顔を真っ赤にして少し下を向く。市が賑やかなのが幸いして、町の人には聞こえない・・・。ような、愛紗にとって救いになる現実はそのには無いのだった。周囲は静まり返り、一刀と愛紗を見ている。

「あれは・・・県令様に、関羽將軍？」

「二人は、ああいう関係だったのか？」

回りは二人を注目してざわめきが起きる。

「ってか二人は手を繋いでるから、やっぱり・・・。」

「だろうな。でも、二人ならお似合いでいいんじゃないか？」

「そうだな。」

町の人々はこちらを見ては何かを喋っている。これは一刀も予想外だった。

「愛紗、やっちまったな。」

「そ、そんな暢気なコトを言っている場合では・・・。」

愛紗はかなり慌てている。

「別にいいだろ。愛紗なら寧ろ嬉しい限りだよ。」

一刀が冗談混じりではあるが真面目な声で言う。

「私も、決して嫌と言うわけではなく・・・きゃ・・・。」

一刀は愛紗を抱きしめた。町民は流石にこれ以上騒ぐのは空気を壊すと、一刀と愛紗を話題に出さないようにしてくれた。この町の人はかなり空気が読める人達のようなのだ。

こうして、市を隅々まで回り、最後の店となったのだが・・・此处で奇跡が起きる。

「此处、服屋じゃん!!」

「あ・・・。」

愛紗は呆然のして服屋を見る。初めて見る美しい服の数々。愛紗も一着一着眺めている。今の愛紗は將軍ではなく、一人の女の子として服を見ているのだが、一刀は愛紗と普通の女の子で何かが違う気がしていた。

「愛紗。袖を通してみたら？」

一刀が言った何気ない一言が答えを導いた。

「嫌です。」

一刀の頭には？が三つほど浮かぶ。

「何で？袖を通さなければどれが似合うか分からないしサイ・・・。」

「

と、一刀が言っている途中に、

「似合うハズがありません!!」

愛紗が怒鳴りつけた。疑問の答えは此处にあった。

「決めつけなくてもいいんじゃない？」

「いいえ。決まっています！」

愛紗は着るコトすら完全否定する。何故そこまで否定するのか？一刀には分らなかった。

「試しにこれだけでも試してみて……。」

一刀がお願いしようとしたが、

「結構です!!」

そう怒鳴って、愛紗は足早に帰ってしまった。

「俺何か悪いコトしたか？」

店主に聞いてみる。

「いえ、単純に自信がないだけでしょうね。関羽將軍はきつとオシヤレに気を使うより志や鍛練を優先して来た人でしょうから。半ば諦めているのかも知れないですね。実は前に一人でこの店に来て、嘆いてましたから。」

「そうか……。」

一刀はため息をついた。愛紗の気持ちを理解していなかった自分にと、自分に自信を持ってない愛紗。二人分のため息だ。愛紗にはその内に手を打つコトを決めた。

「それよりさ．．．。」

「はい、なんででしょう?」

「此処つて服の注文出来る?」

「基本はしませんが、県令様の願いなら聞きましょう。」

「あのさ、書く物貸して。今から服の絵を書くから、その通りに作つてよ。大きさは、張飛將軍くらいで、二着。」

「張飛將軍と軍師様用ですね?どうぞ。」

いいながら、紙と筆を渡す。

「流石は店主だ。その通り。」

さらさらつと筆を動かし、絵を描く。

．．．半刻後．．．

「出来た．．．つと。」

「おお．．．。これはこれは。」

「俺の世界であつた服なんだが、出来そつか?」

「色は白と黒で大丈夫ですかね?」

「ああ。問題ない。」

「時間がどれくらい掛かるかはわかりませんが、やらせて頂きます。」

「分かった。出来たら、包みに包んで俺宛てに贈ってくれ。代金は後ほど相談でな。」

「わかりました。」

「では、俺も帰ろうかな。」

そういつて服屋を後にした。一刀が描いた服とは一体??それは後ほど明らかに。

その日は愛紗と会話を交わすコトはなかった。次の日からは普通に話したそうだ。愛紗とオシャレはこれからどうなるのだろうか?一刀にも分からない。が、

(このままじゃ愛紗にとってオシャレが一生つまらないもので終わってしまうかも知れない。だから、なんとかしてあげよう……。)

と、一刀は心に誓うのだった。

愛紗パート02（後書き）

そろそろ次の章へ向かいますが、華雄の真名が無いのが問題です。華雄を殺すか生かすか。また、生かすなら真名をどうするか？検討したいのですが、真名が無くてはどうしようもないので、読者様の真名の希望を取らせて頂きます。真名の案がある方は「作者紹介ページ」より私にメッセージを送って下さい。もしくは、感想に添えて頂いても構いません。是非、お願いします。では次回！！

鈴々パート02（前書き）

飼育日記＋ です。短いのは勘弁です（笑）

鈴々パート02

鈴々と俺は、普段はだれも近づかない家に来ていた。正確に言えば空き家をアノ生物の為に買ったのだった――。

【コカトリスの小屋】

ここにあるものは全て石で出来ている。正しくは、木で出来ている物、鉄製の物。全てがコカトリスによって石にされていた。そんな不気味な部屋の中で、一羽の鶏を飼育しようと鈴々と俺は此処にいるのだが――。

「この鶏さんは何を食べるのだ？」

鈴々が聞く。

「こいつは、確か、石にした生物から養分を少し吸い取って生きる魔物だからな……。」

一刀が陰しい顔をする。

「どんな生き物がいいのだ？」

鈴々が聞く。

「一番は……人間だろうな。その辺の生き物の何倍も効率がいい。」

「それは流石にまずいのだ……。」

鈴々が下を向く。コカトリスを世話するには、人間を石化させる必要がある。一刀がリカバーで治せるとは言っても、協力してくれる人はいないだろう。

「鶏さんに栄養をあげても、死なないんだよね？」

「ああ。コカトリスの栄養は人間の１％未満だからな。」

「それじゃ、鈴々が石になるのだ。」

鈴々はいつもの調子でいった。

「本当にいいのか？」

一刀が聞く。

「鈴々が飼うたっていったから、責任をとらなくちゃいけないのだ。」

そっぴいながら、ストーンチェックを一刀に渡す。

「お兄ちゃん。鶏さんを持ってきて。」

「分かった。」

そっぴいながら、部屋の隅にいるコカトリスを連れてくる。

コカトリスは、獲物があると分かると、すぐに息を吸い込む。

「うっっ……。」

鈴々の足が震える。一刀も声をかけようとしたが、

「ハアアアアア……。」

コカトリスは息を大きく吐いた。さの息は鈴々の脚を確実に捕らえていた。

「にゃううう……。」

鈴々は未知なる感覚に戸惑う。

ピキッ

脚がゆっくりと石になってゆく。鈴々は、不思議な感覚を覚える。体の一部分から感覚がなくなり、動かせなくなる。体を拘束される恐怖感や快感が鈴々を襲い、鈴々は声にならない叫びをあげていた。

「にゃう……。うつつ……。」

「鈴々！大丈夫か！？」

一刀が心配そうに声をかける。

「お兄ちゃん……。大丈夫なのだ……。うにゃ！？」

少し石化の進行速度が上がった為か。鈴々はまた声を出してしまう。石化は既に股の近くまできていて、鈴々の細い脚は綺麗な灰色を描いていた。

「う……。にゃ！？あああああ！！」

鈴々も子供とはいえ、女の子だ。股に違和感が襲えば少し色っぽい声をだしてしまうだろう。

石化はどんどん広がっていき、いつも鈴々が出しているキュートな腹も灰色に染まってしまった。もうすぐ胸が固まると言う所で、

「お兄……。ちゃん？」

鈴々が一刀を呼ぶ。

「石になるのって以外に……。面白い……。ひゃあ！？」

喋ってる間に胸に到達。固まった鈴々の胸は少し大きくなっているようにも見える……。訳はないか。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん……。お兄……。」

ここから先はまたペースがあがり、鈴々は完全に石となった。

コカトリスは石になった鈴々の体をあちこちつつくように養分を吸っていた。

（にゃう……。くすぐったいのだ。）

そして一刻後……。

コカトリスはようやく満足したのか、入った時にいた恐らくお気に入りの場所に帰ると、寝てしまった。

「鈴々、戻すぞ。」

『リカバー!』

聖なる光が鈴々に降り懸かり、石化はとけた。

「ふう・・・鈴々、お疲れ様。」

「うつ・・・疲れたのだ。」

そう言うと鈴々は一刀に抱きつく。

「うわっ。鈴々。」

「今ならお兄ちゃんを一人じめ出来るのだ。」

「フ・・・そうか。」

無邪気さに心を癒されながら何故かクラトス風に返事をする一刀。

「最近はお紗と朱里とずっと一緒に、鈴々は寂しいのだ・・・。」

そういいながら、鈴々は更に強く一刀を抱きしめる。

（確かに政務が忙しくてお紗や朱里といなくちゃいけないコトが多かったかもな・・・。）

「政務も済ませたから、今日は思いっきり遊ぼうか。」

一刀は鈴々に言う。

「やったのだー!!」

鈴々は一刀を離すと、部屋中を走り回って喜んだ。

「えっと、とりあえず、市にでも行ってみようか？」

「うん！」

一刀は鈴々の手をしっかりと握って市へ向かった。

【市】

「あそこの肉まんは美味しそうなのだ。」

「食べる？」

「うん。」

この会話を8回くらいしたあとに鈴々と解散した。つまり、鈴々に今月の小遣いを全て肉まんに使われてしまったのだ。一刀は泣きながらも気持ちを入れ替えていた。

「また戦はあるよな・・・。」

本心は戦いなど起こしたくないが、避けられない。それを妙な胸騒ぎが伝えている。もし避けられないなら・・・。

自分が前に出ていこう。そう決意しながら、鈴々を追い掛けていっ

た
一
刀
で
あ
っ
た
。

鈴々パート02（後書き）

次回、ついに氾水関へ???キャラが沢山でてくるので頑張ります。
では、次回!!

第九章：敵有仲間軍？（てきはなかまのぐんにあり？）（前書き）

ついに汜水関攻略編が始まります？あの袁紹や曹操や孫権が姿を表す！？

第九章：敵有仲間軍？（てきはなかまのぐんにあり？）

あれから数週間後、更に各地の村が志願してきた。

朱里達と考えた善政が各村を動かしたのだろうか・・・。

気付いたら、公孫賛と同じくらいの土地を支配するコトになった。が、公孫賛と比べて、軍事力も経済力も足りなく、此処まで来るのも大変だったが、今では他の地域から攻められても何とか対応出来るようになっていた。そして、これからは少し平穏な日々を暮らせるかと思いきや、洛陽の暴君を討伐する為の軍団から勧誘が来てしまっていた・・・。

【軍議室】

「と、言う訳で洛陽の暴君を放って置く訳にも・・・。」

愛紗が今の状況を整理しながら話しているが、一刀には一つ気掛かりなコトがあった為、聞いてみるコトにした。

「んで・・・その暴君を噂ではなく、物理的証拠・・・いや、証言とか実際に被害に会ったって人の話は聞いてないのか？」

「いえ、ありませんが、罪無き民が傷付けられて・・・。」

「いる保証がどこにあるというんだ？」

「それは・・・。」

愛紗が答えられなくなった所で朱里が話し始める。

「確かに、ご主人様の言う通り不自然な所が多いですね。」

「不自然とは何なのだ？」

鈴々も疑問に思うコトを聞いてみた。

「えっと、間者を放ってはいたんですが、洛陽の間者だけは帰って来ないのです。」

「それは大変なのだ。」

「殺された・・・のか？」

愛紗が朱里を問い詰めるが如く聞く。

「多分・・・、そう考えるのが妥当かと。」

「そうか・・・。」

一刀はため息をつく。誰が、何の目的でこのようなコトをするのか・・・。さてよ、世界にイレギュラーな者が入る時、それを止めようとする働きをする精霊はこの世界にいるのだろうか。イフリートやシャドウ、セルシウスのような存在や、ラタクスのようなイレギュラー専門のような精霊・・・まさか。

「俺を排除する為の罠・・・か。」

「はっ!？」

愛紗と朱里を揃えて言う。

「えつとな。俺の世界には、魔物を管理し、抑える為の精霊がいたんだ。魔物のように、イレギュラー・・・その世界で不自然な存在は排除しようとする働きを持つ精霊がいるんだ。そいつの中の誰かが俺を排除しようと、しかも自然な流れで殺そうとしてるのかもしれない。」

と、一刀が最善の説明をするが、愛紗と鈴々は首を傾げている。朱里は何とか話をまとめて簡潔に言う。

「つまり・・・ご主人様の命を狙う者による罠の戦・・・そういうコトでしょうか？」

「ああ。それが誰なのかは保証がないが、精霊とソードダンサーの二枚刃かもしれない。」

「そうですか・・・なら、この戦には参加しないほうが・・・。」

と朱里が言う。

「いや、参加しよう。」

一刀が朱里の意見を否定する。

「何故です!？」

愛紗が一刀に問い詰める。

「そうした場合、洛陽を納めてる人・・・董卓が罪もないのに死んでしまうかもしれない。」

「それは・・・。」

愛紗が絶句する。

「それに、この戦に参加すれば、何者の仕業か目通しが立つ。更に、軍事力が強い人達と交流するいい機会だ。」

「成る程。流石ご主人様だ。ご主人様がそう言うのであれば、私たちに否はありません。」

「鈴々は暴れたらいいのだ。」

と二人は賛成するが、

「一つだけ条件があります。」

と、朱里が言う。

「なんだ？」

「魔術はなるべく控えてください。」

朱里の発言に驚く一刀。

「この戦の後は確実に戦乱の世を迎えます。」

「確かに、朝廷が機能しない今、戦乱の世になるのは見え透いたコトか。」

「はい。ですから、余りご主人様を脅威に見せない方がいいのです。」

「と、言っと？」

一刀が意味を確認する。

「もし、ご主人様の力量を知られたら矛先は間違いなく私たちに向くでしょう。」

「成る程。油断させといて、後で驚かすのだ。まあ、ご主人様は術を使わなくても鈴々を圧倒出来る武をお持ちだ。問題は無いだろう。」

「あの時の技は凄かったのだ。」

愛紗も鈴々も、一刀の武にも関心しているようだ。改めて、自分の主を尊敬しつつ、作戦を認めた。

「それじゃ、明日の朝にでも出陣ってコトで。」

「御意。」

「了解なのだ。」

「御意です。」

そして、鈴々、朱里が出ていく。最後に愛紗が一礼して出ていくのだが、何故か愛紗が離れてから胸騒ぎがする。この胸騒ぎは何なの

だろうか。一刀は疑問を抱く。

「これが、恋！？……って洒落にもならないな。嫌な予感の前兆かもな。愛紗……。」

一刀は最後に一人言を吐きながらも自分の部屋へ戻っていった。

【洛陽場】

「全く……弱ったコトになったわね。」

一人の少女が困ったような声で喋る。

「確かに、数が全く違うわな。どないすんねん？」

また一人、関西弁風の喋り方をする少女が話す。

「どうするも何も、汜水関で守り、虎牢関で守って、向こうの兵糧を削るしかないでしょ。数が違うんだから。」

「本当に暴政をしてるんちゅうたらもつと兵隊を出せるんけどな。」

関西弁の少女が残念そうに言う。

「月が許さないから……。しかし、あの魔物を出すあいつはそこまでして、天の御使いを殺したいのかしら……。」

「おかげさまで、こっちはいい迷惑やな。」

と、二人で嘆いていると、

「我が武で止めてみせよう。」

一人の気の強そうな女性が声をあげる。

「華雄……。無駄に攻めては駄目よ。数がどれだけ違うか。」

「数など、我が武には通用せん!!」

自分に自信があるのか？華雄は大声を上げる。

「……。わかったわ。私も貴方の武は信用しているわ。好きにしなさい。」

「御意!」

そついい、華雄は走って部屋を出た。

「……。張遼は虎牢関の防衛を呂布とお願いするわ。」

「呂布うちとね……。」

「大変だろうけどよろしく。」

「分かった。やったるけど……。」

張遼は一呼吸した後、

「時間は稼いぐけど、もしアレだったら二人で逃げや。そこまで面倒見れるかは分からないで。」

と言った。恐らく、この軍力の差では勝てないと悟ったのだろうか。

「分かったわ。月は私が守る。」

「んじゃ、呂布っちを探してくるわ。」

そういい、軍議は終わった。汜水関では華雄が待ち受けて、虎牢関では呂布に張遼が待ち受ける。一刀達はその中でどう戦っていくのだろうか。と、言いたいのだが……。

【連合軍の軍議場】

次の日、一刀達は喙県を出発し、連合軍と合流後に軍議が行われた。

「……どうも。」

そこには、三人の女性がいた。一人は無関心にちらつと見る程度だった。後の二人は……金髪ドリル野郎……いや、金髪の少女二人は、こちらをじろじろ見ていた。二人は雰囲気も、髪型も似ていたが、違うといえば背と顔。口調も違うだろう、と想像していたら、大きい方が口を開いた。

「貴方が民の間で天の御使い……だなんて噂されている人ですか？」

「まあ、そうだな。」「ただのブ男じゃない。」

もう一人の金髪がツツコミを入れる。

「まあ、ブ男だな。それはいいとして、軍議を始めない？」

一刀は平然と流す。

「あら、自分の名をけなされても平然としていられるのね。」

「名なんかどうでもいいさ。守りたい人達を守れるなら俺の名なんざ、どうでもいいんだ。」

「変わったブ男ね。」

と、いいながらも呆れてはいないようだ。

「変わっていて結構だ。」

と、言い合いをしていたら、もう一人の席に人が座っていた……
って、

「公孫賛じゃないか!？」

「お、北郷か。久しぶりだな。」

公孫賛も一刀の存在に気付き、挨拶を交わす。

「あら。公孫賛さんはその天の御使いと知り合いなのですか？」

「命の恩人だ。」

「まあ、庶民は庶民と仲良くなるモノですものね。」

「全く・・・袁紹は相変わらずに名門を鼻にかける奴だ。」

公孫賛が指摘すると

「あら、袁家は鼻にかけなくとも名家ですよ?」

と袁紹は返事をする。

「うう。曹操も孫権も何かいつてやれよ。」

「馬鹿に与える言葉はないわ。」

「私には関係ない。」

公孫賛のフリも虚しく返される。

その後、袁紹と曹操の喧嘩が長々と続き、結局袁紹が後で配置を伝えてると言う形になった。

【北郷軍陣地】

「ただいま。」

「お帰りなさいませ。」

「お帰りなのだ。」

二人が笑顔で迎えるが、表情が曇る一刀を見ると、

「軍議で何かありました？」

「実は……。」

一刀が一連の流れを説明する。

「それでは、何の為の集まりだったのですか！？」

愛紗は予想通り怒る。

「俺も分からないな。強いていうなら、顔合わせ？」

「ふざけないで下さい！！」

愛紗がかなり怒っている。

「と、言われてもな……。」

一刀が困った時に、人の気配がした。この気配は……曹操？

「関羽將軍はいるかー！？」

と、女性の声がした。明らかに曹操ではない声だった。

「私が関羽だが、何か用か？私は今機嫌が悪いのだ。手短にお願いする。」

愛紗は愛想無い声で言い放った。

「なんだと？その物いいは！？関羽、此処で勝負！！」

女性はいきなり剣を構えた。

「いきなりそこまで話を持っていくか……。」

愛紗は半分呆れているが、得物を構えた。

「いいだろう。関雲長、全身全霊を持って、お相手しよう。」

まずい。二人とも本気になっている。一刀はそれに気付き止めようとするが……。

「春闌やめなさい。」

先に曹操が声を出した。

「愛紗も何やってんだよ。此処で勝負したら、回りの士気にどう影響するか分からないだろ。」

「ご主人様……。申し訳ありません。」

「華淋様……。申し訳ありません。」

二人はそれぞれの主に頭を下げる。

「やっぱり曹操か。何のようだ？」

「あら、私を分かるなんて、流石はブ男ね。ようは貴方ではなく、

関羽にあるのだけど。」

そう言うと、曹操は関羽を見ながら続ける。

「関羽。私は貴方の志を叶えてあげる。私の兵や財、なんでも使っていいわ。その代わり、私のモノになりなさい。」

「な・・・モノと言うと、夜の相手もしろと？」

愛紗は恐る恐る聞く。

「ええ。もちろんよ。」

曹操は、当たり前かのように返事をする。愛紗が返答する前に、一刀が返答した。

「モノだと・・・!？」

一刀はもの凄く怒っている。色々納得のいかない所があるようだ。

「モノでしょ？配下は駒のような物。モノ扱いして何が悪いのか・・・。」

ブチッ

一刀の何かが切れる音がして、部屋にいる全員がこちらを向く。

「俺の大切な人をモノ扱いだ？調子こいてんじゃねえぞ!!」

かなりの威圧のある声に一同は驚き、何も行動を取れなかった。

「愛紗はなあ。俺をこの世界で生きる為に、前世での悔いを掃ってくれた人だよ……。心から好きって言える奴なんだよ。そいつをおめえはモノ扱いしたんだ。そもそも、人は戦の道具じゃねえんだ。もう許さねえぞ？てめえの国を、軍団を守りたいなら、いますぐひざまづいて謝れ……。」

そう言うと、一刀は机を殴った。殴った机からは火がでて、灰となった。「な……。なによ？わ、私を脅す気？」

曹操は、慌てながらも一刀に質問する。

「お前なんかには脅しをかける価値すらねえ。愛紗をまた狙いに来るんなら、この拳はお前の顔に飛ぶ。覚えておきな。」

一刀は大きく深呼吸してから最強に大きい声で叫ぶ。

「愛紗は渡さねえ！！」

曹操は愛紗がどうこうより、一刀に命を狙われる方が怖かった。拳から火を出す人なんて他にいないだろう。脇にいた女性二人も絶句していた。

「いいわ。今は引いてあげる。春闌、秋闌、帰るわよ。」

「はっ！」

三人は自陣に帰っていった。

「ご主人様……。」

愛紗は顔を真っ赤にして一刀を見つめている。最後のがまだ耳に残っているのだろうか……？

「愛紗……悪いな。愛紗の意見もあつただろうにさ。」

一刀は愛紗に謝った。

「何を言っているのです。私はご主人様の元を離れ、あんな気持ち悪いコトを言う奴らの元へ行くとお思いですか？」

愛紗は呆れたように言う。

「愛紗の志を叶えるなら、1番の近道だと思うけ……。」

一刀が言いかける刹那、愛紗が一刀を抱きしめる。

「私も、ご主人様の元から離れたくはありません……。」

そついいながら愛紗の目が潤んできていた。

「ご主人様に私を渡さないと言って貰えて凄く嬉しかったです……。」

「愛紗……。一緒に志を果たそうな。」

一刀はそついうと、左手で愛紗を抱きしめ、右手で愛紗の頭を撫でた。

「お兄ちゃん。鈴々は？」

「あの、わ、私は？」

鈴々と朱里が縦続けに聞いてくる。

「勿論、二人とも同じだ。誰にも渡さないさ！」

「鈴々もお兄ちゃんからは絶対に離れないのだ。」

「わ、私もご主人様の傍にずっといます。」

そういうと二人は一刀の傍に駆け寄る。一刀は愛紗から両手を離し、右手で鈴々の頭を、左手で朱里の頭を、撫でた。

三人は顔を真っ赤にして

「ご主人様……。 （お兄ちゃん……。 ）」

とデレながら、愛紗は一刀の胸を軽く掴みながら顔を擦り付けるが如くの形を取り、鈴々と朱里はそれぞれの腕を掴んでいた。

四人は改めて契りを結ぶのだった……。

第九章：敵有仲間軍？（てきはなかまのぐんにあり？）（後書き）

翠の所に入る前に、区切りが良かったので切ってしまいました。次はいよいよ華雄と戦闘します。裏で影を潜めるあの人達も、伝説の漢女も、控えていますので、お楽しみに？では、次回！

第十章：華雄奇襲（かゆうのきしゅう）（前書き）

最近感想や、メッセージで、一刀といった世界といまいる世界は繋がっているんですか？等、物語のネタバレに繋がる質問が多いです。それらについては毎回消去しているのですが、そのコトについて、読者様に通知を怠った為に不満に思っている人が出てしまい、何とお詫びすればいいのか解らないのですが、申し訳ございませんでした。上記については合計5件同じ質問がある為、此処で答えさせて頂こうと思いましたが、やはりネタバレは防止しなくてはいけないのでこの先の展開を見て欲しいです。（まだまだ序盤ですし。）あと、駄文については承知してます。最後に誤字脱字については、洛陽制圧？後に今までの作品を総編集します。気になっている方、見つけた方はメッセージで教えて頂けると嬉しいです（かなり把握しています（汗）。それでは長くなりましたが、第十章の始まりです）。

第十章：華雄奇襲（かゆうのきしゅう）

「あー。何か来る間合いを間違えたかなー。」

外から誰かの声がする。愛紗がすぐ反応し、

「だれだ!？」

と怒鳴るかの如く叫ぶ。

「愛紗、いきなり怒鳴るのは失礼だろ？」

一刀は冷静に愛紗を宥める。

「ですか・・・。」

愛紗は自分が今までしていたコトを鈴々達以外の人に見られたからか？顔を真っ赤にしている。

「いきなり来て悪かったな。私は馬超ってんだ。宜しく。」

「いきなり怒鳴ったりして申し訳なかった。我が名は関羽だ。」

「鈴々は張飛なのだ!」

「私は諸葛亮です。」

「俺が北郷一刀だ。宜しく・・・って、此処に来た用事は何だ？遊びに来るはずもないだろうし。」

一刀が用件を聞き出す。

「そうだった。袁紹が配置が決まったから報告しろって。北郷軍は後曲だってよ。」

「むう。我が軍の兵は一騎当千の猛者ばかりだと言うのに……。」

「鈴々は前にでて暴れたいのだ。」

二人は残念そうに言う。

「まあ、無駄に兵を失わずに済むんだからそう言っなよ。」

「それに、後曲には後曲なりの戦い方がありますから。」

一刀と朱里はフォローを入れる。

「それで、馬超は何処に配置してるのだ？」

「あたしは父と同じ場所だから、左曲だな。」

「一緒に戦えなくて残念なのだ。」

鈴々が更に残念がる。

「まあ、皆は後ろからあたし達の戦いを見守っててくれな。」

「分かった。馬超、死ぬなよ？」

一刀がよき戦友として馬超に言う。

「当たり前だ。こんな所で死んでたまるかよ。」

そう言い残して馬超は他にも連絡する場所があるからと去っていった。

「馬超か。結構感じいい奴だよな。」

「そうですね。いずれご主人様の手に掛かるのでしょっけど!？」

愛紗がまた怒りだす。

「愛紗、手に掛かるって表現は頂けないぞ？」

「そうなのだ。いくらヤキモチでも、お兄ちゃんを悪く言うのは駄目なのだ。だけど……。」

「ご主人様の周りに女性がどんどん増えていますから……。うう、不安です。」

三人がそれぞれ不安を口に出す。

「あのなあ、さっき契りを結んだばかりだろ？」

「あ!？」

馬超の登場により、つい先程までやっていたコトを思い出す。三人共、余程嫉妬したのだらう。それにより、三人は顔を真っ赤にする。

「そういうコトだから、早く戦の準備をするぞ!？」

一刀が叫んだコトにより、先程までの穏やかな空気は消えていた。今あるのは、目の前にある汜水関を攻略するための気合いだけだった。

「編成は朱里に任せる。愛紗、鈴々は自分の部隊が決まり次第、展開の動きを確認!」

「御意。」

「了解なのだ!」

「御意です」

こうして、汜水関の戦いが始まったのであるが・・・

・・・二刻後・・・

「袁紹・・・何を考えているんだ?」

一刀が疑問に思う。汜水関は要塞だ。それに袁紹は無策に突撃命令を指示したのだ。

「恐らく、何も考えていないのかと・・・。」

朱里が不安を隠せずに言う。

「我々は後曲で良かった。そうで無ければ無駄に兵を損ねる所だったな。」

愛紗は、先程の後曲への不満は忘れてしまっていたようだ。

「でも、馬超が心配なのだ。」

「そうだな。あんな指示出されちゃ、命の保証なんか無いよな。」

鈴々と一刀は馬超が無事であることを祈りながら戦場を眺めていたが……。

「後ろから殺気を感じる……伏兵がいるかもな。」

一刀が直感で感じとる。

「ご主人様の勘を信じます。全軍転換して、後ろにいるかも知れない伏兵さんに備えて下さい。」

「応っ！」

転換作業がまだ3割しか終わっていない頃だった。

「伝令！伏兵がこちらに向かってきています！！数は約二万五千です！」

伝令が声を荒げる。一刀達の軍は一万しかない。伏兵の割には数が多かった。

「ちい、もう来るのか！」

愛紗が声を上げる。

「俺が時間を稼ぐ。準備が出来たら合図を頼む。」

「な、ご主人様！？術を使っではいけないのですよ？」

「あそこの狭い所で敵を一人一人倒していけば十分だろ。」

幸い、敵の方向から此処に来るまでには、狭い道を通る必要があった。人五人は平行に通れないくらい狭い空間だった。

「危険すぎます。私もお供しましょう。」

「鈴々も行くのだ。」

二人は強引にでも行くと言う目をしていた。一刀はそれを察した為、否定することが出来なかった。

「分かった。朱里、部隊は方円陣で待機させて。」

「また、一人で待たなくてはいけないのですね……。」

朱里はいじける。無理もないだろう。前の戦いでも一人で待ちぼうけだったのだ。

「朱里、いつもゴメンな。」

そう言いながら朱里の頭を優しく撫でる。

「はうう、そんなコトされたら断れませんよあ。」

朱里は顔を赤くしながら呟く。

「それじゃ、いくぞ！愛紗、鈴々！」

「応！」

「暴れるのだ！」

鈴々と愛紗は馬で、一刀は浮遊して目的地へ向かった。

【狭き道】

一刀達は目的地にたどり着くと、地を踏む。愛紗と鈴々の馬は後方に下げた。一刀も翼をしまい、待機した。そして、敵兵が到着するのを待った。

敵兵はすぐに到着した。それと同時に三人は名乗りを上げた。

「我が名は関羽。天の御使いの北郷が一の家臣なり！」

「鈴々は燕人張飛なのだ。鈴々の一撃を受けてみよ！なのだ。」

「我が名は北郷一刀。天の御使いなり！世界再生の邪魔をするものには罰を与えん！」

三人の名乗りには兵は動揺していた。関羽、張飛、北郷と言えば黄巾賊を少人数で撃退した猛者達のなかの猛者達である。この三人が同時に道を塞いでいる。下手をしたら、そこら辺の門より堅い守りだろう。そのような予感さえ漂う中、一人の将が声を上げた。

「たがが三人にビビるコトなどない。全軍突撃!!」

「応っ!!」

兵達は次々と一刀達に襲い掛かるが、誰一人突破できる者はいなかった。

「とりゃ!!」

一刀が素早い動きで兵を狩り、

「てりゃやややや!!」

「うりゃ!!うりゃ!!うりゃ!!」

愛紗と鈴々が兵を吹っ飛ばす。兵の士気は既に無くなっていた。そんな中、例の将が前にでてきた。

「我が名は華雄!天下無双の武人なり!!北郷、関羽、張飛、尋常に勝・・・」

ドオオオオン!

非常に悪いタイミングで音がなり、狼煙が上がった。朱里の合図だが、今は引くに引けない状況だ。

「俺が相手をするから二人は先に戻って。」

「ですが・・・。」

愛紗は否定する。ご主人様を囿にするなど、愛紗には出来ないだろう。

「姉者、行くのだ。鈴々達が馬に乗れなかったら逃げるコトが出来ないからお兄ちゃんは囿になるのだ。それに、お兄ちゃんはあるな奴にやられたりはしないのだ。」

「早くいけ!!」

一刀が怒鳴ると愛紗は目を潤ませながらも馬に乗り、自陣に戻っていった。

「ふん。仲間を逃がすか!」

華雄は馬から降りて一刀に近付く。

「違うな。作戦を遂行するためだ。俺も戻るから。」

一刀は平然と吐く。

「易々と帰すと思う・・・」

パアアアアア!

一刀は翼を出す。行きなりのコトで華雄は少し動揺して三歩後ろに下がる。その隙を一刀は見逃さない。

「んじゃ、また会おう!」

「な!ま、待て!」

一刀は馬より早く自陣へ帰っていった。

華雄はしばらく呆然としていたが、

「つ、追撃だ！全軍突撃！！」

こうして作戦は成功した。華雄が来た頃には完璧な方円陣が出来ていて、前には愛紗、鈴々、一刀が待っていた。三人の桁違いの強さを事前に見せられた兵達が互角に戦えるコトも無く、華雄は敗走を余儀なくされたが・・・。

【荒野】

「まてい！！」

「ちっ！関羽か。ちょうどいい。汜水関に帰る前にお前の首を持ち帰ってやる！」

華雄は殺気をだして関羽に向かう。

「いいだろう。関雲長、全身全霊を持ってお相手しよう。」

愛紗得物を構える。華雄は先に仕掛けた。

「てりやあああ！！」

ビュン！！

ガシッ！

思い斬撃を愛紗は止める。

「ちい！」

「まだいくぞ！！」

。華雄がまた構えた為、愛紗は少し間合いを取る為に下がったが・・・

「今は敗走の身。続きは後ほどだ！！」

「なっ・・・待て！！」

愛紗は華雄を追った。が、見失ってしまった。

【北郷軍陣地】

「ただいま戻りました。」

「愛紗・・・良かった。戻らないから心配したよ。」

「ご主人様、華雄を取り逃がしました。申し訳ございません。」

愛紗は華雄を打ち取れ無かったコトを後悔しているようだ。

「愛紗が無事ならいいんだ。流石に袁紹達の包囲は抜けないだろ。」

一刀が言うが、朱里は首を振った。

「華雄さん単体ならどうにでもなりますし、第一袁紹さんに期待してはいけません。」

「そうだな・・・。華雄については連絡待ちとして、兵が疲労してるから休ませようか。」

「そうですね。そうしましょう。」

こうして一刀達はつかの間の休息を取るのだった。

第十章：華雄奇襲（かゆうのきしゅう）（後書き）

華雄は馬鹿では無いので、一刀にされた仕返しを愛紗に出来たんでしょうね。華雄VS愛紗は次もありますので、お楽しみに。では、次回！

第十一章：再華雄（かゆうふたたび）（前書き）

いよいよ、関羽VS華雄です。結果はどうなるのか？始まり～始まり～

第十一章：再華雄（かゆうふたたび）

「袁紹・・・あいつは何がしたいんだ？」

「私にも判りません。」

「私にも理解出来ないですよ。」

「袁紹は馬鹿だからしょうがないのだ。」

鈴々にまで言われたらおしまいだろう。何があったか？それは数分前のコト。

「華雄が逃げ切った！？」

「はい。」

顔良という少女が伝令に来たのだが、内容は華雄があの人数の中を突破したのだ。

「姫が・・・いや、袁紹様が曹操と孫権に連絡をとらなかつたんですよ。私はとるように促したんですけど、言うコトを聞いてくれなくて・・・。ごめんなさい。」

「顔良が謝るコトじゃないさ。」

「そ、そうだな。顔良殿は最善を尽くそうとした。それは事実だ。」

「しかし、袁紹さんって・・・。」

「とんでもない奴なのだ。」

四人は顔良をかばいながら話す。

「はううう。本当にごめんなさいね。」

それでは。と顔良が帰ろうとするが、一刀がそれを制する。

「顔良。主はきちんと選べよ?」

「は?」

愛紗、鈴々、朱里、顔良は疑問符を浮かべた。

「君みたいな良将があんな奴の責で死んだりするのは頂けないからね。」

「と、いいつつ我が軍に加えようと言う魂胆ですか?ご主人様。」

「お兄ちゃんはまだ女の子を入れるのだ。」

「ご主人様の素行は大体予想がつきますね・・・。」

三人が嫉妬混じりのツツコミを入れる。

「ち、違つぞ。俺は顔良が辛そうだったから言っただけだ。」

一刀が否定する。

「と、言うコトは私は北郷さんの軍に入っではいけないんですか？」

顔良が少し笑いながら話す。

「いや、そうとは言ってない。もし加わってくれるって言うならば歓迎するってコト。」

一刀が説明する。

「わかりました、考えておきますね。では。」

一礼して顔良は自陣へと帰っていった。

顔良は後ろを振り返り、愛紗達が一刀を叱っている風景を眺めながら、一刀の言葉を振り返る。

「北郷さん・・・か。」

常に人を上から見下すのが主の態度と言っても過言ではない。しかし、北郷一刀は違った。回りに助けられるコトを感謝し、回りを自分以上に大切に思い、敬意も忘れない・・・もし自分があの中に入れたら？そう思いながらも自分の主の元へ帰っていった・・・。

【袁紹軍陣地】

「斗詩。北郷軍はどうだった？」

一人の少女が帰って来た顔良に声をかける。どうやら顔良の真名は斗詩のようだ。

「文ちゃん……。凄い仲良しな感じであの輪の中に入りたいくらいだったよ。」

「斗詩がそこまで言うなら、すっごく楽しそうなんだろうな。」

と、二人で盛り上がって来た最中、

「もう！なんで汜水関が落ちませんの！？」

と、袁紹はかなり不機嫌だった。

「姫！。汜水関は要塞ですし、華雄を取り逃がしたんですからしょうがないですって。」

「だよな！。もっと気楽に待つのが後方の役割だって。」

二人は袁紹を宥めるように言うが、

「もう待てませんわ。北郷軍も前に出してしましましょう。」

袁紹が奥の手と言わんばかりに言うが、二人が反対した。

「それは駄目です。今、戦場は混乱してるのに北郷軍を前に出したりなんかしたらもっと混乱しますって。」

「斗詩の言う通りだな。前線が崩れた訳でもないし。」

しかし、袁紹は二人が意見をしている間に伝令を出してしまっていた。

「つて！姫、もう出したのかよ！！」

「猪々子！追いかけよう。」

「お、応！流石にまずいつて。」

二人は追いかけたが、伝令は不運にも馬に乗った為、二人が北郷軍に着く頃には苛立ちながらも出陣準備を整えていた。

【北郷軍陣地】

「北郷さ〜ん！！」

「・・・顔良か。」

「今更何のようだ！？」

愛紗は怒り、鈴々と朱里は困った顔をし、一刀は呆れた顔をしている。

「やっぱり間に合わなかったね・・・。」

「姫はこれだから・・・。あたし達、必死に反対したのに。」

二人は土下座して謝る。顔良に限っては涙を流していた。

「・・・謝って済む問題ではない。顔を上げよ。」

「無事に戻って来れたらまた話すのだ。」

「今はやれるコトをやるしかないですしね。」

「そーゆうコトだから、二人は早く自陣に帰れ。」

四人は同時にため息をついた。どうして、こんなに良い将が付いていながら袁紹はああなるのか？誰もが疑問に思っていた。

「ははは……北郷さんの言ったコトが身に染みてきましたよ……。」

文醜は顔良が何を言われたか分からない為に

「北郷さん、斗詩に何言っただよ！？」

大声で聞いた。

「まずは名を名乗れ。」

北郷は冷静に返事する。

「あたしは文醜だ。名を言い遅れてすまなかった。」

「まあ、俺も名乗ってないからな。知ってると思うが、北郷一刀だ。んで、さっき言った言葉は……。」

回りに袁紹軍の兵がいたので、文醜の耳元で囁いた。

「な……。でも、間違っではない話だな。」

文醜にも思い当たる節があるようだった。そして、二人はまた一礼

して陣地を去っていった。

二人は陣地に戻っても口を開くコトは無かった。北郷一刀・・・彼の器の大きさを知ったからだろうか。自分達が大変な時に他の人まで心配出来る仁徳には感心する他無かったのであった。が・・・。

「さうと、袁紹をどう処罰するかあ!？」

「普通に斬り殺したいですね。」

「愛紗の目が本気なのだ・・・。」

「ご主人様の目も光ってるような気がします・・・。」

北郷一刀は本当に仁徳に溢れているのだろうか・・・？

「仲間の命が掛かってるんだ。それくらいのおとしまえば付けないとな?」

「そうですね。ふっふっふ・・・。」

二人は、いつの日かの復習を決めつつ、前線へ出るのだった。

【曹操軍陣地】

「へえ。ブ男の軍がねえ・・・。」

曹操は興味深そうに話を聞く。

「私達は一端引いて、ブ男を見定めてやりましょう。」

「そうですね。兵の疲労も考えるとそれが上策かと。」

一人の軍師が曹操の案を承諾していた。

「それじゃその間に春闈、私の相手をしなさい。」

「は、はい!!」

指名された一人の女性は嬉しそうに曹操の元へ足を運んだ。

【孫権軍陣地】

「孫権様、曹操軍が下がるようですが？」

「そうか、私達もあの天の後使い達を見定める必要がある。一端さがろう。いいな？」

「は、はい・・・。」

孫権軍の軍師は何か言いたげだったが、言わずに頷いた。

結果、北郷軍が前線に出ると同時に二軍が下がってしまった為、北郷軍が最前列になってしまった。

「はめられたな。」

「はめられましたね。」

「はめられたのだ。」

「これを予測出来なかったのは正直、悔しいです。」

しかも、自体是最悪の方向へ進んでしまった。

ドカッ！！

「門が開いただと！？」

愛紗が驚きながら叫ぶ。

「華雄のお出ましか。今度はやばそうだな。」

華雄は兵隊を総動員で攻撃を仕掛けてきた。きっとタイミングを計っていたのだろう・・・。

「まずい、急いで全軍後退させないと・・・。」

「兵隊さん達は簡単に後退出来ませんよお。」

「なら、俺がしんがりを勤めるから三人は後退を急げ！！」

そう言うで一刀は三人が止めるよりも早く行ってしまった・・・、しかも単騎で。

「私もいく！鈴々は朱里を頼む。」

「愛紗、お兄ちゃんを宜しくなのだ。」

「分かった。」

「はう……。また置いてかれるんですね。」

こうして、あたふたしながらも、一刀と愛紗による殿が始まった。

【汜水関門】

華雄の軍が二人を待ち構えていた。他の軍勢が二人の運命を見守った。一刀は走っていたのだが、愛紗が馬で追いかけた為。一騎に二人乗る奇妙な後継だったとか。

「北郷、あの時は逃がしたが、今こそ尋常に勝負！！」

「それは私の台詞だ！華雄、尋常に勝負！！」

「いいだろう。北郷を倒す前の景気付けだ。いくぞ、関羽！！」

ガシンッ！！二人は激突した。力的にはほぼ互角に見えるが、愛紗にはかなりの余裕があった。それに比べて華雄は関羽の速さ、重さに少し驚いた為、余裕が無くなっている。

「おや？無双の武を持つと言っていたように記憶しているが、戯言か！？」

愛紗が挑発を開始。華雄はそれに乗った為、どんどん愛紗が有利になっっていく。

- - - 8 合目 - - -

ガシンッ！！

「はあ・・・、はあ・・・。」

華雄はかなり疲れていた。挑発に乗っている為、振りが大振りになりすぎている。それに比べて、愛紗は冷静にガードをしている為、疲労の差は見て分かる。そして、9合目で決着が着いた。

ガシンッ！

ビュン！！

華雄の得物が後方へ飛んでゆく。
関羽はゆつくり華雄に近付いた。

一刀も、回りの兵を既に約350は倒していたが（魔神剣しか技は使っていない）一端止めて華雄に近づく。回りの兵も、将の敗北に気付き、戦意を喪失していた。このまま勝ちが決まった・・・と思つたが刹那、魔物の気配を感じた。一刀が後ろを振り向くと、一刀達と北郷軍陣地の間にベアの大群が沸いていた。数は約50数は少ないが、北郷軍だけでなく、連合軍全体が動揺していた。

「まずい！！愛紗、今は華雄は逃がしていいから、こいつらを片付けるぞ！？」

「後意。華雄よ、決戦は次の機会までまとう。今は去れい！！」

華雄は無言で兵を連れて虎牢関まで帰っていった・・・。

「愛紗、時間がない。術を使っていいか？」

「な・・・それでは、今までの苦勞が！」

「でも、このままじゃ他の軍の人達が危ない。」

いくら低級とは言っても魔物だ。孫権の軍も、曹操の軍も混乱しながらどんどん後方に引いてゆく。

「分かりました。この事態では止む終えませんし。」

「済まないな。いくぞ！」

そして、術詠を開始しようとしたが・・・

「お兄ちゃんの疾風隊！！鈴々と一緒に突撃するのだー！！」

「応っ！！」

鈴々を先頭にする部隊はベアに向かって突進した。その勢いはすさまじく、ベア達も足を止めざる終えなくなっていた。

「どうやら、術を使う必要はないみたいですね。」

「そうだな。愛紗、俺の背中には任せたぞ？」

一刀は笑みを浮かべて愛紗に言う。

「御意。」

そして、北郷軍は、その武の強さを他の軍勢に見せ付けるのであった。突如沸いた化け物にも通用するその武勇は、あの馬鹿な袁紹でさえ、

「やるじゃありませんか。」

と、言わしめるものだったと言う・・・。

華雄が汜水関から敗走した為、汜水関はすぐに陥落した。そして、
一刀達は休む間も無く虎牢関へ向かうのであった――。

第十一章：再華雄（かゆうふたたび）（後書き）

汜水関は短めにしました。理由は、やっぱり虎牢関でしょ？という作者に謎の理念があるからです。次から虎牢関ですが・・・、運が いいのも武の一つですねー。華雄さん、危うく死ぬ所でしたが、何とか虎牢関へ逃げました。これも刺客の作戦か！？さあ次はどうなるのか？私にも分かりません（ry では、次回！

第十二章：毘総大将天然？（そうたいしょうはてんねんのわな？）（前書き）

感想ありがとうございます。感想のアドバイスを受けながらも、一生懸命成長して行きたいと思います。後、華雄の真名は未だ受け付けています。そのままでもよい方の意見もお待ちしています。では、始まり〜。

第十二章：畏総大将天然？（そうたいしょうはてんねんのわな？）

ようやく虎牢関が見えてきた。今虎牢関には、呂布、張遼、華雄がいるという。流石の袁紹でもこのまま行くのはマズイと察したのか、軍議を開くコトになった――。

【軍議場】

「ちよつと曹操さん！ 貴方の軍が後ろに下がるとはどう言つ事ですのッ！」

軍議が始まってまだ一分も経過していないのにこの宣言。流石に呆れるしかないだろう。

「ふん・・・当たり前でしょう。無能な盟主の命令に従ってたら悪戯に兵を失うばかり。付き合つてはいられないのよ。」

曹操の言葉に袁紹が顔を真っ赤にして怒る。

「む、無能ですって……ッ！？ この私を無能と言いますのー！」

「その問いをわざわざ肯定してあげないと理解出来ないの？ やはり無能ね。」

「キーーーーーッ！！ むかつきますわ、この小娘！」

曹操は汜水関での痛手が大きいから後曲に下がるらしい。連合軍の中でも強国である軍が下がると言う事は、これから立てるであろう策が大きく変わる。

それは駄目だと袁紹が反発した結果、今に至るのだ。まあ、曹操が言うのも無理はないのだが……。

一刀は2人が繰り広げる子供じみた争いに、溜め息を吐いた。

「それはこっちの台詞よ。私の可愛い兵達が貴方の無能のせいで傷付いているんだもの。いい加減にして欲しいわ。」

「そんなコト、私のせいではありませんわ！ 貴方の部下が無能なのではなくて？」

常々、袁紹の言い分には無理がある気もするが……今は置いて置こう。

「私の部下が無能？ ……なかなか面白い冗談を言ってくれるわね？」

袁紹の物言いに曹操は鼻で笑い飛ばすが、目は全く笑っていない。

このまま続くと思われた2人の言い争いだったが、公孫賛が完全に呆れた顔をして止めに入った。

「2人共！ その辺で止めておけよ。それに今から攻める虎牢関を守っているのは董卓軍が誇る武将、呂布と張遼、それに先程まで手を焼かされて華雄だぞ！！こいつらをどうにかする為の軍議なんだから、言い争いをしてる場合じゃないだろ！」

公孫賛の言い分に2人は押し黙った。流石は公孫賛だろうか。

相変わらず事態の收拾の上手さに一刀は関心していた。

「実際どうするのだ。ここで戦を長引かせては我が軍は不利だぞ？」

今まで黙っていた孫権が唐突に口を開いた。その言葉に黙っていた袁紹がいつもの調子で言う・・・不安だ。

「ふん。どうするも何も、私の中では既に策など出来ていますわ。この小娘が邪魔をするから策が発表出来なかっただけです。」

その一言に関心した者は誰一人いなかった。

「あら。何か愚策でも思いついたの？」

「ええ勿論……………って、誰が愚策ですよ！」

再び2人の間の空気が険悪になっていく。この二人は面白くもない喧嘩ばかりするから正直見てて飽きると思う一刀の横で、これを再び感じ取った公孫賛が割って入った。

「はいはい。怒るのは良いから・・・。」

「くっ…………ま、まあ宜しいですね。ここは伯珪さんのブサイクな顔を立てて」

「だからお前はいつも一言多いんだっての！」

止めに入った公孫賛も言い争いに加わりそうになってしまった。

「何でも良いから、とっととその策とやらを聞かせな。いつまで五月蠅く無駄に言い争うんだよ？」

一刀の言葉に袁紹と曹操の表情が怒りの色が浮かぶが、なんとか収めたようだ。

袁紹は1度咳払いをした後、ゆっくりと口を開いた。一刀は危険予知でもしたのか、体が少し震えていた。

「宜しいですね。私の策と言うのは、北郷軍に有り！ですね。」

「・・・・・・え？」

突然袁紹に自分の軍の事を言われてしまう。一刀はなんとなく予想がついた為に、深く溜め息をついた。

「華雄を撤退させたのは貴方と、小娘お気に入りの将なのでしょう？　ならば貴方達が、呂布、張遼、華雄を討ち取れば、この戦は勝ちも同然ですわ！」

袁紹の言うコトが予想される範囲内だった為に、一刀は更に溜め息をつく。

「あら・・・・それは素晴らしい愚策ね。」

「そうですね・・・・って、愚策ではありません！」

袁紹は否定するが、愚策だろう、と皆が思っていた。

「・・・・我が呉軍は後方に移る。」

溜め息を吐いた孫権は、席を立つ。

「あ、ちょ、仲謀さん！ 勝手な行いをされては困りますわ！」

「・・・・・・・・・・」

袁紹の言葉に耳を傾けるコトもなく、孫権は本陣を出て行った。

それに続き、曹操や他の軍勢の代表も本陣を出て行ってしまった。

最終的に本陣に残ったのは元親と公孫賛の2人。

「・・・・こうなったら、北郷軍に託すしかありませんわ。」

袁紹はめげずに一刀に命令を降す。

「無理に決まってるだろ。大体、一番の貧乏で武器すら微妙の軍に先陣を任せるなんて、それこそ愚策だろ？」

「袁紹もさ、いい加減諦めて自分の軍で攻めたらいいんじゃないのか？そこそこの武将だっているだろ。」

一刀が断り、公孫賛が改善策を促すが・・・。

「貴方達が指図をする権限はありませんわ！ この連合軍の総大将として命令します。北郷一刀、貴方の軍勢で先陣を勤め、この戦に勝利を呼びなさい！ 貴方の軍は妖怪にも負けない士気を持っているではありませんか！？」

「確かにそうだ。だが、断る！ 無駄に兵・・・いや、俺達について来た仲間を失う訳にはいかないからな。」

一刀の返答に公孫賛が頷く。まあ、当然の反応だが。

「では、北郷軍を包囲し、全軍で北郷一刀を討ち取るように仕向けますわ？」

袁紹は平然に答える。

ブチッ！！

一刀の中で何かが切れた。

「・・・口で無理なら今度は脅しか？」

一刀は席を達、袁紹を睨みつける。しかし、袁紹は平然としている。

「あら、これは駆け引きですわ？」

「黙れ！！」

一刀は怒りに任せ、術を唱え始めた・・・。

《天光を満つる所に我はあり・・・》

公孫賛は一刀が唱えている間、趙雲の言ったコトを思い出していた。カミナリを起こす剣を出し、黄巾賊を大量に抹殺した・・・と。

《黄泉の門開く所に汝あり・・・》

「黄泉の門って・・・まさか！！」

公孫賛は最悪の可能性を描きながら、向かい側にいる一刀の元へ走る。一刀の回りには石が少し黄色を帯びて宙に浮き出した。袁紹は最初は笑っていたものの、ただならぬ殺気に怯えていた。

《出でよ、神の……》

「北郷……!!」

ドンッ!!

公孫賛は間一髪で一刀を吹っ飛ばす。一刀は最後まで術を唱えるコトのないまま、地面に俯せで倒れていた。

袁紹は未だに腰を抜かして呆然としている。公孫賛はすぐに一刀の元へ駆け寄った。

「北郷!!ご、ごめん。」

公孫賛は謝るが、返事がない。いや、聞こえていなかったのだろう。ただ、一刀はこう呟きながら涙を流していたと言う。

「愛紗……鈴々……朱里……ごめん……。」

この小数であの軍勢にぶつかればいくら一刀がいても、術が使えなければ木っ端みじんになるだろう。

彼女らを護ると誓いながら、自分がいながら更に危険な目に合わせなくてはいけない現実、力のない自分自身に一刀は歎いているのだった……。

「北郷……。」

そんな一刀を見て、公孫賛は同情しつつ、袁紹と何やら話をしていた――。

――半刻後――

一刀も我に還り、

「すまなかつた。従うよ。」と言だけ言い残し去ろうとする。しかし、公孫賛がそれを阻止して、話がある、と一刀を連れ出したのだった――。

「なんだ、話つて？」

「いやさ、私も出来る限り手伝つてやるからさ。元氣だせよ？」

そう言つと、一刀の頬にキスをした。

「な、なんだよ？いきなり。」

一刀は慌てて声を出す。

「はははっ。前の仕返した。あの時は助けて貰ったしさ。」

「俺を氣遣つてか。ありがとう。」

一刀は淡々と礼を述べる。

「流石に話はそれだけではないだろ？」

「ああ。袁紹に、北郷の軍を先陣にする条件を付けてきた。多分聞いてないだろうと思つてさ。」

公孫賛は此処まで気が効くのか？ と関心する一刀。

「一つは、北郷軍の兵士全員に防具と武器を提供するコトだ。更に、全軍からなるべく兵を提供するようにする。」

「ほ、本当か！？」

これだけあれば、戦いもいくらか楽になる。朱里がいい案を浮ぶ為の種にもなるだろう。

「ああ。そしてもう一つは、北郷が粘つてる内に必ず他の軍勢を動かせるようにするってさ。最悪でも自軍を動かすらしいから、期待出来るぞ。」

「公孫賛・・・ありがとう。本当にありがとう。」

一刀は感謝の気持ちを全面的に出す。これだけあれば勝算はいくらでもあるだろう。

「あと・・・最後にお願ひがあるんだ。」

風向きが少し変わった。一刀は俺が果たせるならば・・・と、用件を聞いた。

「私のコトを真名で呼んで欲しいんだ。私達はお互いに危険を助け合つて乗り越えて行こうとしている仲だし・・・さ。」

公孫賛のいきなりの申し出に慌てる一刀。

「べ、別に、嫌なら無理はしなくてもいいぞ。」

自分の言った言葉に恥ずかしながら話す公孫賛。

「い、いや。嫌ではないし。むしろ嬉しいけど、本当にいいのか？
真名で呼ぶってコトは・・・。」

「いいんだよ！！何度も言わすなって。こっばすかしいじゃないか。」

一刀が言葉が続けようとするが、公孫賛が割り込む。

「そうだな。うじうじ言ってもしょうがないな。じゃあ公孫賛、早速だが、真名を教えてくれ。」

「ああ、私の真名は・・・。私の真名は、白蓮だ。」

白蓮は顔を真っ赤にしながらも伝える。

「そうか。それじゃ、白蓮？」

一刀が早速、真名で呼ぶ。

「お、おう。なんだ？」

照れ臭そうに反応する白蓮。

「俺のコトは一刀でいいぞ？やっぱり、親しい人には名前で呼ばれたいしな。」

「そうか。分かった、一刀。改めて宜しくな。」

「ああ。白蓮、こちらこそ宜しく。」

二人はお互いに名を呼んだ後しばらく沈黙するが、その後は二人で大爆笑した。特に意味はないが、気分がよかった。ほとぼりが覚めた頃、一刀は軍議をするから――と白蓮と別れた。

【北郷軍軍議】

「ただいま。」

「お帰りなさいませ。ご主人様。」

「お帰りなのだ。」

「お疲れ様です。」

三人がそれぞれ出迎えてくれた。しかし、軍議のコトを伝えると、愛紗がまた暴走を始めようとするのを皆で阻止したりした為、大変だった……。

「そういう条件を袁紹に出した公孫贇さんに感謝しませんと……。

」

朱里は嬉しそうに言う。これで勝ちが見えた！！と、言わんばかりだ。そのおかげさまで口を滑らせてしまった……。

「白蓮はいい奴だからな、うん。」

この言葉の後、気温は一気に氷点下まで落ちた。

「白蓮とは、公孫賛殿の真名ですか？」

「いつからそんな関係になったのだ!？」

「軍議が長引いたとか言っつて、何かをやっていたのではないですよ
ね!？」

「一刀は自分のうっかりを叱りながらも三人を宥めるのに一生懸命になるのだった――。」

第十二章：毘総大将天然？（そうたいしょうはてんねんのわな？）（後書き）

最後は・・・申し訳ありません＞＜区切りが悪いですよね（泣）あまり気にしないで頂けると助かります。では、次回！！

第十三章：虎牢関戦（ころうかんのたたかい）（前書き）

久々の更新……。内容に悩んだのと、リアル事情。そして、この先の展開を考えていた為に更新が遅れました。これから遅れが出ると思いますが、最後まで必ず完結させてみせます。そして、真シリーズも製作してみせますよ！！では、大変長らくお待たせしました。始まり始まり（＾－＾）；

第十三章：虎牢関戦（ころつかんのたたかい）

「つまり、曹操さん達にやられた仕返しをします。」

朱里が作戦を大まかに伝える。愛紗と一刀はそれだけで理解したようだった。

「成る程……。それはいい考えだ。」

相変わらず黒いオーラを放って言う愛紗が悪魔の笑みを浮かべる。

「どついつコトなのだ？」

未だに理解出来ていない鈴々が声を上げる。

「つまりですね。敵の先陣を私達で釣って、曹操さん達に押し付けるんです。」

「成る程なのだ。」

鈴々も納得したようだった。

「それで、何日くらい保つ必要があるんだ？」

一刀が話を進める。

「多分十日前後でしょう。厳しい戦いになりそうですが、頑張りましょう。」

こうして、虎牢関の戦いが始まった……。

【虎牢関前荒野】

周りは荒野が広がっている。

東には森が、西にはただ砂漠（？）が広がっている。南には仲間の軍が、そして北、いや一刀の目の前には、難関不落と呼ばれる虎牢関、そして官軍、更には猛将の三人（呂布、張遼、華雄）がいる。正に鬼に金棒と言う所だろう。その威圧感に一刀達の軍にも緊張が走る。陣を建てて三日。遂に董卓軍が北郷軍に攻めてきた……。

「うりゃうりゃうりゃー！！」

ザシュツ！！

ズバツ！！

「てりゃあああー！！」

ザシュツ！！

グシャツ！！

愛紗と鈴々が近付く敵を粉碎していく。

「うおおおお！」

一刀も負けんとばかりに高速に剣を振る。

スパッ！！

スパッ！！

愛紗や鈴々とは違って速さで鮮やかに敵を倒す一刀。正に芸術とでも言うのだろうか？濁る音を一つも出すコトが無い。

董卓軍の兵達でも、力で揜伏せる武将と、技で切り裂く武将を同時に見てしまえば流石に士気も下がるものだ。みるみる内に攻撃は弱くなっていき、十日はあつと言うまでもなく過ぎた。

こうして、北郷軍は敵を釣るコトに成功して、曹操軍と孫権軍になり付けけるコトに成功した。また、張遼が曹操に降るコトになった。虎牢関を守る武将が一人減るのは一刀達にとっても有り難いコトだろう。曹操の軍が強くなるコトには問題がありそうだが……。

【北郷軍軍議】

「敵は六割型は消滅したが……。」

「まだ、呂布さんとあの華雄さんがいますから……。」

愛紗と朱里が険しい顔で一刀を見る。

「さっきの戦いで私達の兵も疲れてはいますが、私も含めて虎牢関に突撃します。」

朱里が少し不安そうな顔をしながらも自分も前に出るコトを告げた。

「私達の強さを天下にしらしめるにはこれが一番なんです。」

「そうだが……。朱里が危険ではないか？」

「朱里が危ないのだ！」

愛紗と鈴々は朱里までも前にでるコトに反対した。

「なら俺が……」

と一刀が言いかけた時、愛紗と鈴々が何故か黒い視線で一刀を睨みつけた。

（なんでここで妬くんだよ！？）

と、無言の突っ込みを入れながらも言葉を訂正した。

「……俺の一刀疾風隊に任せよう。」

「それがいい。」

「鈴々も賛成なのだ！」

笑顔で答える二人。朱里の方は些か不満げだった。

（ご主人様と一緒にいたかったのに・・・）

朱里の思わず漏らした声は砂煙に掻き消された――。

【虎牢関】

「張遼が降っただと!？」

「・・・（コクッ!）」

呂布から張遼についての報告を受けるなり、華雄は苛立った。無理もないだろう。華雄はあれだけ武勇に優れた將軍が、恥も知らずに降ったと思っている。

華雄が一般の目を持っているかとはとにかくにも、張遼があつさり降った事実には董卓軍はおろか、連合軍も驚いた。簡単に言えば、張遼は仁義深い人物のようだ。

張遼の話は置いて置くが、呂布が華雄を冷静にさせるなど、しようとする訳も無く、

「全軍!!あの裏切り者を含め、連合軍なる逆賊共を皆殺しにしろ
!!!」

華雄はただ、怒りに任せて指揮をとっていた――。

【虎牢関門前】

一刀達は門が開くのをひたすら待っていた。

ドーン！

ドーン！

その時、鈴々が動いた。

「みんなー！引いて！ー！」

鈴々が言っや否、門を開ける為の丸太（？）みたいな奴を引いた。

「鈴々が押したら皆で突っ込むのだ！離したら駄目なのだ！ー！」

「お、応っ！ー！」

一刀と愛紗と朱里は首を傾げて見ていた。

「行くよー！壺・弐のー・・・」

「どっかーん！ー！」

『獅子戦吼！ー！』

丸太の真ん中に獅子戦吼をぶつける。その勢いで丸太は猛スピードで門へ突っ込んでいく。兵士達も必死に支えながら門へ突進する。そして・・・

バンッ！！

門が開いた。鈴々は獅子戦吼を放った勢いのまま門へ走り、雄叫びを上げた。

「燕人張飛！一番乗りなのだ！！」

北郷軍の兵士達はその言葉に続くように叫んでいた。

「流石鈴々だよな。」

「鈴々があそこまで考えるなんてな。」

一刀と愛紗は鈴々の猿智恵と、その武勇に感心していた。

「鈴々ちゃんに感心している場合ではないですよ！私達も急ぎましよう。全軍、虎牢関に突撃します。私達についてきて下さい！！」

応っ！！ とまた雄叫びが上がる。北郷軍は一斉に前進して鈴々と合流し、虎牢関へ侵入した。

そこまでは順調だった。しかし、此処であの猛将が立ち憚る。

【虎牢関右側】

「うわー！！りよ、呂布が出たぞー！！」

ザシュッ！！

ザシュッ！！

「た、たすけてく・・・」

グシャッ！！

かの猛将は、北郷軍の指揮を、兵の命を次々と奪っていった。

【北郷軍陣内】

「ッ！？呂布を止めなければ！！」

愛紗は急いで前衛に走っていった。

（・・・なんなんだ？この気持ちは・・・）

一刀はふと遠征前を振り返る。愛紗が部屋を去ろうとした時のゾクゾクするような寂しい感じ・・・今の寂しい感じは更に強く・・・

「愛紗が危ない！！」

突然一刀が叫んだ為、鈴々と朱里は目を丸くする。二人は何か言おうとするが、一刀がそれを制する。

「鈴々！愛紗の援護を頼む。一人で行かしたら愛紗が危ない！」

「了解なのだ！！」

鈴々も呂布へ目掛けて走っていった。しかし、やはり一刀は二人が不安で仕方なかった。そして、

「俺もい・・・。」

と言い出そうとしたが、

「伝令、華雄が現れました!!」

兵士からの報告に一刀は少し苛立つ。愛紗達を助けに行きたいが、華雄をなんとかしなくてはいけない。

「華雄は俺が倒しに行く。そして、愛紗達を手伝いながら帰ってくる。朱里は本陣を任せた!」

一刀は朱里にまで威嚇するような目をしていた。それは焦りか、苛立ちか、それとも不安か……。それは誰にも解らなかった。

朱里の返事を待たずに一刀は飛んだ。

【虎牢関左側】

「うりゃあああ!!」

ザシュツ!

ズシャアア!!

戦場では華雄が派手に暴れていた。北郷軍の兵士も流石の気迫に押し負けてしまい、斬られていく。

「たああつ!!」

カキイン!!

「なんだと!?!」

華雄は思わず大きく二歩下がった。それもそうだろう。いきなり一刀が目の前に現れて、兵士をかばって攻撃を受け止めたのだから。

「随分のんびりした攻撃だな、華雄！」

一刀は軽くあしらう。少しピリピリしてか、若干Sモードになっているようだ。

「なんだと!?!」

華雄は其れを挑発と取り、更に怒りだしていた。

「喋る時間は無いんだ。早く来いよ!」

そういうと一刀は身構える。

「言われなくても・・・殺る!!」

タツ・・・

物凄い速さで一刀の位置まで駆け寄り、斬撃を放つ。が、

ピュン!!

攻撃はかすりもしなかった。一刀はギリギリまで引き付けてから空中へジャンプしていた。

「うおおおお!!」

『飛天翔駆!!』

ガッキイイイン！！

「うおわっ！！」

華雄は体制こそ崩れないが、5メートルほど飛ばされた。

「体制も崩さないか。流石は華雄と言う所だな。」

目は本気、しかし笑顔で話す一刀。

「・・・ッ！？」

『魔神剣・双牙！』

文字通り切れる刃の波動が二つ、華雄を襲い掛かる。

ガシンッ！

一つを何とか凌いだ華雄。しかし・・・

バキッ！！

「な、何だと！？」

一刀の波動は、華雄の得物を喰らった。

「勝負有りだな。」

一刀は今度は目も完全に笑いながら華雄の元へ歩み寄る。

「悔しいが私の負けだ。早く私の首をとるがいい。」

華雄は観念したかのように笑顔で一刀を見る。彼女は武人としての最期を快く受け止めているのだろうか。

「悪いけど、殺す訳にはいかないな。董卓の事実を確かめなくちゃいけないし、その武勇は気に入ってるしね。出来れば仲間になってもらいたいけど・・・この話は後で。今は一応捕虜として俺の陣地に来てもらう。」

しばらく沈黙が続き、

「解った。」

と、頷いた。そして、兵隊に囲まれて去る時に

「呂布は強い・・・。気をつけろよ。」

と、小さな声で吐いた。

「心配ありがとうな。」

一刀は華雄に一礼するや否、超高速で呂布の所へ向かった。

・・・その頃・・・

【虎牢関右側】

ザシユッ

ザシユッ

ザシユッ

「ぐわっ・・・。」

「たった・・・。」

ザシユ

ザシユ

呂布は北郷軍を片っ端から倒しながら、ゆっくりと前進していた。

「・・・弱い。」

そんな時だった・・・。

「まてい!!」

愛紗は呂布の前に立ち憚った。

「・・・お前は？」

「我が名は関雲長。幽州の青龍偃月刀とは私のコトだ！」

愛紗は呂布の前で、堂々と名乗りを挙げた。

「・・・お前が関羽か。後、後ろのお前は誰だ？」

そういうと、愛紗の後ろの兵士の間から鈴々が前に出て来る。

「えへへ・・・ばれちゃ仕方ないのだ。鈴々は張飛なのだ。」

「鈴々！！何故此处にいる！？」

「お兄ちゃんの命令なのだ。それに、こいつはかなり強そうなのだ。愛紗一人じゃ危険なのだ。」

「うつ・・・。確かに危険ではあるが・・・。」

やはり、二対一の戦いは武人としては絶えかねるようだ。

「・・・二人。同時に相手してやる。」

呂布の思わぬ一言で全てが解決した。

「おのれ・・・。鈴々！？私達の力を見せ付けるぞ！！」

「うん！分かったのだ！！」

二人はそれぞれ戦闘体制に入る。そして・・・

「てりやああああ！！」

「うりやうりやうりや！！」

二人は同時に呂布に襲い掛かる。流石の呂布であっても防げないと兵士達も思っていた。しかし・・・

「・・・遅い。」

ビュンッ!!

ビュンッ!!

素早い動きで二人の攻撃を弾き返した。

「うぐっ・・・。」

「むー・・・。」

二人は同時に唸る。二人のコンビネーションはよく、今まで敵無しだったのだ。だが今、目の前にいるのは天下無双の呂布。並の将とは訳が違う。いや、違うにも程がある。

「・・・。」

「・・・。」

二人はこのままでは負けるコトを確信してしまう。この一瞬の隙が命取りになるコトは十分知っているだろう。だが二人は、この状況で冷静になることが出来なかった。若さ故の失態であろう。

呂布もこの隙を逃す程優しくはなかった――。

「・・・こないなら・・・いく・・・。」

赤兔の如く駆ける呂布。その矛先は鈴々だった。

「にやにや!?!」

鈴々は慌てて構えるが・・・間に合わなかった。

ガシンッ!!

ピュン・・・。鈴々の矛は宙を舞った。そのまま呂布は鈴々を斬ろうと振りかぶる。そして・・・。

「・・・ふんっ!!!」

ザシュッ!!

生々しい音が響き渡る・・・。北郷軍の兵士は全員青ざめた。

「うつっ・・・え!?!姉者・・・姉者!!!」

斬られたのは鈴々ではなく・・・鈴々を庇った愛紗の背中だった。
- -。

第十三章：虎牢関戦（ころつかんのたたかい）（後書き）

虎牢関でどうするか悩んだのですが、このような形になってしまいました（^-^）； 次回はベタな展開ではありますが・・・。呂布と一刀の激戦を描きたいと思います。では次回！！

第十四章：一騎打（いつきうち）（前書き）

前回かなり更新が遅れたお詫びにもう一章追加。呂布と一刀の大一番の始まりです。

第十四章：一騎打（いつきうち）

一刀は兵士達が動揺しているのに気付く。何があつたのか？自分の勘が当たっているのではないか？そう思いながらも、兵士の上空を飛んでいた――。

【虎牢関右側】

「姉者――！！嫌なのだ、死んだら駄目なのだ！！」

鈴々が必死に愛紗の名を呼ぶ。

「り・・・りん・・・りん。大丈夫・・・か？」

と、愛紗は鈴々を心配するが口からは血を垂らしている。

「喋っちゃ駄目なのだ！！早く何とかしないと・・・。」

しかし、鈴々は突然のコトにパニックに陥り、冷静に物事を考えられず、何も出来なかった。そこに呂布が追撃をしかけようとする。

「・・・次こそ・・・お前。・・・ふんっ！」

一時間を大きくとっていた呂布が一気に詰め寄る。鈴々はそんなコトには気を留めず、その小さな体で愛紗を抱いている。

しかし、呂布が後二メートルで間合いが取れる所で足を留める。そして、呂布は再び間合いを取る。

「愛紗あ!!」

「お、お兄ちゃん……。」

物音一つしなくなった戦場に一刀の音が響き渡る。

「姉者、鈴々を……。庇って……。それで……。っ!」

鈴々は今にも泣こうこしていた。

「泣くな鈴々!! 愛紗は死んだりしない! いや、させてたまるか!」

そっというや否、一刀は術を唱えた。

『ヒール!!』

愛紗の体を聖なる光が包み……。傷が塞がった。

「一先ずこれで安心だが、また開くだろうから。鈴々は愛紗を連れて本陣へ戻るんだ。」

一刀は再び呂布を見る。一刀が怒っているのか、哀しんでいるのか。誰にも分からなかった。

「分かったのだ。お兄ちゃんも死んだりしたら駄目なのだ!!」

そっいいながら、鈴々は愛紗を抱えて本陣へ帰っていった――。

数分後、再び緊張感溢れる空気になる。回りの兵士達は戦わず、この戦争で1番となるであろう一騎打ちを見届けるコトにしていた。

「・・・お前は・・・誰だ？」

呂布が構えながらこちらを睨む。

「俺は北郷一刀だ。俺の仲間を傷付けた罰は与えないとな!!」

一刀から放たれているオーラは呂布をもくぎづけにした。

「・・・お前、強い。・・・恋、久々に本気。」

呂布も負けんとばかりにオーラを放つ。そして・・・一騎打ちは始まった――。

先に仕掛けたのは呂布。先程の鈴々に詰め掛けた時なんかは比べものにならないくらいの速さで一刀に近寄る。

「・・・ふんっ!!」

ガッキイイイン!

一刀は双方の剣を巧に使い受け止めた。

「つく!中々やるな!」

そついいながら一刀は一步大きく下がりながら攻撃を仕掛ける。

『魔神剣！』

呂布は初めて見る技に驚きながらも間一髪横に避ける。

「・・・お前も、やる。」

一刀と呂布はまた間合いを取った。

「次は俺からいくぞ！うらああああ！！」

『裂空斬』

縦に回転しながら呂布を目掛けて突き進む。呂布は、この技にも驚いた＋余りの速さに回避するけとが出来なかった。

ガシン、ガシン、ガシンッ！、ガシンッ！

呂布は回転による連続攻撃を全てまともに受けた為に、かなり辛い状況となった。しかし、一刀も呂布のガードを弾くコトが出来なかった為、隙が出来てしまう。

「・・・隙。」

そついいながら呂布は突きを繰り出す。

「ふんっ！」

避け切れないと判断した一刀はジャンプし、空中に舞う。そこでなんとか体制を立て直す。しかし、

「・・・ふんっ!!」

呂布もジャンプし、追撃を仕掛けて来た。

「何っ!？」

「・・・はあっ!!」

ガッキイイイン!

一刀は何とか刃を防ぐ。しかし、空中にいた為に踏ん張るコトが来ず・・・。

「うわああああ!!」

一刀は大きく吹っ飛ばされた。そして、壁にたたき付けられる。

「ぐはっ!!」

そのまま地に倒れる一刀。そこに呂布がゆっくりと近付く。

（此処で殺られるのか?）

そういいながらも、酷く傷ついた愛紗の苦しそうな顔を思い出す。

（自分の仲間を傷付けたような相手に負けていいのか?）

答はすぐに出た。そして。

（二人とも自分を信じてくれている。いや、二人だけではない。朱里だってかなり自分のコトを心配していた。それに回りの兵士達も俺の名前を呼んで、立つコトを、勝つコトを期待している。負ける訳にはいかない・・・いけないんだ！）

「うおおおおおおおー！」

一刀から翼が現れ、また、剣は光っていた・・・いや、剣は雷の力を持っていた。その姿は、誰もが天の御使いであると納得してしまうかのような、凜々しい姿だった。

「・・・くっ!？」

流石の呂布も今の一刀は先ほどまでとは違っと感じて、間合いを余分にとっていた。

「天の御使い様ー！」

今の一刀を見た北郷軍の兵士達は騒ぎ出す。これが、自分達を導いて来て、これから導くであろう天の御使いの真の姿なのだろうと。

「呂布・・・。いくぞー！」

「うらああああー！」

上空2・5メートルくらいの低空飛行で呂布に襲い掛かる。

「・・・ふんっー！」

呂布がジャンプし、攻撃を仕掛けようとするが、少し隙が出来てい

た。一刀はその僅かな隙を逃さなかった。

「はぁ・・・っ！」

『雷破斬！』

ガシンッ、ガツキイイイン！！

「・・・っ！？」

一打目は防いだが、雷の力で腕が痺れた為、二打目を上手く防げず、地に落とされた。一刀は更に追撃を仕掛けた。

「いくぞ！」

『獅吼翔破陣！』

呂布を突き、更に体制を悪くし、渾身の力と闘気で呂布に斬り掛かる。

ガツキイイイン！

呂布は受け止めた・・・しかし、闘気が更に呂布を攻めて攻めて、攻め抜いた。そして――。

ドゴオオオオオン！！

通常では有り得ない音が出たや否、呂布のいた場所に砂煙が舞う。一刀はそこから数歩下がって様子を見る。

（流石の呂布もこの技には倒れた……いや、まだ来るだろうな。）

一刀は何かを感じて、再び構える。そして、砂煙が消えた否、呂布が最後の奇襲を仕掛けてきた。

砂煙の掃けた場所には呂布の形のした穴が開いていた。恐らく攻撃に堪えきれず、一度は倒れたのだろう。しかし、流石呂布と言う可きか？直ぐさま起き上がり、無我夢中で攻撃を仕掛けて来た。

しかし、その動きは遅かった。やはりかなりのダメージを受けているのだろうか。しかし、一刀は容赦なく、止めの一撃を放った。

「これで最期だ！！」

『雷迅剣！』

呂布の肩に突きを入れる。その瞬間。雷が呂布に落ちた。

ズドドドドド……

呂布は力無く地面に倒れた。一刀は刀を抜きヒールを呂布に使った後に、高らかに声を挙げた。

「敵将呂布、北郷一刀が討ち取ったり！！」

北郷軍を始め、連合軍全体が大きな声を挙げる。

かくにして、虎牢関に將軍がいなくなった為、虎牢関は直ぐに征圧できそうだった。しかし、愛紗が心配な一刀は北郷軍全員を本陣に引き換えした。もちろん、縄で縛った呂布と共に……。

【北郷軍陣地】

「愛紗・・・？」

一刀は呂布を兵士に預けて一目散に愛紗の元へと向かっていた。

愛紗は俯せの状態で静かに眠っていた。

「あ、お兄ちゃん！！お医者さんが治るって。」

愛紗のそばいいいた鈴々が、何時もの元気な声で出迎える。

「そうか・・・良かった・・・！」

一刀は歡喜余り目から汗を流していた。

「お兄ちゃん、愛紗が起きた時に泣いていたら駄目なのだ。」

「・・・そうだな。」

一刀はその汗を拭き取った。

「それで、お兄ちゃんが戻ってきたってコトはあの強いお姉ちゃん倒して来たの？」

鈴々が興味深く聞く。

「ああ。危なかったけど、何とか倒して来た。今は縄で縛って生け捕りにしてるぞ。」

一刀は笑顔で答える。

「すっごーい、あのお姉ちゃん倒したんだ。」

鈴々が一刀に関心する。一刀は少し間を置いて鈴々に尋ねる。

「呂布を仲間になりたいと思ってるんだけど……。」

「鈴々も賛成なのだ！」

「えっ!?!」

一刀は思いも寄らない発言に驚いた。自分の義姉を傷つけた……もしかしたら殺されていたであろう敵を生かすコトを許せるとは思ってはいなかった。

「あのお姉ちゃんは愛紗を傷つけたのだ。でも、あんなに強い奴が仲間になってくれたら、鈴々も愛紗もこれからもっと強くなれるのだ。それはいいコトなのだ。」

「そうか……。」

鈴々は自分の考えを正確に一刀に伝えた。鈴々は子供であるが、武人としては立派な大人なのだと一刀は思った。

一刀は鈴々の頭を撫でた。

「にゃあ……くすぐりたいのだ。」

「ご、ご主人様〜!!」

しかし、一刀はすぐに鈴々の頭から手を離れた。一刀が声のした方を見ると、朱里が今にも泣きそうな目で一刀を見ていた。

「ご主人様……。ご主人様!!」

朱里は一刀を見つけたや否、鈴々並の速さで一刀の胸に飛び込んできた。

「ううっ……。ご無事で良かったですう……。」

堪えていた涙を流しながら一刀に抱き着く。

「ああ……。ただいま、朱里……。」

「はうう……。う。」

しばらく経ち、朱里が泣き止む。そして、三人はただ愛紗が目覚めますのを待っていた……。

第十四章：一騎打（いつきうち）（後書き）

華雄の真名をどうしましょう・・・。未だ決めていない設定に汗っ
ています（笑） では次回！！

第十五章：新契約（あらたなちぎり）（前書き）

今回は少し走り書きになってしまいましたが……。更新します！

第十五章：新契約（あらたなちぎり）

「んんっ……。此処は……？」

愛紗が目を覚ました。自分が何故寝ていたのかが思い出せない。此処は何処なのだろうか？ 答えは痛みと共にやってくる。

「ッ！？ 傷……。そうだ、呂布に一太刀浴びて……。」

愛紗は回りを見る。一刀と朱里は何やら話に夢中で、愛紗が起きたコトに気付いていないようだった。鈴々の姿は見当たらず無かった。

「曹操さんには何て伝えましょうか……。」

「これは厄介だよな……。」

他の軍勢には、関羽と張飛が敗走したと言う噂が流れていた。それで、曹操が関羽を心配して、間者を放ってきたのだった……。

「鈴々も怪我してないし、愛紗……。関羽も大丈夫だからもう帰るのだ！」

「……と、言われなくても、関羽將軍に会わなければ帰れません。」

鈴々が朱里の策の元、外で時間を稼いでいた。しかし、時間稼ぎにも限度がある。それで、二人は新たな策を考えていたのである。

「い、ご主人様？」

愛紗は一刀を呼ぶ。一刀はようやく愛紗が目を覚ましたのに気付く。

「愛紗・・・!？」

「ご主人様・・・。心配おかけしましたね。関雲長一生の不覚です。呂布に一太刀浴びせられるなど・・・。」

「それより、愛紗が目を覚ましてくれてよかったよ・・・。愛紗!」
感動の余り、愛紗の寝ていた所に近付く。愛紗も体を起こす。そして一刀は愛紗の髪を撫で下ろす。

「愛紗・・・。」

「ご主人様・・・。」

朱里が咳ばらいして止めようとしたその時、鈴々が食い止めていた間者が、一刀達のいる所へ来てしまった。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

五人は絶句した。

一刀と愛紗は、今の状態を間者に見られて。

鈴々は、愛紗が目覚まして即行一刀とイチャついているのを見て。

朱里は、明らかに気まずい状況になってしまったと感じて。

間者は・・・愛紗と一刀が今から色事をしようとしていると考えて。

「これは一体・・・？」

間者が1番最初に我に還る。

「これは・・・。そのだな。えっと・・・。」

愛紗が顔を赤くして間者を見る。一刀はこうなってしまうては！と口を開けた。

「今から愛紗と色事しようとしてたんだから、邪魔するなよ。まあ、色事出来るくらい愛紗も元気だってコトな。」

「は、はあ・・・。」

間者も、思いも寄らぬ切り返しに慌てている。

「あと、これを曹操に全て言つと、お前の首が跳ぶだろうから、色事の話は省略して、元気だと伝えておけ。」

「は！分かりました。お邪魔して申し訳ありませんでした。私のコ

トはお忘れ下さい。では！」

と、間者は一礼すると、北郷軍の陣地を離れていった――。

「さて・・・。」

一刀は、何事もなかったかのようにコトを進めようとする。

「ちよっ、ご主人様！？どういっつおつもりで！！」

愛紗が羞恥からか、声をあらげる。

「あんな間者は適当に流せばいいんだって。それより、怪我の具合はどうだ？」

「は、はあ。心配をおかけしました。私はもう大丈夫です。」

愛紗はいつも通りにはきはきと返事をする。

「それで…。呂布はどうなったのですか？」

「とりあえず、華雄と一緒に捕虜にしている。今から話を聞こうとしてた所。朱里！？」

「は、はうあー！！」

「二人を連れて来てくれるか？」

「御意です」

朱里は呂布と華雄を連れて来る為に牢へ向かった。とはいっても、小さな小部屋テントに過ぎなかった。

「……………」

沈黙が暫く流れる。数分立った所で、朱里が二人を連れてきた。

「……………」

「……………」

二人は無言だった。何を考えているのか、それは解らないが、一刀は話を始めた。

「お二人さん。少し話があるのだけれど、いいかな？」

「かまわんぞ、北郷。」

「……………（コクッ）。」

華雄は平然と答え、呂布は黙って頷いた。

「えつとまず、やっぱり董卓の暴君説は嘘なのか？」

「なっ!?!」

華雄が予想外の質問に驚く。

「……………月、優しい。」

呂布が口を開く。

「月？月とは誰だ？」

愛紗が質問する。

「董卓の真名だ。確かに董卓は優しいし、暴君なんかではない。」

一刀は予想通りと頷いた。朱里も、鈴々も、愛紗も同じ反応だった。

「な、お前達はそれを信じるとでも言うのか？」

華雄は用心深く聞く。

「まあ、噂よりは中にいた人の話の方が実用的だな。概ね、誰か人質にされていて、俺の命を狙う為に戦を起こさせるように仕組んだのかな？」

一刀が続けて聞く。

「な……。何故そこまで分かっている！？」

華雄が戸惑いながら質問を返す。

「推測だ。そいつらはどんな奴だ？」

一刀は華雄に更に詳しい情報を求める。

「方術師と、体術の達人、それに……魔物を操るコトの出来る化け物だ。」

華雄は悔しそうに言う。恐らく、人質の為に抵抗する機会もなかったのだろう。

「ソードダンサーに、精霊が二人つて可能性が高いな。」

一刀が嘆きながら言う。現状は思わしくは無い物だった。魔物に手を貸す精霊は恐らくこの世界を壊そうとしている。また、それには一刀の存在は邪魔なのだろう。だから今、一刀を殺す為にこの戦が行われているのである。

その状況は愛紗も朱里も鈴々も感ずいたのか、少し落胆した表示を見せる。

「後は考えても始まらないな。洛陽では、周りに注意しながら董卓を探すしかない…か。」

「それしかありませんね。」

「なら、早くいかないと危ないのだ!」

「だな。ご主人様、早く軍を動かしましょう。」

三人は一刀を急かすが、一刀はそれを制する。

「待つて。話はまだ終わってないから。」

「えっ!」

三人は思わず声をあげた。

「華雄には、あの時の質問に答えて貰わないとな。」

そう。華雄には仲間になるかの話をしていたのだ。

「勿論。私は、北郷一刀の武勇に感銘を受けた。それに、命を拾われた恩もある。是非とも仲間して頂きたい。」

「決定だな。」

一刀は頷いた。愛紗達も、今の状態から言っても、反逆に会う理由はないだろうと否定はしなかった。

「呂布さんも仲間になって欲しいのだけれど……。」

一刀は呂布にも話を振ってみた。

「それは危険過ぎます!」

愛紗は呂布だけは駄目といわんばかりにツツコミを入れる。

「鈴々は賛成なのだ。呂布お姉ちゃんくらい強い人がいた方が安心なのだ。」

「確かに、部将不足は後々大きくなりますし。」

鈴々と朱里は賛成なようだった。

「……………、条件。」

呂布が真剣な目で一刀を見る。

「条件って仲間になる条件ってコト？」

「…（コクッ）。」

呂布は一度頷いた。

「分かった。言ってみて。」

「……………恋の家……………壊さない。」

恋とは、恐らく呂布の真名だろうか。呂布は話を続ける。

「家……………友達がいる……………。」

恋は下を向く。友達が急に心配になったのだろう。

「それなら大丈夫。また先陣やらされそうだしね。」

一刀はこれなら果たせそうだと頷く。

「……………もう一つ……………。」

呂布は話を続ける。

「……………お金が欲しい。」

「……………え？」

「な……………！？」

「……………はうあ！？」

「……………にやにや！？」

四人は驚く。当たり前だろう。呂布ほどの武人がいきなり金を要求するのだから。

「お、お金ってどのくらい欲しいんだ？」

「友達とご飯毎日食べれるくらい……………」。

呂布は顔一つ崩さない。

「友達って…何人いるんだ？」

「……………20匹……………」。

「ああ、友達って犬とかのコト？」

「……………（コクッ！）」

一刀は納得したようだった。いつの時代でも動物が好きな人はいるものだと思った。

「朱里、何とかなりそうか？」

一刀は期待しながら朱里の返事を待つ。

「それくらいでしたら大丈夫です」

朱里は笑顔で一刀に答える。

「分かった。呂布の条件をのむよ。これから宜しくな、呂布。」

「……………恋でいい。」

「そうか、じゃ恋。宜しくな。」

「……………（コクッ！）」

こうして、一刀に新しく仲間が出来た。一刀は彼女達の活躍にも期待しつつ、ソードダンサーのコトを考えていた……………。

（ソードダンサー……………。今度こそ倒してやる……………！）

第十五章：新契約（あらたなちぎり）（後書き）

大変申し訳ありません。実は入院していた訳ですが……その間に、
どという流れで書けばいいのか……自分でも解らなくなってしまう
た為、無期限の連載休止にします。大変申し訳ありません。復帰の
見通しはありませんが、いつかは簡潔させたいと心から思っていま
すので……。本当に申し訳ありません！

第十六章：嵐静前（あらしのまえのしずけさ）（前書き）

色々…小説や泣きゲー等を少し研究していた為に、更新がとんでもなく間延びしてしまいました。期待していた方々がもしいたとしたらば…大変申し訳ないコトをしました。これから研究しながらやっっていく為、更新時期が不安定になるかと思いますが、応援していただければ幸いです。では…久しぶりの為、また文が酷いとは思いますが、どうぞ>>

第十六章：嵐静前（あらしのまえのしずけさ）

「貴方が指図をする権限はありませんわ！ この連合軍の総大将として命令します。北郷一刀、貴方の軍勢で先陣を勤め、この戦に勝利を呼びなさい！」

いつの日にか聞いた言葉。いや、つい最近に聞いた言葉を受けながら、一刀は自陣に帰っていくのだった……。

【洛陽門前】

連合軍一行は、あれから休憩一つ無しに行軍を走らせていた。その為に、最期の戦にも関わらず、『それでもかつ！』と言いたくなるくらい士気が低かった。それも、あの高らかと声を上げるあの人が原因であるコトは明らかであつたが……。

「小娘達の軍がのんびり行軍をするお陰で、私達の軍の士気が下がってしまったではありませんか！」

袁紹は全く気付いていなかった！！

「貴方……正気で言ってるの？」

曹操が呆れた口調でツツコミを入れる。

「正気も何も事実ではありませんか？」

袁紹は当たり前とばかりの堂々とした声で反論した。この一言を聞いた瞬間、軍議に参加していた全ての人が呆れ、無言のまま帰っていった…。よって、北郷軍はまた袁紹の馬鹿に突き合わさせられるコトになってしまった。

【北郷軍陣地】

「ただいま…。」

一刀は沈んだ声で帰還を伝える。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お帰りなさいつ、ご主人様。」

「お帰りなさいなのだ！」

「…お帰り……なさい…。」

「ご主人様、ご苦労様です。」

それぞれが一刀を出迎えるが、何となく話の結果は見えているようだった。

「皆さん、前回のコトもありましたし、予想はついていたようです…。」

朱里が残念そうに話す。

「だが、先陣に立てた方が董卓を保護しやすすくないか？」

愛紗が口を挟む。

「いえ、もし私達の軍が自発的に先陣にでようとする形になれば、兵隊さんを借りるコトも出来たのですが、今の兵隊さんの人数も、疲労度も、かなり厳しい状態ですから…。」

朱里は心配そうに下を俯く。それを知ってか知らずか、一刀は朱里の頭を撫でながら、

「大丈夫だ。必ず倒して戻ってくるから…。」

と、声をかけていた。

「はうう…。」

朱里は、顔を真っ赤にしていた。それを見て、拗ねる者、くやしがる者、不思議そうに眺める者など、皆様々な反応を見せていた。

【洛陽】

晴れた空の向こう側は、黒い雲に覆われていた…。そんな曖昧な空を眺める、異様な者達は今、洛陽から敵を見ていた…。

「フッフッフ……。遂に現れたな！北郷一刀…。」

「いよいよですか…。貴方も楽しみですよね？」

「北郷…：タオス…：我が魔族…：世界ヲ…。」

洛陽の影に三人（？）の強者が肩を並べて連合軍の様子を見ていた。

黒い雨雲が被さる前に、袁紹は動き出した。それに伴い、本当の長い長い戦争が…。北郷一刀達の戦いが始まるコトになるなど、誰も知る余地も無かった…。

一刀は移動している最中、頭痛と共に、白昼夢を起こしていた。それは、彼の過去の抜けている記憶だった…。

（この戦いは…英雄達の最後の冒険…。最後の呪い…。最後の…。）

「はっ!!」

一刀は我に帰る。ふと左手に違和感を感じていた。

「熱いつ!」詳しく見ると、エクスファイアが赤く光っていたのだ。まるで、今の夢に共鳴しているかのよう…。

「これは、何か裏がありそうだな…。」

一刀は、起こりゆる沢山の可能性を考えながらも、移動の速度をあげていた。

一刻後、ついに洛陽での戦いが始まった…。だが、洛陽には兵の気配すら無かったのである…。

【洛陽門前】

「敵の策…と見る可きでしょうか?」

朱里が珍しく悩んでいる。確かに、人氣が全く無いのである。伏兵や工作など、畏の可能性はおおいに見られるのだ。

「鈴々は早く突撃したいのだ!」

「我が本気を早く、あの魔物達に見せ付けるのだ!」

考えの無い二人は既に駄々をこねはじめる。

「落ち着けて！二人とも、畏だったらどつするのさ。」

一刀は二人を宥めに入る。

「その時はその時なのだ！」

うんうん、と華雄も頷いている。

（そんなにいいわけあるか…。）

一刀は声にならないツツコミを入れながら、朱里と一緒に考える。

……。

……。

……。

……。

……。

何回考えても、同じだった。一刀以外に精霊にも、ソードダンサー

にも太刀打ち出来る人間はいなかった。つまり、一刀が一人、先見をすればよかった。しかし…。

（愛紗達が許してくれないよなあ。）

説得するのは難しいのだった。

「はあっ！？何を言っているのです!!」

「勿論駄目ですよ。」

「抜け駆けは狡いのだ!」

「そうだぞ、ご主人様。」

「……………一人……………危険。」

予想どおりと言えば予想どおりの結果となった。しかし、一刀は、甘い言葉を駆使して、何とか作戦の実行を認めて貰ったのだった。

（あんなコトをいうんじゃないかった…。）

一刀は、自分の行動を後悔していた。何故ならば…

「ご主人様あゝ」

「はう。」

「んにゃ。」

「ご主人様……。」

「……………（コクツ、コクツ。）」

北郷軍全体がものすごく桃色な空気になっていた！！

「本当に大丈夫ですか……。」

一刀の親衛隊の隊長が、気まずい様子で声を掛けて来た。

「大丈夫だろ……多分。」

一刀も別の問題を作ってしまったとはいえ、余り気にもしていらなかった。いよいよ屍地、洛陽の場内へ飛び込むのだ。

こうして、不安要素たっぷりのまま一刀は一人で場内へ侵入していた。因みに、桃色空気になるのを防ぐべく、愛紗達には挨拶無しで向かっていった……。

（見送り無しってのも、寂しいなあ…。）

そう思いながらも、一刀は既に門の目の前へ到着していた。そこで、
おかしいコトに気付く。

（門が閉まっていらない…？）

門には、木を横にしたりして、鍵のようなモノを使い閉めるのだが、
それらしき物が、隙間から見る限りでは見当たらなかった。

「開けるしか、ないよなあ？」

一刀は、畏の可能性を考えていたが、それを踏まえて一人で来たコ
トを思い出し、『すうつ。ふう。』と一呼吸した後、素早く門を
開けた。

（誰もいないな…。）

門を開けても誰もいなかった。魔物の気配すらしていなかった…。

（怪しいがしょうがない…。行くか。）

一刀は、近くに来た親衛隊に、『先に行く、皆は恋の家の確保を先
にするように』とだけ伝えて、奥へと進んだ…。

【洛陽門前】

不吉な雲を洛陽を包み混んでいる。まだ昼頃にも関わらず薄暗く、いかにも不吉な空気を作りだしていた……。そんな中、北郷軍は愛紗を先頭に、城の中へと急いでいた。

「恋、道はどういけばいい!?」

「……………右……。」

いつにもなく、愛紗は焦り気味だった。恋は…言わなくても判るくらいマイペースだ。

「……………左……。」

「……………まっすぐ……。」

「次はどっちだ!？」

愛紗は目の前の屋敷に見向きもせずに聞いていた。

「……………うう……………恋の家。」

恋は指で目の前の建物を指した。

「なっ……………」

「大きいのだーっ!！」

愛紗は呆気に取られ、鈴々は大きい屋敷のような家を目の前にしてはしゃいでいた。

数分後、無事に恋の家と恋の家族（動物達）の保護が完了した…とはいっても、ただ動物達を探ただけだが。

しかし、愛紗達は未だ気付いてはいなかった……

「ガルルルッ!!」

「ガウウウウウ!!」

既に恋の家は魔物に囲まれていたのだった……。

その頃……一刀は城下町をどんどん奥へと進んでいった。一刀はソー
ドダンサーの気配を既と感じとっていた。その感だけを頼りに進ん
でいった。

……。

……。

.....。

.....。

.....。

一刻後。

一刀は比較的広い広場に辿りついていて、周囲には何も無く、物音一つしていないかのようだった…。

「いるんだろ！？出てこい！！」

一刀は力いっぱい叫んだ。刹那、一刀から10メートル離れた場所に闇色の影が突如現れた…。

「やっぱりお前か……。ソードダンサー…っ！！」

続く。

第十六章：嵐静前（あらしのまえのしずけさ）（後書き）

因みに……KEYの作品を中心に研究していました。数々の感動作品を魅せてくれました……。私もいつか、そんな名作が書けたらいいなと思っています。

第十七章・洛陽三面策（らくようさんめんさく）（前書き）

いよいよ洛陽の戦いです…とはいっても余り長くはならないです
けど（汗）

第十七章：洛陽三面策（らくよつさんめんさく）

【広場】

静かに空気が流れる…。

ソードダンサーと北郷一刀が向かい合っている。互いに隙などは無く、ただ睨み合っていた…。

「ホンゴウ…ワレノジャマスル…。コノセカイデモ…ジャマスル力…。」

「何処の世界でも関係無い！俺はただ、無駄な悲しみを作らない為に生きているだけだ！！」

自分の里を。故郷を、そして…大切な人を失った一刀は、その悲しみを誰よりも知っていた。故にその現況を作った張本人であるソードダンサーに対する殺意は並大抵なものではなかった…。

一方、ソードダンサーも、幾度も作戦を邪魔する一刀を憎んでいた。

更に冷たい風が二人を包み込む。そして…凍結しかけていた二人だった。
が。

シャキッ！！

サササササッ！

剣を構え……一呼吸した後に、

ダッ！

「うおおおおおお！！」

一刀が、先手を打つコトで、闘いが始まった……。

『瞬迅剣！』

「……………ッ！！」

一刀は素早い突きでソードダンサーに迫っていた。ソードダンサーも久々の一刀の素早さに少し戸惑ったのか、声にならない声をあげていた。

「グオオオオオ!!」

しかし、ソードダンサーは華麗に一刀の剣を避けると、六本の剣を巧みに使い反撃をする。

ビュンッ!

ビュンッ!

ビュンッ!

ビュンッ!

ビュンッ!

ビュンッ!

素早い連撃が一刀を襲う。しかし、一刀もこれを難無く避けていた。

ササッ！

互いに間合いを取り、また呼吸を整えると、今度はソードダンサーから仕掛けて来た。

「……………」。

ソードダンサーが念を込めると、ソードダンサーのめのまえに無数の剣が現れる。そして、

ビシッッッ！

その矛先が一斉に一刀へ向く。ソードダンサーが念を更に込めると……剣は一斉に一刀に襲い掛かった。

「くそっ！」

『閃空裂破！』

ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！

回転しながら剣を弾き返す。しかし、全てを弾き返すには足りなか

った。一刀に更に剣が襲い掛かる。

『裂斬風！』

ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！ガキンツ！

……

今度は縦に回転し、残りの剣を全て叩き落とした。しかし、閃空裂破で浮いた所から裂斬風をした為に、一刀に隙が出来ていた。無論、この機会を見逃すソードダンサーでは無かった。

「グオオオオオ！！」

ソードダンサーは瞬間移動で一刀の裏へ周り込み……一刀の背後を目掛けて六本の剣が振り下ろされた。

【恋の家】

既に、恋の家に魔物が侵入していた。魔物達は裏庭と正面の門から侵入している。そこで、愛紗と恋が正面門、鈴々と華雄が裏庭へ向

かっていた。因みに組み合わせは朱里が考案したものだ。

【裏庭】

裏庭には、ベアやウルフが大量にいた。華雄は初めて戦う為、少しだけ緊張しているようだった。

「うおおおおー!!」

ガシッ!

鋭い一降りでウルフを真つ二つにする。直ぐ様襲い掛かる魔物にも一閃一閃振り下ろしていく。

一方鈴々は、常に間合いを常に取りついていた。未知数の魔物が、どんな攻撃をしてきても避けれるようにする為…と、一刀が事前に教えていたからだ。そして鈴々は、魔物とはかなりの回数戦っている為に、慣れているのだろう。

「うりゃうりゃうりゃ〜！」

ザシュッ！

ザシュッ！

その一撃は確実に魔物を捕らえていた。

【正門】

正門には、スライムが大量に出現していた。

「なんだ！こいつらは！？」

愛紗は驚きを隠せないように言う。無理もない。愛紗は初めて見る謎の物体なのだ。

「……………前も来た…。」

恋は一度スライムと戦ったコトはあるようだった。見てもそこまで驚くコトも無く、得物を構えた。

愛紗も恋に負けんとする勢いで得物を構えた。そして、標的のスライムを決め……………突撃した。

「てりやああああ!!」

ザシュツ! ザシュツ!

愛紗はスライムを切り刻む。スライムは完全にちぎれた。しかし…

ぐにゃぐにゃ…………

切れたスライムは直ぐにくつつき、元の形に戻る。刹那、スライムは槍の形に変形し、愛紗に襲い掛かる。

「くっ!!」

ガキンツ!

スライムは固体化していた為、槍は鋭く、金属音を響かせた。

「……………適当に斬っては駄目……………」

そんな愛紗を見て恋が口を開く。

「……………目と目の間……………ふんっ！」

恋は素早くスライムに向かって走ると、スライムの目のような部分の間…つまり眉間と思われる位置を一突した。

グチョッ…

するとスライムは奇妙な音を立てて土へ還っていった……………。土に還るものだろうか？

「……………次、愛紗……………」

「お、応っ！」

「せりゃあああああ！！！」

グチヨツ…

愛紗も恋のように眉間を狙い一突した。するとスライムは死んでいた。

「なるほど。流石は天下無双と名高い恋だな……。」

愛紗は感心していた。自分一人では確実に解決しなかったのであるからだ。しかし、それと同時に泣いていた。魔物一匹相手ですら苦勞して、我が主の一の家臣と言えようか…。むしろ、恋の方が…とさえ考えていた。

「……………愛紗、凄い。」

恋がいきなり愛紗声を掛けた。

「ひゃあ！？つてれ、恋！いきなり何用だ！？」

恋のコトを考えている時に恋に話し掛けられた為、愛紗は慌てた。

「……一回で倒せた……。」

恋は前にスライムと戦った時、スライムの弱点に気付いてからそこに当てるのに、何発も攻撃していた。故の一言だった。

「なに、恋の方が凄いではないか。何せ、私に指導出来る位だからな。」

そして、恋と愛紗は向かい会い微笑んだ。そして直ぐに180度向きを変えていた。スライムが愛紗と恋を囲んでいたのだ。

「背中……。」

「分かっている。私の背中も預けるぞ？」

「……………（コクッコクッ！）」

そして、二人は魔物が相手でも惜しみ無く舞い始めた……………。

【広場】

一刀は地に倒れていた。反射的に剣で攻撃を防いだのだが、空中では波動までは抑え切るコトが出来ずに吹っ飛ばさせていた。

「くそっ……………」

と、一刀はうめき声をあげながらも、咏唱を開始していた。

《輝く御名の元、地を這う穢れし魂に、裁きの光を雨と降らせん。
安息に眠れ、罪深き者よ》

『ジャッジメント！』

無数の聖なる光が天から広場に降り注ぐ。流石のソードダンサーも避け切れなかった。

「グオオオオオ……………」

ソードダンサーはうめき声をあげる。その隙に体制を整え、更に追い撃ちを掛ける。

「光よ！！」

『フォトン！』

聖なる光がソードダンサーを包み、縛り上げて攻撃する。

ソードダンサーが動けない内に距離を縮め、一気に勝負を決めにいく。

「これでトドメだああ!!」

『火炎裂空!!』

一刀は火炎車の如く突進した。その勢いは空気を裂き、闇を砕くには充分だった。

「グオオオオオ!!」

これで、ソードダンサーを倒したかと思われた。しかし……一刀の攻撃が当たる直前にソードダンサーが消えていた。代わりに少年が一刀の前に突っ立っていた……。

「これ以上俺の邪魔をするなら……お前を殺す……っ!」

『発!』

少年はいきなり一刀に向かって一撃を加えた。一刀はいきなりのコトで少し混乱した為、その一撃をモロに喰らってしまった。

「うっっ…………。ぐっ!」

一刀はその場で立つのでも精一杯だった。不意打ちに彼の威力が重なり、相当なダメージになっていた。

少年の目は鋭く、殺意以外は何も感じられない位恐ろしく…………危険だった…………。

第十七章：洛陽三面策（らくようさんめんさく）（後書き）

恋と愛紗の関係は原作より少し変わっています。愛紗は一刀の存在により、自分が1番の武を持っているという概念を捨てている為、余り恋に刺々しくはならないのでは？という想像を勝手に作りました。では、次回。次回の更新は…土日中に出来ればいいかなあ…。

第十八章：個々之志（じじのじじろせし）（前書き）

前話の戦いの続きです。では、どうぞ。

第十八章：個々之志（このころ）

【洛陽門付近】

連合軍は、北郷軍が突入してから突如現れた魔物の群れにより、進軍するコトは困難を窮めていた。

「な、なんなんですよ!？」

袁紹は現れた魔物に慌てていた。

「まあまあ、倒しちゃえばいいじゃん。」

「猪々子、言うのは簡単だけど……」

ガウルルルル!!

「きゃあ!？」

魔物の声を聞いた顔良は驚いて声をあげてしまう。

「ふーん。斗詩…さては怖いんだろー!？」

文醜はニヤリと斗詩を見る。斗詩は諦めたような顔で

「はあ…。そりゃ怖いよお。だって、あんなの見たことないし…」。
ため息を交えながら嘆いた。

「そんなもーん、私達で二人で力を合わせれば大丈夫だっての!」

文醜は力強く顔良を説得していた。

「お二人がそうおっしゃるなら、前衛は任せましたわよ!」

袁紹はここぞとばかりに指示を出す。

「了解!」

「えう…」。

顔良は涙目になりながらも文醜に連れられて前衛へ向かった…。

他の曹操と孫権の軍は相変わらず様子見を続けていたのは言いつまでもない。

そんな時、曇り空の洛陽の中心に光が落下した。

ドドドドドドドドドドッ！

眩しい光に鋭い音。これは一刀が放ったジャツジメントの光なのだが…

【曹操軍陣地】

「いまのって…魔物の繰り出す妖術かしら…？」

曹操はいつにも増して、怯えた表情で夏侯淵に聞いていた。

「その可能性は高そうです。」

夏侯淵は平然と答えた。

「ということは、秋蘭は別の何かが起こしていると言っても言うのかしら？」

曹操はいつもより、少しだけ不機嫌そうに聞いていた。

「御意。私は、あの北郷一刀という男が引き起こしたものと…。」

「あの男が？」

曹操は更に不機嫌そうに聞いてくる。

曹操もその可能性は考えていたのだろう。しかし、それは余りにも普通の人間の出来る能力を越えていた。しかし、北郷一刀は異なる世界の人間（正確には少しだけエルフの血が混じっているが）である。もしそれが事実なら、この先自分達が一刀を倒すコトが出来るのか…。それが不安で曹操は苛立っていた。

夏侯淵はその曹操の考えに気付いたからか、

「あの男は私が射り倒します。」

と、力強く曹操に言い放った。

「そうね…。少し混乱してたわ。ありがとう、秋蘭。」

そうして曹操と夏侯淵はキスをした…。

「孫権軍陣地」

「あの光は……っ！」

孫権は目を疑うようにその光った場所を見ていた。雷とは少し違う。しかも無数に落下した細い光。しかし雷の何倍もの威力があるコトだけは解っていた。

「蓮華様、今は今すべきコトに集中しましょう！魔物のコトで惑わされてはいけません！」

一人の少女が力いっぱい叫んだ。その名は甘寧。孫権ともっとも信頼関係の深い将である。

「そ、そうね。あの光一つで弱気になっていたら、王として情けない。ありがとう、思春。」

孫権は再び洛陽を見つめていた。その目に怯えた様子は無く、ただ力いっぱいに洛陽を、魔物を睨んでいた。

【裏庭】

ザシユッ！

一閃、また一閃と魔物を切り刻む華雄と鈴々。その数は明らかに減っていた。

「ぐ。」

「姉ちゃん頑張るのだ！後少しなのだ！」

鈴々は華雄を励ましながらも更に魔物を倒していく。

その時だった。空中から何かが落ちて来る。

「にやにや！？」

鈴々は反射的に後方へ下がる。そして、その場所には……

「ギョオオオオオ！」

イエティが落ちて来た。イエティは直ぐさま鈴々に向かって何処から持って来たのか解らないようなデカイ石を転がして来た。

「んにゃ!？」

鈴々はいきなりのコトに対応出来ずに石に弾き飛ばされた。

「このっ……。」

後ろに下がっていた華雄はイエティとの間合いを詰めようとする。
しかし…

『フリーズランサー』

無数の氷のつぶてが華雄を襲う。

「うがああああ!！」

華雄の体のあちこちが切れる。切れた場所は赤い血で滲み始めた。

「っ、強いのだ…。でも、お兄ちゃんと比べたらまだまだなのだ!」

鈴々はいエティに突撃する。いエティは咏唱を開始していたが、鈴々の方が少しだけ早かった。

「思いついたのだ!!」

『風迅剣!』

速キコト風ノ如ク…鈴々は疾風の速さでいエティを突き飛ばす。

「グオオオオオ…」

いエティはもがき、苦しみながら起き上がる。しかし、無理に起き上がったのが運の尽きだった。

『獅子戦吼!』

鈴々はいつもの掛け声はかけずに素早くいエティにトドメを刺した。

「グオ、グオオオオオ……。」

いエティはうめき声をあげながら散っていった…。

「流石は燕人張飛…か。くっ！」

華雄は鈴々を褒めていたが、傷が思った以上に痛むのか、うめき声を出してしまふ。

「鈴々は愛紗達の様子を見てくるから、姉ちゃんは朱里と一緒に動物の世話をしているのだ！」

鈴々は明るく、目は真剣に言い放った。

「解った…。気をつけて。」

華雄は気遣いに感謝し一礼して、鈴々の前から去った。

鈴々は、華雄のコトが好きだった。何故なら唯一自分を子供扱いせず…常に一人の将として見てくれているから……。

【正門】

グシャッ！

グシャッ！

正門では愛紗と恋が戦っていた為、残りは50匹位になっていた。

「……………もう少し。」

「ああ！後少し、一気に行くぞ！」

「……………（コクッ！）」

再び構える……………が、そこで二人はスライムの異変に気付く。スライム達が奇妙な動きを見せていた。

「……………??」

「なっ、なんなんだ!？」

二人は疑問を抱きながらもただ構えていた。

すると、スライムは二手に別れて、ピラミッドを作った。そして………

ボワンッ!!

「……………!?!」

「なっ……………!」

二人は同時に驚いていた。何故なら…スライムが合体を始めたのだから。

「余談だが、冠を被っている青色とは全く関係は無い。それだけは断言しておこう!」

合体した巨大なスライム二匹は、愛紗と恋をそれぞれを襲う。

ビュンッ!ビュンッ!

二人はそれを避けると間合いを取っていた。

「一人一体の相手は難しい。二人で一体を集中して狙うぞ!」

「……………（コクッコクッ!）」

恋は強く頷くと、一体のスライムの裏へ素早く回り込む。そして、二人で同時に攻撃をしかける。

「ふんっ!!」

「てりやああああ!!」

ブンッ!

グシャッ!!

二人の攻撃がスライムの急所を捕える!

スライムはその場で屍となった…。しかし、もう一匹のスライムが愛紗を目掛けて攻撃を仕掛けた。しかし、愛紗は全く気付いていない。

「……………危ないっ……………」

それにいち早く気付いていた恋は愛紗を庇いに入った。そして……

グシャッ!

硬化したスライムの鋭く尖らせた手が恋の体を貫通する。

「……………ぐうっ!!」

恋はうめき声をあげた。愛紗は一瞬何が起こったのか解らなかったが、直ぐに状態に気付くと崩れ落ちそうな恋の体を抱き抱えた。

「恋っ！恋っ！」

愛紗は泣き叫びながら自分を庇って傷を負った仲間の名前を呼ぶ。

しかし、スライムはその状況を好機とばかりに再び攻撃を仕掛ける。しかし、愛紗は恋を抱き抱えたまま攻撃を避ける。そして、近くの兵士達に恋を預けると一呼吸した。

「貴様…よくも恋を…っ！」

愛紗は怒りで場を支配していた。スライムも流石に威圧感を感じていた。

愛紗はスライムに近づくと、そのまま勢いよく攻撃した。

『崩襲撃！』

グシャツ！

愛紗の鋭い攻撃にはかなりの重みがあった。しかも、そのスイングスピードはとても人間とは思えないものだった。勿論、そんな攻撃にスライムは耐えるコトも出来ずに死んだ。

しかし、愛紗はその場で膝をついていた。自分の気の緩みが原因で仲間が傷ついたコト…。愛紗がそんな自分自身を許せる訳も無く、目には涙さえ浮かべていた。

「恋姉ちゃん、意識あつたから大丈夫なのだ！！」

「りっ、り、鈴々！？」

不意に義妹の声が聞こえた為、愛紗は慌てていた。情けない姿を見られた…。そう思っていた。

「大体、恋姉ちゃんは強いから心配ないのだ。それより、早くお兄ちゃんを捜すのだ!!」

「ああ、つてちょ、鈴々!？」

鈴々は愛紗の手を強引に引っ張って歩きだした。こうして一刀を捜しに向かったのである…。

【広場】

ブンッ!

ブンッ!

ブンッ!

一刀と少年は互いに攻撃しては避けて…を繰り返していた。

「チッ! いい加減に当たればいいものを!」

少年は仕方ないとばかりに後方に合図を送っていた。

（もう一人いる……！？）

一刀はふと気付いたが…少し遅かった。

「水の力を食らうがいいでしょう！」

『スプレッド』

一刀のいた地面から水が噴き出してくる。

「うぐっ…！」

そして、空中で野放しにされたと思うと、直ぐに別の術が来た。

「次は風ですよ…。」

『エアスラスト』

ザシュッザシュッ！

一刀に無数の風の刃が一刀を襲う!!

「ぐはっ……!!」

一刀の周りには生々しい血が零れ落ちる。

「まだ終わりませんよ……。」

『グレイブ』

地面から尖った石が現れ……落ちて来る一刀を狙い延びて来る。

グシャッ!!

「ああああああ!!」

更に激しく赤く染まる広場の一点。そして岩は豪快に一刀の体から離れる。一刀は衝撃でまた空中に飛ばされた。

「トドメですよ……左慈。」

後方で術を咏唱していた男はその少年の名を呼びあげる。

「解ってるさ、于吉！これで終わらせてやる…何もかも！！」

『天崩流』

左慈の鋭い一撃が一刀に直撃した……。

「ぐああああああ……。」

ドスッ！

血が、倒れた一刀を囲む。一刀は立ち上がるコトも出来ず、意識は段々と遠退いていった……。

【洛陽】

愛紗と鈴々は走って広場を探していた。二人はもの凄く嫌な予感を感じていた。我等が主のピンチだと……。

第十八章：個々之志（このころざし）（後書き）

不安なウンディーネです（^-^；　　なんか、この展開でいいの
だろうか？ってなるんですよね：常にですけど（苦笑）　ま、そん
なプレッシャーにも負けずにウンディーネくおりてーでこれからも
頑張っていくますよ？では、次回へ。

第十九章：天御使暴走（てんのみつかいのぼつそう）（前書き）

洛陽の戦い終結へ！一刀の運命はいかに…。

第十九章：天御使暴走（てんのみつかいのぼうそう）

いつから雨が降り始めていたのだろうか……。きっと今降り始めたのだろう。しかし、降り始めにしてはかなり激しく……。冷たい雨である。

【広場】

愛紗と鈴々は絶句した……。目の前にあるのは誰が見ても屍にしか見えない主の姿。そして勝ち誇っている二人の少年の姿だった。

「ご主人……様？」

「おにい……ちゃん？」

二人は身動き一つせずに倒れている赤い人間を見て思わず膝をつく。そして……二人は一際大きな声で泣き出した……。

【一刀の夢の中】

此処は何処だろうか…。ああ、俺はあいつらに殺されたのか…。

一刀は痛みを感じない体を察してそう思った。ここは何も無い、暗闇の世界…。

暫く沈黙は続いていた。しかし、思わぬ声が聞こえてくる。

「う、ご主……人様……っ！」

「おにいちゃん……っ！」

それは一緒に生活して来た仲間の声。その声は一刀を呼んでいた…。

「いかないとな…。」

しかし、方法が無いコトに気付く。此処は……

……あなたはまだ死んではないですよ……

「誰だ!？」

何処からともなく声がする

声の発生源はすぐに分かった。それはこの石……エクスフィアだった。

……此処は……あなたの夢の中……。私の……エクスフィアの力を最大に使える、きっと……

「そ、そうなのか。」

とりあえず、自分が死んでいないコトにホッとする一刀。

……しかし、それはとても危険なのです……。あなたにも、あなたの周りにいる人にも……

一刀は意味が理解出来なideいた。

「それは、どついうコトなんだ？」

……あなたの精神が耐えられるか……私には分からないのです……

「精神が…か。」

確かに、精神異常を起こして暴走してしまえば…それまでだ。きっと町は破壊され、何万の人が死ぬだろう。しかし……

……………この世界を救う術はこれしかないのです……………

この世界を救う…。一刀には理解出来ないコトが多かった。しかし、自分が此処で立ち上がらなければ、世界が終わる…。そんな気がしていた。

「分かった！エクスフィアの力を最大に引き出してくれっ！」

一刀は先の不安はあったが…今は悲しんでいる人達の為に起き上がるコトを優先した。

……… 分かりました。が、くれぐれも気をつけて………

そう言われた刹那、一刀のエクスフィアが赤く光出した。そして一刀の体内にその力が覚醒する。

段々と自我が薄れる中、一刀はふと疑問を投げかけた。

「あなたの名前は…？」

……… 私の名は、アンナ………

「アンナ…さん………」

そして、一刀が覚醒した時、一刀の精神は異常を起こし始める。

「うぐうああっ…！」

段々と意識が遠退いていき……一刀は気を、正気を失った。

……どうか、この苦しみを乗り越えますように。一刀…あなたは一人ではないから……

アンの声は一刀には届かなかった。そして一刀は夢から覚めていった…。

【広場】

「さて…于吉、帰るか。」

「そうで……………」

「ちょっとまちな！」

二人の少年が去ろうかという時に何処からか声がする。

「まだ生きてい…………ぐっ！」

『紅蓮剣！』

一刀は素早く起き上がると、音が聞こえた瞬間には左慈の目の前で素早く渾身の力を籠めた炎の突きを繰り出す。

「うぐっ！」

一刀の攻撃はかすりはしたが、左慈を捕らえるには至らなかった。左慈は大きく間合いを取ると、自分の傷を押さえながら呼吸を整えた。

「なんだ？その程度か！」

一刀はそう言いながら、日本の剣でカチャカチャと金属音を立てながら左慈に近付く。一刀の身体は傷だらけで、あちこちから血が滲み出ているのにも関わらず、まるで無傷のような顔色でいた。

「あいつ…性格が変わってるぞ…、于吉！」

「わかりました…トドメを私がしましょう。」

『フリーズランサー』

無数の氷のつぶてが一刀を襲う。

「ご主人様っ！！」

愛紗が叫ぶ。辺りには氷の粒と砂煙がけた漂う。

『フォースフィールド！』

フリーズランサーは一刀の出した透明な壁に全て掻き消される。

「なにつ……！」

ア然とする于吉。左慈も驚いた様子を隠すコトも出来ずにいた。

「なんだ？その程度か！？」

一刀はそう言い放つと剣に黒い球体を作り、その球にエネルギーを込めていく…。

ゴオオオオオオ……

広場中の小石が何かの力によって宙に浮く。小石は宙に舞い上がりながらも、奇妙に揺れている。まるで、不吉なコトしか起きない未来しか想像出来ぬ様に……。

「フフフ……。」

不意に一刀が笑い出す。そして左慈と于吉を睨みつける。その眼は、まるで兎のように赤黒く光っていた……。

「違う……。」

この一部始終を見ていた愛紗は、恐れながらも口を開いて呟いた。

「確かに、いつものお兄ちゃんはあるコト言わないのだ。今のお兄ちゃんは怖いのだ……。」

鈴々も愛紗の言葉にどう意見だった。

「まさか…この技は!？」

于吉が、まるで何かに気付いた様に声をあげる。

「于吉!なんか知ってるのか!？」

「説明は後です!今は逃げましょう!?!でないと…死にます。」

いつもなら反発する左慈であったが、今のただならぬ空気に『反発』という手段は掻き消されていた。

「わかった。ずらかるぞ!?!」

左慈と于吉はテレポートの準備を急ぐ。

「逃がすかよ!?!」

《はーはっはっは!闇に吞まれる!?!》

『アイン・ソフ・アウル!』

一刀は黒い球体を前に薙ぎ払う。すると、それがビームの様に発射される。

「間に合って下さい…。」

「ちっ！なんて力だ…。」

ゴオオオオオオ！！

……。

黒い何かは二人と共に、夜空へと消え去った。

「……………」

一刀は何かを呟くと、愛紗と鈴々の方を見る。赤い眼の戦神には、既に誰もが敵にしか見えていなかった。

「そんな……………」

「お兄ちゃん……………」

自分達にかけられている殺気に二人は足を震わせていた。

「おまえらも、よっぽど死にたいようだな!!」

一刀はまたアイン・ソフ・アウルを放つ為に力を溜める。

ゴオオオオオオオ……

一度行った為か、先程よりは溜めるのにてこずっていた。

「愛紗…。あれ！？姉者？」

鈴々は声を震わせながら愛紗に話しかけたが、隣には愛紗は居なく、愛紗の得物だけが置いてあった…………。

（私は何をしているのだろうか…。武器も持たないで走って…。）

愛紗は涙を流しながら、一刀の元へ走ってゆく。

（今のご主人様には…。私の声は届かないのだ…………。そんなコトは分かっている…。分かっているのに！！）

更にスピードを上げて愛紗は一刀の元へと急ぐ。

（やっぱり、私はご主人様のコトが…………。）

愛紗はふと、今までの経路を思い出す…。

（占い師の予言の場所へ半信半疑で向かった場所。そこで私は一刀様に出会った…。一刀様は半分の怒りと半分の罪悪感で戦っている…。）

（私達を家臣と扱うコトを決めても、私達をまるでただの友のように…接してくださって…本当は戦争が誰よりも嫌いなハズなのに先頭にたって…。）

（私達を命掛けで護ってくださって…私達を愛してくださって…。それで…。それで…。）

「私も愛していました！ご主人様っ！！」

『アイン・オ……』

一刀は放つコトが出来なかった。愛紗が一刀に抱き着き、押し倒した。一刀は傷の痛みの責か、殺気の持たない愛紗の接近に気付かなかった。

剣を落とした為、黒い球体は完全に消えていた。

「て、てめえ……………っ。」

「ご主人様っ！」

チュツ……………。

「な、何をす……………」

一刀が怒りに声を上げるが、愛紗はもう一度キスをする、あの時の様に……………名を名乗った。

「我が名は関羽。字は雲長。真名は愛紗。一刀様の左腕であり、一刀様を心から愛している愛紗です……………。一刀様を……………一刀様を……………お迎えに来ましたっ……………！」

「俺はお前のコトなんかしら……」

……だから、私を女の子と軟弱な扱いをしないでください……

「しらな……」

……似合うハズがありません……

……決めつけなくてもいいんじゃない……

……いいえ。決まっています……

「だからっ……」

……ご主人様が鈴々と私を導くのです……

「俺は、お前なんか知らないっていつ……」

……はっ。申し遅れました。我が名は関羽。字は雲長。貴方様を、
天の御使い様をお迎えに来ました……

「はっ！！」

「じしゅ…………きゃっ！」

ドスッ！

一刀がいきなり立ち上がった為に愛紗は地面に落ちた。

「うぐああああ！？」

一刀は頭を抱えながら、独りで暴れた…。

「ご主人様…………？」

「俺は…………戦神…………仲間なんかいねえ…………。」

「一刀様は戦神ではありません。人間です。それに…………私達は仲間

ではありませんか。」

「仲間だと……………？俺に仲間が……………」

一刀は思い出す。

<独りで回っていた世界のコト>

<村の仇であるソードダンサーのコト>

<今の世界にたどり着いたコト>

<鈴々、朱里、恋、華雄、愛紗。最愛の仲間巡り逢えたコト>

「俺は……………。俺は……………。」

<そして、彼女達が大好きだったコト>

「うあああああああああああー!!」

【恋の家】

あれから少し時間が経過した。雨は止み、辺りは夕日色に染まっていた。

北郷軍の武将達は、一つの部屋に集まり泣いていた。

一刀の怪我はとてつもなく深く、酷い怪我だった。覚醒時は、あた

かも何でも無い怪我のようなそぶりではあったが、肉は深く裂け、出血も激しかった。手当てはしたものの…ここまでの怪我をしてしまうと、生きるか死ぬかは…運任せとなる。

「お兄ちゃん…このまま死んじゃうのかな……。」

鈴々が泣きながら、口を開く。

「鈴々、不謹慎なコトを言うな!!…ご主人様は…ご主人様は……きつと助かる。助かるのだから……。」

「ご主人様……死んじゃ嫌ですよ……ご主人様っ……。」

「ご主人様……きつと…生きる……。」

「んっ……。いじは……?」

一刀は目を開き、周りを見た。すると、最愛の彼女達が自分を見つめて、涙を流していた。

「ご主人様………やっぱり起きた…。よかった………」

「はわわ……。ご主人様…。よかったですう…。」

「お兄ちゃんが目を覚ましたのだ………」

「ご主人様………」

愛紗達は歡喜で胸がいつぱいになり泣いていた。

一刀は今までの経緯を振り返りながら、彼女達に言った。

「恋、朱里、鈴々、愛紗………みんな…ただいま!…」

第十九章：天御使暴走（てんのみつかいのぼうそう）（後書き）

次で第一部が終了する予定です。とはいっても特に区切りは無いですけど（笑） 後、華雄がいらないというツツコミは無しで願います。後ほど解るんで（＾－＾）；

第二十章：洛陽制圧（らくようせいあつ）

【市場】

此処は戦場洛陽の犠牲となった場所の一つ。辺りは魔物の血で汚れていた。そこを一台の馬車と、ウルフ三匹が通っていた。既に他の魔物はソードダンサーの退却と共に消えているのだが、このウルフ達は恐らく、別任務：乃ち、あの馬車に乗っているであろう人間を狙っているのである。

「ちょ、追いつかれるわよ!?!」

馬車に乗っている一人の少女：賈馱が声を上げる。

「す、すいません。しかし、これ以上は無理です!!」

「詠ちゃん、落ち着いて...」

もう一人の少女：董卓が、冷静さを失っている少女を宥める。

「月...でも、このままじゃ...」

ドスッ!!

「「キャッ!」!」

不意にウルフが背後から突進し、後輪が外れた。その勢いで馬車は倒れ込む。

「いたたたた…って!言ってる場合じゃないわ。早く逃げないと…。」

「ぐわああああ!」!

ガブツ。ガブ。ジュルルルルル……

馬車を走らせていた侍がウルフに喰われてしまった。

「もう駄目だわ…。」

「……………」

少女達は目の前の光景に絶望感を抱いていた…その時だった。

「てりやああああ!」

ザシュッ!

ザシュッ！

二人の少女を狙っていたウルフは突如現れた少女の攻撃を受けていきたえた。

「あんたは……。」

「華雄さん……。」

二人と華雄は面識があった。

「無事か、二人とも？」

「ええ、あんたのおかげで………って！華雄、後ろ後ろ！」

後ろから、もう一匹のウルフが華雄を目掛けて突進して来た。

「ふんっ！」

『獅子戦吼！』

ドンッ！！

魂の籠められた一撃にウルフは破裂したかのように消え失せた。

「あんだ…。そんなに強かったつけ？」

賈馱が華雄に思わず疑問をぶつける。

「今のは、鈴々…いや、張飛將軍の技を真似してみたただけだ。私も
案外、自画自賛過ぎる所さえ治せば、もっと強くなれるのかもな。」

華雄は自分で言っで自分で納得していた。

「つて、あなた…北郷に殺されたって聞いたけど…。」

「ああ、私は北郷に降った…………。」

華雄は少し下を向きながら……………これまでの経路を話し始めた。自分
が全く通用しなかったコト。北郷一刀が事情を全て知った上で戦
場に立っていたコト。恋も降っているコト。ソードダンサーや左慈
達を撃退する程彼らが強いコト。

「それで、私達をどうする訳なんですか…？」

董卓が不安げに聞く。

「勿論、ご主人様の元へ来て貰う。まだご主人様は目を覚ましてい
ないかも知れぬが、二人は必ず保護しなくてはいけない。」

最後に、辛かっただろう…。と華雄は付け加えて。道を案内した。

「……………」

「……………」

賈馱と董卓は、華雄に黙ってついていくのだった。

【洛陽門】

袁紹軍の人達はまたもやド肝を抜かれていた。謎の黒い物体が悍ましい音を立てて空へ向かっていった刹那、魔物が全員消えたのである。

「い、一体…なんだったのです…?」

「さっぱりわかんねーけど北郷の兄さんが、やつつけてくれたんじゃないの?」

「うう……。疲れたよ、猪々子……。」

袁紹軍はいつもの調子のまま、洛陽の中へと足を運んだ。

【曹操軍陣地】

「……………。終わったみたいね。」

曹操は少しため息混じりのような声を漏らす。

「そろそろ、姉者も戻って来る頃でしょう…お、見えて来ましたね。おーい、姉者ーっ!!」

夏侯淵は、洛陽で様子見に行っていた夏侯惇を見つけ、手を振っていた。

5分後。

「華淋様。北郷一刀はとんでもない武の使いでした…。」

そついいながら、曹操に北郷一刀が光を振り落としたコトは剣に炎を燈す技などを伝えた。

「……………。分かったわ。春蘭、下がりなさい。」

「はっ！」

そついいながら、夏侯惇は自分の部隊へ戻っていった。

「秋蘭も戻りなさい。」

「御意。どうか、深くは考えないようにしてください。」

夏侯淵はそう告げると、足速に自分の部隊へ戻っていった。

「北郷一刀…。天の御使いを名乗る漢…ね。」

曹操はしばらく一刀のコトを考えていたが秋蘭の言葉を思い出し、考えるコトを止めて洛陽の内部へ侵入の指示を出していた。

【孫権軍陣地】

周瑜は悩んでいた。北郷一刀の武を見てしまった私は、どう報告すればいいのかと…。

仮に、本当のコトを告げれば、戦になる前に降伏すると言い出すだろうし、隠すにも追い追い危険な状況になるコトは目に見えていた。

「北郷一刀…っ！」

周瑜は唇を強く噛み締めた。今はどうするべきか？やはり、士気を考えれば隠して置いた方がいいと判断した周瑜は、血が滲み出ている唇を必死に動かしながら、孫権にでたらめなコトを言っでごまかすのであった。後に沸き立つであろう北郷一刀の噂に惑わされない為に…。

【恋の家】

『ナース!!』

一刀は回復の術を唱えた。すると、一刀と周囲の將軍の傷は、ほぼ完全に消えていた。

「はう……。やっぱり、ご主人様の力は凄すぎます!」

「全くだ……。これだけの人数の傷を一瞬で治せるとは……流石は私達のご主人様だ。」

鈴々や恋も頷いている。

そんなやり取りをしている頃だった。

「ご主人様。賈馱と董卓を無事に保護しました。」

華雄が、二人の少女を連れて帰ってきた。

「華雄……。無事だったんだな。」

一刀は不意に起き上がると、少しふらつきながらも華雄の元へ近付いていった。

周りからは、まだ立っては駄目だと言う声がしているが、一刀は耳を借さなかった。ゆっくり華雄に近付くと、華雄の頭を撫でた。

「うむ…以外にこういうのも気持ちいいものだ…。」

華雄は少し顔を赤くしながらも、話を続けた。

「こっちの眼鏡が賈…」

華雄は不意に殺気を感じて話を止めた。一刀の後ろの3名が一刀を殺さんばかりの目つきで見っていた。

「じゅーじゅーじんーさーまあー??？」

「おーにいーちゃん??？」

「ぶんっー!!」

三人は誰がみても分かる位に嫉妬していた！！

「ああ、ごめんごめん。」

そう言うと、一刀は三人の頭を順番に撫でた。

「はうう…。」

「んにゃ…。」

「もう…。」

三人はとても気持ち良さそうにしていた。それを見ていてか、恋は

「……………私も…。」

と呟いた。

「分かってるよ。恋も、ありがとうな。」

一刀は恋の頭を撫でた。

「……………（コクッ）。」

撫でられた恋は照れ隠しなのか、首を一度振っていた。

「はあ……この軍はいつもこの調子なのかしら……？」

賈馱は呆れたように呟いた。

「でも、みんな楽しそう……。」

そういつて二人は一刀達を眺めていた。此処ならばきっと楽しく暮らしていける。そんな希望を持ちながら……。

10分後。

「それでは、お二人はご主人様の侍女になってもらいますね」

「はあ!？」

賈馱の希望はあつというまに崩れ落ちてしまった。彼女にとって見れば、今まで軍師だった人間がいきなり侍女をやるコトになったのである。絶望感を抱くのも無理も無い。

「でも、内政に絡むと存在がバレちゃいますから…二人の命の安全の為に、受け入れて欲しいのですが。」

朱里は必死に賈馱を説得していた。

「でも…」

賈馱はまだ何か言いたそうであつたが…

「私は…それでも構いません。生きて…罪を償わなくては いけませんから。」

董卓の一言で賈馱は嫌々ながらも反論すること無く承諾した。

一刀の新たな野望も知らずに……………。

「なんなのよ!!この侍女の服は!?!」

「詠ちゃん、この可愛いね…。」

二人が来ているのは他でも無いメイド服を来ている。そう、人はそ

れを『マニア向け』と呼…

「呼ぶな！！」

賈馱さんは天の声も届く程に怒っていた！！

「詠ちゃん、そんなに怒っちゃ駄目だよ。」

「でも……。この服…。」

「わ、私も初めて見ましたけど…その、二人とも似合ってますよ。」

「二人ともかわいいーのだ！」

「うん。二人とも似合ってるな。」

「詠…月…。可愛い…。」

朱里達によって、二人はメイド服を着るコトも承諾してくれた。董卓は、そこはかとなくノリノリだったコトは、余り触れないコトにするが…。

もう一人、色々な意味で納得していない人が一名いた。その名も『

関…。

「ご主人様、一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」

愛紗は完全に暴徒と化していた！！

いかにも怒っているような声の愛紗は、一刀に向かって静かな怒り（？）をぶつけていた。

「質問は想像付くけど、一応言ってみて…？」

「なんで…なんであるような服を常備しているのですか！？」

「えっと…。それはかなり長い話になるけど…」

「構いません。理由が知りたいだけですから。」

愛紗は更に冷たい目で一刀を見ていた。

「えつとですね…。元々は鈴々と朱里に着せようと思ったんですが…。」

「ほう、鈴々と朱里に？」

「前に行った服屋で、服の特注をしてただけで、それが…こっちに出発する日にわざわざ届けて貰ってて…」

一刀は愛紗の目をちらつと見る。顔色は全く変わらない。

「んで、親衛隊に、『しまっとけ』って命令したら、さりげなく服が俺の荷物に「シャキツ！」入ってたんだけど…」

一刀は虚言を並べていた。もし、鈴々と朱里に一日でも早く来て貰いたかった…などと言えば、即首を撥ねられてしまうだろう。

「話はそれだけですか。」

そういうと、愛紗はいつの間にか得物を持って構えていた。しかし、その目は少し滲んでいた。

「え！ちょ、愛紗さん？」

「そんな見苦しい言い訳を考える頭など、んっ……。」

愛紗は何かいいたげだったが、一刀がその唇を指で塞いだ。

「本当は愛紗も服が欲しいんじゃないの？」

一刀は、ずっと疑問だったコトを口にしながら、そっと指を離れた。

「でも、私には似合わないで…」

「似合わないって決めつけるなよ!!」

一刀はいつもより大きい声で叫んだ。

「……………」

愛紗は何も言わず、一刀の言葉を待った。

「愛紗は美人だし、可愛いし、きっと似合う服だってある。俺が保証するから。」

辺りの音は消え、いかにも、二人だけの世界と錯覚されるような空間が構成されていく。

「ご主人様…。」

「愛紗…。」

ギョルルルル…。

後一步で二人がキスするであろう時に鈴々のお腹がなった。

「あ、そろそろご飯にしませんか？董卓さんも賈馱さんもお疲れでしようし。」

「そうね。でも私達は侍女になったんだし、ご飯作るのを手伝うわ。」

「あつ、詠ちゃんは待ってて。私が手伝うから…。」

「な、なんでさ！？月〜。」

「……………仲良し……………」

「ああ。なんだかんだで皆仲良くやれそうだな。」

「り〜ん〜り〜ん〜？」

「わわわっ、愛紗が鬼になったのだ！？ごめんなさいなのだ〜。」

一刀の周りには気付けば誰もいなくなっていた。一刀はふと背中に手を当てる。そこは、本当は癒えていない傷口からの出血でドロドロしていた。

「ふう…。」

一刀はため息ながらに術を詠唱する。傷口を塞ぎながら、少し前の戦いを振り返る。この力を制御出来るようにもつと強くならなければ…そう思いながら、裏庭へ出てみる。明るい星達が、一刀を照らしていた…。

いままでも、そして、これからも。

董卓の件は、魔物に食べられて死亡したコトで話を片付けられた。
勿論、本人達は一刀達と一緒にいるが。そして一刀達は、新たな仲間達と共に啄県に帰還した。

第二十章：洛陽制圧（らくようせいあつ）（後書き）

また、各キャラのパートへ移ります。全員は、書けるかな…？なるべく多くの人数を書きます！！では、次回！

Memory 編：血濡偽過去（ちぬられしいつわりのかこ）

「ふう…。」

洛陽から啄県に戻って来てから三日が経過した。今までの遠征で溜まった書類も大まか片付いた頃、一刀は気分転換に森の奥へと向かった。

【森】

此処は、普段なら誰も出入りしない場所。昼も夜も賊が出る。しかし、一刀にはそのようなコトは関係が無かった。そして、近くにたまたま見付けた湖に足だけ入れる…。前の世界での思い出に浸っていた。既に夕焼けになった空を眺めて…。

【イセリア】

やっと物心がついた頃。

既に親はいなかったボクは、遠いおじいちゃんに値するセイジさんのいるイセリアに預けられていた。

……僕はジーニアス、よろしくね。……

当時の記憶がゆっくりと脳裏に浮かんでくる。

因みに、セイジさんは姉のリフィルさんと弟のジーニアスさんのコトだ。

少しかけ血が繋がっていた。エルフと多少の繋がりを持っているボクは、術が使えた。

最初は『ファイアーボール』が使え、怪我した時に『ファーストエイド』が使え、『ファイアーボール』での悪戯で家が燃えそうになっってしまった時に『アクアエッジ』を覚えた。

すぐに術を覚えたボクを、ジーニアスさんとリフィルさんは『私（僕）達いじょうの天才』と言ってくれていた。

……ほんと、すごいよね！……

……私も、流石に驚いたわ。……

そんなジーニアスさんとリフィルさんは、ある理由でエルフの森で生活しなければ行けなくなった。ボクを連れて来ては行けない事情があったらしく、ボクは置いて行かれた。ただ、何かあったら『ミズホの里』へ行くんだ。それだけ言われた。

……絶対帰って来るから……

まだ6歳の少年には、ミズホの里が何処なのか？勿論分かるハズも無かった。

ジーニアスさん達が居なくなってから、自分がエルフの血を引いているコトが原因でボクはイジメにあった。でも、ボクにはジーニアスさん達がいる。そう思っていたから、その時は良かった。

……やゝい！ハーフエルフ！！……

……イセリア人はハーフエルフは嫌いなんだい！！……

……（ボクは、何もしてないのに……。）……

数カ月経つても、二人は帰って来なかった。そんな中、俺は家の中を探索していると、貴重品箱みたいな箱を見付けた。その中には、綺麗な宝石が仕舞われていた。それを俺はポケットに閉まってみた……そんな時だった。

「大変だ！！魔物が村に襲って来たぞ！！」

不意に外が慌ただしくなった。それに、

（魔物……………？）

かつての記憶。自分が余りにも小さいが為に記憶されていない記憶。能に無くても、身体はハッキリと覚えていた。ボクの、ボクの親は…

「お父さんとお母さんの仇！」

ボクは、家の中にあつたジーニアスさんの友達であつて僕のまた、ひいおじいちゃんであるロイドさんの形見の双剣を持って外へ飛び出していた。

外へ出る。周りの家は燃えていた。逃げゆく人々も、魔物に次々と殺されていった。

「うつつ。。。」

しかし、目の前の光景を見ると怖くてしょうがなくなる。

「でも…仇なんだ!」

一刀は双剣を自分の持ちやすいようにもつと、魔物が固まっている場所へ走り出していた。

そもそも、なんでロイドさんの剣があの家にあっただろう?

そんな疑問を抱きながらも、こちらに気付いて襲い掛かってくるウルフに照準を合わせる。

剣を握ると、あの宝石が光り輝いた。刹那、次を取る行動が瞬時に浮かんだ。

ウルフは直進しかして来ない。

そう感じて、ボクは素早く回り込んだ。

「ガウウ……」

案の定、ウルフは直進のみしか考えていなかった。背後はがら空き

だった。

「たああああー!!」

ボクはウルフに向かって二本の剣を同時に突き刺した。

「ガウウウウ!」

ウルフは悲鳴の声をあげながら死んだ。

宝石が光り輝く間は身体が何故か軽かった。そのおかげで、イセリアを襲った魔物達を全滅させるコトができ…。

ドスンッ!!

大きい物音がして、ふと周りを見る。そこには巨大な人間のような魔物がいた。しかし、色も声も変だった。

「グオオオオオ…」

それは、まるでゾンビのように気持ち悪い魔物だった。

ダッ！

その魔物がこちらに近づいてくる。

ズコッ！！

「うわあああ…つぐ！？」

ボクはその攻撃を避けきれずに吹き飛ばされてしまった。

「痛っ…。」

口からは血が少し垂れていた。凄く痛い。けど、周りを見ると、もつと痛そうな人、苦しくて気絶している人、死んでしまった人…。自分が立ち上がらないといけない気がした。

ボクは剣を構える。すると、宝石が光る。宝石があれば勝てる…そんな気さえした。

「やあああああー!!」

ブンッ!

魔物にこれでもかっ!と言いたくなる位の全力の攻撃を繰り出す。しかし、魔物に当たることは無く…また吹き飛ばされてしまった。

「うぐうあ……。」

多分、背中からも血が出ている…そんな感覚がありながらもボクは立ち上がり、呪文を唱える。

『ファイアーボール!』

日の玉は全て魔物に当たらずに、鎮火してしまった。

「グオオオオオ!」

魔物はボクに接近してくる。

怖い…。殺される?お父さんとお母さんと同じように?

せつかく生きてるのに…助けてくれたのに…。そんなの…そんなのは…。

「嫌だああああ!!」

宝石が先程とは比べ物にならない程強く光る。刹那、背後から何かが着くような感覚がした。首を後ろに捻ると…そこには。

「え……?」

羽が生えていた。いつの間に…って考えてる場合じゃないや!

魔物の追撃をジャンプしながら横に避けると地面に着地……しない?

気付くと、ボクは空を飛んでいた。どうしても今は考えずに、敵に集中するコトにた。背後に回り込み、少し距離をとる。すると、脳裏にいきなり術の詠唱の文が浮かび上がる。

どのみち、自分が知ってる術では聞かないなら…と、ボクはその術を唱えた…。

《聖なる翼よ、ここに集いて神の御心を示さん》

『エンジェルフェザー！』

自分を浮遊させている翼から、羽が二本抜け落ち…そのまま刃と成して魔物を切り刻む。

「ウグオオオオオオ！」

魔物の両足は切れて、無惨な姿になった。しかし、死んではいけない。余計に気味悪くなった魔物をどうにかして倒したい。そう想うと、また別の術が脳裏に浮かぶ。

《雷雲よ刃となりて敵を貫け！》

『サンダーブレード！』

魔物は粉々に粉碎され、辺りにいた魔物も闇に消えていった。これでよかった……はずだったのだから。

「お前がやったんだな……。」

いきなりの村長の言葉にボクは口を開けるコトが出来なかった。

「大体、精霊様のおかげで、魔物はもう村を襲撃などはしない……！これだけの人を殺して……お前もこうなりたいか……！？」

言ってるコトが理解出来ない。ボクは魔物を伐っただけなのに……なんで……！？」

「うっ……。うわああああ……！」

ボクは叫びながら、走った。何処までも、何処までも……。

【森】

「一刀……？一刀！？」

ふと、声がした。我に還った一刀は、まず自分が震えていたコトに気付く。

「あ……………？」

涙を払うコトも忘れて振り向くと……そこには桃色のポニーテールの少女が一人いた。

「一刀、私の領地で何し……ってなんで泣いてるんだよっ！？」

白蓮は、見ては行けないものを見てしまったかのように慌て始めた。

「って！？此処って白蓮の領地か！！」

一刀も状況を把握したのか、少しパニック状態になっていた。

「ああ、それはいいんだけど……。一体どうしたのさ？」

そっついながら、白蓮も一刀の隣に座る。

「ん。少し昔を思い出しててな……。」

そっついながら、今まで思い出していたコトを大まかに語った。語る終始、一刀は涙を流していたのだが、白蓮は気にせず話を真剣に聞いた。

「辛い思い出ばかりなんだな……。」

白蓮は慰めるように言う……しかし、その表情に哀れみや同情は無かった。

「関羽達に話しづらいコトだったら私に話せばいいから。」

白蓮は笑顔で一刀を抱きしめた。

「ほんと、情けない男だよな…。」

「男がそんな下向きな考えを言うなって!」

ピキッ。

ふと、冷たい空気が一刀を襲う。一刀は周りに近づいて来ていた気配に気付いた。そして、今考えるコトは一つ…白蓮を護るコトだった。

「白蓮! 暫く潜つてろ!」

一刀はいきなり叫ぶなり、白蓮を湖に突き落とした。

「な……。」

バsshャーン！

白蓮が湖に落ちたと同タイミングに…

ピュン！

ピュン！

ピュン！

突然、3方向から矢が飛んで来る！

一刀は二本の剣で一本ずつ弾くが、白蓮のでタイムロスがあった為に間に合わなかった。

ザシュ！！

「うぐあっ！！」

正面から来ていた矢に対抗する間もなく、矢は一刀の左胸に突き刺さる。

（左胸って…心臓があるような…）

一刀はその場でうずくまる。直ぐさま矢を抜くと、矢の飛んで来た方向へと投げ返す。

「うぐ……っ！」

一人の男が声を上げ、屍とかす。しかし、残りの二人がまた弓を構え……。

『ライトニング！』

一人の賊に雷が落ちる。雷に打たれた賊は、唸り声を上げながら倒れる。

ザシュッ！

「ぐっ………ガハッ……。」

もう一人の放っていた矢が一刀の腹部を捕らえる。

「ガハッ………ガハッ……。」

一刀はまた矢を抜き取る…が、今は投げる力すら出ていなかった。元々怪我も不完全なまま出て来て、肺や脇腹をやられたのである。流石の一刀でも限界であつた。

「いつてて……。一刀!? 何すんだ……って……かず……と?」

湖からどうにか上がった白蓮は、今の状況を見て絶句した。一刀が賊にやられている状況を見て…。

棒立ちになってしまった白蓮に弓が向けられる。白蓮は、これに全く気付かない。そして…

「あ…。」

気付いた時には弓が白蓮の方へ飛んで来ていた。そして……。

ザシュッ!

豪快に肉を裂く音が響く。白蓮はそつと目を開けた。そこには…

「一刀っ!」

自分の身代わりになって腹部に矢を受けた一刀の姿があった。

『ウィンドカッター!』

風が刃となって、最後の賊を切り刻む。賊は声をあげる間すら無く倒れた。

「ふう…疲れた…」

一刀は力尽き、倒れた。

「一刀っ！何やってんだよ!？」

白蓮が慌てて一刀に寄る。

「白蓮…。怪我は…無いか？」

一刀は自分の状態より、白蓮に怪我が無いか気になっていた。

「わ、私は一刀のおかげで無事だよ！それより、お前の方がヤバイだろ！」

一刀はどんどん出血している。前の戦いの傷が癒えていないのに大量出血となれば、命に保証は持てない。

「白蓮が無事なら…いい。」

そついいながら、一刀は術を唱え始める。しかし…

（集中出来ない…。血が出過ぎたか…。）

空を見る。この場所から見える夕焼け空はとても綺麗に見えた。

だんだん血が引いていくのを白蓮は感じていた。

「一刀！？死んだら怒るぞ！」

白蓮は泣きながら叫んだ。

そんな声を聞きながら、前の戦いの後を思い出していた。

「起きたら自分を心配してくれる人がいた…こんなコトは一度もなかった…。」

「一刀？」

いきなりの過去話で驚く白蓮。

「こつちの世界に来て…良かった…。」

そういうと、一刀は意識を失った。

「一刀…？一刀！？」

白蓮は流れる涙を気にするコトも無く、叫び続けた……。

気付けば、空は暗くなり、月が出ていた。湖は綺麗に月を照らしていた。

一刀はまだ脈はあった。白蓮は、自分の服をちぎり、一刀の傷を塞ぐのに使っていた。しかし、流石の一刀の体力も既に限界が来ていた。そんな時……。湖の真ん中で、月に誘われたかのように、謎の生き物が姿を表した。

Memory編：精霊ウンディーネ（せいれいうんでぃーね）

その生物は、馬の容姿でありながらも色は白く、一本の細長い角がただ綺麗だった。

「な、なんなんだあの馬は!？」

「…………ユニコーンです…………。」

「ゆにこ…………って、誰だ!？」

いきなりの声で驚く白蓮。声は明らかに寝かせてある一刀の方から聞こえてきた。

白蓮は、何かの気配を感じながらも、その場で硬直していた。

「…………申し遅れました。我が名はウンディーネ。水を統べる精霊です。……………」

「は!?!うん…………え!」

突然のコトで更に驚く白蓮。言っている意味が全く把握出来ていなかった。

ウンディーネは話を簡潔に始めるべく、話し始めた。

「……………一刀を助けたいですか？……………」

白蓮は我に還る。一瞬忘れてしまっていた自分の願い…。

「助けたいつ！助けたいさ！」

「……………ならば、我の力を信じ、湖を歩くがいい……………」

「湖を歩くって…。」

「……………我は水を統べる精霊。それ位ならたやすい。そして、あのユニコーンに自分の想いを願うのだ……………」

そういうと、ウンディーネは何かを唱える。すると、白蓮の靴が青く光る。

「これで…水を歩いて、あの馬に想いを伝えたらいいんだな？」

「……………その通り。……………」

白蓮は、ウンディーネの答えを聞くや否、湖の上を走り出した。

（うわっ、本当に湖の上を走れてるしっ！）

白蓮は、今の状況に感動を覚えつつも一刀を助ける為に、ユニコーンの元へ向かった。

「純粋な心を持った女よ……。」

「はっ！？し、喋った？」

白蓮はまたまた驚いてしまう。

「喋る動物は、そんなにも珍しいか…？」

「いや、す、すまん。取り乱した。」

白蓮は少し咳ばらいをして、髪を整える仕草をすると、ユニコーンに話し始めた。

「ゆにこーん。お願いがあ……」

「分かっている。貴女の心は読めている故…。」

ユニコーンは、冷静な口調で話を続ける。

「我が角を使えば、一刀を助けられる…。我はその為だけに生まれたのだから。」

そういうと、ユニコーンの角は取れて、白蓮の元へ向かう。

「あ、ありがとうございます。ユニコーン。」

白蓮はユニコーンを見る。ユニコーンは、いかにも消えてしまいうな状態だった。

「ゆ、ユニコーン!？」

「案ずるな…。我が角を渡す時…我が命の消滅と新しいユニコーンの誕生を意味する…。」

そう言い残し、ユニコーンは消えていった…。

「ユニコーン…。」

白蓮は罪悪感から更に涙を流していたが、一刀を助けるべく、走って彼とウンディーネの待つ所へ戻っていった。

「ウンディーネ…だっけか？あのユニコーンがこれをくれたんだけど…。」

「……………これを使いなさい……………」

ウンディーネは、ネックレス状の宝石を白蓮に掛けた。

「これは……。」

白蓮は見覚えがあった。この色、この紋章は…。

「……一刀が持つてる物とほぼ同じものです……」

ウンディーネが声出さぬ疑問に答える

「本当だ……。でも、どうすれば……」

「……角と貴女の身体を一刀に密着させ、強く願うのです……」

「み、密着てなあ!？」

白蓮はコトを考えながらも慌てて返事をする。しかし、ウンディーネは聞く耳すら持たずに話を続ける

「……さすれば詠唱が脳裏に浮かびます。その通りに詠唱すれば、一刀は助かるでしょう……」

「……わかった。」

白蓮は、覚悟を決めて一刀を抱く。手にはユニコーンの角を持っている。

（一刀を助けてくれ…。）

居るコト10分。

白蓮は、まだ一刀を抱きしめていた。もう自分無理なのか…そんな諦めすら出ていたのであるが、

（彼の者を……………）

（……………死の淵より……………）

(……………呼び戻せ！)

「浮かんだ……！」

白蓮は、やっとの出来事に歓喜の声を上げる。

「……………詠唱するのです……………」

ウンディーネにしては少し私情を込めた声で白蓮を促す。

「分かった。」

《彼の者を死の淵より呼び戻せ！》

『レイズデット!』

白蓮が唱えると、突如天から現れた温かい光に一刀が包まれていく。

天の御使い

今の一刀を人が見れば、誰でも信じるであろう光景を目のあたりにした白蓮は、無言で……ただ一刀の回復を祈っていた。

「んっ……。此処は……」

一刀は目を開ける。すると目の前には白蓮の顔があった。

すでに夜は遅く、虫の音以外は何の音もなかった。

「くう……………」

白蓮は一刀を膝枕して寝かせながら寝てしまっていた。

このまま寝かせてしまつて風邪でも発生したら大変だ、と一刀は白蓮を起こす。

「んっ……………つて一刀!？」

白蓮は一刀を見る。そこには、服だけがボロボロになっていて、皮膚には傷一つついていない少年がいた。

「どうやら、また借りが出来たみたいだな…。」

一刀はそばにいたウンディーネを見る。ウンディーネは今までのいきさつを全て話した。

「でも、普通エルフの血が混じってないと魔法は…」

「……………どうやら、こちらの世界の住民は皆術を使う素質があるそうです……………」

ウンディーネは軽く説明を加えると、白蓮の方を向く。

「……………彼女の属性は運がよく水と光……………」

「そ、そうなのか？」

白蓮は自分の手を見た。

（私がアレを…使える？）

「……………エクスフィアが無いと力が目覚めない様です。一刀のとは作りが違うが、貴女にその宝石を預けましょう。一刀と私の命を救った礼に……………」

「ちょ、ウンディーネは助けて無いだろ!？」

白蓮は色々信じられないコトを一つずつ認識しながらもツツコミを入れる。

「……………我々の本来還る場所は此処から遠い。故に今は一刀の中になっっている。つまり、一刀が死ななければ何度でも現れ、一刀が死んだ時は我々の死ぬ時ということだ……………」

「なんか、分かったようで分からないけど、とりあえずこれは有り難く使わせて貰う。」

白蓮はウンディーネに一礼する。そしてウンディーネは挨拶もせず消えていった……………。

「しかし、白蓮が水と光の二色だとはな…。まあウンディーネが出て来る辺り、水が強いんだろうけど。」

一刀は、最初にそうしていた様にまた湖に足を入れていた。

「みたいだな。よくわかんないけど。」

白蓮もまた、一刀と同じようにする。

「本当にありがとう。白蓮がいなかったら確実に死んでたな。」

「ちょ、こっばずかしいし、先に命をかけて守ってくれたのは……
…一刀の方だし…」

二人の顔の距離は既に10cm位になっていた。お互いに見つめ合う。よいそよ風が辺りを揺らす。その風が二人を動かしていた。

「白蓮…」

「一刀…」

二人はそつと唇を重ねた。凄くゆっくり重ねた唇は中々離れるコトが無かった。

「あ、やっべ！城から抜け出して来てたんだった…。」

一刀は今日の昼の出来事を思い出しながら言った。

「ま、マジかよ！？って私も警邏からそのまんまだった……。」

こんな太守達で果たして大丈夫なのか!?

「帰ろう…。」

「そうだな…。」

二人は帰った時に怒られるのを想像しては顔を青くした。そして、一刀が翼を広げて帰ろうとした時、一刀の服を白蓮が掴んだ。

「どうした、白蓮?」

「また…なんかあったら守ってくれよ…な?」

白蓮は上目で一刀を見る。その目には少しの寂しさが見え隠れしていた。「わかった、約束する。」

そういうと一刀は白蓮に一礼すると、遙か彼方へと飛んで行った。

「一刀…。」

白蓮は一刀が見えなくなるまで見送った後、自分も城へと帰っていた。

【啄巣・城】

「ご主人様、どちらへ行かれてたのですか？」

帰って来た一刀の部屋には愛紗が待っていた。

「少し…考え事をしてさ。」

愛紗は呆れた様な顔をしつつ、続ける

「考え事って…相談なら私達がいれば……………」

「過去を思い出していた。」

一刀はそれだけ伝えるとベットへ寝転がる。

「ご主人様……。」

愛紗は深く追求した自分を責める。少し考えれば想像位ついたハズだった。

「愛紗、今日は一緒に寝てくれないか？」

「は、はい！？」

不意の一言に焦る愛紗。

「だから、エッチな方じゃなくて、前と同じ。話せる人すらいない昔を思い出したらまた人肌が恋しくなってるね。」

「そついつコトならお供しますとも」

愛紗はさっきまで、ローテーションだったのに、いきなりハイテンションになっていた。勿論この後は、また寝相で一刀は絡まれた。しかし、今の生活を考えたら悪い気がしなかった。

此処には、自分を思ってくれる仲間がいて、友達がいて、民がいて……。

（自分を思ってくれる人の為に戦うは久しぶりだな…）

一刀はそんなコトを考えていた。

あの日、斬られただけのハズなのに、死体すら残らなかったあの少女以来だと…………。

更に一刀は疑問に思っていた。彼女に好きだと言われて恋人同士になっっていたが…自分の感情は本当に恋なのだろうか。

愛紗や鈴々達にも一刀は同じように接していた。自分は恋では無かったのか。それとも、今の仲間にも全員恋をしてしまったのか？

今の一刀には答えが出せなかった。故に、

（考えないコトにしよう。）

一刀は、とりあえずつかの間の休息を楽しむコトにした…。

「いひゅじんさまあー！」

今は、愛紗の寝言がその空間を支配していた。

一刀の夜はまだまだ長くなりそうである。

Memory編：精霊ウンディーネ（せいれいうんでぃーね）（後書き）

これより、キャラ別タイムに入ります。短編集にしないのは、直接ストーリーにも関わるからです。では次回！

朱里パート02

（きっと、ご主人様はお戻りになられてるはず。）

朱里は夜が明け始めた頃、既に一刀の部屋の前へいた。

中から人が動く音が微かに聞こえる。朱里は間違いなくいるであろう主に構って貰おうとドアを勢いよく開けた…。

「ご主人様、いつお戻りに……。」

朱里は一刀のベットを見て言葉を失った。そこには一刀と愛紗が絡み合ったまま寝ている姿があった。

「はわわ!？」

思わず朱里は何時もの慌てぶりを存分に披露した後、

「し、失礼しました！！はうあ！？」

などと大声を出しながら去っていった…。

1時間後

合いたままのドアを呆然と眺める一刀と愛紗。

「朱里…だよな？」

「朱里ですね…。」

二人は朱里に誤解されているコトに気付き、深いため息をついていた…。

【中庭】

今日の政務が概ね片付いた一刀は、気分転換にと中庭で鍛練をしようとしていた。

「この辺がいいかな…？」

一刀は場所を見つけた刹那、双剣を抜いて身のこなしを確認しながら剣を振った。

（誰かが見てるな…。）

数分も経たずに何かの気配に気付いた一刀は、練習を中断して周りを確認する。すると、木の下に犯人の女の子を発見した。

一刀は手を振りながら、その名前を呼んだ。

「朱里！」

「はう!？」

自分の方に手を振りながら歩いて来る一刀を見て今朝の出来事を思い出す。

(やっぱり、愛紗さんとエツチなコトしてるのかな…)。

朱里は考えては止め、考えては止めを繰り返していた。

「朱里?どうかしたか？」

一刀は、まるで何事の無かったかの様に朱里に話しかける。

「あの……今朝のコトなんですけど……えっと……その……」

朱里は何かを聞きづらそうにしている。一刀は大まか予想がついたのですぐに答えた。

「少し、自分の過去を思い出してさ……。今と違って人が皆俺を避けていた時のをね。」

「……………」

朱里は黙って一刀の言葉の続きを待つ。

「それで、一人だと心細くなって…俺の部屋で待っていてくれた愛紗にワガママいって一緒に寝ただけなんだけど…」

朱里は自分の思考とは違う答えだったので安心した。が、

「ご主人様…っ！」

朱里は一刀に抱き着いた。

「し、朱里？」

一刀は突然のコトに驚く。

「ずっと帰ってこなかったから、心配してたんですよ！…ずっとずっと……………」

そっついながら朱里は涙を流し始めた。

一刀は自分の行動を深く反省した。やはり、仲間に心配をかけさせるコトをするのは自分の立場的に1番してはいけないことだった。

それを平気でやった結果、一人の少女に辛い思いをさせたのだった。実際、朱里だけではないだろう。愛紗も勿論、鈴々にも、恋にも…皆に迷惑をかけたのである。

一刀は朱里の頭を優しく撫でながら話す。

「俺はいきなり遙か遠くまで行ったりはしないからな。」

「はうう……。それだけじゃないですっ…。」

「え？」

「ご主人様に1番に構って貰おうと思って今朝は早く起きたんですよ!？」

そういうと、朱里は更に強く抱きしめた。もう離さないとばかりにナデナデ。

「はうっ……。」

一刀は、朱里が自分のコトを此処まで思ってくれていたのかと関心していた。

「朱里。」

「はい。」

しばらくそのままの状態で朱里を落ち着かせた後、一刀は朱里を呼ぶ。

「今から一緒に市にでもいかないか？」

「はい！喜んでお供しますよ？」

朱里は一刀からの誘いにご機嫌だった。

【市】

「随分賑わってるな。」

啄島の市は、かなりの発展を見せていた。皆が自由に商売出来るようになった結果、商人がかなり頻繁に来るようになり、流通が盛んになっていた。

「これも、私達が頑張つて来たからですよ。」

朱里は嬉しそうに語りながら一刀を引っ張って行く。

「それで、いつまで腰にしがみついていらっしゃる予定で…?。」

流石の一刀でも、この状態だけあつての町の人の視線は耐え難いものだった。

「もう、いきなり居なくなったりしないって約束してくれたらいいですよ」

朱里は少し拗ね気味だった。

「んじゃ、手を繋ごう。」

一刀の提案に朱里は少しの間考えた後、

「御意です」

提案に乗ってくれた。

一刀は朱里の笑顔に心が躍りながら、警邏という名のデートを楽しんでいた。

ドスッ！

「はわわ！？」

朱里が誰かにぶつかってしまふ。

「ごめんなさい…。」

朱里はぶつかってしまった人達に謝る。

「いてえな！骨が折れちまったじゃねえか！！」

「アニキにぶつかって怪我させたんだぜ？嬢ちゃんよ…」

「金を払うか、その可愛い身体を払うんだな！！」

ぶつかってきたのは、その辺の盗賊だった。皆真剣を持っていた。

因みに、一刀と朱里は民達にバレるのを防ぐ為に、一般服を来ているので誰から見ても天の御使いにも軍師にも見えなかった。

（早くなんとかしないとな…）

「とりあえず、ちょっと来いや!!」

朱里にぶつかって来た男が朱里の腕を掴もうとする。

「さわるな…。」

ゴスッ!

一刀は盗賊の延ばして来た腕を蹴り上げた。

「いつ……てめえ、死にたいのか?」

そういうと、三人は抜刀する準備をして脅しに掛かる。

「朱里。結構下がってる？巻き込まれるから。」

「でも、剣は……。」

一刀は愛用の双剣は城に置いてきていた。故に丸腰状態なのである。

「はやく！あと、警邏してる人達を見つけたら呼んで来て。」

「り、了解です。気をつけてくださいね……」

そういうと、朱里は走っていった……。

「へっ……あの女の子だけ逃がして、自分は死のうってか！？」

盗賊達は笑い声をあげていた。辺りには野次馬が現れて囲んでいた。

「……………来い。三人まとめて相手してやるさ。」

そういうと、一刀は身構える。

「なめてんのか！ゴルア！？」

右端にいた男が剣を抜き、一刀に切り掛かる。一刀は、気を集中させていく――。

ガシッ！

一刀は腕で剣を防ぐ。周りからは悲鳴が聞こえる………斬られてしまった――。

「おおおおお！？見ろアレ！」

野次馬が沸く。一刀は、腕一本で、傷一つ無く受け止めていた。

「な、何だと!？」

流石に賊達も焦る。真剣を素手一つで防ぐ人なんか聞いたコトも無いだろう。

「次はこっちの番だ!」

『掌底破!』

手から気を出した一撃を喰らわせる!!

「ぐはっ……」

賊の一人は口から血を吐きながら、野次馬の更に遠くの方まで飛ばされていく。

「てめえ!!」

もう一人の賊が、剣を投げ付けてくる。

「遅い!!」

一刀は軽く避けると、一気に間合いを縮める。

『飛燕連脚!』

跳び蹴りを空中で連打する。

「ぐふっ! うがっ! ごほっ……」

最後の一発でその賊も遠く彼方まで吹き飛ばす。

「なっ……。なんなんだよお前は!!」

朱里にぶつかってきた…恐らく、1番偉い奴だろう。その賊が怒りながら、何処にしまつてあつたのであろう大斧を持って襲い掛かる。

『獅子戦吼!』

一刀はその気を大斧に命中させる!

BURRN!

大斧は、粉々に砕け散つた。最後の賊は、そのまま座り込む。

「くそっ……。」

「そんな言い掛かりをつけてなんになるんだ…。役人に突き出したりはしないからとつと消えな。」

一刀は賊の目を見る。まだ反省はしていない様だった。

「どうしたら分かつてもらえるか……」

「今だ！」

いきなり賊が大声を上げる。刹那……

グサッ…。

グサッ…。

「うぐっ………！！」

賊は三人だけでは無かった。別の二人が最初から一刀の背後で弓を持って構えていた。二人の矢は一刀を貫通していた。

「キヤアアアアアア！」

野次馬が叫ぶ。紅く鮮やかな血が勢いよく吹き出す。

「やったな!!」

「少し喧嘩が強いからって調子にのりあがっ……………」

ザシュ!

ザシュ!

バタッ バタッ

先程まで健在だった二人は、華麗な舞の洗礼を受けて…散った。

「……………」

辺りは状況を理解出来ずに沈黙する。

「助けに入った民間人は何処だ!？」

愛紗が一刀だとは…勿論、呼びに来た女の子が朱里だとも知らずにやってきた。

「関羽か…。せめて、とどめだ!!」

「やめろおおお!!」

ザシュ!

愛紗が気付くのは少し遅かった。一刀の腹には、大きめの剣が刺さる。

「がっ……………」

一刀はその場で倒れた。

愛紗は…。普段以上の何倍もの胸の痛みを感じていた。今まで救えなかった命の数、痛みが生じていたのだが、今回はその何十倍も痛かった。その理由は、次の一言で明かされた。

「ご主人様…？ご主人様あ！！」

朱里が一刀の近くに駆け寄る。その時、愛紗は全てに気付いた。

「ご主人様…？一刀様！！」

「んんっ……。」

一刀は目を覚ます。

「此処は……痛っ。」

突如、怪我の痛みに襲われた。それと同時に、先のコトを振り返る。

「結局、不安にさせているのか……。」

そうつぶやきながら、自分を夜通しで面倒を見てくれていた……。
一刀のベットに寄り掛かるように寝ている朱里に感謝した。

この後愛紗に、朱里と一緒に一刀がお説教されたコトは言うまでもないだろう……。

「少しはご自分の身分を考えてくださいっ!」

「はわわ……。」

「はいっ……。」

月&詠パート01

一刀が、しっかりと治るまで面倒を見るコト……これが月と詠の役目だった。しかし…

「身体が鈍ったら大変だろ！」

「だから！今は、大人しくしてなさいよ！！」

一刀の身体は、前々の傷も含めて完治はしていなかった。賊に気付かなかったのも、それが少しは影響しているのだろう。が…

「ただでさえ、気配すら読めなかったんだ！」

一刀は全く気付いていなかった！！

「だから、その傷のせいでしょ！！」

ペチッ！

詠は一刀の背中を思いきり引つ叩く。

「痛っ!!」

「ほら見なさいよ! ぜんぜん治ってないじゃないの!」

二人の喧嘩を微笑ましいと思いつつも、月は二人に割って入る。

「詠ちゃん……ご主人様を虐めちゃ駄目。」

「あ……うん、ごめんね。月。」

詠は、相変わらず月には弱いようである。

「謝るのは……私にじゃないよ?」

「わ、分かってるわよ! 叩いたのは私が悪かったわ。」

本当に反省しているかはわからないような口調で言う詠。

「ご主人様も……無茶を言わないで……ください。」

月は、じっと一刀を見つめる。

「……………分かったよ。」

一刀は諦めて、大人しく休むコトにした。

「んで……………。こっちの生活には慣れた？」

二人が啄巣に来てから5日程度経った。

「…不便無くやらせて貰ってるわよ。」

「張遼さん以外の人も…みんないますし…楽しいです…」

「そうか…。」

二人が不便無く、ある程度普通の女の子として暮らせているコトにホッとする一刀。

「後は、アンタの侍女で無ければ最高だったんだけどね…！」

「私は…ご主人様のコトが好きだから…侍女でもいいんですけど…」

月の爆弾発言に、一刀と詠は言葉も出ない。

「…って、月！そいつに騙されちゃ駄目…！」

「俺がいつ騙した…！」

「最初からでしょ…！」

一刀と詠は睨み合う。その隣で、月がクスクスと笑い出す。

「月、どうかした？」

「何で笑ってるの!？」

「……だって……楽しいから。」

と、言うと、またクスクス笑いだす。

「何で楽しいのよ？」

「だって……平和な喧嘩だから……」

「………そうね。私達は何時も軍治のコトの喧嘩ばかりしかして無かったわね……。それに比べて此処は……」

一刀は今になって初めて気付く。月と詠がどれだけ苛酷に生きて来たのかを。

洛陽に入ってから、周りの人には悪口を言われ、孤立した後には左慈達の登場……そして、反董卓連合軍の発足。二人にとっては、今まで

の道のりはとても辛い物だったのである。

ナデナデ

「なっ…。」

「あっ…。」

気付けば一刀は二人の頭を撫でていた。

「な、なに…すんのよ。」

「あう…。」

「何か希望があれば、遠慮無く言っていいいからな。此処は自由な場所だから。」

一刀はそれが今、自分に唯一出来るコトだと判断した。彼女達の心の傷を少しでも癒やせるようにと…。

「そうさせて貰うわ……。」

「お気遣い……ありがとうございます……」

二日後。

「アンタ……。どんだけ回復力あるのよ……。」

「ご主人様……凄いです……。」

「これなら何度でもイケるんじゃないかしら……。」

「いや、何度もは無理だろ……。」

少し間違えれば変な意味に聞こえるが、一応確認すると、二日で一
刀の怪我は、ほぼ完治しているのである。そして、詠は剣を持って
刺す仕草を取っている。

ガチャ！！

「何を破廉恥なコトをやっている！！」

愛紗が勢いよく部屋の中に入ってくる。

「侍女であるコトをイイコトに、ご主人様に何をやって……！！？」

冷静に状況を確認する愛紗。一刀に包帯を巻いている月と、それを見ている詠。

「ん、愛紗、どうかしたか？もしかして、敵軍でも現れたのか！？」

「あつ……し、失礼した！！」

状況が把握出来た愛紗は、自分の失態に気付くと羞恥心からか、勢いよくドアを閉めて帰っていった。

「なんだっ たんだ……？」

「さあ？それより月、早く続きをやっちゃいなさいよ。」

「……うん。」

こうして、のんびりと休養を取った一刀は、その二日後には完治したのである。

華雄パート01（前書き）

どうやら、死にかけ過ぎと思う人がいるそうですね（^- -^）；

その辺は後半にどう繋がるのか…ってコトで完結をお待ち下さい！。

では、華雄ルート…作品では即死んでしまう為、キャラが掴みにくいのですが…どぞ！

華雄パート01

一刀はたまたま訓練場に足を運んでいた。そこで、華雄が一人残って鍛練をしていた。全体での鍛練の時間は一刻前に終わっていた。つまり、華雄はずっと一人で鍛練をしていたのである。

【鍛練場】

「うす！」

華雄は一刀に気付くと一例して話しかける。

「お、ご主人様ではないか。ご主人様も鍛練か？」

「まあ、そんなところ。」

そう言うと、一刀は自分の得物と同じ双剣の刃を潰した物を二つ取り出すと、素振りを始める。

華雄もそれを見つつ、自分の鍛練を続けた。

数分後。

「華雄、手合わせしないか？」

一刀はそういうと、華雄と同じ得物を取り出す。

「な、ご主人様はそれも使いこなせるのも言うのか？」

華雄は流石に驚いていた。普通、あれだけ双剣を極めている人ならば、その道一筋でやってきた…そう思うのだろう。

「ま、双剣から札術まで出来るからな。それで、やるのか？」

「ああ、是非お願いする。」

「うおおおお！」

ガシッ！

ガシッ！

華雄は一刀に鋭い攻撃を打ち付ける！

ガシッ！

ガシッ！

「ふっ、ふっ…。」

一刀は冷静に攻撃を受け止めて、隙を探す。

（流石だな…この一週間でここまで隙を埋めるなんて）

しかし、全く隙がある訳でも無かった。

「此処だ！」

ゴスッ！

華雄の腹に素早く人当てする。

「うぐっ…。」

華雄は少し間合いを取った。

「随分強くなったじゃないか。」

先の連続攻撃で一刀も少し疲れていた。華雄の攻撃は重い。故に、連続で当てられると厄介なのである。

「ご主人様には、遠く及ばないがな。」

そういうと、華雄は構える。

（この感覚…まさか、あの技を使えるのか？）

「いくぞ、ご主人様！」

「うおおおおおおお！！！」

『獅子戦吼！』

ガシッ！

一刀は反射敵に攻撃を抑える。しかし、

ドッカーン！

気が爆発して、一刀は吹っ飛ばされた。

「イタタ…。まさか、獅子戦吼が来るとはな。」

「鈴々を見て学んだのさ。直ぐに習得出来るとは思わなかったがな！」

立ち上がる一刀を見て、華雄はまた突撃する！

『獅子戦吼！』

一刀は、得物の上手く使って、ジャンプして避け、そのまま背後へ周り込む。

「な……………」

そして、一刀は得物を華雄の首に突き付ける。

「勝負…あつたな。」

「ああ…。」

武器をしまった華雄と一刀は、並んで座っていた。

「同じ技を二度使うのは頂けないな。」

一刀は、先の戦いでのアドバイスをしていた。

「そうだな。攻撃を読まれては、いくら威力があっても使い物にはならない…か。」

華雄は、一刀のアドバイスをすっかり受け止めていた。以前のよう
な暴走的な思考は既に無く、強くなる為に必死だった。

「そうならない為に、別の技を覚えられないか？」

一刀は、そんな素直になった華雄を見て、提案した。

「教えてくれるのか？」

「ああ、華雄の攻撃は、他の人よりも重みがある。だったらそれに
相応しい技が一つある。」

「本当か？」

「ああ。教えて欲しいか？」

華雄はしっかりと一刀の目を見る。そして…。

「お願いします、ご主人様。」

一礼した。

まずは一刀が手本を見せる。

「いくぞ！」

『崩襲撃！』

バキッ！

標的にしていた岩は、いとも簡単に砕けた。

「ま、この技だな。」

「ほう…素晴らしい一撃だ。」

華雄は一刀の一撃にえらく関心していた。

「んじゃ、やってみて。」

一刀は、自分の砕いた横の岩を指す。

「わかった。」

「はあああああ!!」

ガシッ!!

岩は、砕ける所か、欠けるコトすら無かった。

「くそっ……。」

悔しがる華雄。一刀は焦るコトなく華雄にポイントを正確に教える。

「此処はこう持った方がいいな……。」

一刀は自分の手を華雄の手に重ねて、動きを示した。

「ご主人様、手が……」

顔を少し赤くして華雄が口を開ける。

「あ、嫌だった？」

「いや、少し恥ずかしいだけだから…大丈夫だ。」

そういうと、こうか？と素振りをしてみせる。

「そうそう。そんな感じだな。」

そのままずっと素振りをしてはアドバイスをしている内に夕方になってしまった。流石に夜までやってたら愛紗達に怒られてしまう。

「これが最後だな。」

「御意。」

華雄は集中して岩を睨み付ける。少し強めの風が吹く。その風が一瞬止んだ時、華雄は走り出した。

「うおおおおお！！！」

『崩襲撃！』

バキッ！

岩は跡形も無く、綺麗に砕けた。

「やったぞ……。」

華雄は握りこぶしを作る。そんな華雄に一刀は寄っていく…。

「よく出来たな、華雄。」

そんな一刀を見て、華雄は、また少し赤くなりながらも

「ご主人様、ありがとうございました。」

更に深々と一礼した。

【城内】

「華雄！！今日の警邏はお主では無かったのか！」

「あ…すまん、忘れていた。」

この後、相変わらず愛紗に寄って制裁が降されたのはまた別の話である。

恋パート01

【軍議】

「えっと、現在の予算はですね……」

軍議が続く中、一刀はボーッとしていた。一刀は県令であるから、参加しないといけないのだが…一刀は話を聞くコトしかするコトもなく、つまりはもの凄く暇なのである。

自分が特に軍議に参加しなくても話がどんどん進む中、一刀は抜け出すコトにした。

「愛紗？」

「現在の兵隊の数……なんでしょう？ご主人様。」

「少し離席していいか…？」

「駄目です…！」

愛紗は即答で返事を返す。

「ちよいと漏れそうなんだけど……」

「え！？あ、ああ……。そういうコトならば……」

愛紗は最後に

「なるべく早く戻るように。」と釘を刺してから許可を出した。

「すまないな……。」

一刀はそういいながらも、内心はくそ微笑みながら部屋を後にした。

【中庭】

のんびりするといったら此処である。

「さてと……。」

一刀は、何時も寛ぐ時にお世話になっている場所へ向かう。

「あれ？」

その木々に囲まれた一角に、先客がいた。

「…………ご主人様…？」

恋が眠そつに起き上がる。恋が寝ていた場所にはセキトなど、生物が数匹寝ていた。

「起こしちゃったね…。恋、ごめん。」

一刀は素直に恋に謝る。

「ご主人様なら…いい。」

恋は俯いた様子で一刀に告げる。一刀は、恋が怒っていないコトを確認すると話始めた。

「俺も、のんびりしたくなったら此処で寝たりするんだ。」

「…………恋も…一緒…。」

コクッコクッと頷く恋。その仕草はまるで動物の様でとても可愛かった。

「いつもセキトと一緒にいるの？」

一刀と恋はお互いに向かい合って座りながら話を続け始めた。

「……………（フルッフルッ）」

どうやら違うようだった。

「……………仕事。…忙しい」

「そうか。」

どうやら、洛陽の時より仕事が増えたらしかった。

（やっぱり、人材不足かな…。）

と、一刀が考えていると、

「…でも、楽しい…。」

「うん、楽しいコトはいいコトだよな。」

「……………（コクッ）」

それでも、気に入って貰えたコトは嬉しいと思った。

「ご主人様も…寝る…？」

恋が初めて一刀を何かに誘って来た。一刀はこれもいい機会だと、恋に付き合うコトにしたのだが……。

「わんっ！わんっ！」

ガサッ、ガサッ！

バタッ、バタッ！

五月蠅くて寝る所では無かった！

「れ……………嘘っ！？」

恋はそんな状況にも関わらず、ぐっすりと眠っていた。

「……………くう。」

恋はどうやら熟睡しているようだった。一刀は恋の寝顔を見て…少し感動していた。

「本当に動物みたいだよな…。」

暫く一刀は恋の寝顔を見て楽しんだ…。

【軍議】

「ご主人様…遅いですね。」

朱里がため息を付く。

「まあ……予想はついていたが。しょうがないお方だ。」

ガタッ。

愛紗が席を立つ。

「何処へいくのだ？」

「ご主人様を探しに行く。」

「鈴々も行くのだ。お兄ちゃんの匂いがしたら直ぐに分かるのだ！」

「鈴々よ……お前は犬か？」

華雄が珍しくツツコミに回る。

「まあ……同じようなものだが、鈴々がいた方が話が早いな。」

そついうと、愛紗と鈴々は一刀を探しに中庭に向かった…。

【中庭】

「……………（ジー…）」

「……………んっ。」

一刀はゆっくりと目を開ける。すると、恋が一刀を覗き込んでいた。

「……………起きた。」

「ああ…おはよう。」

恋も一刀も少し寝ぼけてるようだった。

「…ご主人様みたいな人…初めて。」

顔を少し紅くしながら話し出す恋。

「え？」

いきなりのコトに驚く一刀。

「強いのに…優しい…。」

「…強い人…みんな威張る…」

恋は何処か寂しそうに語る。今はまさに弱肉強食の世界。群雄割拠などという言葉は飾り立てにすら成らなかった…。

それを理解している一刀だからこそ、決して威張るコト無く…回りに接するコトが出来るのである。

「お兄ちゃん見つけ……モガモガ…」

「……………」

中庭で一刀を見つけた二人。しかし、何か違う雰囲気を感じた愛紗は鈴々を止めて話を聞く。

「そうやっていがみ合うから…戦いは続くんだよ。」

恋は一刀の目を見て驚いていた。一刀の目は、戦いの時より遙かに真剣だった。

「上下なんか無いんだから。それに…」

一刀は城を見る。皆がきつと居るであろう城を。

「仲間が出来たんだ。本当に護りたい仲間。前の世界にも一人いたんだけど…。」

恋は一刀の一瞬の哀しい目を見逃さなかった。

「護れなかったんだ…。だから、皆を必ず護る。そう決めたんだ。」

一刀は決意を固めた様な目をしていたが…。

「ご主人様…無理してる…恋…分かる…！」

「うおわ!？」

恋は座っていた一刀を押し倒した。いきなりのコトに一刀は成すがままに倒された。

「いつも笑ってる…けど…本当は笑ってない…！」

不意に自分でも無自覚だった事実を指摘されて何も言えない一刀。

軍議から抜け出したくなるのも…ただ暇だった訳では無く、いつ来るか分からない魑魅魍魎な魔物。そしてあの二人から皆を護れるか…気付かない間に…。

（逃げてたんだな…。）

「恋…、本当は怖かったんだ。誰か一人でも居なくなるのが怖くて…。」

戦場で悩み事を抱えている者は確実に死ぬ…。先日の朱里と市に行った時には既に悩んでいたのだろう。

「恋は…ずっと一緒…」

「うん…ありがとう。」

「私もずっと側におります。」

途端に愛紗が二人に寄ってくる。

「え？愛紗…。」

愛紗がいるコトに気付かなかった一刀は驚いていた。刹那、もう一人いるコトにも気付く。

「鈴々も一緒なのだ！」

鈴々もいつのまにか近くに来ていた。

「鈴々…。みんな、ありがとう…。」

一刀はそれ以外に言う言葉が浮かばなかった。

「ところで…。」

愛紗が咳ばらいをしながら話を切り返す。

「いつまで二人でそのような羨まし…もとい、破廉恥なコトをやっておられるので？」

「あ、ごめん！」

一刀は今の状況を今更ながらに把握し、恋を退かして立とうとする。
が…

「…駄目。」

恋が避けてくれなかった。

「な！？」

予想外の抵抗に驚く3人。

「ご主人様…続き…」

恋が一刀を強く抱きしめる。

「つ、続きとは…なんだ？」

愛紗が恐る恐る問い掛ける。

「ご主人様と…寝る…」

「な!？」

「寝るってお昼寝？」

「鈴々は知らなくていい！」

愛紗は完全に勘違いをしていた。そして…

「ご主人様…。私を置いておいて…そ、そのような行為を……っ！」

まるで裏切られたかのような反応をする愛紗は…さっきまでは持っていたなかった青龍偃月刀を持って…一刀を睨みつける。

「ちょ、待てって愛紗！」

刹那、恋が一刀から離れる。やっと理解してくれた…そう思った刹那、恋も得物を持っていた。

「ご主人様…護る！」

「二人とも止めるのだ！」

鈴々が止めに入ろうとするが、全く効果が無かった。

睨み合う二人。そして、二人は戦いを始めた…刹那。

「止めるおおお！」

『ライトニング！』

バキッ！

「うわっ！？」

「んっ！？」

二人の間に突如雷が落下する。

「いい加減にしてくれ。とりあえず、軍議…終わってると思うけど戻る。」

「御意。」

得物を戻した愛紗は少し不満ながらも納得したようだった。

「……。」

恋はまだ納得の行かない様だった。

「分かった。今度一緒にセキトの散歩に行こう。」

「……………（コクッ）」

一刀の一言で恋も何とか了承してくれた様だった。

「あはは！お兄ちゃん大変そうなのだ！！」

鈴々の声が明るく響いていた――。

軍議に戻った一刀は…予定通り、他の武将達にも言われるがまだまだ
ったとか。

愛紗&鈴々パート（前書き）

更新が遅れ、申し訳ありません。この文自体は一週間前から出来上がってはいたのですが…この展開で本当にいいのか…悩んだ結果、この流れで行かせて頂きます。賛否両論だとは思いますが…では、どうぞ。

愛紗&鈴々パート

愛紗と鈴々は、中庭に立っていた。二人は共通の考え事をしていたのである。

「あなた様は…今、どこで何をして居るのでしょうか…。」

愛紗は空を見上げる。既に太陽は沈み、夜も遅い中である。

普段なら、綺麗な月が見えているであろう。しかし、今日は生憎の曇。月はもちろん、星すら見えない空が実に奇妙だった。

「お姉ちゃんはどこにいったのだ…。」

いつもの元気潑刺な鈴々の姿も無く、子供で淋しがり屋の鈴々になっていた。

恐らく、いつもは無理をしても元気になっていたのだろう。そう思わせる位に今の鈴々は元気が無かった。

同じく中庭をうろつく男が一人いた。彼のまた、どんよりしている様子だった。もちろん、この時間に城の中庭を自由に歩ける人物は一人しかいない。

「はあ……………」

一刀はため息を吐きながら、庭を適当に歩いて行く。

「まさか、久々にあいつの夢を見るとはなあ。」

一刀は夢を見た。前の世界で消えていった少女のコトを。そして、あの日の不自然さを。

「血が…出ていなかったか。」

そう。彼女が消えた時、血は出ていなく、死骸させも残って居なかった。とても不思議な話である。

しかし、彼女が消えてしまったコトに深い悲しみを覚えた一刀は、何も考えられなくなつて…今に至っている。

（まだ…生きているのか？）

ふと沸き上がる疑問。しかし、その答えを出すコトは出来ない。普通なら死んでいるだろう。

もしかしたら、魔界に飛ばされてしまったのかも知れない。あるいは――

（この世界に来ている…か。）

その可能性は限りなく低いものであるが、決して無い訳でもあらず。その証拠に、自分はこの世界で生きている。ソードダンサーによって飛ばされて。

しかし…こればかりは誰にも判断出来なかった。

「うーん…」

一刀は、歩く速度を変えずに歩いていた。

「鈴々、そろそろ戻るぞ。」

愛紗が立つ。鈴々も、それに合わせるかのように立つ。そして、そ

の場を離れようとした…その時に二人は一刀と目を合わせた。

「あ…ご主人様？」

「んにゃ、お兄ちゃんなのだ。」

「お、おう。」

三人にいつもの元気は無く、少しため息混じりの返事でもあった。

再び腰を降ろす愛紗と鈴々。その横に一刀は座った。

「今日はどうしたんだ？」

一刀が口を開く。愛紗と鈴々が真剣に悩む話。それが単純な話では無いコトは一刀は理解していた。

「実は……………」

愛紗はゆっくりと過去を語り出した……

時は今から3年もさかのぼる。愛紗と鈴々は、弱き民を守ろうと町を出た。

二人は各地を点々としながら、自分達の理想の主を求めて旅をしていた。そんなある日のコトだった。

「大分遠くまで来たな……。」

「鈴々はもう疲れたのだ……。」

二人は、出発点から何日も歩かなくては来れない場所へとたどり着いていた。

二人の所持金も危うく、そろそろ、働いてお金を貯めなくてはいけない頃であった。

「何か働き口を探さなくてはな……。」

「ご飯が食べれないのだ。」

そういいながら町を歩いていった。その時、ふと声がした。

「や、止めて下さい！このお茶の葉は、母の為に買ったものなんです。」

「そんなこつたしらねえよ！金かその少し高級そうな茶の葉か……いい身体してるじゃねえか、姉ちゃん。それでもいいぜ！」

その声は、明らかに女性を困らせているものだった。正義感が一際強い彼女達は、その現場へ向かって走り出していた。

「無理です！どれも母や大切な人から預かった大切なものなんです！」

美少女は、更に抵抗するが、それは火に油を注ぐようなものだった。

「ま、まずは服を切つて脱がしてやるからな。」

シュパッ

男は、巨体であった。しかし、その動きは素早く正確で、美少女の上着を切り刻んでしまった。

「え？あ！？」

上半身の服が綺麗にはだけ、上半身がさらけ出されていた。流石の美少女もそれには耐えられず、顔を赤くして泣き出してしまった。

「おお、その胸…有りだな。」

男が嫌らしい目で美少女を見る。そして…

「触らせて貰おうか!!」

そっぴいなから手を触れようとした…次の瞬間。

「させるか!!」

ゴトツ!

愛紗の相棒である青龍刀が男に直撃する。勿論、棒の部分でわざと攻撃したので、血は出ない。

「うぐっ…………。」

男はうめき声を上げながら倒れ込む。愛紗は、その男の首に容赦無く、青龍刀を突き付けた。

「直ぐに立ち去れ。さもなくば…斬る!」

愛紗は、鋭い声で喋る。完全にビビった男は、悲鳴を上げながら去っていった。

「お怪我はありませんか?」

愛紗は、まるで別人のように声を変えていた。

「あうう……。」

美少女は未だに泣いていた。愛紗も少し戸惑っていたが…

「姉者！！話よりも、このお姉ちゃんに服を着させてあげるのだ！」

鈴々の声に助けられ、その場をなんとか取り留めた――

「その後に…お互いのコトを話しまして、あのお方を義姉として迎え、我等は町の近くにあった桃園で、誓いを立てました。」

一刀は、愛紗の話を聞いて、少し違和感を覚えていた。何故だか、その少女を知っているような気がしていた。

「桃香……。」

一刀は、ついついその名前を呟かずには居られなかった。

「そうです。私達の義姉となったお方は桃香様で……って、ご主人様？」

愛紗は驚いて一刀を見る。目は何を質問したいのかを明白に語っていた。

「いや、俺の世界で守れなかった娘でね…。」

一刀は少し俯きながら話す。

「まさか…いや、奇遇ですね。私達と桃香様は三人で旅をしていたのですが…二年前から離れ離れになってしまいました。」

愛紗は哀しい目をしていた。きっと、未だに未練も残っているのだろう。

しかし、一刀はそんなコトに一切気付かず話を進めた。

「俺と桃香が出会ったのは一年半前で、しかも…」

一刀はふと、彼女の言葉を思い出す。

…半年前に気付いたら此処にいたんだよね…

…多分、ずっと遠い場所から来たんだと思う…

（もしかして…いや、まさかな。）

「愛紗、桃香って髪はピンク色か？」

疑問に思いながらも、一刀は愛紗に質問を続ける。

「はい。そうですが…」

少し戸惑いながらも返答する愛紗。一刀はそんな愛紗にお構い無しに質問をぶつける。

「少し…いや、かなり天然な所があつて…でも誰よりも明るい娘だったか？」

「そういうお方でした…って！？まさか！！」

愛紗も一刀の考えに気付いたようだった。一刀と愛紗と鈴々が会った人…桃香は同一人物だったのではないか？

愛紗も、その可能性を否定しなかった。桃香はいきなり消えてしまった。どこに行ったかすら分からなかった。荷物も置きっぱなしだった。

つまり、その可能性ならば愛紗の今までの疑問が全て解決するのである。

「だとしたら、あのお方は…今どこにいるのでしょうか…？」

「そればかりは分からないけど、この世界のどこかに居る気がするんだ。」

一刀は、そんな予感を抱きながら月を見た。いつの間にか雲は消え、綺麗な満月や星達が輝いていた…

鈴々は既に爆睡していた。途中から話に参加していなかった限り、既に寝ていたのだろう。

愛紗は鈴々を背負うと、

「それでは…お休みなさいませ、ご主人様。」

城の中へと戻っていった。

一刀も、少し時間が経つと気分も落ち着いて来たのか、眠れる気がしていた。

ゆっくり起きあがると、そよ風が吹き始める。まるで、彼に勢いを付けるかの如く……

愛紗&鈴々パート（後書き）

次から袁紹攻略編です！白蓮の活躍に期待して下さいね！

第二十一章：白蓮乃奮闘（ぱいれんのふんとう）（前書き）

いよいよ袁紹攻略編です。追加イベントが多いので、少し長くなるかも知れませんが、では、どうぞ

第二十一章：白蓮乃奮闘（ぱいれんのふんとう）

【???】

ここは遠い場所。普通の人間になら来れるハズもないこの場所に、ソードダンサーと左慈と于吉はいた。

「……くそっ！」

左慈は相変わらずの口調で口を噛み締めていた。

「あの技に勝つには、ソードダンサーの力が必要ですが…。」

二人はソードダンサーを見る。ソードダンサーはいかにも辛そうにしていた。

「再起を計るのは難しい。か…。」

「それまでの間、時間を稼ぎましょう。奴の力では…天下統一し、この場所に現れるのは時間の問題でしょう。」

于吉は相変わらずの冷静な顔で言う。

「策は？」

「マナを全体的に減らしましょう。我々にも被害が出ますが、まあ

問題無いでしょう。更に、魔物も所々で利用すれば。」

この男はいつも頭が回る精霊である。一刀が上級魔法を使えなければ、戦力的には周りと五分になる…とは言えなくても、手間は掛かるだろうと考えていた。

「分かった。しばらくは見学か…つまらんな。」

「今は我慢して下さい、左慈。」

反董卓連合が解散してから二週間が経過した。

朝廷の権限は既に無く、群雄割拠の世の中になっていた。

そんな中で北郷軍は、公孫賛軍と同盟を結ぶコトで、自分達の町を守るうとした。それはつい三日程前のコトである。

白蓮のいる城まで同盟を結び、自分達の城についてからまだ二日しか経ってないのに、事件は起きてしまった。

【軍議】

「相変わらず目茶苦茶ですよね…。」

朱里がため息を付く。

「同盟からまだ三日だというのに…」

愛紗が嘆く。

「袁紹はいつも鈴々達の邪魔をするのだ。」

鈴々が少し怒る。

袁紹軍が、公孫瓚を攻めて来たのである。今頃は既に戦が始まっている。

「しかし…早く助けに行かなければ、白蓮も危ないし…次の標的は俺達だもんな。」

一刀が話を素早くまとめる。一刀としては、白蓮を早く助けたくてしょうがないようだった。

「ですが…軍を出す準備に一日、移動で二日は掛かります。」

「そこで、お兄ちゃんが一人で先に行っちゃうって言い出す訳なのだ…。」

鈴々が少し俯く。また置いてかれると分かりきっているからである。しかし、一刀は意外な言葉を放つ。

「あ、鈴々も連れて行くから。」

「んにゃ!？」

鈴々も含め、全員が驚く。一刀の心の内が読めなかった。

「白蓮の軍は将がいなすぎるからな。俺が連れていける将は一人。その中で1番兵が馴染みやすいのは鈴々だろ？」

一刀は大まかな話をする、直ぐに行けるように支度を始めたいと言った。

愛紗達は、一刀が一度言い出したら止まらない性格を知っていた為に、諦めた様子で

「気をつけて。」

と言っしかなかったとか。

【公孫贇の城門】

白蓮は、籠城戦をしなかった。それは、民に被害が出るのを恐れた為である。それと同時に、白蓮も前線で戦っていた。

「うりゃああああ!!」

ザシュ!

金色の敵兵を次々と倒していくが、数が違い過ぎる為に徐々に押されて来ている。そんな中、白蓮は二人の將軍にあっってしまった…。

「文醜に顔良か。」

白蓮は嫌そうな顔をしている。確かに、このまま二人で戦われては勝ち目が無かった。

「おっとー! 大将発見だぜ!!」

文醜が異様なハイテンションで叫ぶ。

「本当だねー。凄くラッキーだね。」

顔良もうんうんと首を振る。

「うわー。参ったなこりゃ…」

頬を掻きながら、時間を稼ぐ方法を白蓮は考え始めた。

――一刀が単体で援軍で来てくれる――

そんな気がしてならなかった。それは、一人の将としてでは無く、一人の女の子としての勘だった。

「それより文醜。」

公孫賛は武器を降ろして文醜を呼び掛ける。

「なんだ？」

文醜も釣られて武器を降ろす。

「ちょっと猪々子！？いくら相手が武器を降ろしたからって、猪々子が武器を降ろさなくても…」

そっついながらも文醜と顔良は武器を降ろしていた。

「なんで袁紹に仕えてるんだ？」

白蓮は大まじめな顔をして話し掛ける。

「それは…アタイたちは、二人で旅をしてる時に、袁紹様に拾われたんだよ。」

文醜が何時にも無く弱々しい感じで話していた。

「私達、行く宛ても無くて…そのまま旅をしていたら、どうなっていたか…。」

顔良も文醜の話に続くように語り始める。

「そんなコトがあつたんだな…。袁紹も、案外いい奴だったんだな。」

公孫賛は、二人の話を聞いて戦場であるコトや、目の前に猛将が二人もいるコトを忘れて感心していた。

「袁紹様のコト、少しだけ分かってくれてアタイも嬉しいよ。」

「私も、嬉しいです。」

二人は公孫賛に袁紹の良さが伝わって満足そうな顔をしていた。

「でも、そういうアンタだって…援軍の宛てが無いからって籠城戦をしないのもカッコイイよな、斗詩！」

袁紹のコトで、かなり気分を良くした文醜が顔良を呼ぶ。

「そうだよな。民を守る姿勢がステキですよ。」

気分を良くしたのは顔良も同じだったらしい。何時も以上のテンポの速さで喋っていた。

「いや…一刀達が多分来るとは思っただけだな。」

公孫賛は、1番の禁句を言ってしまった。

籠城しなかったのは、その事実を隠蔽する為の工作だったのである。

「……………」

「……………」

二人は絶句した。一刀……つまり北郷軍と言うのは、兵力では劣るが、一騎当千の武将が大量にいるだけに有らず、総大将の北郷一刀は人間離れした力を持つと言われている。

「ってことは、速攻でアンタを倒せばいいってコトだな？」

文醜はやる気満々の様子だった。

「そうだね。一刀さん達の軍の士気も下げられるし、一石二鳥だよ。」

顔良が的確なコトを言うが、勿論二人の耳には届いていなかったりする。

「やれるモノなら、やってみるがいいさ。」

と、公孫賛は強がっているが。

（やばいなあ……自分で言っちゃったよ……なんて馬鹿で間抜けなんだよ……私って奴は……）

内心で焦っていた。勿論そんな状態で倒せる程文醜は甘くは無かった。

ガキッ!!

「くっ!!」

文醜の一撃はかなり重い。受けるだけで手が痺れる。

公孫賛は少し距離を取りながら、時間を稼ぐ方法を考えようとするが…。

「てりゃあ!!」

文醜が容赦無く襲い掛かる為、これ以上は無理だった。

ガキッ!

「っち!!」

公孫賛は、また大きく下がるが……

「貰った!!」

文醜は、その相手の下がる勢いを生かして、カウンターの応用の技を繰り出す。

つまり、下がる意志の状態の人間を吹っ飛ばすコトで、よりダメージを与えると言うものである。

これは、かなり上級技術であるが、文醜に掛ければおてのものだった。

バシッ！！

「ぐあっ！？」

公孫賛は、肩を刺されながら、かなり大きく吹き飛ばされた。

【上空】

「もう着いたのだ？？」

鈴々と一刀は城の上空にいた。勿論、一刀が鈴々をおぶっているのだが。

街の様子は、乱れ一つ無い。と行った所だった。

「白蓮は反対側にいるのか…。」

一刀は砂煙の舞う方向を見る。その方向を見た時、白蓮はちょうど文醜に吹き飛ばされたのである。

「嫌な予感がする。鈴々、急ぐぞ!」

「おう!」つて、鈴々が急ぐ必要は無いのだ。お兄ちゃんが頑張るのだ!」

「そ、そうだったな。」

一刀は調子を崩されながらも、白蓮の待つ方向へ向かった。

「くっそ。」

起き上がる白蓮。左肩からは血が出ている。戦って負けるのは既に時間の問題……のハズだった。

（あれ……体が軽いぞ?）

エクスファイアが光っているのである。

「な、なんだ?」

文醜も少し動揺しているようだった。

（とりあえず、落ち着くか…）

白蓮は腹式呼吸をすると、何かを感じていた。

（水…？そうか…！）

白蓮はあの日の出来事を思い出していた。水の精霊ウンディーネから貰ったエクスフィア。あれから一度も光らなかったあの宝石。

今ならこの力を使える。白蓮はそんな気がしてならなかった。

「いくぞ、文醜！」

白蓮は、剣に力を籠める。力強い水をイメージする。

そして……剣を力いっぱい振り下ろした。

『アクアエッジ！』

剣からは、円盤上になった水が、かなりの高速回転をして文醜を襲う。

「うおっ！」

文醜は、間一髪で避ける。その際に髪が少し切れていた。

その水は、奥にいた兵士に当たった。

「ぐはっ…。」

兵士は、その水に真つ二つに斬られてしまった。

「ちょ、あの技はなんなんだよ!!」

流石の文醜も焦っているようだった。しかし……

「はぁ………はぁ………。」

公孫賛は地面に膝をついていた。

「い、猪々子！今がチャンスだよ!!」

顔良の声で我に帰る。白蓮は力尽きてもう戦えない状況である。留
めを刺すには絶好の機会だった。

「お、おう……なんだかしらねえが……死んで貰うぜ!!」

文醜は、勢い良く白蓮を目掛けて走りだした――。

第二十二章：白蓮之逆襲、一刀之困惑（ぱいれんのぎゃくしゅう、かずとのいっ

「おりゃああああ！」

文醜が距離を詰めるが…

【上空】

「間に合ったな。」

「みたいなのだ。」

白蓮が起き上がった時、二人は既に戦場の上空にいた。

ただし、高度が果てしなく高い為に誰も気付いては居なかったのだが。

しかし、白蓮が膝を付いたのを見ると、そう暢気にもしていられなかった。

「まずいのだ…。」

鈴々が声をあげる。

「そろそろ助けるか…。」

そついうと一刀は手に力を籠める。手には雷を帯びた球体があった。

「これはなんなのだ？」

鈴々が興味深々な様子で聞いてくる。

「説明は後で。これを投げたら突撃するから、しっかりと捕まってるんだよ？」

「分かったのだ。」

鈴々の元気な声と共に、一刀はその球体を投げた。

『パラライボール！』

ドッカーーン！！

「うおおおおっ！！」

文醜は行きなりの爆発で吹き飛ばされた。

「ぶ、文ちゃん！？」

流石の顔良も驚きを隠せなかった。急いで文醜の元へ駆け付ける。

いや、驚いたのはそこにいた人間全員だった。いきなりの爆発である。しかも、その煙には雷が混じっていて、誰が見ても悍ましく見える後継だった。

煙は消えた時、そこには二人の人間が立っていた。一刀と鈴々である。

「燕人張飛、只今参上！なのだ。」

「なんとか間に合ったかな…。」

二人の姿を見るや、白蓮の軍の士気は一気に上昇した。

「うおおおおお！」

「天の御使い様と、張飛様が来て下さった！！」

「援軍が来るんだ！絶対にこの要所を守ってやるぞ！！」

おう！！と元気な声があちこちで聞こえる。そんな中、白蓮が口を開いた。

「かず……と？」

先程の攻撃が余程体に負担が掛かったのか、弱々しい声だった。

「ああ。助けに来た。」

一刀は手を差し延べる。

「助かった……よ。」

しかし、白蓮は気を失ってしまった。その負担はかなりのものだった。

たのдарう。

「そのの兵士！」

一刀は、たまたま近くにいた兵士に声を掛ける。

「はっ！」

「白蓮を頼む。後、皆を城の中に移動させる。籠城戦にする。」

一刀はしかし…と言いたげな兵士を睨む。

「白蓮を助けたかったら黙って領け！！」

「はっ！」

一刀の氣には勝てなかったのか、兵士達は一刀の言うコトを聞いてくれた。

「前線の人間と、俺と鈴々が囷を引き受ける。いいな？二日もすれば俺達の軍が到着する。それまでは何としても耐えるぞ！！」

「おうつ！！」

兵士達は一斉に方向転換をして、城の中へ潜っていった。

「それで、どうするのだ？」

鈴々は一刀の指示を待つ。

「鈴々は、危ない所を探して助けてあげて。俺はこの二人と戦ってるから。」

「うー。つまんないけど…皆の命が大切だから了解なのだ。」

そういうと、鈴々は押され気味な前線を探しながら走って行った。

「話は終わりか？北郷のにいちゃん。」

文醜は不機嫌そうな顔をして一刀を睨み付ける。一騎打ちを邪魔されたのに余程苛立っているのだろう。

「ああ。じっくり相手してやるから安心しろ。」

対する一刀も、命の恩人を傷つけた相手に怒りを見せない程温厚な人間では無かった。

「そうかい。それは良かったよ！！」

台詞を吐くと、文醜は一刀に突撃したが…。

「甘いな。」

ブンッ！！

カキンッ！

「なっ……………」

文醜は今の状況を整理出来なかった。

振り下ろしの寸前を狙って大剣を蹴られたのである。大剣は文醜の真後ろへ円を描いて飛んでいった。

「くそっ！」

文醜は跳び引いて剣の飛んだ場所へ下がる。そして、剣を拾うとまた飛び出していこうとするが…。

「まって文ちゃん！」

顔良が文醜を止めに入る。

「なんだよ斗詩！邪魔すんなってのー！」

文醜は顔良を振り払おうとするが、顔良は更に強くしがみつく。

「私も一緒に戦う。」

「斗詩……………」

珍しく好戦的な顔良を見て、文醜は少し戸惑う。

「北郷さんを倒すには、二人で協力しないと。それでめ厳しいかも知れないけど…文ちゃんだけを死なせたり、危険なコトには合わせられないよ！」

顔良は言いたいコトを言い切ったのか、大きく深呼吸をしながら文醜の返事を待っていた。

「…分かった。一緒に北郷のにちゃんを倒そうぜ!!」

「うん！」

顔良は嬉しそうな顔を浮かべると、直ぐに戦闘体制に入った。

文醜もそれに続き、戦闘体制を作った。

（マズいな……。）

一刀は少しだけ背筋が寒くなるのを感じた。おそらく、両方が死を覚悟しての上で一刀を殺しに掛かるだろう…と。

タイマンでのそれならまだ対抗出来る。しかし、二人ががりでは話が変わってくる。

一人を倒した瞬時に攻撃されては防ぎようが無い。

「てりやあああああー!!」

「えいつ!!」

ガシッ!

ドンッ!

一刀は文醜の剣を受け止め、顔良のハンマーを回避する。

二人の攻撃は単調ではあるが、信頼に足る二人のコンビネーションが、その単調さをカバーする。

故に一刀は押されていた。元々速さが売りの一刀だからこそ回避して時間を稼げているが、そう長くは持たなそうだった。

術を使えば良いのだが、最近のマナの薄さが原因で技は辛うじて使えるものの、術は全く使えなかった。

しかも、一刀の技は殆どがタイマン用の技であった。それらの技のみで複数の敵を相手にするのは難しい話だった。

一刀は後方に下がると、双剣に力を込めながら力いっぱい振る。

『魔神剣・双牙!』

二つの魔神剣がそれぞれに向かい襲う。

「うわっ！」

「ひゃあっ！」

二人は攻撃を何とか押さえるものの、勢いの余り吹き飛ばされる。

一刀は、またパラライボールを作り出していた。

正直、この少女達を殺すのは気が引けていた。二人とは反董卓連合の時に会っただけであるが、彼女達に若干情が写ってしまっていた。故に加減をしてしまったのである。

それは、今に始まったコトでは無い。

華雄と戦った時、恋と闘った時、明らかに加減をしていた。故に恋の時に限っては怪我をしてしまった。

勿論、本気で刺し違えてでも殺そうとする時と殺さないで降伏させる時では、どうしても出せる力が変わってくる。

しかし、その気の迷いが今は命取りに……いや、これからも。常に命取りになる。それに確信を持った一刀は、迷うコトなく二つのパラライボールを容赦無く投げ付けた……はずなのだが。

『パラライボール！』

かなり巨大な爆発音が周りに響く。辺りには煙が立ち上る。

（逃げられたか…。）

タイミング的には逃げるコトは不可能だった。つまり、攻撃が若干それてしまった為に致命的なダメージを受けるコト無く逃げ切られたコトになる。

「お兄ちゃんっ！！」

鈴々の声がするが、一刀は反応出来なかった。いや、もしかしたら聞こえていなかったのかも知れない。

一刀はこの場に及んで突発的に気付いてしまったのである…。

・・・自分はヒトと殺し合いをする覚悟が出来ていないと・・・

夕日と、大量の血が一刀を紅く染めていた。

鈴々の指示の元、場内へと引き上げる兵達には目もくれず、どこが遠い空を見上げていたのだった。

第二十三章：一刀之決意（かずとのけつ）

【公孫賛軍場内】

白蓮の軍は無事に籠城の構えを作るコトが出来た。軍の被害も奇跡的な数字となり、援軍の目通しも立っていた。

しかし、軍の士気はとてつもなく低くなっていた。その理由は他にもない――

「……………」

一刀の調子が明らかにおかしかったからである。鈴々ですら、今の一刀を見るのは初めてであった。

ため息ばかりで、何を話しても返事が帰って来ないのである。

そんな様子を見た兵士は不安になる。凄く当たり前な話だった。

「お兄ちゃん…。」

鈴々が心配そうに一刀を見ている中、

「中に入ってもいいか？」

白蓮の親衛隊が、一刀に用意した部屋に入ろうとする。

「んにゃ！？おねーちゃん起きたのだ？」

鈴々が驚いた様子で聞く。無理も無いだろう。医師が二、三日は起きないと言っていたのだから。

「それは…張飛にも言っておくべきかな…。とりあえず、中へ入れてくれないか？」

「わかったのだ。後、鈴々のコトは鈴々でいいのだ。」

「そうか。それじゃ、私のコトも白蓮でいい。」

ガチャツ。

「かず……っ！！」

白蓮は入って直ぐに一刀に声をかけようとしたが、途中で言葉が止まってしまった。

一刀は何時もと違う、無気力な目をしていた。何かに怯えているような、哀しんでいるような目。

「白…蓮…？」

一刀は今部屋の中に入った少女を確かめるかのように呼んでいた。

「おい！どうしたんだよ一刀っ！」

白蓮が叫ぶ。しかし、一刀は微動だにもしなかった。

無言の時間が数分過ぎた頃。

「俺さ…。」

一刀が口を開く。鈴々は我慢の限界だったが、まだ寝てはいなかった。

「何かあったのか？」

白蓮と鈴々は、一刀を向く。二人とも、内心はホッとしていた。

「もう…一緒には戦えない。」

一刀の一言に肝を抜かれた二人。一刀は話を続ける。

「俺は…人を殺す覚悟が出来ていないんだ。」

それは余りにも矛盾な話だった。

黄巾賊と戦った時、一刀は術により、大量の人数を殺していた。

それは、魔物を倒すと同じ様な感覚だった。

大志の為に…そういいきかせて今まで戦ってきたのである。

しかし…それでいいのだろうか？その疑問に直面してしまったのだ。
った。

「お兄ちゃん…。」

鈴々は、武人だから……。戦いが本望だから気にする必要が無い。
そう言いたかった。

しかし、それで一刀は納得しないコトは知っていた。だから、何も
言えなかった。

「一刀……。」

白蓮は一刀の姿に未だにア然としていた。

「鈴々は、少し外の見回りに行ってくるのだ。」

鈴々は、悲しい目をしながら一刀の部屋を後にした。

「……………」

相変わらず黙り込んでしまう一刀。

「あのさ……」

我に返った白蓮が話を始める。

「一刀は、どうして魔物達と戦おうと思ったんだ？」

一刀は、少し考えた。自分は昔、どうして魔物と戦おうと思ったのかを。

「敵討ち……………。復讐。」

一刀はそう答えたが、白蓮は納得していなかった。

「本当にそう思っているのか？」

白蓮は、ア然としながらも、一刀の昔の話を聞いた時を思い出していた。

だからこそ、その答が間違いだと分かっていた。

「……………」

一刀は考える。自分が何の為に戦っていたのかを。

そして、あの日を思い出した。イセリアでの魔物の襲来の時を。

確かに、敵討ちを考え、外に飛び出した。

だが、外へ出てからは、村の家を破壊していった魔物や、村の人を殺そうとしている魔物を優先的に倒して回った……。

「大切な人を……護りたいって思ったから。」

一刀はようやく、答えにたどり着いた。

「それじゃあさ、今この世界で戦ってるのはなんでなんだ？」

白蓮は一刀に笑顔を向ける。一刀もその意味が分かっていた。

「一刀は何も間違ったコトはしていないんだ。人を殺すとか……確かに、苦しいコトなだけとさ。」

白蓮は、自分の言いたいコトが上手く言えず、頬を掻きながら照れ笑いしていた。

「私は、仲間を護りたい。だから戦ってる。一刀も、仲間を護りたいから戦っているんだ。」

「ああ……そうだよな。」

一刀は、白蓮の言いたいコトは分かっていた。しかし……

「でも、やっぱり人を……。」

「殺したくないなら殺さなくてもいいんだ……」

そっぴいなから、一刀のベツトに向かうと、一刀を抱きしめた。

「ぱ、白蓮……？」

「だから……。だから、もう、一緒に戦えないなんて言わないでくれよ……っ！」

白蓮は力強く抱きしめたつもりだったが、感情的になりすぎている為か、上手く力が込められない。

しかし、一刀にはとても強く響いていた。

自分自身の心の弱さ、甘さに苛立ちを感じながら。

（護りたい人達の為に、これからも戦おう）

一刀は改めて決意した。自分の護りたい人の為ならば、何でもしよう。

「それに……。」「

白蓮が話を続ける。

「何？」「

「一刀が戦いたくないなら戦わなくても……」

いいんだ。白蓮が言う前に。

「それは駄目だ！」

一刀が叫ぶような声を上げる。

「え――。――」

白蓮はいきなりの自体にびっくりしていた。

しかし、それ以上に一刀自身がびっくりしていた。

（なんで俺はこんなにムキになって叫んだんだ？）

また、沈黙が流れる。白蓮も一刀も、さっきの一言が原因で気まずく感じていた。

「あとさ…。」

白蓮が少し控え目な口調で話しかける。

「別に、文醜とか顔良に情けをかけても構わないからな。」

「え？」

思わぬ展開に驚く一刀。

「推測だから…違ったら怒られるかもしれないけどさ。」

人呼吸置いてから白蓮は話を続ける。

「今悩んでたのって、文醜達を殺したく無い気持ちが出て来たからじゃないのか？」

「あ、ああ…。よく分かるな。」

余りにも凶星だった為、戸惑いを隠せない一刀。

「だって、華雄に呂布まで殺さずに仲間にする位だからな。大体の予想はつくさ。」

「そ、そうか。」

愛紗に怒られる理由が凄く見えて来た一刀は、少し冷汗すら見えていた。

「でも、それが一刀の魅力だと私は思うけどな。」

白蓮はすかさずフォローを入れる。最後に
「甘すぎる気もすくけどな。」と付け加えたが。

「ありがとう、白蓮。」

一刀はそういいながら白蓮を抱きしめ返した。

「あっ……………」

白蓮は一瞬何が起きたのかが分からなかった。直ぐに理解したのだが。

「白蓮……………」

「一刀……………」

こうして、二人は眠らない夜を過……………

ガチャッ。

「お兄ちゃん……………って！おねーちゃんと何してるのだっ！」

鈴々の登場によって二人はかなり暴れ回った。

白蓮がベットから降り、一刀もベットから降りた。

「お兄ちゃん…もう、鈴々と一緒に戦ってくれないの…?」

鈴々の目から一滴の涙が頬をつたって零れる。鈴々にとっても、それが1番辛いコトだったのだろう。

「ごめん、もう大丈夫だから。一緒に戦うから。」

一刀は子供をあやす様に鈴々の頭を撫でる。

「本当に?」

鈴々は一刀を見上げる。目の涙は溢れていた。

「ああ…本当だ。心配かけて、悪かったな。」

一刀は鈴々と顔の高さを合わせると、鈴々を抱きしめた。

「うにゃ!?!」

鈴々はいきなりのコトでびっくりして、声を上げる。しかし、気持ち良いのか、それ以上の抵抗はしなかった。

こうして、長い一日は終わりを告げた。

第二十四章：籠城戦（ろっじょうせん）

「へえ」。それがその石なのかー。」

一刀、鈴々、白蓮はエクスフィアの話で盛り上がっていた。

白蓮の超回復の理由を説明している内に、精霊の話等もしなくてはいけなくなってしまったのだが、鈴々は終始はしゃぎながら聞いていた。

（やっぱり鈴々は無邪気な子供なんだな…）

と、のんびり考えながら外を見る。

外には袁紹の軍勢が待機していた。数では明らかに負けているのだが、一刀達の的確な指示と兵の士気の高さにより、籠城戦を若干有利に進んでいた。

明日の早朝には愛紗達も到着し、一気に反撃をするコトが出来る。

今日は完璧な籠城戦を繰り広げた。

袁紹の軍勢は、攻城兵器を持ち出して来たが、火矢などを使い、全て撃退した。

普通ならば、次の策が直ぐに動くハズなのだが…。

【袁紹軍陣地】

「攻城兵器が全て壊れたですって？」

袁紹は怒っていた。

「そう言われましても……。」

「次の作戦をお願いします。」

文醜と顔良は、次の策では成功させようと必死だったのだが。

「もう、作戦なんて考えていませんわ！」

袁紹の発言に二人だけでなく、近くにいた兵士達もが思わず呟く。

「え？」

しかし、周りの空気など気にしない袁紹は

「い、今から考えますわ！」

そう言つと、真剣な表情で考え出した……………。

【公孫賛軍城内】

「あれから全く動かないな……。」

一刀は、どちらかと言うと警戒していた。

あの袁紹のコトである。何かとんでもないコトを企んでいるのかもしれない。

一刀はそう思っていたのだが…。

「まあ、袁紹のコトだし大丈夫だろ。」

「お兄ちゃんは心配しすぎなのだ。」

二人の意見に押され、しぶしぶ納得した様だった。

【袁紹軍陣地】

「くう……………くう……………」

袁紹は考えながら寝ていた。考え始めてから直ぐに寝てしまい、夕食を取る時間に起き、その後に風呂に入りたいだの、駄々をこねた揚句に、また爆睡してしまったのである。

「斗詩い、どうする?」

流石の文醜も、呆れていた様だった。

「これ以上ここで待機しても無駄だよねえ…。」

顔良もお手上げである。

兵達は指示があると信じていて皆、いつでも突撃出来る用意を作っていた。

「今日はもう寝るか？」

文醜は、少し眠たそうに欠伸をしながら顔良を見る。

「そうだね…。兵隊さん達には悪いけど、皆疲れてるだろうしね。」

顔良もなんだかんだで眠そうだった。

「ってことだ。そこのお前、連絡しとけよ。あたい達はまだ寝るかだよ。」

近くの兵を捕まえると、そう命令した。

「はっ。お休みなさいませ、文醜様、顔良様。」

そういうと、兵は走って連絡しに回り始めた……。

【公孫賛軍城内】

「ま、気にしててもしょうがないか。」

「そうなのだ…ってさっきからいつてるのだ。」

鈴々は頬を膨らませていた。

「ま、一刀らしいけどな。」

白蓮も一刀をからかっていた。

一刀は後悔した。白蓮に薦められて三人で酒を飲んだのである。しかし…

「うい…ひつく。お兄ちゃんももっと…飲むのだあ…。」

「一刀お…鈴々の言うとおりだ…もっと飲めえ…。」

二人はとても酒癖が悪かった！

「いや、俺はいい…。」

一刀は寝れぬ夜を過ごすことになってしまった。

とは言っても一刻後には二人とも酔い潰れてしまったのだが。

【公孫贛軍城門前】

「やっと着いたか…。」

「着きましたね…。」

「やつとか…。」

「……………」

愛紗達は、もうすぐ太陽も昇るという時間には既に城門前に着いていた。

城門を守る兵に許可を貰い、兵士達と中を通過すると、愛紗達は一目散に一刀を探しに場内に入っていた。

「ぐう……………」

「くう……………」

「ぐあ……………」

白蓮、鈴々、一刀は仲良く川の字を作りながら眠っていた。

その一見幸せに見える空間を…あの人がぶち壊した。

ガチャッ！！

「ご主人様っ！？」

明らかに必要以上の音を立てながら愛紗が三人の寝ている部屋に侵入する。

その勢いは、案内をした兵士達が硬直する程だったと言う。

そして…川の字で寝ている三人を見た。

かつては自分が川を作っていた一人だった。その時、凄く嬉しかったコトを思い出す。

それと同時に、自分が鈴々と一刀と一緒に川を作れていないコトに悲しくなる。

普通ならば、愛紗のポジションにいる白蓮が妬まれるのだろう。しかし…愛紗は何故か標的を一刀にしていた。

本人にも分からないまま…青龍偃月刀を握りしめて一刀に向かっていった。

「ご主人様の……ご主人様の……馬鹿ア！」

愛紗はその得物を力いっぱい振る。

ガシッツ！

「止めておけ、愛紗！」

華雄が愛紗を止めに入る。しかし、完全に乱れている愛紗は回りか見えていなかった。

「邪魔をするな、華雄！」

「いやっ、こればかりは譲れん!!」

「何をっ……。」

愛紗が力いっぱい華雄を押すが、華雄もそれに負けない力で堪えていた。

「ご主人様が死んでしまったらどうするんだ!？」

「ええい！退けと言っている!」

その後しばらくの間、戦いは続いたとか続かなかったとか。

どちらにしても、その間に一刀達が誰も目を覚まさなかったのは奇跡的なコトだった。

一刀が目を覚ました時、部屋はぐちゃぐちゃで、疲れきって横たわっていた華雄と愛紗がいた。

「……………どうしたの？」

一刀が、近くで様子を見ていたであろう恋に聞く。

「…愛紗……………ご主人様…殺そうとした…。」

恋からとんでもない爆弾発言を受けた一刀は、

「ああ、なるほ……………ええ!!！」

ため息を付く暇も無い位にパニックっていた。

「そういう訳か…。」

その後、華雄に詳しい説明を聞いた一刀は愛紗を見る。

愛紗はただ…申し訳ございませんと顔を伏せていた。

一刀は愛紗の近くに歩み寄る。

「ごめんな、愛紗。」

一刀は愛紗の両手をとる。

「あ…いやべ、べつに…妬いていたりした訳では無くだな…。」

凄く慌てながら自分の気持ちを否定する愛紗。

「にはは…。自分で全部言っちゃったのだ。」

「な…………。」

ただでさえ赤面していたのに…更に真っ赤になってしまった。

「そんなじゃれあいしてる場合じゃないですよっ!」

このまま、エンドレスに話が続くと判断した朱里が話を止めに入る。

「そ、そうだったな。今は戦時中だ。」

一刀が調子を戻すかのように吐く。

「そうでした、ご主人様。大事な話があるので、早急に我等の軍の

所へ来て欲しいのですが。」

愛紗が、ふと思い出したかの様な仕草をしていた。

「大事な話……？分かった。」

一刀は、首を傾げながらも話を了承し、軍を泊めてある場所へと足を運んだ。

【兵舎】

北郷軍の為に用意して貰っていた飯の兵舎。その中で一人だけ女性が混ざっていた。

その容姿は美しく、周りが男だらけで、尚更美しく見える愛紗位の年頃の少女がいた…。

「んで、どうして私だけ一人で男だらけの此処にいたくちやいけないのさ。」

馬超は少し怒り気味だった。愛紗達が喧嘩もとい、じゃれあいをしている間、ずっと兵舎で待たされていたのである。

「すまなかった、馬超殿。ご主人様が全く起きなかったの…。」

「だからって、殺そうとするのは可笑しいだろ…。」

赤面する愛紗を見て起きながら、あっさりと馬超に真相を話す一刀。

「もう…ご主人様はいつもそうやって…。」

周りで鈴々達がクスクスと笑い始める。

「鈴々…恋まで私をからかうな！」

恥ずかしながらの声なので、威圧感は全く感じなかった。更に笑いは大きくなる。

「北郷達の軍って…なんだか楽しそうだな。」

そんな風景をみながら、馬超は関心したように頷いていた。

「気に入ってくれて嬉しいよ。そういえば…」

一刀は、どうして此処にいるのかを思い出して、馬超に話を聞こうとしたが、馬超にそれを制された。

「実は…父が、私達の曹操に殺されたんだ…っ！」

いきなりのコトで一刀は理解出来なかった。

「私もそれには驚いた。あの馬騰殿が曹操にやられるなどと…。」

先に事情を聞いていたのだろう。愛紗は複雑な目をしながら馬超をみていた。

「母だけじゃなくて…私以外の一族は皆殺しにされたんだ…っ！」

晴れていた空が少しずつ曇り始めた。馬超はそんなコトには気にも止めず話を続けた。

「北郷…。あたし達一族の仇を取ってくれないか…。」

仇を取る。それは復讐である。一刀は、その気持ちをよく理解していた。かつて昔の自分がそうだったように…。

しかし一刀は今、復讐心を否定していた。自分がその気持ちを胸に抱いて行動した結果は明白だった…。

友はいなく常に一人。

これがどれだけ辛く、哀しく、報われない話なのか？今の一刀には理解しつつあった。

しかし、馬超の性格ならば…一人でも曹操に突っ込んで行ってしまうだろう。

それを何となく分かっていた一刀は…

「今は曹操を攻めるのは無理だ。此处を守らないといけない。」

「そんな…。」

唇を噛み、下を向く馬超。そんな馬超を気にせず、一刀は続ける。

「でも、いずれ曹操とは戦う。俺達の目指す世界再生をするために。その時まで待ってて欲しい。」

一刀は終始笑顔だった。馬超も話を聞きながら、一刀の笑顔を見て少し気分がよくなったのか。先程より少し大きい声で、

「それじゃ、この戦いから手伝うよ、ご主人様。」

馬超は北郷軍に入るコトを決めた。

「ちょ、いきなりご主人様って…。」

一刀は驚きを隠せないままの対応を取ってしまう。後ろからは恒例の冷たい視線が飛んで来ていた。

「あ、まだ自己紹介をしていなかったな。あたしは馬超。字は孟起。真名は翠って言うんだ。よろしくな、ご主人様。」

「あ、ああ。俺は北郷一刀。宜しく、翠。」

少し戸惑いながらも真名を呼ぶ一刀。すると、翠は急に身体をもじもじさせた。

「じ、実は…。男の人であたしの真名を呼ぶのってさ。ご、ご主人様が始めてなんだよね…。」

「え、そうなの？」

その事実は一刀も驚いていた。暫く沈黙が流れる空気だったのだが…。

「ごほんっ！！そろそろ今日の戦いの会議をしなくてはいけないのでは？ご主人様。」

愛紗の明らかにわざとな咳により、中断された。

「翠も、ご主人様を調子に乗らせないようにな。」

愛紗達は既に翠と真名を教え合っていた。だからだろうか、鈴々も慌てて自己紹介をして、真名で呼び合うようにしていた。

一刀は軍議に向かいながらも翠のコトを考えていたが…

（翠の復讐心は、何とかしないと…。）

「ご主人様っ！早く行こうぜ。」

今は翠の明るさに押されているしかない、とため息をついていた…。

第二十五章：覚醒（かくせい）（前書き）

お久しぶりです。ウンディーネです。

かなり久しぶりの投稿となりました。高校生活は意外にも忙しいんですよ？

さて、第二十五章ですが、少し間が空いてしまったために少し違和感があるかと思います。その辺は申し訳無く思います。

また、誤字脱字もそれなりに出てしまうと思います。もし発見した人は、報告してくださるとありがたいです。

それでは、長くなりましたが、本編をお楽しみください。

第二十五章：覚醒（かくせい）

この炎天下の中、一刀は自らでは無く、朱里の提案によって単体突撃を仕掛けようとしていた。

【連合軍軍議場】

「袁紹軍を倒すには、こちらの強さを見せ付ける必要があると思います。」

北郷軍の軍師である朱里が、この場を仕切っていた。朱里の偉大さは、白蓮の軍の人達には伝わっているようで、軍議は比較的円滑に進んでいる？

「こちらには、愛紗さんや鈴々ちゃんなど、沢山の猛将が揃っています。なので、多少の兵力差があっても、余裕を持って勝てると思います。しかし、問題が有りまして……。」

朱里は後ろめたい顔をしている。一刀は、それなや気づいてフオロ―を入れる。

「城から出るときを狙われたら一網打尽にされるな。」

「はい……。それで、ご主人様お願いします。」

朱里は明らかに目を泳がしている。その考えは読めた。しかし、俺は構わなくても他の皆が納得するとは到底思えなかった。

「俺が空から奇襲をかける……か。それが1番安全かな。」

一応提案して見るが、周りの反応は予想通りだった。

「な、何を言っているのです！？ご主人様にその様な危険な目に合わせる事など、私にはできません！！」

愛紗をはじめ、周りの武将達が、それぞれの不満を叫びだした。

「あの、袁紹さんの軍が敗走させた後に突撃したいので、兵力はなるべく……。」

朱里がいい終わる前に

「分かった。ここは朱里に従おう。」

愛紗が折れた。1番最後まで一刀の身を案じると思われただけに、全員が面喰らった。

「ふふふ、ついに仕返しの時が来たか……。」

愛紗のオーラを感じとった一刀達は、それ以上の追及はしなかった。というよりは、する勇気が無かったのである。

愛紗のオーラは、それほどまでに黒かった。一刀すら話しかけられない程。

【白蓮の城門前】

北郷軍と公孫賛軍は、配列を整えて待機していた。

「な、なあ、り、鈴々？」

翠が、少し震えているような声を出す。

「ん？どうしたのだ？？」

鈴々は、相変わらずの口調で応答している。

「愛紗って、いつもああなのか？？」

翠は愛紗を見る。愛紗は、未だに黒いオーラを放っていた。しかも、半分ニヤケている。

「姉者は、恨みや妬みがある時はああなるのだ。翠も気をつけた方がいいのだ。にはは・・・。」

翠は、何も言わずに頷いた。愛紗は怒らせてはいけない。それだけは翠にも伝わったようだった。

【上空】

一刀は、一人で奇襲のタイミングを図っていた。袁紹軍の様子を伺っているのである。

その中で、標的にはピッタリの場所を見つけた。

「兵糧蔵・・・か。」

遠征している軍の命綱とも言える場所。そこを付けば確実に袁紹軍

は混乱するだろう。

一刀の技があれば、兵糧を燃やすのは簡単である。しかし、一刀はそれを良しとはしない。

ただでさえ貧困な人々がいる世界である。そんな世界で大事な食べ物を燃やすのは、世界再生を目指すコトに矛盾する。

「しょうがないか・・・。」

一刀は、苦戦を覚悟で、兵糧蔵を目掛けて地上に降りた。

【兵糧蔵】

袁紹軍の中でも、最も強い兵達を守る場所。それが兵糧蔵である。袁紹曰く、

「食べ物、何がなんでも死守しなさい!!」

らしい。

故に、エリートな兵隊が多い。彼らも、そんな選ばれた戦士と誇りを持って働いている。

今日も、期待と誇りを胸に働いていた。そんな時だった。一人の兵隊が異変に気づく。

「おい！空を見ろよ！」

そんな声で、20人程の兵隊が一斉に空を見る。空には、奇襲をかけた一刀の姿があった。

マズイ。

全員がそう思ったが、時すでに遅し。

『裂空斬』

一刀の双剣が、1人の兵を捕らえた。

グシャリ。

響く恐怖。地に落ちた一刀の顔は無表情であった。

戦うことを決意した。

そんな気迫が感じられる一刀の前に立つのは19人の兵士。

「うおおおお！」

1人の兵士が一刀に向かって走り出す。

「。。。。」

そんな様子を目にしながら一刀は尚、無表情だった。そして、また剣を構えた。

『魔神剣』

ザシュ。

その一撃は、見事なまでに心臓を貫いた。

地に現れる生々しい赤。まるで悪魔の微笑みのようだった。

「くっ。よくもっ!!」

兵士達は、5、6人で束になって一刀を襲う。

しかし、一刀の前では、それすら無駄な行動でしか無かった。

『閃空裂破』

ザザシュッ。ザシュ。グシャ。

一刀の剣は、容赦なく兵士を傷つけた。

残りの兵士達の足が止まる。こいつには勝てない。だれもがそう感じていた。

「どつしたんだ!？」

この騒ぎを聞きつけた袁紹軍の兵士達が沢山集まってきた。

「ふ、伏兵か!？」

兵士の1人が声をあげる。目の前の状況を見ているからか、声が震えていた。

「袁紹様に報告しなくては!!」

1人の兵士がかけに行く。他の兵士達は一刀を囲むようにしてじわりじわりと近づいてくる。

集まった兵の数はおよそ250。普通の武将なら死を覚悟する人数である。しかし。

「まとめて相手をしてやるよ。」

一刀は、面白いと言いたげな笑みさえ浮かべていた。そして、せの笑みが消えた時、また一つの命が散っていった。

「は、速い……。」

ザシュ。ザシュ。ザシュ。

一刀は一人一人、確実に斬っていった。敵が攻撃する隙すら与えずに。

ザシュ。

「ぐはあ．．．。」

ザクツ。

「？あああつ！？」

【袁紹軍軍議場】

「え、袁紹様！」

兵士が慌てて袁紹の元に駆けつける。軍議場に緊張が走る。特に顔良と文醜は、何かを感じとっているのか、周り以上に緊張していた。

「な、何事ですよ！？軍議にいきなり乱入するなんて、袁家の兵士としての恥を．．．。」

兵士は袁紹の説教をも無視して報告をした。

「兵糧蔵に伏兵が現れました！今にも陥落するかもしれません！」

「な、なんですって！？」

さすがの袁紹でも、今の異常事態には気づいたようだった。足をジタバタさせながら、

「公孫賛さんの貧相は軍の癖に生意気ですわ！！あと、天の身遣いなどと言われる胡散臭い人も援軍にくるなんて・・・」

不平不満を漏らしていた。

「伏兵の人数は！？」

いち早く我に返った顔良が、兵士を落ち着かせる。

「は、はい・・・。それが、申し上げ難いのですが、一人だけです。」

その一言で全員が凍りつく。たった一人の伏兵に軍が翻弄されているのである。にわかに信じ難い話である。

「その一人ってまさか・・・。」

「北郷のにいちゃんだろうな。そんな無茶苦茶が実行出来るなんて。」

顔良の言葉に続いて文醜は、うんうんと頷いた。

「しょうがありません、顔良さん！文醜さん！北郷を討ち取りなさ

い？いいですね？」

袁紹は相変わらずなコトを言っているが、二人は意外にも乗り気だった。前回の戦いが中途半端だった故のものか否。

「わっかりました！！行くぞ！？斗詩い！」

文醜は、先にどんどんスピードをあげながら走っていく。

「ま、待つてよ文ちゃん！？」

顔良は慌てて文醜を追いかけていった・・・。

【白蓮の城門前】

「皆さん！今ですよ！！」

狼煙が上がると同時に太鼓の音が響く。そして城門が開く。袁紹軍内は激しく混乱しているため、城門が開門したのにも関わらず、進軍すらしてこない。

「攻めどきだ！今こそ、我らが力を袁紹に、天下に知らしめるのだ！全軍突撃！！」

「ううおおおおおっ!!」

ついに連合軍も動き出した。袁紹軍と連合軍の本当の戦いはここから始まるのであった。。。

第二十五章：覚醒（かくせい）（後書き）

さて、改めまして、更新の遅さをお詫びさせていただきます。

更新が遅れた1番の原因は、携帯にあるんですよ（汗

じつは、携帯の機種を変えて、念願のiPhoneになったんです！

しかし、iPhoneは文字が非常にうちにくいんですよー。

故に、創作中に集中出来ない。書いたデータが飛んだ。etc・・・

と、私自信にも色々あったのですよ（T ^ T）

あと、漢字変換が難しくて・・・。

次の投稿日も未定ですが、今月中には出来るかと思っています。

楽しみにしてくれる人が1人でもいれば私は幸せです。

では次回！

第二十六章：猛攻（もうこう）（前書き）

もうすぐ、初投稿から二年経つんですよー。

今となつては、この2つの作品を混ぜるなんて考えられない位に思つてます。

因みに、今はシンフォニア色が薄いです。しかし、途中からの展開で、シンフォニアの方も出てくるので、安心してお待ちくださいな。

それでは、どうぞ。

第二十六章：猛攻（もうこう）

【白蓮軍城門前】

「てりやああああ！！」

繰り広げる戦い。その戦いは一方的なものであった。

袁紹軍の兵は、ただの烏合の衆。それを支えていた文醜と顔良もこの場には居ない。数に違いがあるものの、どちらが有利から明白だった。

関羽、張飛、華雄、呂布、公孫賛、馬超。さらには軍師には諸葛亮と、有力な武将が勢ぞろいしている連合軍にとって、袁紹軍は足元にも及ばない。

「うおおおお！！」

翠が暴れる。

「うりゃうりゃうりゃー！！」

鈴々が吹き飛ばす。

「ふんっ！！」

華雄が薙ぎ払う。

「・・・、弱い。」

恋が切り伏せる。

「これが、我らが力だ!!」

愛紗がゲキを飛ばす。

「いつけー!!」

白蓮の白馬隊が、更に敵を攪乱させる。

「敵さんの前衛が崩れて来ましたよ!! 皆さんもう一押しです!」

朱里が適確な指示をだす。

今の連合軍には隙一つない。その人材力は、既にトップクラスであった。

なりより、初めて身内として共に戦うのに、混乱すらない適応力は、言葉にしようがないものである。

【兵糧蔵】

「はっはっはっ……。」

文醜は兵糧蔵へ向かって走る。とにかく走る。

「にいちゃん相手にあいつらが長く持つ筈がないっしょ!!」

一刀の力量は文醜もよく知っていた。数々の噂。そして、ついこの間でも戦いで。

それ故に焦っていた。今頃、何十人も兵士が倒されているだろうか？

推測すら不可能な存在。とにかく、1人でも多くの兵を助けてやりたかった。

「ま、待つてよ文ちゃん……。」

そんな文醜の優しさを誰よりも身近に感じているのが、他ならぬ顔良である。

時々、無茶苦茶言ったり天然であったりするが、誰よりも優しい。それ故の無茶苦茶も少くはない。そんな文醜に惹かれて顔良は文醜の側にいる。

だからこそ、今の文醜のことが心配でならなかった。なにせ、相手はあの北郷一刀である。

敵にすら仁義を重んじ、情けを思ふ心の広さの持ち主。そして、類を見ない無双の剣豪。

前の戦いでは逃げ切ることができたが、今度はそうも行かない。

「もし、文ちゃんが……。」

顔良がそんな思考をしていた時、文醜が足を止めた。

「嘘だろ……。」

そんな声に反応して、顔良も周りをみる。

死体。死体。死体。死体……。

「そんな……。」

周りは兵士の死体で赤く染まっていた。その数は200以上。

「ぐわあああああああ！」

前方で声がする。振り向くと、そこで最後の生き残りの兵士が切り伏せられていた。

北郷一刀によつて。

「来たな……。」

一刀は、顔良と文醜の気配に気づくと振り返る。その目はいつもより鋭く尖っていて、まるで魔物のようであった。

「つく……。」

一刀の余りの気迫に思わず一步下がってしまった文醜。

「本当なら、狼煙も上がったことだし、帰りたいんだが、ただで帰

すわけにはいかない・・・か。」

少し残念な顔をする一刀。やはり、根は優しすぎる人間なのである。

「当たり前だ！袁紹様の軍をこんだけ荒らしておいて！！」

文醜が一刀を目掛けて走る。勢いよく、猪の如く。

『魔神剣！』

剣によって生まれた波動の刃が、文醜を襲う！

「ちい！！」

文醜は、ギリギリでこの攻撃を避ける。しかし、足が止まってしまった。一刀は、この隙ができることを計算していた。

『崩蹴脚！』

ジャンプから繰り出す突きは早く鋭い技だった。文醜はなんとか攻撃を食らわないようにと、守りの態勢をとる。

ガシッ！

「おわっ！！」

確かに、剣は食い止めた。しかし、文醜はその攻撃の重さに耐えることが出来ずに吹き飛んでしまった。

「文ちゃん!？」

文醜は、冊にぶつかり、倒れたまま動かない。

「よ、よくもーッ!」

顔良が一刀に襲いかかる。いつもより何倍もの速さで。

「遅いな。」

一刀はその得物が振り下ろされる前に後ろに回り込んだ。

『獅子戦吼!』

「きゃああ!？」

顔良は文醜の隣へ突き飛ばされた。一刀は、圧倒的な強さを見せて尚、頬も緩ませずに二人の方向をむく。

「そろそろ終わりだな・・・。」

一刀は剣を構えて、突撃の構えを見せる。

「降参するならば、殺しはしない。だけど、まだ闘うならば、容赦もしない。」

いつのまにか、一面が夕焼け空になっていた。鳥がざわつき、風は一層強くなる。周りの木々は激しく揺れ動く。

一刀は、ゆつくりと二人に近づく。

「くそっ……。」

文醜は諦めた様子で地を見る。そこには、先に死んでいった兵士の血のあとが残っている。自分もそうなってしまうのか？そんな不安がよぎる。

「……。」

顔良はまだ諦めてはいなかった。その手には、いつのまに持つてきたのだろうか短剣が握られている。

「隙ができれば投げないと……。」

武人としては情けない。

しかし、顔良にとって文醜の命と比べれば、どうでもいいことだった。

プライドよりも何よりも、友と末永く生きたい。それが顔良の全てだった。

一刀が数メートルまで近づいた時だった。一刀は不自然な物音に気づく。ふと足を止める。背後から、怪しい気配を感じていた。この気配は……。

「魔物か!？」

一刀はその気配の正体に気づき、声と共に振り返る。

グサツ。

「な・・・ッ！」

一刀は突如現れた痛みに驚き、膝をついた。しかし、今はそれを気にしている場合ではない。魔物にひとが殺される事態だけは避けるべき、周りを見張る。

「文ちゃん!! 早く逃げよ!!」

が顔良が文醜に手を差し出す。文醜は、卑怯なことはしたくないと言いつしたが、真剣な表情の顔良に逆らうこともなく、自分たちの得物を掴むと、一刀の背の方向へ走り出した。

走る。

走る。

とにかく、ひたすら、可能な限り早く走る。

一刀のいう通り魔物がいるなら尚更である。噂では、無差別に人を襲う化物とされている。出会わないで陣に帰れますように。

顔良は必死に願ったが、その願いは叶わぬ夢だった。

「嘘でしょ……。」

「なんなんだよ、こいつらは!？」

目の前には、たくさんの魔物が群れを作っていた。魔物たちは、人間、を見つけるとすぐに闘う準備をする。術を使う魔物は術を詠唱しはじめる。それ以外の魔物は、2人を襲いはじめる。

ガキッ。

ガシィ。

「ちいっ!！」

「っ、強い!」

その魔物たちは、大人の人間より数倍デカイやつらである。その攻撃は鋭く強く、2人は、それを避けるので精一杯だった。やがて、術の詠唱は終わりを迎えていた……。

『フリーズランサー』

2人をロックオンした魔物は、フリーズランサーを一斉に発射した。2人は、自分達の死を覚悟した。ここまでか……、と。

顔良は自分のしたことを後悔した。一刀に殺されなくても死ぬ運命にあった。それなのに、自分の意地で、エゴで。彼はただ、一瞬私たちを敵と見なさずに魔物を探していただけだったのに。

もしかしたら、私たちをも守ってくれたのでしょうか……。

そんなことを考えていたら、氷の刃は目の前に来ていた。全てが終わる……はずだった。

『フォースフィールド!』

何かの壁に当たる音がする。顔良と文醜は、驚いて目を開ける、すると目の前には、背中から血を流している1人の男の姿があった。

「って、北郷のにいちゃん!？」

「うそ……。」

2人は、一刀の姿を見て面食らっていた。自分達の敵が自分達を助けるなんて、と。

「最近は、あいつらのせいでマナが薄いが……。やるしかないか。」

一刀は術を詠唱し始める。それも、かなりの速さで。

『フォトン！』

聖なる光が、魔物達に降り注がれる。魔物達は、一瞬怯んだが、すぐに一刀に向き直すと、突撃を仕掛けてきた。

『鳳凰天駆！』

空高くにジャンプする。その時、空中で一刀は炎の鎧を身に付ける。

そして、そのまま剣を突き刺すが如く急降下した。

「グオオオオオオオオオオ！」

魔物が4匹死ぬ。まだ4匹ほど残っている。1匹の魔物が一刀を狙う。しかし、一刀はそれを軽く避けると、素早く斬撃を放つ。

「剛・魔神剣！」

魔物がまた1匹死ぬ。他の魔物達は慌てて術を詠唱し始める。が、

《聖なる翼よ ここに集いて 神の御心を示さん》

『エンジェル・フェザー！』

いつの間にか一刀には美しい翼が生えていて、そこから無数の羽の刃が現れた。その刃は、確実に敵を切り裂き、詠唱の隙を与えなかった。

その後は一刀の1人舞台だった。詠唱はさせず、攻撃は避けてカウンター。更には、多種多様な術技を惜しみなく使った。

『魔皇刃！』

最後に残った敵を貫き、辺りは魔物の屍で埋めつくされていた。

「終わったか……。2人とも、怪我はないか？」

顔良と文醜は硬直していた。一刀の噂は前々から聞いていたし、一度は戦ったことはあるのでわかる。しかし、今のはそれらとは違った。一言で言うならば、「圧倒的な強さ」である。

それに、顔良に限っては、不意打ちで怪我をさせているのにも関わらず、命を助けて貰っている。既に、2人の取るべき行動は決まっていた。

「降伏致します、北郷様。」

第二十六章：猛攻（もうこう）（後書き）

さて、残りは袁紹本隊の陥落のみとなりましたが……。先にあの弓士イベントですね。

袁紹については……。全く考えていません。本音をいえば、生かすか殺すかすら検討中です（^ ^ ;）

まあ……。そのイベントまでには考えておきます！！

では次回！

第二十七章：孤高之狩人（ここっのかりうど）

「てりやあああああ！！！」

一撃。

ザシュツ。

また一撃。

馬超は酷く荒れていた。家族を全て失った哀しみ、自分が守れなかったことに対する苛立ち。そして、曹操に対する憎しみが入り混じっていた。

力が欲しい。ただ、もう誰にも負けない力が。

「うおおおおおおお！！！」

馬超は1人、森の奥までかけていった。孤高の狩人の如く……。

「さて……。そろそろ戻らないと流石にまずいかな。」

一刀はゆっくりと起き上がる。背中傷は、顔良に手当てしてもらったようである

「全く……。斗詩の治療はあたしの特権だったのになー。」

文醜は、不満そうな顔をしているが、どうしてだか笑っているような感覚がした。

「もう。文ちゃんはやキモチやなくなつて。」

「だ、誰がヤキモチなんかやいてるってんだよ!？」

文醜は顔を真っ赤にしながら否定するが、まるで説得力がない。

「二人とも、ついてきてくれるか? いまから、自陣に帰るんだけど。」

文醜が少し可愛そうだったのか、一刀は助け船を出した。

「わかつてるよ。一応、捕虜の身だもんな。」

「少し、騒ぎ過ぎでしたよね……。すいません。」

2人とも落ち着いたようだった。この様子だと、また愛紗に色々言われるだろうが、一刀は気にはしていないようだった。

（殺す必要がなければ殺さなくてもいい……。か。今更何を考えるんだか。）

一刀は、こちらの世界に来てから、何万人もの命をうばってきた。なのに、月日が経つほど。沢山の人間を殺せば殺す程、人を傷つけることを拒むようになっていた。

（元々がそういう人間だったのかな？）

一刀は深くは考えないことにしていた。考えても答えが見つかりにくい話は苦手なのもまた、彼らしさである。

遠くから風の音が聞こえる。既に夕日は沈む寸前で、更に雲が少しずつ顔を出している。

「誰か来る！」

一刀は、顔良と文醜に警戒するように促した。2人は疑いもせず一刀に従い、周囲を見ていた。

すると、一刀の前に1人の女性が現れた。素晴らしいスタイルの持ち主で、長い槍を構え、ポニーテールの髪型がよく似合っていた。

「翠じゃないか。迎えに来てくれたのか？」

「……。」

翠は、無言で一刀を睨みつける。隣にいる顔良や文醜にも、いや三人を睨みつけているようであった。

「ど、どうしたんだ。何かあったのか？」

「あんたは……。あんたは！愛紗達を裏切ったのか！」

翠は武器を構える。その顔は、憎しみの色に染まっていた。

「な、何故そうなる！？」

一刀も流石に動揺している。何がどうなっているのかサッパリだった。

「ずっと見てたんだよ……。顔良達と楽しそうに会話してただろ！怪我の治療もしてもらってただろ！」

どうやら、つい先程までの流れを翠は正反対にとっただけらしい。翠は一刀に斬りかかる。

「ちい！」

ガシッ！

鋭い金属音が辺りを支配する。その攻撃はとにかく重い。

一刀は一旦距離をおく。今は翠を納得させる説明をする必要がある。その為には、

（戦わざるをえない……。か。）

一刀は構える。しかし、手に持っている剣を近くの木に刺し始めた。

「ッ!？」

翠も一刀の行動には驚きを隠せないようだった。

「な、なにしてんだよ!？」

「今の翠だったら、武器なんか使わなくても勝てるさ。」

一刀は、丸腰のまま前進する。翠は未だに気を取られていて、一刀の前進に合わせて後退するしかなかった。

だが、翠は負ける訳にはいかなかった。自分と同じ哀しみを愛紗達に背負わせたくはない。その思いが翠を激しく突き動かす。

「うおおおおお!」

翠は勢いよく、槍を突き出す。一刀は軽く避けて、自分の間合いを保つ。

「思ったより早いな。これは、少し気合い入れないとな!」

今度は一刀が攻撃を仕掛ける。踏み切ったかと思えば、一瞬で翠の背後へ回る。

「いくぞっ!」

鋭い蹴り上げを放つ。素早い動きに蹴り。疾風のごとき攻撃に翠は

なんとか防ぐので精一杯だった。

「っちい!!」

翠は、力押し of 戦いは得意であるが、一刀のような細かい動きを余儀なくされる相手は非常にやり難い。

それならどうするか？ 答えは簡単に導けた。自分のやりやすいようにするだけだ。

「うおりゃあああ!!」

ブンッ。

「よっ、と。」

一刀はまるで全てをみきつっているかのように避ける。

「どうした！？ 翠の力はその程度か？」

一刀はわざと挑発する。怒りと憎しみに為すがままの翠相手には、最も楽な戦い方だった。

「ふざけんな!!」

ブンッ。

また大きく空振りをする。翠の攻撃は早く鋭い。しかし、その無駄な感情が焦点を濁らせている。結果、一刀に攻撃は当たらないのだ。

った。

数十分経過した。2人の戦いはまだ続いていたが、徐々に変化していった。

「はぁ……。はぁ……。」

翠はかなり疲労していた。あれだけの回数空振りし続けたのである。無理もない。

しかも、一刀は全く疲れた様子も見せない。背中なら血が多少流れているのは、顔良との一件が原因だろう。

「もう、決着はついただろ。話を聞いてくれよ。」

一刀は和解を求めるが、翠は言うことを聞こうとはしなかった。

「う、うるさいっ！あたしは負けられないんだ！！」

翠は勢いだけに任せて攻撃をしかけるが、早さも鋭さも欠けている一撃は当然のごとく一刀には当たらない。

ここまで翠が熱くなるには何か理由があるはずだった。それは、一刀も知っているある思い。

自己嫌悪。

自分をも少し強ければ。皆を護る強さがあれば。自分だけ生きてしまえば、尚更高ぶってしまう感情。

翠は、その気持ちに押しつぶされそうになりながらも槍を振っているのである。

一刀も、今の翠を見ているのが限界になった。落ち着くまで身体を動かさず予定だったが……。一刀は次の一撃を足で弾いた。

「なっ……。」

ズサッ。

得物が地に刺さる。決着は呆気なくついてしまった。翠から力が抜けていく。また、守れないのか？と。

翠が膝をつくより早く一刀は翠を抱きしめる。翠は抵抗するコトはなかった。

「なにしてんだよ……。」

とどめを刺せ。そう言わんばかりの一言。その言葉に一刀は耳もかさなかった。

「お前のせいじゃない。」

「えっ……。」

一刀の言葉は、翠の心の奥に響いていた。自分が悩んで悔やんで止まなかった。自分を苦しめていた物から少しずつ解放されはじめていた。

「だから、自分を余り責めるな。そんな感情抱いたって誰も救われないんだ。」

「あたしは……悪くないのか？一族唯一の生き残りなのに、仇すら取れないのか？」

心の闇が少しずつ明るく照らされる。心の傷が、僅かな光に反応して癒されていく……。

「まだ、泣いてすらいなかったんだろ？今は思いつきらないていいんだ。」

「あたしは……。あたしは……。ううっ。」

その後、翠は今まで溜め込んでいた涙を思っ存分に流した。一刀は、翠が泣き止むまで、ずっと抱きしめていた。

「ご主人様……。あの、そのっ、」

翠は恥じらいを見せながら、自分の気持ちを精一杯に伝えようとする。

「あり・・・がとう。」

「俺も、昔に護れなかった人がいたんだ。だから、その気持ちは痛いくらいに分かるんだ。」

「ご主人様も？」

「ああ。だけど、いくら自分を憎んでも何も生まれなかった。」

「そ、そうだったんだ。はは・・・あたしと同じなんだな。」

翠は笑顔を取り戻していた。その顔に、以前の自己嫌悪はなく、未来に羽ばたく乙女の顔をした。

「はーあー。ごちそーさまでしたと。」

文醜が思わず声を漏らす。

「あ、忘れた。文醜と顔良のことだが・・・。」

一刀は、顔良と文醜が降伏して、一応捕虜の形を取っていることを説明した。

「そ、そうだったのか。本当にびっくりしたよ。」

翠はなんとか納得してくれたようだった。

「しかし、にいちゃんは優しいんだなー。」

「ほんとだよな。马超さんの為にワザと戦うなんて。もし、私たちが
だったら・・・。」

顔良は次第に震え出した。文醜は苦笑いしながらも、汗が頬を伝っている。

「大丈夫。俺達はそんなことはしないから。」

一刀は優しく笑いかける。

「・・・。」

「・・・。」

二人は、顔を赤くして俯いてしまった。

「どうしたんだ？」

全く理由に気づかない一刀。

「ご主人様って……。」

翠はそんな一刀を見てただ、呆然としていた。フラグをいくらい立てるつもりなのか、と……。

こうして、白蓮を無事に守り切ったのだった。そこに生まれたのは新たな絆である。その絆を胸にしまい、一刀は明日もかけ行くのであ……。

「ご主人様。何故此奴らとそんなに仲良くしているのですか？」

「また愛紗が鬼になつたのだ……。」

「はう……。」

一刀はまだまだ大変そうである。

真夜中の空には、曇一つなく、
たくさんの輝く星と丸い月がいつも
以上に輝いていた。

第二十八章・袁紹之陰謀（えんしょうのいんぼう）（前書き）

新年明けましておめでとございます！

というわけで、今年も地味に更新していききたいと思います。ヨロシクツ！

第二十八章：袁紹之陰謀（えんしょうのいんぼう）

「今から、袁紹さんを追いかけます。」

一刀達が帰って来てまもなくして、朱里が次の行動について説明を始めた。とはいっても、全員がその内容を理解していたかのように準備をしていた。

「突然いきなりどうしたんだ？」

「何をいつているのですか。今から袁紹を徹底的に叩いておかなければ、いづれまた猛威を振るうこととなります。」

朱里のかわりに愛紗が説明に入る。相手が袁紹だけに、やる気は十分だった。少し笑い声を漏らしている辺り、袁紹に対する恨みは並ではない。

確かに今袁紹を倒さなければ、いづれまた攻めて来るだろう。僅かな判断の遅れは全てを台無しにする。

「分かった。今すぐ行こう！」

全軍がその声に反応する。更に動きを活発にしながら進軍の準備を整える。

「それで、二人はどうしたい？」

一刀は、文醜と顔良を見る。その目には一点の曇りがあるようだ。

「ついていくよ。この戦の末を見るのもあたし達の責任だから。」

「そうだよ。北郷さん！私達も連れて行ってくれますか？」

二人の眼に僅かな迷いは感じる。しかし、それ以上に武人のしての責任を全うしようとする決意を感じる。

夜は明け、朝日が山から顔を出し、一刀達を明るく照らしていた。

「ご主人様。準備が出来ました。」

朱里の声が聞こえる。その声で三人は前線へ向かって歩き出す……。

【城門近郊】

あれから丸一日が過ぎた。前方には大きな城門がそびえている。

「ここは、中立地点のはずでしたが……。」

愛紗がぼやく。そうなるのも無理の無い話し合つである。何故ならば、戦闘態勢を整えて一刀の軍を待ち伏せしているのだから。

「なんてこつた……。」

軍が動きを止める。しかし、その間にも袁紹軍は逃げている。早くなんとかしたい。その気持ちが裏目に出てしまい、思考回路が閉ざされる。

「何か策を……。」

その時だった。商人がこちらに向かって歩いてきた。

「誰だ？」

愛紗が少しキツめの声をあげる。

「街の商人です。それよりも、北郷一刀様宛に手紙を授かったのですが……。確か、登り龍といえは分かるとか何とか。」

商人の一言で余計混乱する北郷軍。余りにも唐突過ぎた。

「もしかして、趙雲さんでは無いでしょうか？」

素早く混乱から返った朱里。一刀達も納得しているようだった。

「多分、そうだろう。こんな時でも平気な顔して使いを出すんだか

らな。」

一刀はその文を受け取ると、皆に伝わるように、声をあげて読んだ。

「この城の城主の黄忠殿は、御自身の最愛の娘と、我が娘のように可愛がっていた拾い子を入質に捕らえているために、しょうがなく闘っているそうだ・・・なんて話だ。」

一刀は、渡された紙を握り絞める。そして、黄忠の城を見つめた。

「袁紹め・・・。どれだけ卑劣なことをすれば気がすむのだ!!」

愛紗は余りに過酷な状況に苛立っていた。それは、その場にいた全員が感じていることだった。

「とりあえず、戦うよりは、助けたいって気持ちが強いんだけど・・・。どうかな?」

一刀の意見にすんなり頷く一同。しかし、これからが大変だった。誰が、どうやって黄忠の城内に侵入するのか?

黄忠の軍だけでなく、袁紹の刺客が居るのは明らかだった。誰がかいぐくれるのだろうか。

「あたし達に・・・。手伝わせてくれないか?」

そんな時。降伏して捕虜になっていた文醜が名乗りを上げた。

「ぶ、文ちゃん!?!」

いきなりのことで驚く顔良。それには気にせず、文醜は話を続ける。

「姫があんなことするなんてさ。あたしも信じらんないんだ。でも・・。これが間違ってるのだけは分かる！それに、あたしなら袁紹の刺客にあっても問題無いだろ？」

文醜の目は澄んでいた。その目に圧倒された愛紗は、

「分かった。その代わり、顔良は人質とさせてもらう。万が一もあるからな。」

条件を出して了承した。

「分かった。でも、あたし一人じゃ、趙雲って人も納得しないんじゃないのか？」

「分かっている。だから、鈴々と一緒にいつてもらう。それでいいな？朱里。」

朱里は、いきなり話を振られて焦っているのか、少し手をジタバタさせている。

「は、はい！それが最善だと思います。」

直ぐに準備を始める二人。その顔は真剣そのものの武人の顔である。

「二人共、気をつけてな。」

一刀は、そんな言葉をかけながら、これからのことを考えていた。

（袁紹……。お前を許す訳にはいかない。）

武人とは程遠いであろう女の子を平気な顔で戦の道具にする悪魔を、一刀は許せなかった。自然に手が震える。

しかし、その震えは一瞬にして止まった。その手は温もりを感じていた。

「ご主人様。気持ちは痛い位に分かります。が、今は落ち着いて下さい。」

愛紗は一刀の手を握っていた。その手はやはり、女の子の手だった。しかし、自分以上の感情がねじ込まれているのに気づく。

「どうして、文醜を了承したんだ？」

何かがおかしいと言えば、文醜を了承したことからおかしい話だった。

「自分の慕っていた方が道を踏み外されたのです。自分の憧れを見失ってしまうのです。それは……。あのお方が離れて行ったあの日に感じたものと同じだとしたら……。」

「愛紗っ。」

それ以上の言葉は要らなかった。愛紗の君主に対する愛情が、どれだけ真つ直ぐであるかは、一刀も痛い位に分かっていた。

「俺は、大義を果たすまではどこにもいかないからな。」

一刀は愛紗の肩に手を置く。愛紗は、その反対の手を一刀の手に重ねる。

「ありがとうございます、ご主人様。」

「あのー。いつまで続ける予定ですか？」

朱里は顔だけを笑顔にして一刀につめよる。一刀は、余りの迫力に襲われ、自然と朱里の頭を撫でる。

「えへへ．．．。」

「．．．。北郷軍にはこれを止める奴がないのか？」

北郷軍についてきた白蓮がため息を漏らす。

「あいつらを止める程の力を、私は持つてはおらぬからな．．．。」

華雄もため息を漏らす。比較的客観視思考の二人がこれから苦勞するのは言つまでもないだろう。

「朱里！今から、時間を稼ぐ方向を考えなくては行けなかったのはなかったのか！？」

今度は朱里が一刀を一人で支配しようとしていたので、愛紗が正論を出して止めに入る。

この辺りで口が回るのは、流石の関雲長というところである。

「そ、そうでした！！皆さん、早速軍議に入りましょう。」

朱里は慌てて準備を始めた。愛紗も何やらブツブツ言いながらも朱里を手伝う。

「ふう……。。」

一刀はため息を付く。本当に疲れているようだった。

「ご主人様も苦勞なさるな。」

華雄は、すかさず一刀に駆け寄ると、話をし始めていた。まるで、今がチャンスといわんばかりに……。

「あいつもだったのか……。。」

白蓮は顔に手を当てながら嘆く。

「ほんと、ここの奴らって面白いよな。」

翠が白蓮のところまで歩いてきた。

「一刀は、こんなにせがまれて……。大変だろうな。」

白蓮は、まるで友を見るような眼で一刀を見る。

「とかいって、あんたもご主人様が好きなんじゃないのか？」

翠の急な質問に、白蓮は慌てて反論する。

「そ、そんな訳ではないぞ！」

「その割には、随分と慌ててるじゃないか。」

翠は、白蓮の様子を見て楽しんでいる様だった。それに悔しみを感じた白蓮は、切り返すことにした。

「そっという翠は、ご主人様をどう思っただ？」

翠は切り返されるや否、顔を真っ赤にした。

「そ、それはだな、その……。えっと……。」

翠の顔がどんどん赤くなっていく。その様子が少し面白かったのか、白蓮は少し笑ってしまった。

「って、笑うなよ!!！」

翠は照れ怒りながら、その場を去っていった。

白蓮は、一人で考えていた。

「今のあたしの力じゃ城なんか護れないし、北郷に降った方がいいかもしれないな。」

思わず口に出してしまったが、近くには誰もいなかったなので、その声が誰かに届くことは無かった・・・。

第二十九章：囚人之姫君（とらわれたひめぎみ）

「さて、本題に入る訳だが……。」

軍議は、概ねの流れを掴むに至った。それは、一騎討ちを申し込ん
で時間稼ぎをするということだった。

「誰が一騎討ちをするか？ ですよね……。」

「私がやる。」

華雄が名乗りを挙げる。しかし、誰も頷かない。

「華雄。お前は一騎討ちに熱くなりすぎるから駄目だ。」

その一言に全員が頷く。どうやら全員が同じ考えだったらしい。

「やはり……。愛紗さんと、ご主人様に向かって貰います。」

朱里の発言に翠が納得のいかない様子で口を開く。

「ご主人様は兎も角、なんで愛紗なんだよ!？」

理解ができないといわんばかりに不平を漏らす翠。その様子からは、
もう完全に北郷軍に馴染んだようだった。

「むしろ、俺は妥当だと思うんだけど……。」

全員が納得している中、翠だけが納得していないようだった。

「二人が、一番臨機応変に動けますから。黄忠さんがどんな行動に出るかは、予想が付きませんし。」

翠は難しい顔をして首を捻る。話がよく分かっていないようだった。

「とにかく、ご主人様と行ってくる。さあ、行きましょう、ご主人様。」

「あ、ああ……。」

愛紗は一刀と共に敵陣へ向かっていった。

「な、なんでご主人様を行かせたんだよ!？」

翠は、相変わらず不満そうだった。

「ご主人様が天の御使いですから、それを利用した脅しをかければ、流石の黄忠さんも愛紗さんと一騎討ちをしてくれる筈です。」

朱里は、大丈夫ですよ。といわんばかりの笑顔だった。

翠は、納得こそしないものの、引き下がった。翠も武人としては戦いたかったのだろう。

翠の腕は軽く震えていて、今すぐにも体を動かしたい様に見えた。それに気づいた恋が、翠によっていく。

「……今は我慢……。」

恋の一言で我に帰る翠。その様子を見兼ねた白蓮が翠の元へと向かう。

「今は、落ち着いて対処出来る人間が必要だったんだろ。正直、今の翠じゃ一騎討ちには出せないよ。」

翠は自分の行動をふりかえる。どう見積もっても周りが見えていたとは言えない言動だった。

そんなじょうたいで戦っても黄忠には勝てない。そう思っていた。

「・・・悪かったよ。」

翠は自分を過ちに気づき、その場に残っていた人に謝った。

「いいんですよ。翠さんも色々重なって大変なんですから。」

朱里の言葉に皆が頷く。この居心地の良い空間こそが、北郷軍の武器なのではないか。翠は純粹に考えていた。

曇り一つない空には、太陽が真っ直ぐに上がっていた。

【城下町】

鈴々と文醜は、城下町に無事侵入した。中は、塵一つない空間だった。

普段ならば、きっと賑わっついて非常に暖かい間違うなのだろう。

しかし、今は戦争中である。そんな日常を匂わせる町は、何かに恐れるが如く静まっていた。

その一角に、誰かを待つようにして建物にもたれかかっている人がいる。

鋭い目。すらつとしたスタイルの乙女の手には長い槍の得物。鈴々はその姿に見覚えがあった。

鈴々はその名を呼ぼうとするが、

「何奴だ!？」

先に気配を感じた趙雲が得物を鈴々の方向へ向ける。

「にやにや!？いきなり何をするのだ!」

鈴々は、いきなりの趙雲の対応に抗議する。久々の再会がこれでは納得できないのは当たり前である。

「お、張飛殿だったか。これは失礼。袁紹の刺客がいるやもしれんからな。ずっと警戒していたのだ。」

趙雲は得物をしまうと、すこし呆れたため息を付く。

「まさか、あの手紙を信じるとはな……。」

「お兄ちゃん疑うことを知らないのだ。」

苦笑いをする鈴々。もう慣れた、という所だろうか。

「さて、今から囚われる場所を探したいのだが。一つ聞いてもいいか？」

趙雲の目付きが変わる。その目は憎き敵を見る目そのものだった。

「何故に文醜がいるのだ？彼奴は袁紹軍の重鎮と聞いた気がするのだが。」

再び趙雲は得物を構えようとする。しかし、文醜はむしろ得物を置き、堂々とした声で叫ぶ。

「あたしは、北郷に降ったんだ！それに、姫の今やっていることはあたしも許せないんだ……。」

文醜は眼を赤くしていた。今の彼女の状況はとても辛い。それを聞いた趙雲は黙って得物を降ろす。

「……では、三人で手分けして探す。情報が入り次第他の二人を呼ぶように。」

趙雲は、作戦を告げた。二人は首を縦に振る。

「しかし、名前で読んでいては、袁紹軍の刺客に気づかれるやもしれん。真名で呼び合うことにしよう。」

「え、でも……。」

文醜は戸惑う。自分はどう考えても裏切る可能性は高く見えている筈である。そんな人間とあっさり真名で呼び合うなんて考えられない話だった。

「それが出来ぬなら信用などせん。あの汚らしい策しかとれぬ所にでも帰るがいい。」

趙雲は決して信用はしていない。試しているのである。彼女が、味方になるのかならないのかを確かめる為に。

「……分かった。あたしの真名は猪々子だ。」

文醜の目に戸惑いは無かった。彼女はこれから北郷の武将になるのである。

「ふ……。いい目をしているな。それならば、私の真名を預けようか。我が真名は星だ。」

「鈴々の真名は鈴々なのだ。」

三人はお互いを一度見つめると、それぞれの方向へ向かって行った……。

【城門前】

黄忠の軍勢が構える中、一刀と愛紗はたった二騎でその目の前に立った。

「太守黄忠に告ぐ！我の要求を飲め！さもなくば、その城に天罰を与える！」

一刀は柄にも無いことではあったが、勢いよく言った。

「一応、お聞き致しましょう！」

黄忠の綺麗な声が響き渡る。

「我の一の家臣である、この関雲長と一騎打ちをせよ！そちらが勝てば我等は撤退する。しかし、こちらが勝った場合は制圧させてもらう！」

沈黙が辺りを支配する。兵士達に緊張が走る中、黄忠は決断した。

「いいでしょう、この黄忠がお相手します。」

黄忠は、軍勢の中からただ一騎で一刀達の前に来た。

「素晴らしい度胸だ、黄忠。」

「あら、あなた達だって私達の軍勢の前に二騎で来たじゃないの。それに比べたらたいしたことありません。」

二人は、同時に得物を構えた。一刀は邪魔にならないように距離を置いた。

静粛な時が流れる。風一つない荒野には、睨み合う蒙者が二人。

「てりやあああー!!」

先に愛紗が動く。素早い動きで黄忠に向かって行く。

しかし黄忠は、その攻撃をバックステップをふんで避ける。

愛紗の一撃は重いが、そこまで早く連続で攻撃することが出来ない。

その一瞬の隙について黄忠は素早く矢を放つ。

「ちい!!」

愛紗は、かろうじて矢を全て弾く。

「私の矢5本をその近距離で……。かなりの使い手のようね。」

黄忠は怪しげな笑みを浮かべる。そして、また大量の矢を放つ。今度は6本である。

「この距離ならッ！」

愛紗は飛んだ。その高さは矢を避けるには十分だった。

そのまま黄忠を目掛けて得物を降ろしにかかる。

「くっ!!」

黄忠は避けることが出来ずに弓で受け止める。

「どうした？もう終わりか！」

愛紗は、数メートルの間合を取る。

「私は……。負けられないの。」

黄忠は静かな声で語り始める。

「どうしても、負けてはいけないの!!母として!!」

その声は気付けば怒声となっていた。黄忠は一刀の方へ矢をむける。その数は7本。

「なっ……。」

流石の愛紗も呆気をとられて動くことが出来ない。一刀も、状況が

理解出来ずにいた。

その状況にも気にせず、黄忠はその弓で大量の矢を放った……。矢は容赦なく一刀の方へとかけていく。

「ご主人様ーッ！」

愛紗の悲鳴が荒野を支配していた。

第三十章：桃香（とうか）

一刀は砂煙に包まれていた。一刀に矢が放たれ、その方向には確かに一刀がいた。だが、当たる瞬間に何かが起こり、今の状態に至る。

「ご主人様！！」

愛紗が主君の名を呼ぶ。しかし、その主君に反応する様子は無い。

「ごめんなさい・・・。」

黄忠の眼に涙が浮かぶ。愛紗は当然、彼女の行動を簡単に許すことは出来ない。

「貴様ツ！武人としての誇りを捨てるだけでなく、不意打ちでご主人様を射るとは・・・ツ！」

黄忠は力無く、しかし堂々と前を見つめていた。

「私は、どうしてもあなた達に負ける訳には行かなかったの・・・。武人としてではなくて、は・・・。」

「おれはまだ死んではないぞ！！」

黄忠が言い切るよりも早く威勢のいい声が聞こえて来る。愛紗は、その声に聞き覚えがあった。

「ご主人様！？」

二人がふり返ると、そこには8本全ての矢を抱えた一刀の姿があった。

「愛紗でなくて、俺と直接やりたいのか？」

一刀はその矢を黄忠へ向かって投げる。黄忠は、自分の足元へ転がってきた矢を見つめる。地は暗い色をしていた。しかし、その地には確実に光が差し込んでいた。とても温かい光達の輝きと共に。

「ええ……。あなたを倒せば戦が終わりますから。」

黄忠は、笑みを浮かべながら矢を握る。その手は先よりも鋭さを増していた。

「私の全身全霊。受け取って頂きます。」

「ああ。」

静かな風が流れる。その風は優しく二人を包み込むように流れていた。

場内で探索していた三人は、元の場所へと集合していた。

「何か手がかりはあったか？」

「こっちにはなかったのだ。」

「こっちもぜんぜん駄目だった。」

ため息をつかずにはいられない状況だった。外の騒がしさからいつて時間にそこまで猶予があるとは到底思えない。

「しかたないか・・・。」

星は少し咳払いをした。本人も余り乗り気ではないようだった。

「混乱を招くかもしれんが、町民に話を伝える。」

星の提案に二人は首を縦にふる。きっと三人はおなじ考えをしていたのだろう。

「急がないと大変なことになるのだ！」

「そうだな！急がないと。」

三人は、またそれぞれの方向に向かおうとしたが、

「お待ちください。」

三人とは違う男の声が聞こえてきた。

「貴様は何奴だ。」

星は振りかえる。そこには、野菜を片手に握っていて、頭には白いねじり鉢巻をしている人が立っていた。

「失礼ですが、先ほどの話からして、黄忠様の戦う理由を知っているように見受けられますが……。」

「そなたも知っているというのか？」

星は睨みつける。もしかしたら袁紹の刺客かもしれない。

「はい。袁紹軍の兵士に、娘様と劉玄德様が連れていかれるのを見逃してしましまして、皆で場所を突き止めたまではよかったのですが……。」

町民の顔が曇る。そこには、悔しさと苛立ちが少しだけ現れたような気がした。

「勇気がなかった……か。」

星は、口調も顔色も変えずに言い放った。

「はい。でも、お三方は見た感じかなりの使い手に見えます。ですから、どうかお助け願います……。このままでは、娘様も、黄忠様も、苦しいはずですから。」

町民は深々と頭を下げた。そんな一生懸命な姿をみた三人は、快く承諾した。

「我々は、人質を救う為にきた。手伝うのは当然だ。早速案内してもらいたい。」

話を進める星。その傍で混乱している人がいた。

「お姉ちゃん・・・？」

「どうしたんだよ、鈴々？」

猪々子は始めて見た寂しそうな顔を見て、思わず聞いていた。

「劉玄德って、昔に一緒に旅をしていた桃香お姉ちゃんと同じ名前なのだ。」

その一言に、町民は驚きの表情をした。

「な、なぜ黄忠様しか呼んでいない真名を知っているのですか！？」

「にやにや！？本当にお姉ちゃんなのだ？」

鈴々は、目を輝かせていた。彼女の行方不明により、長い間あつていなかった、義理とはいえ姉に会えるかもしれないのである。鈴々が喜ぶのも当然である。

「そうかもしれんな。とにかく、時間が無い。急いで案内してもらうぞ。」

「はいっ！」

四人は、急いでその場所へと向かっていった。

しばらくすると、手入れの行き届いていない、まるでスラム街のよ
うな場所へと辿り着いた。

「この角の先を少しみて下さい。」

星は言われるがまま角から先を覗き見る。すると、そこには確かに
袁紹軍の兵士がうろついていた。

「なる程な……。あの奥に、お二方がいると？」

「恐らくは……。」

町民の返事を聞くや否、星は自分の得物を構える。

「鈴々！猪々子！今から建物へ突撃する。邪魔をする人間は切り捨
てろ！」

「おうつ！なのだ！」

「……。」

猪々子は黙り込んでしまふ。目の前に立ちふさがるのは元仲間。とても、迷わずにいられる訳がない。しかし、今決断しなくては後悔する……。そんな気がしていた。

「分かった。皆、行くぞ！」

猪々子は、一番前に出て飛び出していった。

「つて！私が先頭だろうが！」

星が慌てて猪々子を追いかける。

「あつ！二人とも、待つのだ！！」

鈴々も星の後ろ姿を追いかける。

「て、敵襲！？」

慌てふためく袁紹軍の兵士達。そんな状況お構いなしに三人は切りかかる。

「てりやああああ！」

「うりやああああ！」

「うおらああああ！」

三人の武は、袁紹軍の兵士達を倒すには十分だった。数分程度で、十人程いた兵士達を一掃したのである。

「さて、あの中にいるのか？」

星は、眼の前の無駄に大きい場所を指す。

「あそこからは人がいる気配がするのだ。いつてみるのだ！」

鈴々は走り出す。どこか懐かしい匂いに誘われて……。

「まてよっ！」

猪々子が慌てて鈴々を追いかける。星もそれに続く。

「鍵がかかっているのだ……。」

鈴々の向かった場所には鍵がかかっていた。中に兵士が一人だけ残っているのである。

「ふっふっふっ……。これで次に鍵を開けて置き、入ってきた瞬間にこの短剣を投げつけてやれば……。」

中にいる男が怪しい笑みを浮かべながら笑っている。

「や、やめて下さい！」

中で捕らえられている少女が声を上げる。とても透き通る声の持ち主である。

「うつせーんだよー!!」

中の男が怒鳴り声を上げる。その時、少女の隣にいた幼児が泣いてしまいそうになる。

「うつっ……。こわいよっ……。う……。うつっ……。」

「よしよし、大丈夫だからね。きっと大丈夫だから……。」

少女は、隣の幼児を宥めるので精一杯になり、それ以上の抗議はできなくなった。

外で、鈴々は距離を取っていた。かなり頑丈な建物だが、鈴々には関係ないようだった。

「本当に壊せるのか？」

猪々子が不思議そうに聞く。並以上のレベルでも、鉄の扉を壊すのは至難の技である。

「アレを使うのか……。ならば、楽に出来るだろうな。」

星は前に見えているので分かるようだった。あの技を。

「いつくのだーっ！」

鈴々は勢い良く扉に向かって走る。

その音を聞いた男が、扉の鍵を外し、その場から3メートル位離れた所で、短剣を投げる構えをした。が。

『獅子戦吼！』

鈴々は、得物に貯めた気をありつたけの力で扉へぶつけた。

「きたっ！」

扉が開いた瞬間、扉がひらいた。しかし、扉は勢い任せに男の方へと飛んできた。

「ぬわっ！？」

ガンッ！

鈴々が中に入った時、既に男が気絶していたのは言うまでも無い。

「んにゃ？中に袁紹の兵士がいると思ったけど、いないのだ。」

周りを見渡す鈴々。その角に、二人の人影があった。鈴々は、その方へ得物を向ける。

「誰なのだ!!」

鈴々が叫ぶと同時に、部屋に少しだけ日が入る。少し暖かくなった部屋で、鈴々は泣きそうな顔をした見覚えのある人に出会った。

「鈴々ちゃん・・・？」

少女は彼女の真名を呼ぶ。それは彼女が鈴々を知っている何よりの証拠だった。

「お姉ちゃん！」

鈴々は、夢のような再会に思わず子供の自分を出してしまいながらも、桃香の元へと駆け出していた・・・。

第三十一章：再会（さいかい）

「そういえば、鈴々ちゃんは私達の軍と戦ってるんじゃないの？」

再会後、星や猪々子と合流した鈴々と桃香は、城門へと走っていた。

「そうなのだけど、二人を助ければ無駄に争う必要がないってお兄ちゃんが言ってたのだ。」

桃香もお兄ちゃんが誰なのかは知っていた。天の御使いと名乗る青年で、あの呂布をも撃退した猛将でありながら、善政を施している。

「ふふふつ。素敵な人なんだろうね。」

桃花は、どんな人が想像する。あの世界であつた、私を大事に思ってくれた人。あの時、里は壊されてしまったが、無事でいるだろうか。また会えるだろうか。

考えていくうちに、不安が積もる。さよならも言えずに戻ってきてしまったのである。

「桃香お姉ちゃん？」

黄忠の娘、璃々の声で桃花は我にかえる。桃花は気がつく足が止まってしまっていた。

「え、あ……。ごめんごめん。」

「まったく、気をつけるのだ。いまでも、お兄ちゃんと黄忠が戦っ

ているのだ！」

鈴々も相変わらざるの桃香の点ねぶりに苦笑いする。

「鈴々も、足を止めるな。璃々殿と桃香殿の身が我らの手元にある以上、これ以上の戦いは無意味だからな。」

「うん、そうだね。早く行かないと！」

五人は、城門を目指して城下町を駆け抜けていった・・・。

「はあっ・・・。はあっ・・・。」

黄忠は息を荒げていた。一刀との戦いはいつにも増して激しいものとなっていた。

それは、この複雑な事情による戦であることが原因なのは間違いない。

黄忠からしてみたら、人質をとられていてどうしようもない上、敗北すれば、自分の愛する娘が殺されてしまうかもしれない。

本来ならとても戦なんか、ましてや一騎討ちなど、出来る状態では無かった。人質の娘をも考えず無心になるなど、そもそも無謀な話である。

「もう勝敗は見えている。黄忠、降参してくれ。」

「・・・ッ!」

勝敗は見えている。黄忠はそれを理解していた。ここまで一騎討ちをして、どちらが優勢か？誰が見ても分かる結果だった。

「私は・・・。戦わなければいけないの!」

黄忠はそれでも、娘を救うまでは戦う決意でいた。たとえ自分が滅びようと・・・。

その目は既に鬼神と化していた。恐るものは何もなかった。ただ、武人として、母として、一騎討ちに望んでいた。

「成程。なら、俺も本気でやらせて頂く!」

一刀は剣を構える。無駄も隙もない構えだった。

「この一撃が・・・。私の本気の市毛機です。」

黄忠は一本の矢を構える。最後になるであろう一撃を。

「はッ!」

黄忠の放った矢は、いままでの矢より遥かに鋭く、重く、一刀に襲い掛かる。

一刀は、身動きもせず、その矢を見ていた。

「今だ！」

『守護方陣』

一刀は天に剣を掲げる。すると、謎の模様が地面に描かれる。

「なっ！？」

突如現れた模様に、黄忠の全身全霊の一撃をかき消されてしまった。

「そんな・・・。」

思わず膝をつく黄忠。一刀は少しずつ黄忠に近づいていった。

「顔を上げてよ、黄忠さん。」

一刀は手をさし伸ばす。しかし、黄忠は反応をしない。負けを認めたら、璃々が帰ってこれなくなってしまう。

その時、黄忠の兵の一人が、黄忠に向かって矢を構えていた。

「危ないっ！」

一刀は、黄忠をかばい、前へ出る。矢は、黄忠を目掛けてまっすぐ飛んでいる。

『魔神剣！』

一刀は剣で作った衝撃波で矢を砕く。その後、直ぐに術を唱え始めた。

『ライトニング！』

晴れた空から、一本の雷が落ちる。その雷は確実に矢を放った兵士を貫いた。

「袁紹め……。人質だけでなく、ここまでするなんてな。」

一刀はボソツと本音をはいてしまった。黄忠は一刀の一言で知ってしまった。

「全て、分かっていらしたのですね……。」

その時、城門が開く音がした。全員が城門をふりかえる。そこには、4人の美少女と、一人の幼女の姿があった。

「璃々……。」

黄忠は、その姿をみるなり城門へ走っていった。

「お疲れさまでした。」

ふと背後から声がする。ふりかえると愛紗が笑みを浮かべながら立っていた。

「ああ。俺たちも行くのか。」

「はい。ご主人様。」

一刀と愛紗肩を並べながら黄忠の後を追いかけていった。

「おかーさん!?!」

璃々は、こちらに走って来る黄忠を見るなり叫ぶと、その方向へ向かい走り出していた。

「うわわ、まってよ!」

桃香は、璃々を追いかける。他の三人も、二人を追いかけるように走る。

「璃々!?!」

「おかーさん!?!」

二人の親子は、無事再会した。二人にこれといった怪我も無く、幸せを抱きしめていた。

「ふうー。一時は本当にどうなるかと思ったよー。ありがとう、鈴々ちゃん。」

「お礼なら、お兄ちゃんに言うのだ。ほら、愛紗と一緒に走ってき
てるのだ。」

鈴々は二人が来る方角を指をさす。桃香はその方向を見る。夕焼け
と重なって懐かしい顔が見えてくる。

「あつ本当だ！愛紗ちゃんと、隣にいるのが・・・え？」

桃香は、突然体を震えさせていた。隣にいる人間に見覚えがあるか
らである。

「どうしたのだ？」

不思議そうに見つめる鈴々に桃香は反応出来なかった。

「おい。そっちも成功したみたいだ・・・な？」

一刀も桃香を見るなり、凍りついたかのように動かなくなった。

「やはり桃香様でしたか。お久しぶりです。」

愛紗は桃香に一礼する。しかし、桃香はまったく反応しない。

しばらくの沈黙のち、一刀が震えた声で囁く。

「・・・桃香？桃香なのか？」

「うん……。カズ君。」

透き通った風の音が、辺りを駆けていく。沈黙が続きながらも、刀は続けていた。

「生きてたのか……。」

「うん、あの時に、この世界に戻されたみたい。」

「そうだったのか。」

一刀は、言葉を吐いて直ぐに桃かを抱きしめた。

「え、か、カズ君？」

「よかった……。！本当によかった……。！」

一刀の目から涙が自然に流れ落ちる。桃香は、再び重なり合うその体の温もりを感じていた。

「ごめんなさい……。カズ君……。！」

桃香も涙を流していた。二人の抱擁は、しばらく続いていた……。

「だとしても！会えなかった期間は私達の方が短かったのですが？」

その後、愛紗の咳払いにより、感動の再会は流されて……。今に至る。

「うつゝ……。ごめんなさい。」

桃香は愛紗によりお説教を受けている。何故かその脇で一刀も正座させられているのは言つまでもない。

「私達だつて、その。ずっと桃香様を心配していたのですよ？」

「ふふーん。愛紗ちゃん、もしかしてヤキモチ？」

桃香の一言は的を射たようだった。愛紗は、ぬう。とうなり声を上げていた。

「ごめんね、愛紗ちゃん。それと、ただいまっ！」

「……。わ、分かればよろしいのです。」

愛紗は顔を背けると、どこかへ歩き出していた。この二人の微妙な上下関係を見てしまったのは気のせいだろうか。

「あ……。。」

正座させられていた一刀達に、一人の女性が近づいて来た。

「黄忠さん、お願いがあるのですが。」

「は、はい……。」

「俺達は、今から袁紹を追わなければなりません。ここを通していただけないでしょうか。」

ああ。と、顔を緩ませる黄忠。

「勿論、構いません。私達も、袁紹は許せませんし……。なりよ
り、璃々の命の恩人ですから。」

「ありがとうございます。」

一刀は丁寧に頭を下げる。黄忠の大人な雰囲気が一刀を畏らせているのだろうか。

「ふふつ。そんなに畏ることなんか無いんですよ。」

黄忠は大人の余裕で一刀を見つめていた。

「それより、私からもお願いがあるのですが。」

「はっ、はい……?」

会話で圧倒されている一刀は、若干戸惑っているようだ。

「私達と、この城を、あなた様に委ねたいのです。」

黄忠は口調を変えていた。その透き通った目は真剣そのものだった。

」

「え？」

「刀も、いきなりの話でついていけないようだった。」

「私の力でこの町を守るには限界があります。だから、あなたに委ねたいのです。」

その言葉で一刀はようやく気づいた。黄忠の一城の主人としての大きい決断をしたということ。

「・・・分かった、俺たちの所でいいのなら喜んで。」

「刀は手を差し出した。しかし、黄忠はその手を握ろうとはしなかった。」

「ありがとうございます、ご主人様。」

「えっ!？」

「一礼して尚、ご主人様と呼ぶ黄忠。一刀はすこし照れている。それが、大人のパワーなのだろう。」

「カズ君・・・。私もご主人様って呼んじゃえばいいのかな？」

「桃香は、笑顔で一刀をみるが、誰がみても分かるくらいの作り笑いだった。」

「あの、えっと・・・。」

更に戸惑う一刀。それに、追い討ちをかけるかの如く、星がやってきた。

「ふむ……。では、私もご主人様と呼ぶことにしよう。」

一刀が黄忠、桃香、星に囲まれたところ、北郷軍は戦が終わったことを知ったので城前にやってきた。

しかし、来るなり、見知らぬ女性達に囲まれている一刀をみるなり、北郷軍はざわめき始める。

「うわっ。なんなんだよ、この状況は……。って、桃香!？」

「はわわ、ご主人様の周りに胸が、胸が大きい方が沢山います……。どうせ、私なんて……。」

「……。おなか……。すいた。」

「全く、ご主人様はなにをやっているのだから。」

「いつの間にあんなに沢山……。」

武将達が次から次へといいたいことを言う。そのざわめいた空間は、愛紗の雷が落ちるまで続いた……。

第三十二章：宝石（エクスファイア）（前書き）

たまたま書き置きが見つかったので投稿します。若干短いですが、
チョットだけお楽しみください。

第三十二章：宝石（エクスファイア）

「こほん！ では、決まったことを確認するぞ。」

愛紗はまだ怒っていた。愛紗の怒りは誰も抑えられない。故に、怒りが治まるのを待っただけだった。途中で桃香が茶化したりしたが、愛紗はそれを鬼の眼で返した。それ以来、愛紗に逆らう人間は誰も居なかった。

一遍に色々な事があつた為に、最初は混乱していたが、愛紗の冷静（？）な判断により概ねのことは決まった。

まずは、顔良と文醜のこと。先の戦いで文醜の活躍により、二人を将として認めることになった。愛紗は気が向かないようだったが、二人の目は澄んでいた。それを見た愛紗は、「しょうがない……」等と言いながらも、二人を認めたのだった。

次に、黄忠のことである。黄忠は、ここの城に居させるべきか、将として使うべきか。愛紗としては、先の戦いで卑怯な行動が少し引つかかっていた。しかし、一刀達は、それは家族を思うあまり、武人の誇りより、母親としての誇りを尊重しただけであって、武人としての偽りは無いと判断したため、将として認めることになった。趙雲に限っては、前に約束をしていたこともあったので、いうまでも無く受け入れることになった。

問題は、最後の人物であつた。

「……え！？ わ、わたし？」

何故かいきなり焦り出している劉備。まだ詳しく決まっていないうのは彼女のみだった。

劉備のポジションだけは非常に難しい。まず一つポイントなのは、愛紗と鈴々の義姉なのである。あの二人の義姉となれば、武人としても優れている筈・・・なのだが。

「武術に長けている訳でも無く、兵法に詳しい訳でもないんですよ・・・。」

朱里の呟く通り、劉備は武術に長けている訳でも無く、兵法に詳しい訳でも無い。ただ、彼女の理想に二人が肝銘を受けた。それならば、国のトップに立てばいいのだが・・・。

「今更、ご主人様を降ろすことも難しい・・・か。」

いきなり、リーダーが変わってしまったても、民が混乱するだけである。その状況を作れば、反発勢力すら立つ危険性があつた。

「これは難しい問題だ・・・。」

「あたしって、そんなに邪魔存在だったのかな・・・。」

おおよと力なくしゃがみ込んでしまう。自分の存在意義を測かられている・・・には少しオーバーアクションな気もするが。

「いやいや、そんなことはありませんよ、桃香様。」

「そうなのだ。鈴々たちに、お姉ちゃんが必要なのだ！」

二人がどんなに力強く否定しても、案がなければ説得力も無に等しい。

「あのさ……。」

翠が申し訳なさそうに割り込んでくる。その目は何処か泳いでいるようにも見えた。

「何か言い案でも見つけたのか、翠？」

愛紗が、期待を込めた目で見つめる。しかし、その目を見ることなく翠は言い放った。

「早くしないと、袁紹が寢床に帰っちまうんじゃないのか？」

完全に忘れてたと言わんばかりの表情をみせる愛紗達。そうこうしているうちに、時間は過ぎ去って行く。

「朱里！！号令を！！」

「はわわっ、こ、これより、袁紹さんを全力で追いかけます！！皆さん、準備して下さい！！」

兵が素早く動き始める。翠や、恋、武将達も自分の場所へと帰っていく。

「私は、何処にいればいいのかな？」

桃香の疑問に、一刀は厳しい表情をした。

「お前は残れ。」

「え．．．？」

「今から行くのは戦闘だ。桃香は、この街に残っててくれ。帰りによって行くから。」

冷たい風が、二人の間を通り過ぎた。周りの武将達の急ぐ音だけが響く。

「嫌だよ．．．。」

桃香がその沈黙を破る。

「せつかくまた会えたのに！！もう、離れて待ったりはしたくないよ！！！」

「桃香．．．。」

いままで見たことのない桃香の強い意思に圧倒される一刀。

「私は戦ったりは出来ないけど、せめて戦場にいさせて。」

「．．．。」

本当なら、何があっても桃香を城へ待機させるべきなのだろう、しかし。

「分かったよ。その代わり、俺たちから絶対離れるなよ?」

（なんだろう、懐かしいな・・・。）

それが何故なのか本人は分かっていないのだろうか、一刀は困惑しているようにも見える。

「うん!」

桃香はその薄い雨雲のような空気に負けないようなくらい、明るい声を上げた。一刀も、それ以上は考えないようにした。

「あの、小娘はなんで私の邪魔ばかり……。」

怒りを表にしながら馬を飛ばす袁紹。兵達も疲労が溜まっていた。

「袁紹様……。そろそろ休憩を……。」

「うるさいですわッ!!」

「……。」

そんなやり取りの中、一人の男が、地から出てきた。

「貴方が、あの、名門の中の名門、袁家の方ですか?」

「だ、だれですの!?!」

いきなり現れた男に恐怖感を抱く袁紹。

「まあまあ、落ち着いて下さい。私は、貴方に贈り物を届けにきただけですから。」

そういつて、男は袁紹に箱を渡す。

「……贈り物ですって?」

送り主すら分らない贈り物を渡された袁紹は戸惑う表情を見せていた。

「この箱を使えば、貴方は他の人間には負けない力を得るでしょう。まあ、使うか使わないかは貴方次第ですけど。それでは、私は忙しいので失礼します。」

そういつて、男は闇に消えて言った。

「な、なんだったのです・・・？」

いきなりのこととで頭が混乱する袁紹。その箱も、開けたら毒が舞う危険性すらある。普通ならば素直に開けたりならしないだろう。

しかし、袁紹は、あの一言が気になっていた。

――他の人間には負けない力を得るでしょう――

「ゴクツ・・・。」

この箱は罠かもしれない。しかし、もしも罠ではなかったら。曹操や一刀を見返す強さを得ることが出来る。

袁紹は、その力を得ることに溺れた。その箱を豪快に開け、中身の宝石を直ぐに指定の場所に付けた・・・。

その宝石は、一刀の付けているモノに似ていて異なるものだった・・・。

数日後、進軍していた一刀達に一つの伝令が届いた。朱里が出させた偵察隊の一人だろうか。

「え、袁紹が単騎で、曹操軍を撤退させました!!」

『!?!』

その言葉に、誰もが驚きを隠すことが出来なかった。

（まさか・・・な。）

一刀は、最悪の事態を想定した。瞬間的に覚醒するなど通常はあり得ない。

この宝石の力を除いては――

第三十二章：宝石（エクスファイア）（後書き）

原作を友達に貸している為、未だ更新は未定です。受験もあるんで、尚更厳しいです（泣

またしばらく更新未定が続きます。本当に申し訳ありません。

では、次回！

第三十三章：力的絆（ちからときずな）（前書き）

まず最初に。pvアクセスが100万人を突破しました！！今まで
応援してくださってありがとうございます。

今は受験生故に、中々更新出来ない日々が続くかと思いますが、こ
れからも暖かく見守ってください。一生懸命頑張ります。

第三十三章：力的絆（ちからときずな）

【曹操軍陣地】

「全軍！直ちに撤退の用意！！これ以上の戦いは無意味！素早く洛陽まで移動せよ！！」

曹操の号令が響く。兵隊達もこの事態に同様しているのか、中々動けないでいた。

「一体どうなってるのよ！！」

相手は1万弱の烏合の衆。それを統率してるのは、あの袁紹。だれもが楽に制圧できるだろうと思っていた。

しかし。

「いきますわよ！」

『魔神剣』

『ファイアーボール』

数々の素早い技と身のこなしで、曹操軍の兵士を次々になぎ倒していく將軍がいた。

「おーっほっほっほ！甘いですわよ！！」

『魔神剣・双牙』

それは、誰もが予想しなかった強さで。

「撤退だ！撤退！」

「早くしないと置いていくぞ！」

曹操軍を撤退させるに至った。

「さて、次はあの、北郷とやらの番ですわね……。」

袁紹は、怪しい笑みを浮かべながら、自陣の城へと帰って行った。

【袁紹城外】

「やっとみえてきましたね。」

愛紗の声に全員がその城を見上げた。その城の大きさは、今まで見た中でも一番大きかった。

「なんてデカイ城なんだよ．．．。」

翠もこの城の大きさは圧巻だったらしい。

「袁紹さんらしいっていったら、らしいですけど．．．。」

流石の朱里も啞然とする。ここまで大きいと、策を考えるのにも一苦労だ。

「真つ正面から戦っても絶対に勝てないのだ。」

これだけの敷地があれば、中には何十万の兵がいるかも分からない。下手に攻勢に出ればそれはそれで厳しい戦いになる。

「とりあえず、猪々子、斗詩、城のことで情報が欲しいんだけど。」

二人は、あれこれ考え始めるが、やはりこれだけ大きく金の掛かってそうな建物である。そんな穴なんかがある筈も．．．

「そうだ！！あたし達が普段姫のお仕置きから逃げる時に使うあの抜け道を使えばいいじゃん。」

「ああ、あの道なら確かに行けるかもしれないね。でも．．．。」

2人は顔を紅く染まる。2人以外の武将達は、この状況についていけない。

「姫からのお仕置きから逃げる為に使っていた隠し通路、なんて恥ずかしいことは言えないよな。」

「ぶ、文ちゃん・・・自分で言っちゃってるよ・・・」

一瞬、変な空気が、陣中を覆う。このままだと話がそれそうだと判断した一刀はワザとらしく咳き込んだ。

「ごほん、事情はともかく、その道を通れば、袁紹のいるところにいけるんだな？」

「はい、兵に見つかることも無くいけるかと思えます。」

斗詩が冷静に返答するが、まだ少し顔が紅いようにも見える。

「なら、さっそく案内してくれ。」

「ちょ、ご主人様！？また1人で行動するつもりですか！！」

愛紗が猛烈に反対する。主を敵陣に1人で乗り込むのである。そう反対するのも無理はない。

「無駄な犠牲を出さずに戦うにはこれが1番なんだ。後、早くいかないと大変なことになるかもしれない。」

「大変なこと、ってなんなんですか？」

朱里が不思議そうに尋ねてくる。

「もし、袁紹が俺や白蓮が使ってるこの宝石から力を引き出しているのが覚醒の原因だったらの話なんだが・・・」

一刀は、エクスフィアの性能、危険性、なぜ白蓮が持っているのか・・・などを簡単に説明した。

「そんなことがあったんですか・・・本当なら、ご主人様から詳しく話を聞くところですが、今回は急ぎですから、特別に目を瞑ります。」

「・・・後で追及されるのか？」

「はい、もちろん。」

愛紗から黒い光が立ち込める。一刀も流石に苦笑いするしかなかった。

「それでは、私が護衛について・・・」

愛紗が、一刀の護衛になろうと去り気なく提案したのだが、武将達は、この展開を読んでいたのか、皆が皆反対した。

「鈴々がいくのだー！」

「たまには私にもいかせてくれ！」

「恋・・・行く。」

みんながそれぞれを主張する中。1人が静かな声で一刀の前へ出た。

「私に行かせてはくれないか？」

「白蓮・・・」

「私は、一度袁紹にやられてる。だけど、この戦いで、やられっぱなしで終わりたいはないんだ。それに、この数日で、こいつの使い方も分かってきたしな。」

白蓮はそういつて宝石をちらつかせる。

「そういうことならば、仕方ない。ご主人様を宜しく頼む。」

「本当なら、皆で行きたいけど、残る皆にもやってもらいたいことがあるんだ。」

「陽動ですね。もう手配はしてあります。ご主人様、白蓮さん、猪々子さん、斗詩さん。気をつけて行ってきたください。」

「ああ、こっちの指揮は任せたぞ、朱里。」

一刀は朱里の頭を優しく撫でる。

「えへへ・・・頑張ります。」

「それじゃ、時間もないみたいだし、さっさと姫のところに行かないとな！」

「そうだね。姫のことが心配だもん！」

「護れなかった人達がたくさんいるんだ．．．だから、その人達の思いも込めて私は闘う！」

「エクスファイアが暴走しないうちに、なんとかしないと取り返しのつかないことになる。みんな、俺に力を貸してくれ！」

「「応っ！！」」

【城門西】

「この川ぞいを歩くと、場内に侵入できるんだよ。」

「ここに来るのも久しぶりだね。」

猪々子と斗詩が一刀達を案内した場所は、場内に繋がっている川ぞいだった。

そこには、1人ずつならなんとか移動できるであろうスペースが確保されている。

「ここを通るのか．．．」

「マジかよ．．．」

中からは、湿り気により独特の匂いがする場所である。2人が乗り気でないのも無理ない。

「確かに、最初は私も文ちゃんも抵抗があっただんですけど。」

「逆に、兵達は寄ってこないから、安全に中に入れるってこと。さあ、どんどん行こうぜ！」

猪々子と斗詩が中に入っていく。一刀と白蓮もそれにしぶしぶついていった。

【城門】

愛紗達は、袁紹のいる城の城門から微妙な距離を置いた。

「私達は、待つことしかできないのか？」

「はい。今はここで待機して、様子を見ることしかできないかと．．．」

一刀を敵陣に放り込んだのである。家臣がその身を心配するのは当

たり前である。

「相変わらず、お兄ちゃんは無茶するのだ。」

「恋・・・行きたい。」

ガガガガガッ。

そんなときだった。突如城門が開いた。入り口には沢山の袁紹軍の兵士達が武器を構えていた。

「「!?!」」

愛紗達は、いきなりの事態に、驚かざるを得なかった。

【???】

一刀達は道なき道をひたすらに進む。

「やけに外が騒がしくないか？」

「ほんとだ。何かあったのか？」

「北郷軍と袁紹軍が衝突してしまったのではないのでしょうか。」

中からも、外からも騒がしい声が聞こえるようになった。戦いが始まったのは確かだった。

「みんな、急ぐぞ!!」

「「応っ!!」」

4人は走る。ひたすらに走る。すると、進行方向から一つの光が見えてくる。出口はもうすぐだ。

「もうすぐだ!!」

猪々子が声を出した時、その光が4人を包み込む。

その光の先にあったのは・・・

ガヴヴヴヴヴ・・・

「うあ、や、やめろっ、うあーッ。」

「なんだよ・・・これ。」

そこにあっしたのは、魔物が人を喰らう姿だった。

まさに地獄絵図という具合。それが、城下町全体で起きている。

「あ、あそこ！！！」

白蓮が指差した先には、女の子が1人立っていた。その目の前には、鎌を持った亡霊のような魔物が、少女を喰らおうとしている。

「助けないと！！！」

「ぶ、文ちゃん！間に合わないよ！！！」

「でも！行かなくちゃ駄目だ！！目の前で守らなくちゃいけない人

達がいるんだ！」

ビュン。

それは一瞬のことだった。その間に、目の前の魔物は姿を消していた。

「ご、ご主人様？」

斗詩が思わず声をあげる。魔物の代わりにその場に居たのは北郷一刀だった。

「大丈夫か！？」

「う、うん。」

少女は、恐怖の余り涙を流していた。一刀は、その涙を拭くと、また剣を構えた。

「猪々子、斗詩。一般人を安全な所に避難させてくれ。」

「えっ……」

「白蓮と俺は、魔物を討伐してから城に潜入する。街の人がこんなに苦しんでいるのに、助けもしない袁紹が將軍の器を持つとは思えない。いくぞ、白蓮！」

「お、応ッ！！」

一刀と白蓮が勢いよく去っていくのを、猪々子と斗詩は黙って見つ

めていた。

「ははっ・・・無力だよな。」

猪々子が呟いた言葉は、彼女に似合わない悲観的な言葉だった。

「あたし達は、袁紹軍の武將で、皆を守らなくちゃいけない存在なのに、守れなかったんだな。」

「文ちゃん・・・」

いきなりのに、斗詩もなんて声をかけていいのか分からなかった。

けれど、彼女の中で1つだけ確信していることがあった。

「早く、街の人を避難させようよ、文ちゃん・・・」

しかし、猪々子は俯いたままだった。

このままではいけない。そう思った斗詩は、恥じらいを捨てて叫んだ。

「ぶ、文ちゃんの、バカーッ!!」

「!?!」

普段は自分の意見を積極的に言わない斗詩が大声を出したのだ。い

つも一緒にいる猪々子が驚くのも無理ない。

「ご主人様が言っただように、私たちには私たちにしか出来ないことがあるよ！！ここで逃げたら、ずっと何も出来ないままだよ。私は、そんなの嫌。」

「斗詩．．．」

「ご主人様みたいに、強くなくても、私たちに出来ることをやればいいんだよ、きっと．．だから、だから、元気出して、文ちゃん。」

その心は、猪々子を勇気づけるには十分だった。

「分かった。」

「ぶ、文ちゃん．．．？」

「こうなったら、とことんやってやるーッ！！」

「文ちゃん．．．」

二人は、いつものコンビネーションで、街の人達を安全な場所へと案内した。二人がいつも以上に張り切っていたのを、民も感心していた。

しかし。

その間にも、タイムリミットが近づいていることに、誰も気づいてはいなかった・・・

第三十三章：力的絆（ちからときずな）（後書き）

感想の方には、既に展開の方を予想している方も居るようです。そういった感想を見ると、自然と嬉しくなります。ありがとうございます。

これからも、色々と考えたくなるような、興味が湧く作品を書くように、一掃努力していきたいと思います。

大分間が空いてきているので、文が下手になっている気がして（汗
めげずに書きますb

では、次回！！

第三十四章：決戦（けっせん）（前書き）

お久しぶりです。大変長らくお待たせしました。第三十四章がやっと仕上がりしました。後3章くらいで袁紹編が終わると思います。そこまで行ってやっと第一幕って感じですよ。それについては、追いついて説明させていただきます。では、どうぞ。

第三十四章：決戦（けっせん）

【城内】

「うおおおおお！！」

一刀は、人を襲う魔物を片っ端から倒していく。

『ファーストエイド』

「怪我は大丈夫か？」

白蓮は、怪我をしている人の手当てをしながら一刀に付いていった。

しかし、魔物の数は、今までの規模より多く、手間取っていた。

「早くしないと・・・」

一刀は城の一番高い、袁紹が居るであろう部屋を仰ぎ見た。

【城門】

「な、何が起こっているのだ！！」

「わ、私にもよく分かりませんが・・・袁紹軍の皆さんに殺意は無

みたいです。」

城門から、袁紹軍の兵士達が、バタバタと逃げ出すように走っていた。

「いつたい、何があつたのだ！」

愛紗は、逃げる袁紹軍の一人を捕まえて事情を聞き出す。

「ま、魔物が現れたんだ！あんたらも、死にたく無ければ早く逃げるんだな。」

「何を言っている？だったら、早く民を避難させなくてはならないではないか！！」

愛紗の怒りの声にも、袁紹軍の兵士は耳を貸そうとしない。

「だからって、自分達が死に行くことなんか・・・グハッ・・・」

愛紗は、言葉を待たずに、得物で殴った。

「朱里、街の人々を助けなくては。」

朱里は首を縦に振った。

「はい、ご主人様もきつとそう思うと思いますし・・・いえ、既に行動しているかも知れません。」

朱里が空を指指す。その方向には、翼が生えた人間が居る。

「やっと鈴々達の出番なのだ!!」

「魔物・・・倒す・・・。」

「よし、いっちょ暴れてやるか!」

「主にこれから世話になるのだ、ここらで一つ暴れておかねばな。」

「みんな、援護は私に任せて。」

「私も、死力を尽くす!!」

「では、皆さん。ご主人様を援護しに行きますよ!!」

「「応ッ!!」」

北郷軍は、城門をくぐり抜けて魔物がいる死地へと向かった。

【場内】

「なんで袁紹は助けにこないんだ!? 民がこんなに苦しんでいるのに。」

「って、言ってる間にも人が襲われてるぞ!!」

「よし、急ごう!!」

遠くみ微かに見えた敵に向けて走り出した、その時。

「てりやあああああ!!」

ザシュツ。

グオオオオオオオ。

魔物が別の誰かに倒されていた。近くへ行くと、そこには愛紗の姿があった。

「あ、愛紗!? 待機してる・・・って言うか、どうやって中に入っただよ!!」

「袁紹軍から逃げてきた兵士が門を開けたまま逃げ出したのです。」

愛紗は、今の状況を簡単に説明した。

「分かった。愛紗達も魔物達を倒すのを手伝ってくれ。」

しかし、愛紗は首を振った。

「いいえ、この魔物達は私たちが引き受けます。ご主人様は早く袁

紹の元へ行ってください。」

「でも、愛紗達に・・・」

一刀が言葉をいい終わる前に、愛紗は口を開く。

「早く袁紹に会わなくてはと先に言ったのはご主人様です。ここは私達が責任を持って魔物を倒しますので、ご主人様は袁紹の元へ。」
では。

と愛紗は一刀の反応には耳を貸さずに走り去って行った。

「愛紗のいう通り、ここはみんなに任せてさ、私達は、袁紹のところにいくじゃないか。」

白蓮は城を見上げる。そこには、最上階から見下ろして一刀達を見下ろす影があった。

「飛ん行こうと思ってたんだけど、あの様子じゃ、中から行かないと無理だろうな。」

「みたいだな。」

袁紹にしては、守りを考えて待機している。いつでも対戦できるようなオーラを彼女は放っていて、今までの彼女とはまるで別人のようだった。

「それじゃ、中から地道に行くとするか。」

「御意。」

2人は、袁紹が籠っている場内へと駆けだした。

【王座の間】

「随分と早かったではありませんの。」

1番上の階の1番広い部屋に袁紹はいた。その部屋は、金色で埋めつくされていた。

「金．．．ばつかだな。」

「金色．．．だな。」

「おーっほっほっほ！！今更私の偉大さに怖氣ついたのですか、貧相はお二人さん。」

どうやったらそこまで話が飛躍するのだろうか。それに疑問を持った2人は考えてしまった。

「怖氣ついて声も出ないのですの？滑稽ですわね。」

「って、のんびりしていり場合でも無かったな。」

先に我に返った一刀が声をあげる。その声で白蓮も我に返り、剣を構えた。

「今の私を倒せるとお思いで？」

「先に、話がある。」

「あら、剣を構えて話を聞けだなんて、物騒ですわね。話を聞いて欲しかったら、力ずくで私を倒すことですわ！」

『魔人剣』

袁紹の振った剣から放たれる刃。一刀達はイキナリの攻撃になんとか食らいついて避けた。

「くそつ、速いな！」

白蓮は袁紹を睨みつけながら、反撃の機会を伺う。

袁紹は、高笑いするのは裏腹に、隙らしい隙は全くみせなかった。そんなやりとりをしながら、お互いの得意ながら間合いに詰めたり離れたりを繰り返し返す。

「伯珪さんも中々にやりますわね。」

「お前もな、袁紹。」

つかの間の会話を挟むと、再び間合いを取り始めた。

ギョルルルルル・・・

「な、何のですの!？」

「な、なんなんだ今のは!！」

3人ほぼ同時に外を見る。外には、さっきまではいなかったであろう巨大な魔物が湧いていた。

「白蓮！」

一刀は剣を構える。白蓮も分かっているとわんばかりに剣を構えた。

「行ってこいよ、ご主人様!！」

白蓮は袁紹に向かって走る。袁紹もその攻撃を受ける体制を取っていた。

「頼んだ!！」

一刀は勢いよく飛び出していった。

部屋の中は激しい金属音が響き渡っていた。

【場内】

「なんだ、あの化物は!!」

「とつても大きいのだー!!」

「はわわ・・・どうしよう・・・。」

城から人々を避難させた愛紗達の前に、突如魔物が現れた。

「ふむ、人のようではない・・・か。」

「羽根・・・のようなもので付いていますね。」

「大きい鳥なのだ!」

「・・・鳥・・・でも・・・違う。」

「どうみても魔物・・・で間違いないよな?」

グオオオオオオオオ・・・

凄まじい雄叫びを上げている魔物に愛紗達は明らかに動揺していた。

今までとは比にならない化け物が目の前にいるのである。

その時、遠くから接近する者の気配がした。魔物の動きに警戒しながら、その者にも注意する。

「誰かが来るぞッ!!」

「敵か!? 味方か!？」

「新たな魔物かもしれんな。」

武将達が次々に得物を構える。しかし、3人だけは得物を降ろしたままだった。

「みんな心配しすぎなのだ!。」

「はい。敵さんではありませんから安心して下さい。」

「じゃあ、誰だというのかしら?。」

紫苑の質問から少しの間を開けてから、愛紗が得意げに口にした。

「それは、もちろんご主じ...。」

「みんな、大丈夫か!？」

愛紗が名前を言いかけた時に遠くから声がした。

「この気配、主だったか。」

「なんだ、ご主人様だって分かってるなら早く言ってくれりゃいいのに。」

「にやはは、ごめんなのだ。」

この戦闘中に初めてなごみが生じた。それは、厳しい状況が最初から無かったかのような雰囲気だった。

「ご主人様．．．」

．．．一箇所だけは少し違ったようだ。

「さて、どうやって倒すか．．．」

一刀が加わり、なお会議は続いた。

「鈴々はあんな空高くには届かないのだ。」

「当たり前だろ！？誰も翼なんか付いてな．．．」

翠はそう言って一刀を見る。他の武将達も続いて一刀を見る。

「言わずもかな．．．だったな。」

「しかし、ご主人様だけでは危険過ぎないか。」

愛紗は一刀を睨みつけながら話した。

「．．．愛紗はなんで俺を睨んでるんだ？」

「いえ、別に睨んでなんかいません。」

そんな様子を見兼ねた星は、少しため息をつきながら一刀を見る。

「主、気づかんか？これはヤキモチと言つものだ。」

「なッ!？」

愛紗はみるみる内に顔を紅く染める。

「愛紗はヤキモチやさんだからしょうがないのだ。」

「確かに、私の時を含めても、女の人が軍に加わる時はいつも反対しますし。」

「鈴々に朱里まで!？」

「そこまで慌ててるのを見ちゃったら、なんか納得するよな。」

「あらら、愛紗ちゃんも乙女なのだから、そう虐めちゃダメよ？」

クスクスと笑い声を浮かべながら紫苑が加わる。

「うむ。女である以上、恋心を持って悪いことはない。」

華雄もうんうんと頷いている。

「・・・紫苑に華雄まで、ええいッ！この話はもういい！！」

愛紗の分かりやすい反応を見て、皆一斉に笑い出す。

「ということだから、俺があいつを地に叩く。その隙にみんなで一斉に攻撃を仕掛ける。それでいいな。」

一刀の言葉に全員が頷く。遠くで微かに響く金属音が、一刀達を突き動かしていた。

第三十四章：決戦（けっせん）（後書き）

前書きで少し話しましたが、このストーリーは3部構成で考えています。

正確には4部なのですが、まあ3部とも見えるんで。また、2部からは、原作から逸れたオリジナルの展開で進めていきます。無印原作ルートを期待した方、ごめんなさい。

また次の投稿まで間が空いてしまいそうですが、宜しく願います。

では、次回！

第三十五章：決戦其ノ弐（けっせんそのに）（前書き）

毎度の遅い更新で申し訳ないです。しかも、今回は若干短めです。

第三十五章：決戦其ノ弍（けっせんそのに）

【王座の間】

「てりやああああ!!」

「ふんっ!!」

ガキッ!

ガシィ!!

王座の間は激しい金属音が絶えることなく鳴り響いていた。まるで目に見えない何かが生きているような。そんな錯覚さえ感じる程の激しい音だった。

「伯珪さんにしては中々やりますわね。」

「はあ・・・はあ・・・袁紹だつて中々やるじゃないか。」

しかし、一見互角にも見える闘いにも少しずつ差が見え始めていた。

「はあああああ!!」

「ッ!? 速い!!」

ギシィィィィィ!!

袁紹の攻撃は素早く、そして正確に白蓮を捕らえている。白蓮は、

それを受け流すので精一杯だった。

「あら？伯珪さんも所詮はその程度ですの？まあ、袁家に私に勝てる筈がありませんけどね。」

袁紹はもう既に勝負がついたと言わんばかりに大きな声で笑い始めた。

「まだ、闘いは終わっていないぞ、袁紹！！」

「あら、まだそんなに元気が有り余っていらしたのですか。ならば、私も本気でいかせて貰いますわ。」

「喰らえッ！！」

白蓮は、一瞬で剣の先から水の塊を大量に生み出した。

『アクアエッジ！！』

ビュンッ！

白蓮が生み出した塊は、袁紹に向かって襲いかかる。

「甘いすわ！！」

袁紹は、その塊を全て回避した。その動作には余裕すら感じる。

「その程度の技でこの私を倒せるとお思いで？」

その袁紹の顔を見て、白蓮は動じることも無く、笑みさえ浮かべて

いた。

「甘いのはお前だ！！袁紹！！」

ビュンッ！！

「何を言って．．．なッ！！」

袁紹が回避した筈の塊は、実は誘導弾だったのである。一度避けられた塊がブーメランのように一斉に戻ってくる。

そして、その塊は袁紹に全て命中した。衝撃によって辺り一面が霧に覆われた。

「やったか．．．」

白蓮は剣を降ろそうした、しかし、また直ぐに剣を構えた。霧が消えると、白蓮の目の前に、まるでダメージを負っていないかのような表情で袁紹が立っていた。

「正直、伯珪さんがここまでやるとは思いませんでしたわ．．．でも。」

袁紹は再び剣を構える。その表情は、今までよりも鋭く尖っているように見えた。

「私の敵ではありませんわ！！」

そしてまた、王座の間では激しい金属音が鳴り響く。今までより遥かに低く響く音が．．．

【場内】

グオオオオオオ！！

「うおおおおお！！」

場内では一刀と魔物が激しく戦っていた。魔物は、次々と仕掛ける一刀の攻撃を回避しては、隙を見て反撃していた。まるで一刀達の焦る気持ちを読んでいるかのようだ。

愛紗達も、ここに一刀がいる以上、城の中で白蓮と袁紹が戦っていることは知っている。今となっては未知なる力を持つ2人の戦闘を気にならない筈は無い。

「こうなったら・・・アレをやるしかないか。」

一刀はボソツと呟いた。突如、周りの空気が変わった。

「・・・む、主が何か仕掛けるようだな。」

「そうですね、でも今の感じは今まで感じたことがありませんから。」

「鈴々には分からないのだ。」

「とにかく、今はご主人様を見守るしかないだろうな。」

かく話している内に、一刀は魔物に向かって移動した。

グオオオオオオ...

魔物も何か違う雰囲気気付いたのか、けん制するかのよう雄叫びを上げた。

「行くぞー!」

『ピコピコハンマー!』

一刀が叫ぶと、一刀から大量のピコペコハンマーが湧き出した。

ピコッ!

ピコッ!

ピコッ！
ピコッ！

「・・・。」

愛紗達は、この戦場からは明らかに場違いに思われる高く鳴り響く音を聞き、呆然としていた。

それは、魔物も同じだった。突如自分に降りかかったものは避けきることができずに当たってしまったが、ダメージがあまりない。何か異変が起きてるワケでもない。

「よし、今だ。」

一刀は、狙い通りの展開になったと、すぐさま詠唱を始めた。

この重力の中で悶え苦しむがいい

『グラビティ！』

一刀が詠唱を終えると同時に、魔物の周りを何かが覆った。その中だけ違う空間となったのである。

「なるほど。方術を使う為の時間稼ぎだったわけか。」

「確かに、あれだけの隙を作らなければ、あれだけの時間の詠唱は無理でした。流石はご主人様です。」

一刀の詠唱で我に返った2人は、直ぐに一刀の行動の意味に気付いた。

「なるほど、そういうことだったのか。」

「ご主人様もちゃんと考えてるんだな。」

「みんな、得物を構えろ!!」

一刀の合図で全員が得物を構えて待機した。その数秒後。

グオオオオオオ!!

魔物は突如、地面に落とされた。まるで翼が完全に無くなってしまったような、そんな落ち方だった。

「てりやあああああ!!」

「いつくぞー!! なのだあ!!」

「せいやつ!!」

「うおおおりやあああ!!」

「うおおおおお!!」

それぞれが、雄叫びと共に魔物に襲いかかる。抵抗ができない魔物には、そのダメージは致命的なものになった。

「これでトドメだ!!」

一刀は、空中から魔物をめがけて急降下した。
『飛天翔駆！』

グ、グアアアアアア . . . ツ！！

その鋭い一撃は、魔物を真つ二つに切り裂いた。そして、その生々しい鳴き声と共に消滅した。

一刀は剣をゆっくり降りると、自分の方へと駆け足で向かってくる仲間を見た。

「なんとか倒せたな . . . みんな、大丈夫か？」

「はい、おかげさまで全員無事です。」

「兄ちゃんがいなかったら危なかったのだ。」

「はい。相手が魔物になると、やっぱりご主人様がいないと心細いですし。」

その言葉に他の将も、うんうんと頷いた。そんな中、星が一步前へ出る。

「いつものほのぼのとした展開を邪魔するようで申し訳ないが、早

く白蓮を助けにいくべきではないか？」

「ああ、白蓮が心配し、袁紹のコトも気になる。早く助けに行こう！」

「白蓮は無事だろうか・・・」

「・・・危険・・・感じる。」

「ふむ。恋がそう言うならば、危険な戦いをしているのだろうな。主、急がねば。」

「分かった。全員。城の頂上まで全速力で走るぞ！！白蓮を援護して袁紹を助ける！！」

「「御意！！」」

日が傾きかけ、紅く染まる地を駆ける。袁紹によって幕が上がった戦いも終盤へと向かった。

【???】

「クソっ！！北郷一刀め！！」

ドンッ！！

「左慈、落ち着いて下さい。」

左慈は近づく于吉を突き飛ばす。

「落ち着いていられるか！！あれだけマナを減らしたのに、まだあれだけの術を使いやがる！！」

「たしかに、あの状況下での上級魔法を扱いました。しかし、もう、奴は魔術を使えないでしょう。」

于吉の話を聞いた左慈は、何かを企むように笑った。

「そういえば、奴も俺たちと同じ存在だったな。」

「はい。今のマナ量では、エクスフィアに喰われたあの女の子を倒すことは出来ないでしょう。」

「俺たちの出番が無くなるのは気に入らない、が。奴がくたばるなら認めるか。」

「それが、私たち創られし者の役目・・・ですからね。今は彼らの動向を見物しましょう。」

「ああ。」

銅鏡に映る一刀達を二人は無表情で見ていた。映った影は、日が傾いたせいか、とても長かった。

第三十五章：決戦其ノ弐（けっせんそのに）（後書き）

後2回か3回で袁紹編が終わり、天下統一編へ入ります。間に色々
と入るかと思いますが．．．オリジナルが強くなるんで、話がきち
んと分かるようになりしつかりした文を書けるように頑張ります。

第三十六章：永遠之剣（えたーなるそーど）（前書き）

ノロウイルスの餌食になったナージャPです。皆さんはノロウイルスやインフルエンザにはお気を付けください。

今は治ったのですが、学校から出席停止と言われたので、できた時間を書いてみました。

第三十六章：永遠之劍（えたーなるそーど）

【王座の間】

一刀達が王座の間についた時、既に決着がついていた。傷だらけで倒れている白蓮。そして、袁紹の側に猪々子と斗詩がいた。

「白蓮!!」

一刀が一目散に駆け寄る。見たところ、大きな外傷は無かった。

「ファーストエイド!」

「一刀、すまない。袁紹には勝てなかった。」

「無事ならいいんだ。後はゆっくり休んでいてくれ。」

「分かった。」

白蓮はゆっくり立ち上がると、愛紗達より更に後方へと下がった。

一刀は袁紹の方へとゆっくり近づいた。猪々子と斗詩が袁紹を説得しようと頑張っていた。

「だから、姫!!話を聞いて下さいよ!本当にこのままじゃ、姫の身体が...」

「五月蠅いですわ!!」

バジッ！！

「う、うわあああ！！」

猪々子は袁紹に突き飛ばされた。それを斗詩が慌てて庇う。その様子を袁紹は見向きもせず一刀の元へと向かった。

やがて、二人は同時に足を止めた。

「私の家臣になにを言っただんですか。」

「お前が聞いた通りだ。その宝石が危険だから、今すぐ外さないといけない。お前の命に関わる。」

既にマナは薄く、レイズデッドを詠唱できる状態では無い。まさに、背水の陣だった。

一刀は、返事を待つことなく得物を構えた。袁紹の返事を待つことは出来ない。待つ時間すら惜しく感じていた。

「もし、そうだとして。私がこの宝石の力を無くしたら、貴方には勝てないでしょう。」

「だから外せないっていうのか？」

「ええ、私は袁家の希望。お父様、お母様が築き上げた地位と名誉にかけて。敗北は死も当然！！」

袁紹は、素早く一刀に攻撃を仕掛ける。

ガシッ！！

「つく！？」

その一撃は単調ではあるが、とても重い攻撃だった。

「貴方に、天の御使いに、私の志が分かりますか！！」

袁紹が叫んだ刹那、一刀の脳裏にある人が浮かんた。

（一刀も北郷家として、しっかりと稽古してやろうな。）

それは、もう随分前記憶だった。一刀がこの世界に来る前の。ずっと昔の話・・・。

「じいちゃん・・・！？」

「はあああああ！！」

ガシッ！！

袁紹の攻撃に一瞬遅れはしたものの、しっかりと攻撃を抑えた。

2人の間に大きい間合いが出来る。一刀は少し困惑していた。だが、その剣だけはしっかりと強く握りしめていた。

「天の御使いも、私の力に驚いたようですね。」

袁紹がいつもの高笑いをする前に。一刀が呟いた。

「ありがとう、袁紹。」

「・・・は？」

そこに出てきた言葉は袁紹の意表を突いた。袁紹は慌てて剣を構えて一刀を睨みつける。

「俺は何か大事なコトを忘れているのかもしれない。それに気づかせてくれた。だから感謝するよ。」

一刀は剣をしっかりと構える。

「俺は袁紹を助ける！！」

一刀は袁紹に斬りかかる。

ガシイッ！！

「うおおおお！！」

ガシイッ！！

ガシイッ！！

ガシイッ！！

「ツク！！」

袁紹は攻撃を受けるので精一杯だった。

「負けませんわ！！」

それでも隙を探しては仕掛けていく。

ガシィ！

「ちい！！」

また間合いが生まれる。このままでは間に合わない。

「こんどは本気でいくぞ！！」

袁紹は見たことも無い斬撃に備えて構えた。ここを耐えればカウンターのチャンスがある。

『散沙雨！』

一刀は素早い乱撃を繰り出す。袁紹は必死に抑える・・・が。

「なッ！！」

ガシィィ！！

袁紹は、剣を弾かれ、体制を崩してしまった。

『襲爪岩斬破』

一刀は、それを最初から狙っていたかのように斬撃を繰り返し、

「これで終わりだ！！」

最後に重いトドメの一撃を加えた。

しかし。

その一撃は空を斬った。

「はあああああ！！」

ここぞと言うタイミングで攻撃を避けた袁紹は、そのまま一刀に回り込み、

『瞬連刃』

一刀を斬り刻んだ。

空は日が傾き、紅い色から黒い色に変わろうとしていた。

「「ご主人様ーッ！！」」

一刀の決闘を見守っていた武将達が悲鳴に満ちた声を上げる。

倒れこんだ一刀を掴むと袁紹は一刀の異変に気づいた。

「なッ！！」

ポムッ。

それは、一刀では無かった。その証拠に今、一刀だったものはただの丸太になっていた。

「袁紹ーッ!」

袁紹は声が聞こえる方・・・上を見た。そこには、天上から袁紹をめがけて落下する一刀の姿があった。

『天衝裂空撃!』

「ツク!!くああああ!!」

鋭い攻撃に袁紹はついに吹き飛ばされた。

「ご主人様・・・」

「本当に主は珍妙なことをする。」

「見ているこちらがドキドキしちゃうわね。」

「はわわ・・・」

「にはやは、朱里は驚き過ぎるのだ。」

「本当に、ご主人様は素晴らしい武を見せてくれる。恋は気づいていただろうけどな。」

「・・・(コクリ)。」

一刀はゆっくりと袁紹に近づく。力尽き倒れている袁紹は、動くことも出来なかった。

「私の負け．．．ですわね。」

袁紹はもの惜しげにエクスフィアを外そうとしていた。

「っておい！！それを無理矢理外すな！！」

カチッ！

一刀の注意はほんの少し遅かった。袁紹の命を削った宝石のような物体は、袁紹の身体から外れた。

刹那、エクスフィアが光沢を発する。

「え、なッ！！きゃあああああああ！！」

「袁紹ーッ！！」

「何がどうなって．．．前が見えないッ！」

「ま、眩しいのだ！！」

「いったい何が起こっている!!」

愛紗達も、突然のことに驚きを隠せなかった。袁紹が負けを認め、エクスフィアを渡そうとした。特に問題は無かった筈だった。

やがて光が収まると、そこには化け物がいた。背の丈が通常の人間の2倍近くあり、色もツヤ付きの良い肌色ではなく。もはや何色かも分からないようなグロテスクな色をしていた。

「姫が．．．姫が．．．」

猪々子は動揺しながらも、袁紹だったモノに近づく。

「グオオオオオオオオ!!」

「文ちゃん、危ない!!」

斗詩が慌てて猪々子と化け物の間に入る。

バシッ!!

「ぎゃああああ!!」

「斗詩イ!!」

猪々子が叫ぶ。斗詩は窓の方向へ飛ばされた。このままでは窓から落下してしまう。

「危ないッ!!」

一刀が斗詩を抱きとめる。

「北郷さん・・・」

そのまま一刀は愛紗達の元へ駆け寄った。

「ご主人様!!ご無事ですか?」

愛紗が誰よりも先に一刀に声をかける。

「ああ。それより皆は先に陣に戻っていてくれ。」

「!!?」

突然の発言に愛紗達は声にならない叫びを出した。

「こいつは、魔物よりも遥かに強い。それに・・・」

一刀は周りを見る。壁はヒビ割れしていて。見た目の豪華さを台無しにしていた。

「このままじゃ、この城で皆生き埋めだ。今の内に避難するんだ。」

「それではご主人様が．．．」

一刀に食いつこうとする愛紗に

「いい加減にせんか、愛紗。」

星が肩を叩いた。

「今の戦いを見て分かっただろう。私達では足手まといなのだ．．
．私も悔しいがな。」

星は得物を持った手を強く握りしめた。武人として今ほど辛いことはない。

「分かった。全員、撤退だ！！」

武将達は次々に帰っていく。

「ご主人様。」

愛紗が一度振り向いた。

「白蓮との話、必ず伺います。」

それだけ言つと武将達と共に去っていった。

「弱ったな。」

エクスフィアの暴走に吞まれた人間を助ける残された道は1つ。

体内マナを減らす。つまり、ダメージを与えること。

しかし、与え過ぎてしまつては袁紹が死んでしまふ。

それは難しいバランスだった。もはや運と言っても過言ではない。

迷う一刀に、化け物・・・エクスフィギュアは、容赦なく鉤爪を振り回す。

「くそッ!!」

一刀は剣でそれを受けようとするが。

バキッ！！

「ッ！」

剣ごと碎かれてしまった。エクスフィギュアは更に斬撃を仕掛ける。

「グハッ・・・」

鉤爪に捉えられながらも、何とか間合いを取る一刀。

「はぁ・・・はぁ・・・」

肩から鮮やかな血が流れる。このままでは袁紹を殺す何処か一刀が死んでしまう。

そろそろ、私の出番が来たようだ。予定より少し早い登場になってしまった。本来ならば、一刀・・・いえ、ご主人様が私を思い出してから声をかけるべき。

ご主人様が望まない限り姿は表せない。だから、今は声だけ。ご主人様を肯定するファクターとして働かん！

（貴方の力はまだ出されていない）

「だ、誰だ！？」

ご主人様は私の声の出处を探している。

（貴方の本当の得物を創造しなさい）

私を味方と認識したご主人様は何かに気づいたかのように集中し始めた。

「時空を操る世界の楔の剣よ。我が元に現れよ！！」

ご主人様が叫ぶと突如、ご主人様の前に輝く剣が舞い降りた。

エターナルソード。時空をも超えると言われる剣。

ご主人様は、その剣を契約も無しに掴んだ。エターナルソードからの拒否反応は無かった。

そして、ご主人様の目に確信の色が映った。この力があれば袁紹を必ず救えると・・・

第三十六章：永遠之剣（えたーなるそーど）（後書き）

イキナリ話が飛んで驚きました？それは一刀も同じ．．．な筈。何がどうなっているのか？それは第一部最終回である次回のお楽しみです。年内には上げたいと思います。では、次回！！

第三十七章：真実（しんじつ）（前書き）

第一幕最終章です。

第三十七章：真実（しんじつ）

またどこか懐かしい声を聞いた。

その声を聞いたのがどれくらい前だったのかは覚えていない。

けど。

それはとてもかけがえのない大切な記憶で。

今となつては、それを思い出せないことに虚無感さえ抱きそうだ。

「エターナルソード……」

思い出すのは今は後回しだ。今やらなければならないことは袁紹を助けだすこと。

その為に誰かが導いてくれたんだ。絶対に助けなくちゃいけない。

俺は未だに淡く光る剣を更に強く、強く握りしめた。

エクスフィギュアはそんな剣には見向きもせずにもたまたま襲いかかる。

ガシィ！！

ガシィ！！

確かにエクスフィギュアの斬撃は重く強い。けれど、この剣はその爪なんかでは遠く及ばない力を持っているのが痛いくらいに伝わってきた。

「うおおおおお！！」

攻撃が止んだ隙を見て斬り上げる。

バキッ

「グオオオオオオオ！」

エクスフィギュア自慢の爪が砕け散る。その衝撃にエクスフィギュアは大きく仰け反った。絶好のチャンスだ。

『雷神烈光刹！』

激しい連撃を繰り返す。そして、トドメの突きに踏み切る。

「はああああッ！！」

ザシュッ！！

生々しい音と共に、エクスフィギュアの胸部に大きな穴があいた。？

それを修復しようと、エクスフィギュアは体内のマナを消費する。

「今だ！！エターナルソード、そのマナを奪うんだ！」

エターナルソードが光る。すると、エクスフィギュアの周りのマナが薄くなった。

「グオオオオオオオ・・・」

エクスフィギュアが、もがき苦しむ。苦しみのあまり、周りの壁を無差別に殴り始める、壊し回る、叫ぶ……

やがて体内のマナが枯渴したフエクスフィギュアの暴走は止まり、袁紹の姿を取り戻した。

「今だ!!」

『魔神剣!』

衝撃波が袁紹に向かう。そして、その衝撃波は袁紹の持っているエクスフィアに命中した。

パシィ!!

エクスフィアは衝撃波により真つ二つに切れた。それと同時に、袁紹がその場で倒れこむ。

「袁紹ッ!」

袁紹の容態を確認する。まだ息をしている。なんとか袁紹は助かりそうだ。

『ヒール！』

袁紹に治癒術をかける。後は自然回復に頼るしかないが、大丈夫だろう。

ズキッ！！

「ッ！！」

自分の身体のダメージを忘れていた。肩からは未だに血が流れている。

『ファーストエイド』

軽く治癒術をかけた。肩の傷を始め、他の闘いで受けた傷も少し癒えた。

少し休めば袁紹を抱えて歩けるだろう。それまではのんびりしよう。

ガガガガッ！！

「地震か！？」

ミシッ！ミシッ！

周りの壁や床が軋む音が聞こえる。

「しまった!!」

今までの戦いで壁や床がこわれていた。きっと、その衝撃に城が耐えられなかったのだろう。このままでは瓦礫に埋もれることになる。

「窓は!!」

とんで行ければ早い話だ。しかし、窓の方向は既に崩れていて、通れる状況ではなかった。

「くそッ!!」

俺はそばで気を失っている袁紹をおぶって走り出す。生きて皆の元へ帰る為に。

状況は良くなかった。連戦の疲れ、そしてエクスフィギュアとの戦闘で追った傷が想像以上にダメージとなっていた。

階段をゆっくり一段ずつ降りる。

ゴゴゴゴゴゴ・・・

「またかッ！」

咄嗟に体制を低くする。この1つ1つの動作がまた体力を奪う。それでも俺は前に進む。もう立ち止まらないように。

一歩。

一歩。

また一歩。ゆっくりではあるが、テンポを付けて歩き続ける。

それでもまた揺れる。時に何か落ちてくる。うまく進めない。

もう少し。もう少しで出口だ。走りたい気持ちを抑えて慎重に歩く。

そして。

その光の向こう側へと旅立った。

【城門】

城外へやつと到着した。少し意識が朦朧としているが、まだ大丈夫だろう。

「ご主人様！！」

城門ですつと待っていたのだろう。愛紗が大きな声と共に駆ける。

「・・・はッ！」

その声で、気を失っていた袁紹が目を覚ました。

「・・・ここはどこですか？」

愛紗はそのいかにも図々しい言い方に腹を立てているようだ。

「ここは城門近くだよ。城が壊れて危なかったから連れてきたんだけど。」

その時、巨大な音がした。城が一気に崩れ落ちるのがその方向を見なくても手に取るように分かる。

「また助けられたのですわね……。」

「もっと感謝するべきではないか？もしかしたら、ご主人様も貴方のせいで逃げ遅れていたという可能性もあったのだ。」

今までのことも有ったので愛紗は袁紹を許さないつもりなのだろう。

「まあ、それは後でとして。」

「今やらせて下さい。」

一歩も退かない愛紗の肩を軽く叩く。

「とりあえず、袁紹は今捕虜として捕らえる。まあ、悪いようにはしないから、大人しくしていてくれると助かる。」

「……分かりましたわ。」

袁紹は少し戸惑っていたが頷いてくれた。

「……ご主人様は時に甘すぎます。」

愛紗はまだ納得がいかないようだった。

「とりあえず、少し休みたいからさ。早く皆の所に戻りたいんだ。」

「そ、そうでした。そういうことなら。」

あまりこんな使い方はしたくなかったけど……。

今は喧嘩より先にやるべきことがある。

本城から城下町をくぐり抜けてきたから分かる。今のままではここに住んでいた人達が生活できない。

きつと、本陣で保護してるであろう人達は一日も早い復興を願っているに違いない。

【本陣】

「ご主人様が帰ってきましたよ！！」

「みんな、ただいま。」

朱里の声で、武将達が次々に集まる。先程城が崩れたのがあつたからか、物凄く心配されていたのがよく分かる。

「麗羽さま！」

「姫……。」

猪々子と斗詩が隣にいる袁紹に気づき近づいてくる。

「猪々子さん……。斗詩さん……。」

3人はその場で抱き合っていた。何か会話をしているけど、それを聞くのは無粋だろう。

「朱里、これから何だけど。」

「はい。城内の復旧作業の手立ては済んでいますよ。」

流石は朱里だった。いつも俺のしたいことを読んで行動してくれる。思わず頭を撫でてしまう。

「・・・ご主人様？」

いつもだったら満面の笑みを見せてくれる朱里だったが、今回は違った。

どうしたのか聞かないと。そう思ったのだが体力の限界が来たようだ。

「え・・・。ご、ご主人様!？」

俺は数歩ふらふらとした後、そのまま倒れてしまった。

大丈夫、少し寝たらすぐ起きるから。

そう、心の中で誓って俺は意識を手放した。

【???】

「北郷一刀……。死ぬ準備はできたのか？」

左慈が一步步俺に近づいてくる。俺は真つ二つに折れた木刀を握りしめて威嚇した。

「そんな顔するな……。あいつらと同じように楽に死なせてやるからよオ!!」

バキッ!!

「うぐあ……。ッ!!」

なにをされたのか分からなかった。恐らくは蹴られたのだろう。あった腹部の感覚がない。骨も折れたのだろう。

「おらおらおら!!」

バキッ!!

バキッ!!

もはや、声を出すことすら出来なかった。地に伏せ、倒れて左慈の動きを見ることが精一杯だ。

左慈は、愛紗の使っていた得物を持つと、ゆっくりと近づいてくる。

「前言撤回だ。楽には死なせてやらねえよ……。」

「左慈……。えげつないですよ。」

かくいう于吉は紫苑のものと思われる矢を持つと俺の目の前にきた。

「こつこつのはどうでしょう。」

グサッ!!

「うあああああッ!!」

于吉は俺の右手首に矢を刺した。続けて左手首を目掛けて矢を振り下ろす。

「うああッ、うあああああ……。。」

俺は苦しみのあまり、声にならない声を上げるしかなかった。

死ぬまで。

ずっと。

最後に聞こえたのは、狂ったように絶叫する2人の声だけだった。

【???】

「ここは・・・。」

嫌な過去を思いだしてしまった。

過去？

「俺は生きてる・・・?」

いや、死んだ。間違えない。殺された記憶は確かにある。

「簡単に説明してあげるわよん。」

突如背後から声がする。それは、死ぬ前に聞いたことがある声だ。

「貂蟬ッ!？」

「今から貴方は、新しい世界へ移動するのよ。」

「新しい世界？」

「そう。今いた世界は終わってしまった・・・だから、貴方の望む新たな世界を始めるわけ。」

貂蟬は、それだけを告げると消えてしまった。それが自分の最後の役割と言わんばかりに。

冷たい現実には嘆く。俺は愛紗達の足手まといになり、結果。新たな外史を開くことで俺だけ生き延びている。
？

孤独に身体を震わす。今まで笑い合い助けあった皆に会うことはもう無くなってしまった。

ここから逃げ出したい。けれど、少しも動けずにいた。

？渦巻く寂しさ感じ唇を強く噛みしめる。どうして俺はこんなに無力なのかと。

「ご主人様・・・。」

その時、聞き慣れた声がした。俺を慕ってくれて、楽しい時も苦しい時もいつも一緒に。

「愛紗！！」

後ろを振り向く。そこには誰も居なかった。それがどうしても悔しくて涙が溢れ、全身から力が抜けて崩れ落ちた。

？

悔し涙流す前に勇気振り絞り己貫け。

泣いてしまう度にいつも思い出す。剣道を習うきっかけになった言葉。

「そっだ・・・」

俺は再び立ち上がる。まだふらつく身体に喝をいれる。

「俺が強くなって。あいつらよりも強くなって。今までみんなに守られた分、俺が守りたい。」

それが、今の俺が望む外史だった。愛紗がいて、鈴々がいて、朱里がいて。皆が笑い合える国で。

「それが、貴方の望む外史なのね。」

貂蟬が再び顔をだす。その顔は少し寂しげだった。

「そこまでエゴが入ってしまうとは思わなかったわ。」

「出来ないのか。」

「条件があるのよ。」

「条件？」

「その理想を叶える為に対価を奪われるわ。対価は貴方の1番大切なものを奪う。他にも少しペナルティーがあるわ。」

その内容を詳しく聞いた。それはとても辛い内容だった。正直、逃げ出したい。でも。

「愛紗達は俺が守る。」

俺の決意が揺らぐことはなかった。

熱く滾る魂。

（雄叫びと共に解放して）

どこからか声がある。誰の声かは分からなかったが、それは新たな外史を開くことだと言っつのは伝わった。

？

決められたルールを打ち壊して駆け抜ける。

？己の望む道。

自由へと・・・

【自陣】

「・・・んっ。」

目が覚めた。今日の目覚めは中々だった。

悪い夢を・・・いや、間違いなく自分が忘れていた過去を見た。

そこにあっただのは、この世界の真実と。俺の運命。

なんとも言えない虚しさが沸き起こる。

「ん？」

ふと、左手に温もりを感じる。隣を見ると、愛紗が俺の手を握りしめて眠っていた。

昨日倒れてしまったのを思い出す。また皆に心配かけてしまったよ
うだ。

「俺が必ず守るから。」

愛紗の頭を撫でながら、もう少しだけこのままでいたいと・・・

「お兄ちゃんは大丈夫なのか・・・愛紗が居るのだ!」

「なむ・・・五月蠅いぞ鈴り・・・はっ!」

今の状況に気づいた愛紗は飛び起きてしまった。

きつとこの後、愛紗は星や紫苑達にからかわれるのだろう。

こんな彼女達の日常を守ってやりたい。

俺は一層強く願った。

第三十七章：真実（しんじつ）（後書き）

ついに、袁紹編 & a m p：第一部を書き終えることが出来ました。まだ謎は残しているものの、色々と真実が明かされていきました。これもまた、私が産んだ外史となるのですよね。この外史がより永く続くように、これからも精一杯に執筆させて頂きます。

次回、第二幕プロローグは、2011年3月上旬を予定しています。大変申し訳ありません。

最後に、沢山の感想ありがとうございます。返信は出来ていませんが、すべて読ませて頂いています。誤字指摘も把握次第で訂正しています。

これからもマイペースで作品を書いていこうと思います。ここまで読んで下さってありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

では次回！！

打ち切りのお知らせ。

色々と長引かせておいて打ち切り・・・こんな結末にする予定では無かったのですが。

時間が経ち、恋姫無双のゲームの内容すら思い出せなく、また家にあったゲームディスクとPCが、地震により壊れてしまい、真・恋姫無双を再びやり直すコトが困難だということ。

シナリオのオチとなる部分が今年発売された某ゲームとほぼ同じような形で被って萎えてしまったということ。

という点で今回はこういう処置を取らせて頂きました。

これからは、オリジナルのラノベ風の小説を書いて行きたいと思っています。また、何かアイデアが思い浮かんだら他の作品の2次創作は「短編」を書きたいと思っています。今回みたいに間が空いた拳句・・・となったらいけないので。

楽しみにしていた方、今まで本当にありがとうございました。本当に申し訳ありませんでした。

新タイトルとして復活させます!!

TALES OF SYMPHONIA 〜ドキッ 猛者一刀と乙女達の三国志演義〜

この作品は、真・恋姫が出る以前に計画して書き始めたモノです。

2章となる次回からは、真でのキャラも多く交えながらの展開を考えています。

おおまかな構造しか考えていませんが・・・しっかりとした完結を目指して。

今回のように、途中でブツ切りにならないように頑張っていきたいと思います。それでは、新作で会いましょう。

これからも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6930f/>

TALES OF SYMPHONIA ～ドキッ 猛者一刀と乙女達の三国志演義～

2011年11月13日13時55分発行